

鳳東町4丁遺跡

—堺南警察署庁舎建て替えに伴う発掘調査—

2008年3月

大阪府教育委員会

鳳東町4丁遺跡

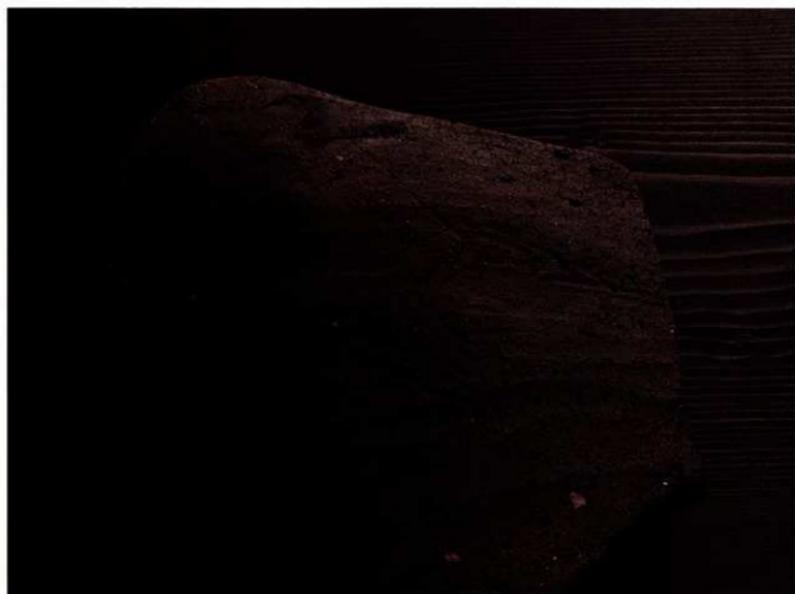
—堺南警察署庁舎建て替えに伴う発掘調査—

2008年3月

大阪府教育委員会



縄文土器 (372)



縄文土器 (372)

序 文

本書で報告いたします鳳東町4丁遺跡は、堺市西部のJR鳳駅近くに位置しています。堺市内には旧石器時代以来、江戸時代に至るまで数多くの遺跡が残され、ことに仁徳陵古墳を始めとする百舌鳥古墳群、「黄金の日日」と称された堺環濠都市遺跡は、それぞれの時代の日本を代表する遺跡です。しかし遺跡周辺では市街化が進み、残念ながら近世以前の面影はほとんど留めていません。発掘調査を通じて往時の姿を見出すことができるのみです。

このたび堺南警察署の建て替えに伴って発掘調査を実施し、泉北丘陵側から大島大社方向に流れる奈良時代の大溝とその脇に平行した2条の溝、そして周辺に広がる水田域などを発見しました。3条の溝は当時の用水路と考えられ、古代における当遺跡周辺の土地開発を考える上で重大な発見となりました。さらに、そうした遺構の下層では、縄文時代の土器や石器が数多く出土しました。

そもそも今回の調査は、平成16年度の試掘調査で遺物や遺構を発見したことにもとづき実施したものです。この鳳東町4丁遺跡に限らず、本課では分布調査や試掘調査を重ね、遺跡という先人達の残した生活の痕跡の追求に努めています。今回の貴重な発見は、こうした作業の積み重ねが結びついたといえます。

調査にあたりましては、関係各位から多大なご指導、ご助力をいただき、厚く感謝いたしております。また今後とも文化財行政にいつそうのご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 富雄 呂秀

例 言

1. 本書は大阪府教育委員会が大阪府警察本部より依頼を受け、平成17年度に実施した、堺市西区鳳東町4丁所在、鳳東町4丁遺跡の堺南警察署建て替えに伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師三木弘（調査番号：05012）を担当として、平成17年6月～18年1月まで実施した。これらに伴う遺物整理事業については、平成18・19年度に調査管理グループ主査三宅正浩・技師藤田道子を担当として実施した。
3. 本調査の写真測量は、株式会社シー・エム・シーに委託した。撮影フィルムは、株式会社ジオテクノ関西で保管している。
4. 本書で掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 縄文土器の胎土分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書の編集・執筆は三木が行なった。ただし、IV章2（1）は京都大学大学院生河本純一が分担執筆し、V章は株式会社パレオ・ラボの報告を掲載した。
8. 堺南警察署建て替えに伴う発掘調査・遺物整理および本書の作成に要した経費は、全額を大阪府警察本部が負担した。
9. 現地での発掘調査、遺物整理事業および本書作成にあたっては、下記の方々、機関から助言および協力を得た。記して感謝いたします。

（敬称略）

工業普通、堺市教育委員会、堺市文化財調査事務所、（財）大阪府文化財センター、大阪府立狭山池博物館、堺南警察署
10. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は2,720円である。

本文目次

序文

大阪府教育委員会文化財保護課 富尾昌秀

例言

I 鳳東町4丁遺跡の立地環境と歴史	
1 鳳東町4丁遺跡の立地環境……………(三木)……………	1
2 鳳東町4丁遺跡周辺の歴史……………(三木)……………	3
II 調査の経緯と経過	
1 調査に至る経緯……………(三木)……………	7
2 調査経過……………(三木)……………	9
3 調査方法……………(三木)……………	9
III 調査の成果	
1 基本層序……………(三木)……………	19
2 第1面の調査……………(三木)……………	19
3 第2面の調査……………(三木)……………	23
4 出土遺物……………(三木)……………	35
IV 中央トレンチ(縄文時代)の調査成果	
1 中央トレンチの調査……………(三木)……………	64
2 縄文時代の遺物	
(1) 縄文土器……………(河本)……………	73
(2) 縄文石器……………(三木)……………	86
V 縄文土器の胎土分析の成果……………(パレオ・ラボ)……………	99
VI 総括……………(三木)……………	110
実測遺物観察表……………	118
縄文土器観察表……………	140
縄文石器観察表……………	146
参考文献……………	115

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	遺跡周辺の地形	2
第3図	鳳東町4丁遺跡と周辺の主要遺跡	4
第4図	調査地の位置	7
第5図	調査区の分割	8
第6図	グリッド位置	10
第7図	調査区基本土層図(1)	11・12
第8図	調査区基本土層図(2)	13・14
第9図	第1面全体図	15・16
第10図	第2面全体図	17・18
第11図	002溝	20
第12図	023井戸	21
第13図	038・089溝	22
第14図	001溝	25・26
第15図	001・A溝木製樋管検出状況	27
第16図	水田域	28
第17図	水田域土層	29
第18図	001・C溝と水口	30
第19図	掘立柱建物1	31
第20図	掘立柱建物2	32
第21図	樋	33
第22図	井戸24	34
第23図	001・A溝出土遺物(1)	36
第24図	001・A溝出土遺物(2)	37
第25図	001・A溝出土遺物(3)	38
第26図	001・B溝出土遺物(1)	40
第27図	001・B溝出土遺物(2)	42
第28図	001・C溝出土遺物／一括遺物(1)	44
第29図	001溝一括遺物(2)	45
第30図	001溝一括遺物(3)	47
第31図	001溝一括遺物(4)	48
第32図	平安整地土・耕作土出土遺物	49

第33図	中世整地土・耕作土出土遺物	50
第34図	包含層出土遺物 (1)	51
第35図	包含層出土遺物 (2)	52
第36図	攪乱土出土遺物	53
第37図	遺構出土遺物	55
第38図	金属生産関連資料	55
第39図	001・A溝出土遺物—拓影—	56
第40図	001・A・B・C溝、002溝出土遺物—拓影—	57
第41図	001溝—括遺物 (1)—拓影—	58
第42図	001溝—括遺物 (2)—拓影—	59
第43図	001溝—括遺物 (3)—拓影—	60
第44図	平安整地上出土遺物—拓影—	61
第45図	平安耕作土、中世整地土出土遺物—拓影—	62
第46図	包含層・攪乱土出土遺物—拓影—	63
第47図	中央トレンチの位置	64
第48図	中央トレンチグリッド位置	65
第49図	中央トレンチ遺物出土状況 (全体)	66
第50図	2・3段上面遺物出土状況	67
第51図	4・5段上面遺物出土状況	68
第52図	2・3段上面堆積土状況	69
第53図	4・5・6段上面堆積土状況	70
第54図	中央トレンチ土層	71・72
第55図	縄文土器 (1)	73
第56図	縄文土器 (2)	74
第57図	縄文土器 (3)	75
第58図	縄文土器 (4)	76
第59図	縄文土器 (5)	76
第60図	縄文土器 (6)	77
第61図	縄文土器 (7)	78
第62図	縄文土器 (8)	79
第63図	縄文土器 (9)	80
第64図	縄文土器 (10)	81
第65図	縄文土器 (11)	82
第66図	縄文土器 (12)	82

第67図	縄文土器 (13)	83
第68図	縄文土器 (14)	84
第69図	縄文土器 (15)	86
第70図	土製品	86
第71図	縄文石器 (1)	87
第72図	縄文石器 (2)	88
第73図	縄文石器 (3)	89
第74図	縄文石器 (4)	90
第75図	縄文石器 (5)	90
第76図	縄文石器 (6)	91
第77図	縄文石器 (7)	92
第78図	縄文石器 (8)	93
第79図	縄文石器 (9)	94
第80図	縄文石器 (10)	95
第81図	縄文石器 (11)	96
第82図	縄文石器 (12)	97
第83図	縄文石器 (13)	98
第84図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	107
第85図	土器胎土の孔隙・砂粒・基質の割合	108
第86図	土器胎土中の砂の粒径組成	109
第87図	現況の水路	113

表 目 次

表 1	分析資料一覧表および胎土分類	99
表 2	薄片観察結果 (1)	105
表 3	薄片観察結果 (2)	106
表 4	行基関連記事	111
表 5	和泉国の飢饉史料	112

図 版 目 次

巻頭図版 縄文土器

図版1 鳳東町4丁遺跡遠景(南から)	鳳東町4丁遺跡遠景(垂直)
図版2 1区 001溝・002溝・023井戸・024井戸・水山城	
図版3 2区 001溝・002溝	
図版4 3区 001溝	
図版5 1区 水田城	2区 水山城・畦
図版6 1区 001溝全景(南から)	1区 001溝全景(南東から)
図版7 3区 001溝全景(北から)	3区 001溝全景(北西から)
図版8 1区 木製樋管検出状況(北から)	1区 001・A溝土層断面(北から)
図版9 1区 001溝 木製樋管検出状況(北から)	1区 001溝 木製樋管検出状況(東から)
図版10 1区 023井戸 木枠検出状況(東から)	1区 024井戸 半裁状況(南から)
図版11 3-58区 001・B溝(北から)	3-60区 001・B溝(北から)
3区 001・B溝Kベルト断面(南から)	3区 001・B溝Jベルト断面(北から)
3区 001・A溝Lベルト断面(北から)	3区 001・A溝Mベルト断面(南から)
1区 001・B溝Aベルト断面(南から)	2区 001・B溝Fベルト断面(南から)
図版12 1区 水田城・畦(南から)	1区 畦土層断面(南から)
図版13 1区 水山城全景(南から)	2区 水田城全景(北から)
図版14 中央トレンチ 南壁西半(北東から)	中央トレンチ 北壁(南西から)
図版15 001溝出土遺物 須恵器	
図版16 001溝出土遺物 須恵器	001溝出土遺物 須恵器
図版17 001溝出土遺物 須恵器	001溝出土遺物 須恵器
図版18 001溝出土遺物 須恵器	001溝出土遺物 須恵器
図版19 001溝出土遺物 須恵器	
図版20 001溝出土遺物 須恵器	
図版21 001溝出土遺物 須恵器	001溝出土遺物 須恵器
図版22 001溝出土遺物 須恵器	001溝出土遺物 須恵器
図版23 001溝出土遺物 土器	
図版24 001溝出土遺物 土器	001溝出土遺物 土器
図版25 出土遺物 須恵器	出土遺物 土器
図版26 出土遺物 黒色土器	出土遺物 瓦器
図版27 出土遺物 瓦器	出土遺物 瓦器

図版28 出土遺物 蛸壺・土鍾
図版29 縄文土器 有文深鉢
図版30 縄文土器 有文深鉢
図版31 縄文土器 有文深鉢
図版32 縄文土器 有文深鉢
図版33 縄文土器 有文浅鉢
図版34 縄文土器 有文浅鉢
図版35 縄文土器 無文深鉢
図版36 縄文土器 無文深鉢
図版37 縄文土器 無文浅鉢
図版38 縄文土器 注口土器
図版39 縄文土器 底部
図版40 縄文石器 石鏃
図版41 縄文石器 剥片
図版42 木製桶管全形

出土遺物 羽口・埴塼・鉄滓
縄文土器 有文深鉢

縄文土器 無文深鉢

縄文土器 注口土器
土製品

縄文土器 底部

縄文石器 石刃

縄文石器 石皿

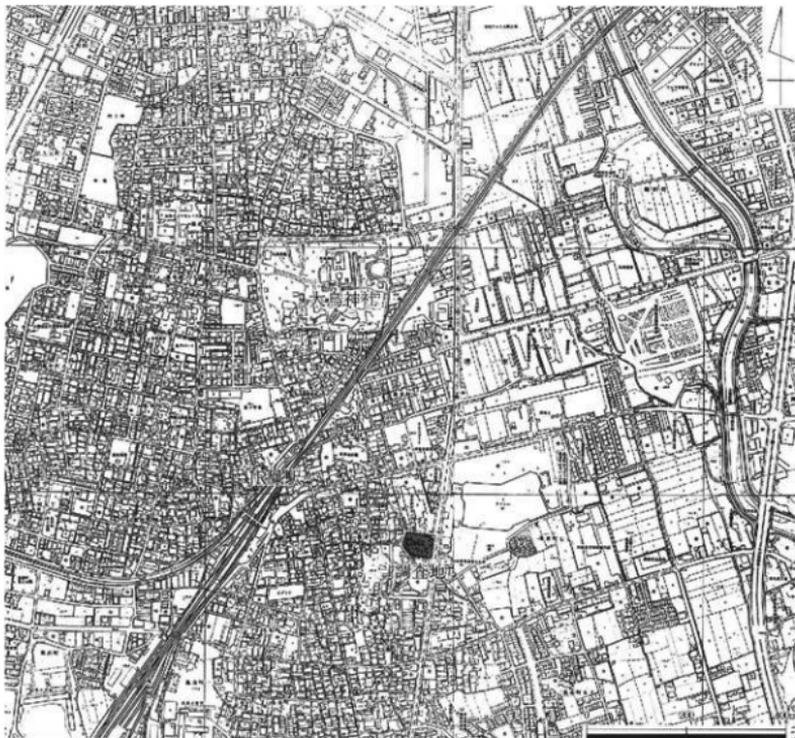
木製桶管小口部

I 鳳東町4丁遺跡の立地環境と歴史

1 鳳東町4丁遺跡の立地環境

鳳東町4丁遺跡は堺市西区鳳東町4丁に位置する。遺跡の範囲は、堺南警察署の敷地に対応する。遺跡は石津川の西岸に位置し、その氾濫原・沖積平野に当たる。この面は日部神社東方の、和田川との合流点より下流の石津川東西兩岸に沿って広がっている。よって、調査地周辺の地形は北および西方向の大阪湾方面に緩やかに下降していく。この地形が当遺跡および周辺の土地開発の在り方を決定付ける要因となった。

鳳東町4丁遺跡が位置する和泉地域は和歌山県との障壁をなす和泉山脈、そこから北西方向に広がる丘陵地帯、丘陵の前線に広がる洪積丘陵、海岸線までの沖積平野に大別される。

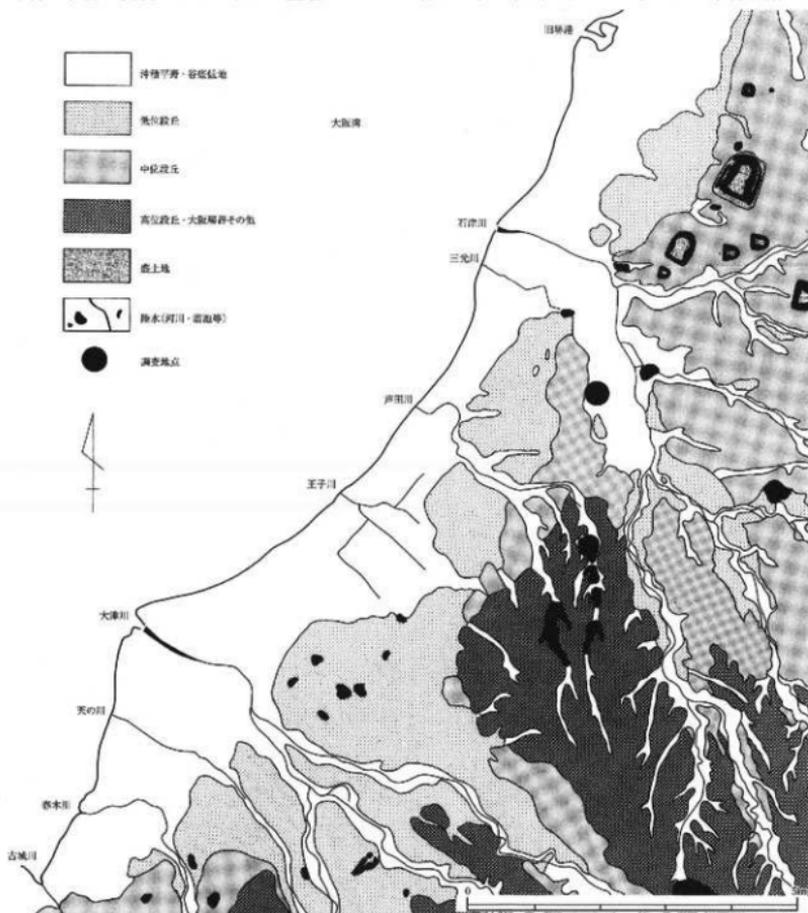


第1図 遺跡の位置

和泉山脈は標高800m前後とあまり高くはない。また山部は割合に緩やかである。この山脈は領家花崗岩類、泉酸性火砕岩類を基盤層として、それを覆って凝固の不充分な礫岩・砂岩・泥岩が互層をなして堆積している。

和泉山脈は、大阪湾方向には緩やかに、これに対して和歌山県側には比較的急峻に傾斜している。さらに大阪湾側には山脈の基盤層が張り出し、岸和田市神於山を始めとする前衛山地が4～5kmほどにわたって形成されている。

前衛山地の北には丘陵地帯が広がる。丘陵地帯は大阪層群と呼ばれる、十分に凝固していない礫岩・砂岩・泥岩およびこれらの互層からなる地層によって形成されている。そして和泉山脈に



第2図 遺跡周辺の地形 ((財)大阪府文化財調査研究センター1996より転載・改題)

源をもつ中・小河川がこの丘陵地帯を深く切り込み、南北方向を幾つも分断している。鳳東町4丁遺跡の南では泉北丘陵が石津川の東西岸に広がっている。

丘陵地帯の縁辺には、中・小河川に沿った河岸丘陵、あるいは海岸段丘が広がる。段丘は比高30～50mほどの高位段丘、10～30mの中位段丘、10m以下の低位段丘に分かれる。鳳東町4丁遺跡周辺では、石津川西岸に信太台地、東岸に泉北台地が広がる。和泉地域では主として中位段丘面が発達している。なお、鳳東町4丁遺跡から至近距離の高位段丘面は、鶴田池付近から南東方向に広がっている。

低位段丘面は、和泉山脈から大阪湾に注ぐ河川の縁辺に広がり、春木川以北で比較的発達するものの、本遺跡周辺では仁徳陵古墳西方や信太台地西方の三光川から春木川間に広がる程度である。河岸段丘は河川の両岸に広がるが、石津川流域では西岸の発達が顕著である。

沖積平野は大阪湾の沿岸に広がるとともに、各河川に沿っても認められる。ただし河川沿いの沖積平野はあまり発達していない。和泉地域における沖積平野は概して狭小であり、ことに南ほど面積は狭くなっている。

上述したように遺跡付近は大阪湾方向に緩やかに下降していくが、遺跡の東方にあたる石津川方向にも緩傾斜する。この地形のため、遺跡周辺では、現在南から北、および西から東方向へ用水路の導水がなされている。

一方、遺跡の西には中位段丘が存在し、その段丘崖が遺跡の間際までせまっている。そのため遺跡内でも、東から西方向へ微傾斜ながら上昇している。段丘崖の比高は5～6mほどである。この段丘面の雨水は、調査地などの崖線際地点に注ぎ込む。

Ⅲ章で述べるが、発掘調査によって発見された溝は、鶴田池が設けられている泉北丘陵から大鳥神社方面に延びる、奈良時代に開削された農業用の幹線用水路であるとみられる。泉北丘陵の存在する南から北方向へ微下降することに加え、雨水の集積が可能である崖線下辺という地形的要因が、農業用の大溝をこの場所に設定した最大の理由といえる。

2 鳳東町4丁遺跡周辺の歴史

次章で述べるように、鳳東町4丁遺跡は平成16年度に新規発見された遺跡である。この遺跡範囲を囲むように、北に大鳥神社遺跡と鳳遺跡、東に鳳東町遺跡と毛穴西遺跡、南に長承寺遺跡が周知の遺跡として所在している。

大鳥神社遺跡では、15世紀前・中葉の瓦質皿・羽釜・搦鉢、中国製の青磁などが出土した幅5.3m、深さ0.8mほどの南北溝が検出された。また10世紀頃の土器溜りも見つかった。

鳳遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物と井戸、中・近世の遺構が検出されている。大鳥神社遺跡の南に広がる奈良～平安時代の集落の存在が予測されている。

本遺跡と最も近距離にあるのが鳳東町遺跡である。本遺跡から東方約200mの地点にある。この鳳東町遺跡は、堺市教育委員会により昭和59年に発掘調査が実施され、井戸、土坑、溝が検出

され、縄文晩期の土器、弥生～古墳時代の土器、須恵器、土師器皿、瓦器碗・皿、瓦質羽釜・火舎、土師質羽釜、須恵質鉢、近世陶磁器、鉄滓、木製品などが出土した。

昭和61年の発掘調査では、地山とみられた黄褐色粘質土中より縄文時代の石器（石鏃、スクレイパー、くさび形石器、石核・剥片）が出土した。さらに古墳時代前～後期の遺構、遺物が検出され、奈良時代および13世紀後半の遺物包含層も確認された。その後の平成2年の調査では奈良時代を下限とする自然河道、12～13世紀中頃の自然流路および縄文時代の石器（石匙）、平成4



第3図 鳳東町4丁目遺跡と周辺の主要遺跡

年の調査では奈良～平安時代の遺物、13世紀末～14世紀の遺物をそれぞれ検出し、13世紀代に土地利用のひとつの両期が求められている。これら鳳東町遺跡における成果は、鳳東町4丁遺跡と共通する点が多く、両遺跡間のつながりを窺うことができる。

毛穴西遺跡では、本格的な発掘調査は実施されていないため、遺跡の詳細な内容については不明である。ただ、包含層から瓦器片が出土し、13世紀代に集落が形成され、条里地割が整備されたと考えられている。

長承寺遺跡では、白鳳期の瓦の出土が知られている。遺跡の詳細は不明であるが、鳳東町4丁遺跡との関係が留意される。

このように鳳東町4丁遺跡周辺では、この遺跡で検出された縄文時代後・晩期の遺物、古墳時代の遺物、奈良～平安時代の溝と遺物、そして平安時代および中世の耕作痕跡などと共通・関連する遺物や遺構の広がり、すなわち各時代の生活空間の広がりを認めることができる。

さらに視野を広げてみると、本遺跡と符合する調査成果の得られた遺跡を認めることができる。ことに、南方に位置する遺跡が注目される。

まず、縄文時代後・晩期の遺構・遺物についてみる。本遺跡と同じく石津川西岸の氾濫原、沖積平野に位置する遺跡には、上遺跡と草部遺跡が挙がる。

上遺跡では縄文時代後期の遺物包含層（土器、耳栓、サヌカイト剥片）、縄文晩期の自然河川や遺物包含層が検出され、土器、石棒、石刀、石斧、叩石などが出土した。さらにその南には草部遺跡があり、縄文晩期の遺物が出土している。

上遺跡や草部遺跡と石津川を挟んだ対岸に位置する鈴の宮遺跡でも、縄文後期の土器および晩期の河道と遺物が検出されている。さらに石津川上流寄りの西浦橋遺跡では、縄文中期末～晩期の土器が出土している。

次に、奈良時代の遺構・遺物が検出された遺跡についてみる。本遺跡より南西約800mの中位段丘上に鳳南町遺跡がある。この遺跡は小栗街道（熊野街道）に沿った位置にあり、街道沿いの集落形成を捉える上で注目される。8～13世紀の遺物が出土している。

先述の草部遺跡では8世紀前半～中頃の須恵器や土師器が、鈴の宮遺跡でも奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

このように、石津川の氾濫原・沖積平野においては、縄文時代後期～晩期の遺構・遺物の検出される遺跡が連続的に存在し、その一連でこの鳳東町4丁遺跡を捉えることができる。

さらに本遺跡における最大の調査成果であった奈良時代の大溝もまた、石津川の氾濫原・沖積平野における遺跡の動向と一致するように形成されていることから、奈良時代に石津川沿岸の開発が積極的に進められていたことが明らかである。

上述のように本遺跡およびその周辺では、地域開発の大きな両期を奈良時代に求めることができるが、最後にその要因となった鶴田池の歴史的状況に目を向ける。とはいえ、鶴田池自体の本格的な発掘調査はこれまで実施されていない。そこで、その東に近在する鶴田池東遺跡における

状況を捉えることで手掛かりとしたい。

昭和54年度の大阪府教育委員会による発掘調査では瓦窯、瓦器あるいは燃料用炭を焼いたと考えられる窯、掘立柱建物、柵列、溝、土坑、小穴、鍛冶炉跡、石組遺構、瓦組遺構、古墳の周溝および木製樋管が検出された。掘立柱建物には奈良～平安時代と鎌倉時代の2時期のものがある。溝もその2時期に分かれる。また木製樋管は、設置時期が8世紀前葉以降とみられていて、建物群の形成時期と一致する。このように調査地では、奈良時代に本格的な開発が始まるとともに、谷地形を利用した溜池が構築され、そこには堤と樋管が設けられたと考えられている。

9～10世紀代にはいったん遺構・遺物数は減少するが、平安末から鎌倉時代にかけて再び増加傾向をみせ、室町時代に至って大型土坑、井戸、鍛冶炉跡、石組遺構、瓦組遺構などが形成された。この間の集落は、8世紀代の溜池の開削と父鬼街道に面する立地とがその基盤であったと考えられる。

昭和56年度の大阪府教育委員会による発掘調査でも、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、小穴、古墳の周溝が検出された。建物、井戸、溝は13～15世紀に比定される。この調査の主要時期に当たるが、小穴の幾つかは8世紀代に遡るとみられている。

昭和61年度の堺市教育委員会の発掘調査では、瓦窯に関連する可能性のある方形土坑と井戸、小穴が検出された。ともに中世の遺構と考えられている。

方形土坑からは、多量の瓦が出土した。その中には、昭和54年度の大阪府教育委員会の発掘調査で発見された瓦窯から出土した軒丸瓦と同范のものも含まれているが、その一方で15世紀に比定できる瓦器小皿も相伴したとされている。

昭和62年度の堺市教育委員会の発掘調査では溝や自然河道が検出され、奈良時代の遺物を包含した溝の存在も確認されている。また同時期の遺物が多量に出土し、「口殿」「新家」と記された墨書土器も含まれていて、鶴田池院や日部駅との関係が想定されている。

平成3年度の大阪府教育委員会の発掘調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物のほか溝、土坑、小穴などが検出されている。また奈良時代の土器甕・鉢・皿・杯、須恵器杯・壺・鉢・碗、平安時代の黒色土器碗などが多量に出土した。

さらに、下降する地形に盛土を施して基盤整備を行なっている状況が確かめられた。その時期は奈良時代であると考えられている。

このように、鶴田池東遺跡では本格的な開発が奈良時代に始まり、ほぼ同時期に集落が形成されたとみられる。集落は平安時代後半期にはいったん縮小するのかも知れないが、鎌倉・室町期には再び活性化している。

奈良～平安時代の遺構・遺物は草部遺跡や鈴の宮遺跡をはじめ、鳳南町遺跡、長承寺遺跡、鳳東町遺跡、鳳遺跡でも認められ、鶴田池北方域の集落化が奈良時代以降に急速に進んだと推定される。この背景には、溜池である鶴田池の構築と用水路の整備があると考えられる。

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

堺市西区鳳東町4丁目内に所在する堺南警察署が老朽化したため、大阪府警察本部では建て替えの準備を進めていた。敷地内は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、庁舎東方には鳳東町遺跡が近在し、さらに北には大鳥神社遺跡、鳳遺跡、鶴田町遺跡が、南には長承寺遺跡が敷地を取り囲むように分布している。ところが敷地内における遺跡の存否確認調査は行なわれていなかった。そのため、遺跡の有無を確認するため、大阪府警察本部施設課と協議し、平成16年6月3日～6月14日に試掘調査を実施した。

堺南警察署は既に仮移転していたが、旧庁舎は解体されないままであったので、試掘調査は建



第4図 調査地の位置

物のない駐車場部分に4×3 m程度のトレンチ3ヶ所を設定して行なった。

その結果、ひとつのトレンチにおいて平安時代の遺物を包含した溝が見つかり、全てのトレンチで中世の耕作痕および近世、中世、奈良・平安時代、古墳時代の遺物が出土し、さらに縄文時代の石器剥片も見つかった。なおこの試掘で発見された溝は、本調査で検出された001溝の東辺部にあたる。

以上の試掘調査の結果を受けて、警察本部施設課と発掘調査の実施方法について協議するとともに、堺市教育委員会にも連絡して、新規発見の遺跡とした。

遺跡の範囲については、その広がり不明であることから、ひとまず警察署敷地内とすること、遺跡名については「鳳東町遺跡」が府道を挟んだ東に既存していて、それとの混同をさけるために警察署の所在住所である鳳東町4丁を取って、「鳳東町4丁遺跡」とすることを堺市教育委員会と申し合わせた。

発掘調査は平成17年度に実施することとなったが、既存建物の解体工事によって遺構面や遺物包含層の崩れる恐れがあったため、建物の解体は地上面以上の部分のみについて行ない、地中の基礎部分（地中梁・フーチングなど）については発掘調査終了後に撤去することとした。そのため、試掘トレンチを設定した旧駐車場部分を除いて建物の基礎が縦横に走り、多くの範囲で坪掘り状の調査になった。また旧建物の基礎構築時において、遺構面や遺物包含層が既に崩された部分もあった。



第5図 調査区の分割

2 調査経過

発掘調査は平成17年6月上旬より開始し、翌年1月末で終了した。調査面積は2284㎡。調査時の掘削作業に伴う廃土を場外に出さないため、その置き場確保の必要性から調査対象範囲を3区に分け、1区ずつ調査を進め、残りの2区分に廃土を仮置きした。調査区は北より1・2・3区と呼ぶ。また調査は1区、3区、2区の順に進めた。

既述したように、建物の基礎を全て残したままであったので、旧駐車場が大半を占めている2区以外では、縦横に走る基礎内を坪掘りするようにして発掘を実施した。

各区ともまず旧庁舎建設に伴う盛土および攪乱土、さらに基礎内の埋め土などを重機で除去することから始めた。基礎内が狭小なため、重機のバケットが入りづらい部分もあったが、ほとんどは重機で除去することができた。また、基礎の底面に敷かれたコンクリートを重機で解体できない部分があり、そこについては調査を断念せざるを得なかった。

1区は6月上旬より調査を開始し、8月9日にヘリコプターによる空中撮影測量を実施、9月上旬に終了した。3区は9月上旬より調査を開始し、10月7日に空中撮影測量を実施、10月上旬に終了した。2区は10月上旬より調査を開始し、11月30日に空中撮影測量を実施した。その後、縄文時代の遺構、あるいは遺物包含層を明らかにするため、建物基礎のない範囲に調査区（中央トレンチ）を設定し、第2遺構面から150cm下まで掘り下げた。この中央トレンチ調査を1月下旬まで行ない、1月末に全調査を終了した。

3 調査方法

【地区割り】調査区の地割りは、大阪府発行の10,000分の1地形図を基準にして、第Ⅰ～第Ⅳの最少4段階の細分で示している。

第Ⅰ区画は、10,000分の1地形図の南西隅を基点にして、南北を15分割（A～O）、東西を9分割（0～8）して、縦（南北）6km、横（東西）8kmに分割した区画である。

第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北・東西それぞれ4分割した縦（南北）1.5km、横（東西）2.0kmの区画で、南西端区画を1番として順次横方向に施番する。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画の北東隅を基点にして南北を15分割（A～O）、東西を20分割（1～20）した、1辺100mの区画である。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画の北東隅を基点として南北10分割（a～j）、東西10分割（1～10）した1辺10mの区画である。

本調査地は第Ⅵ座標系に属し、第Ⅰ区画E4、第Ⅱ区画16、第Ⅲ区画14Hにあたり、第Ⅳ区画1～6d、1～6e、1～6f、1～6g、1～5hが該当する。

なお遺物の取り上げにあたっては、第Ⅳ区画を1辺5mの方眼に4分割したグリッドを基本とするが、本調査地の場合、既述したように地中内の基礎がほぼ全体にわたって縦横に残り、西一

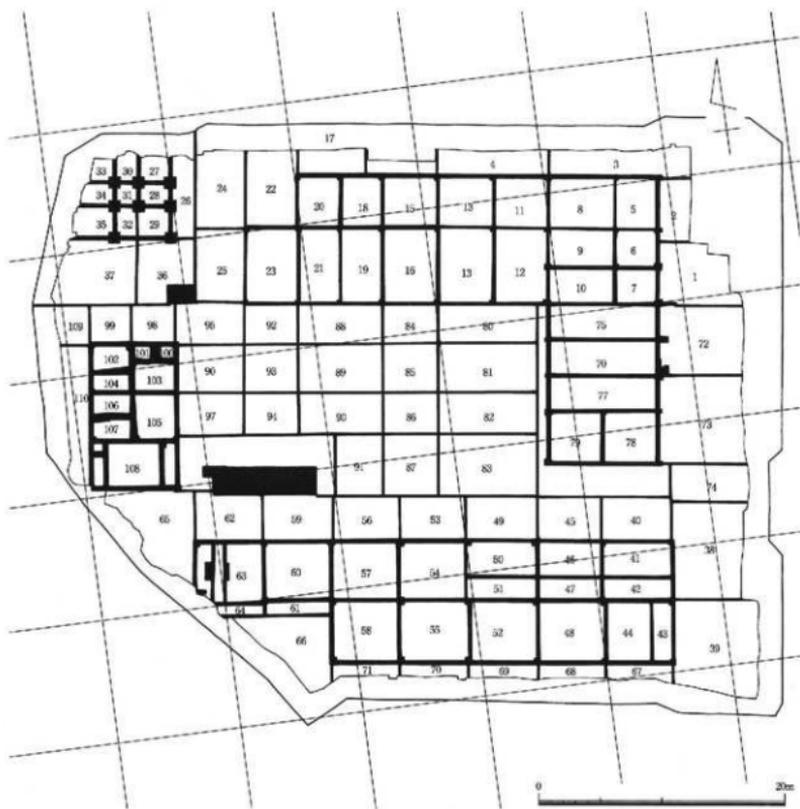
的なグリッド設定では詳細な遺物の出土状況を捉えることができないため、基礎に囲まれた範囲および基礎方向に沿って分割した単位で遺物の取上げを行なった。遺物取り上げグリッドは110区を数える。

【水準】 標高値は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

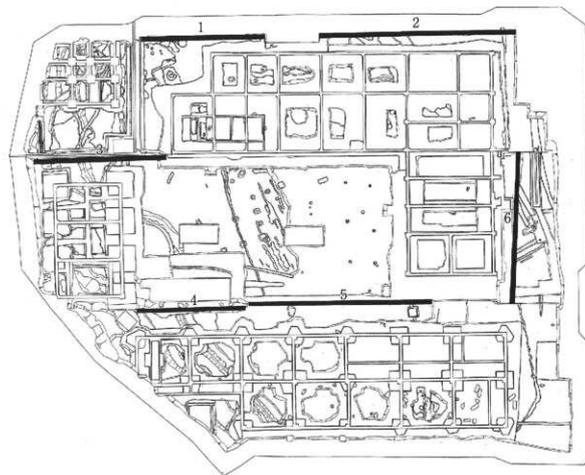
【座標値】 国際基準に基づく座標値を、方位は座標北を用いた。

【遺構番号】 検出の順に3桁の通し番号を与えた。したがって、遺構の時期ごとに遺構番号はまとまっていない。

【図化】 1～3区いずれの最終面においても、ヘリコプターによる航空測量・図化（20分の1・100分の1）を測量委託により行なった。その上面および、遺構の微細図や土層断面図などについては、人手により実測作業（10・20分の1ほか）を行なった。



第6図 グリッド位置



5

- 1 オリーブ灰色(SY7)空移シタ
の薄灰入、灰土に中層作土
- 2 暗灰色(S2)空移シタ
の薄灰入、灰土、中層作土
- 3 和色(107)灰土(1)移シタ
の薄灰入、灰土
- 4 和色(SY4)空移シタ
の薄灰入、灰土、中層作土
- 5 オリーブ灰色(107)空移シタ
の薄灰入、灰土、中層作土
- 6 オリーブ灰色(107)空移シタ
の薄灰入、灰土、中層作土
- 7 オリーブ灰色(SY7)空移シタ
の薄灰入、マンガン赤土、白層

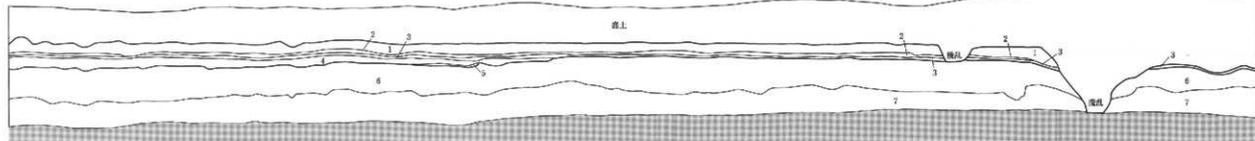
2

- 1 和色(SY4)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 2 黄灰色(S2)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 3 和色(SY5)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 4 オリーブ灰色(SY7)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 5 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 6 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 7 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 8 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 9 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 10 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 11 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 12 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土
- 13 和色(SY6)空移シタ
の薄灰入、中層作土

(W)

5

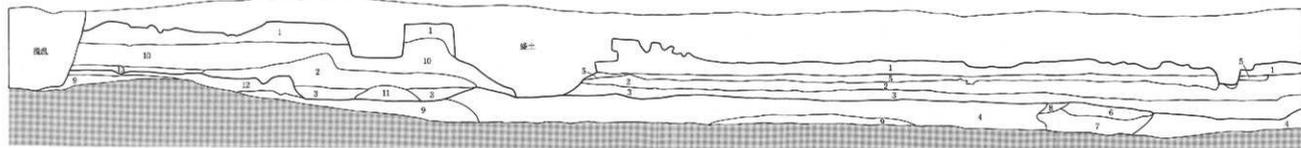
(E)
11.0m



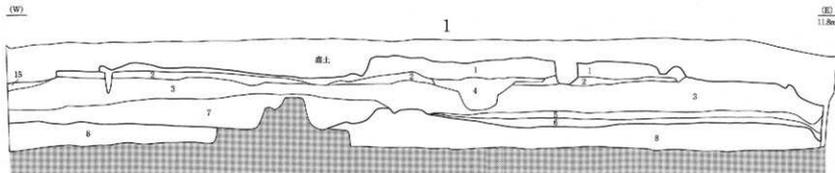
(W)

2

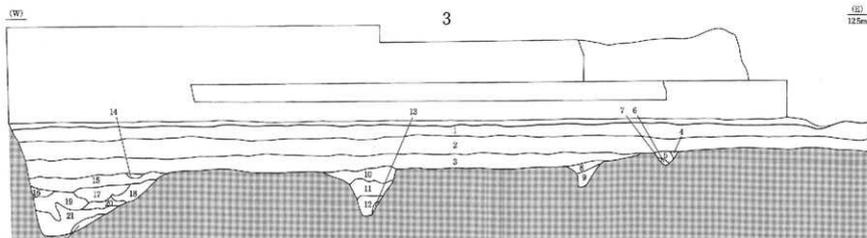
(E)
11.8m



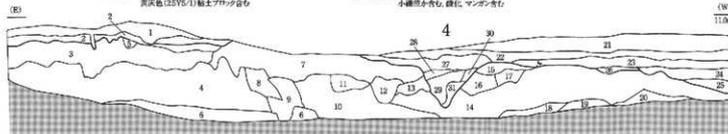
第7図 調査区基本土層図(1)



- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 灰色(SY4)砂シロト
やや粗粒, 崩れ易土 | 5 黄灰色(S2S3)粘シロト |
| 2 灰白-黄灰色(SY6)粘シロト
やや粗粒, 崩れ易土 | 6 灰色(SY5)粘シロト
やや粗粒, 崩れ易土 |
| 3 暗灰色(SY7)粘シロト
明黄褐色(SY7E)粘土を含む, 腐葉 | 7 黄灰色(S2S3E)粘シロト
黄灰色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉 |
| 4 暗黄褐色(S2S3E)粘土
腐葉, 崩れ易土 | 8 明黄褐色(S2S3E)粘土
崩れ易土, 腐葉 |



- | | | |
|---|--|---------------------------------------|
| 1 黄灰色(S2S3)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 平安時代盛地層 | 10 灰白色(SY7)粘土
腐化, 小礫を含む, 腐化 | 19 灰白色(SY7)粘シロト
粘土(S2S3E)粘土を含む, 腐化 |
| 2 暗黄褐色(S2S3E)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 平安時代盛地層 | 11 黄灰色(S2S3)粘土
腐化, 小礫を含む, 腐化 | 20 灰白色(SY7)粘シロト
腐化 |
| 3 暗黄褐色(S2S3E)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり | 12 灰白色(SY7)粘土
腐化, 小礫を含む, 腐化 | 21 灰白色(SY7)粘土
腐化 |
| 4 灰白色(SY7)粘シロト
腐化, 粘性あり, 腐化, 粘性あり | 13 明黄褐色(S2S3E)粘土
腐化, 粘性あり | 22 オリーブ灰色(S2S3E)粘シロト
粘土を含む |
| 5 オリーブ灰色(S2S3E)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 崩れ易土 | 14 暗黄褐色(SY7E)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 崩れ易土 | |
| 6 灰白色(SY7)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 崩れ易土 | 15 黒褐色(SY7E)粘シロト
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 崩れ易土 | |
| 7 オリーブ灰色(S2S3E)粘土
小礫を含む, 腐化, 粘性あり, 崩れ易土 | 16 オリーブ灰色(SY3)粘シロト
小礫を含む | |
| 8 灰白色(SY7)粘土
腐化, 粘性あり, 小礫を含む | 17 灰白色(SY7)粘土
小礫を含む, 腐化, マンガンを含む | |
| 9 灰白色(SY7)粘土
黄灰色(S2S3E)粘土を含む | 18 灰白色(SY7)粘土
小礫を含む, 腐化, マンガンを含む | |

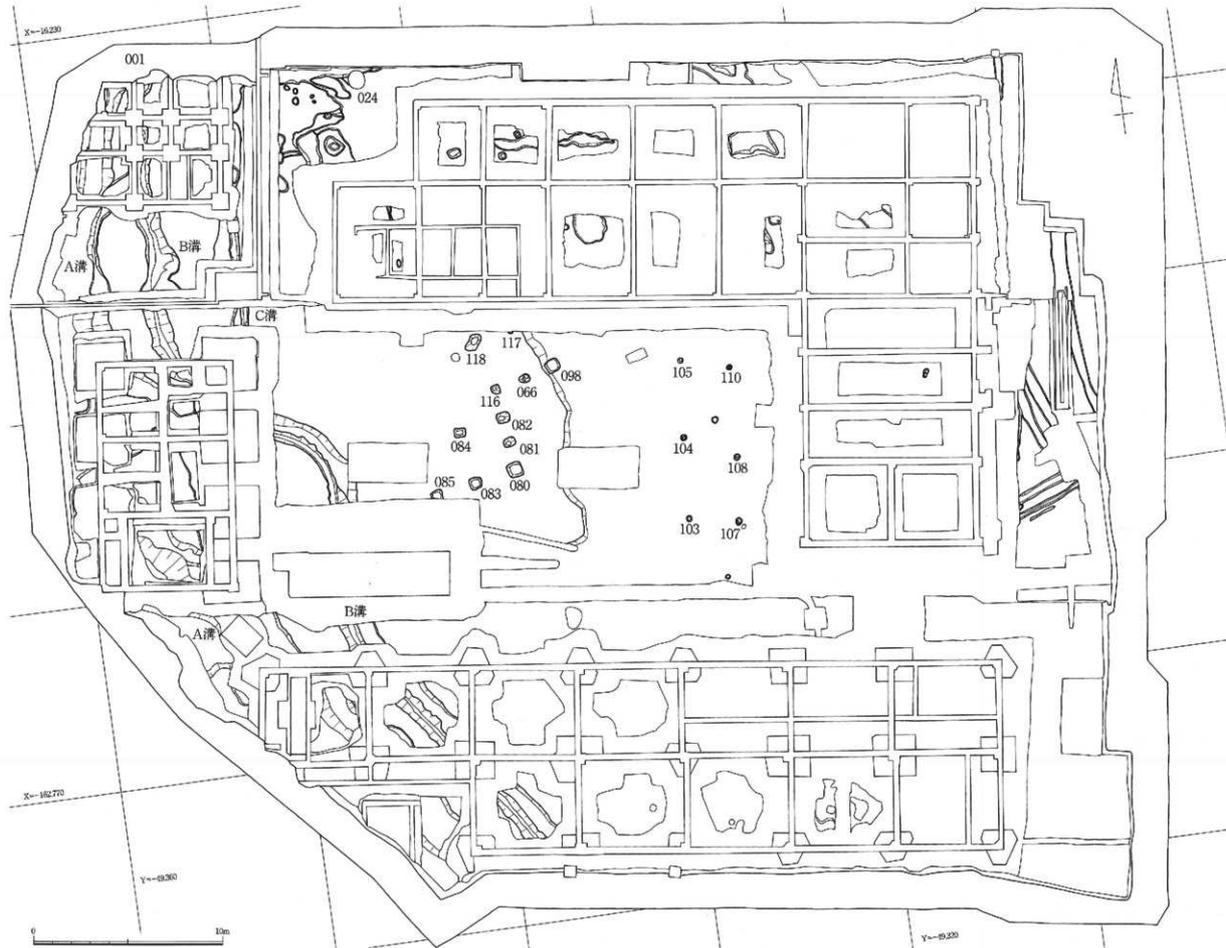


- | | | | |
|---|--|--|--|
| 1 暗黄褐色(S2S3E)粘土
腐化, 粘性あり, 腐葉, 崩れ易土 | 6 灰白色(SY7)粘土
腐化, 小礫を含む, 崩れ易土 | 11 灰白色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 鉄分を含む, D層 | 16 明黄褐色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| 2 灰白色(SY7)粘シロト
腐化, 粘性あり, 腐葉, 崩れ易土 | 7 黄灰色(SY6)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐化, やや粗粒, C層 | 12 明黄褐色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 崩れ易土, D層 | 17 明黄褐色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, D層 |
| 3 明黄褐色(S2S3E)粘シロト
腐化, C層 | 8 黄灰色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, D層 | 13 灰白色(SY7)粘土
腐化, 粘性あり, D層 | 18 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, D層 |
| 4 灰白色(SY7)粘土
腐化, C層 | 9 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, D層 | 14 明黄褐色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, D層 | 19 灰白色(SY7)粘土
腐化, 粘性あり, D層 |
| 5 黄灰色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, マンガンを含む, D層 | 10 明黄褐色(S2S3E)粘土
9層に混入, 崩れ易土, D層 | 15 黄灰色(S2S3E)粘シロト
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐化, C層 | 20 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 崩れ易土, D層 |
| | | | 21 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 22 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 23 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 24 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 25 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 26 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 27 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 28 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 29 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 30 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |
| | | | 31 明黄褐色(S2S3E)粘土
明黄褐色(S2S3E)粘土を含む, 腐葉, 崩れ易土 |

第8図 調査区基本土層図(2)



第9図 第1面全体図



第10图 第2面全体图

Ⅲ 調査成果

1 基本層序

基礎が残る範囲を除くと、基本層序はほぼ共通している。調査地に建っていた堺南警察署の旧庁舎の解体を地上部分のみに留めたので、基礎およびその設置のための掘方を除いた部分では旧地表面以下が遺存していた。

その部分における基本層序は、盛土・攪乱土（60～140cm）、中世耕作土であるオリブ灰色粘シルト（10～30cm）、平安時代の耕作土・整地土である灰黄色粘シルト（10～30cm）、および古代の遺構検出面である緑灰色・灰色粘土となる。この灰色系粘土は厚さ15cmほどで、その下は黄褐色・オリブ灰色・青灰色系の粘土となる。なおこのうち、中世耕作土は調査区の北東半のみに遺存し、しかもかなりの部分で既に削平を受けていた。

調査最終段階に設けた中央トレンチで縄文時代の遺物包含層を確認するまでは、緑灰色・灰色粘土を基盤層の最上面と考えていた。なお調査時に緑灰色・灰色粘土をC層、黄褐色・オリブ灰色・青灰色系粘土をD層と呼んで区分した。

遺構検出面は、平安時代の整地層上面と緑灰色・灰色粘土上面の2面である。前者を第1面、後者を第2面と呼ぶ。

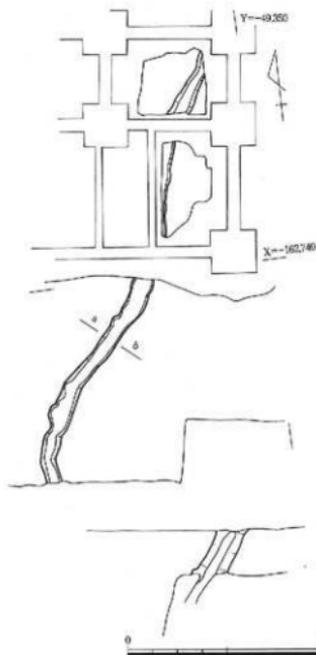
2 第1面の調査

平安時代の整地土上面における遺構は、溝、井戸および小穴と、不定形な落込みであり、建物は検出されなかった。小穴は2区中央に、不定形の落込みは1区西寄りと3区南東に集中する傾向がみられた。

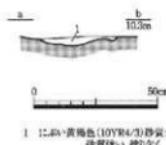
溝は3条あり、後述するように一定範囲を囲む区西溝であった可能性が高い。井戸は調査区北西で検出されたが、建物の基礎により4分割された状態であった。この3条の溝と井戸は第2面で検出されたものであるが、遺構年代としては平安時代より後出するので、この面の遺構として扱うことにした。

小穴や不定形の落込みは、中世期の耕作痕である可能性が高い。平安末に水田面上に整地土を施して、その上に中世耕作土が形成される。下層の水田で認められたような粘質上壤ではなく、また繰り返し攪拌されたようにも観察されなかったが、畝作にともなって形成された土壌ではないかと推測する。

第2面の調査で判明するが、調査区の西端を走行する幹線水路・用水路は平安時代末で埋没する。農耕用水の供給が停止したことで、それと同時に水路の東に広がる水田も廃棄され、一帯は畝地化したと考えられる。小穴や不定形落込みは、その畝作における畝作りや起耕時に生じた痕



第11図 002溝



跡であろうと考える。

【002溝】

1区および2区の西で検出された溝である。098グリッドおよび036グリッドから建物基礎内の028グリッド方向にかけて検出された。036グリッド内では001・B溝と交差している。また036グリッド南辺と098グリッド北辺とでは1mほどの間隔が開くが、その間に3mほどのずれが生じている。この1m間で西へ急激に向きを変えたのだろうが、理由は不明である。堆積土にはあふ黄褐色砂質土の単一層である。その状態から、空溝であったとみられる。また出土遺物のうち、須恵器甕の胴部2点の拓影を掲載したが、この溝の時期を示すものではないと考

える。したがって詳細な時期を求めることはできないが、001・B溝を切っはいる。

002溝は、後述する089溝や038溝とともに、当該地の区画をなしていた可能性が考えられる。

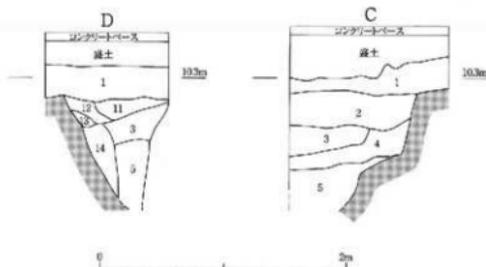
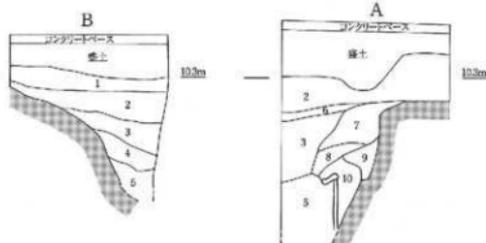
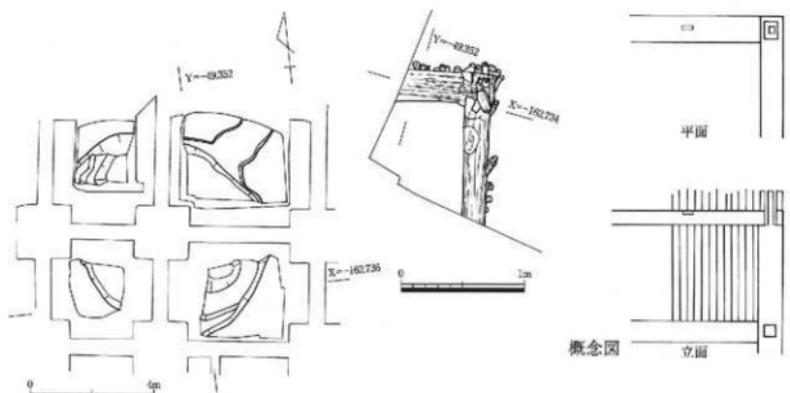
【023井戸】

1区北東で検出された井戸である。旧庁舎のコンクリート床面を解体して検出した。直径3.0～3.5mを測り、平面形は長円形を呈している。深さは検出面から約1.8m下まで確認したが、壁面崩落の恐れがあることからそれ以下の掘削は中止した。

井戸は、井桁に木組みし、背後に竹を刺し並べて壁面の崩落を防止するという、丁寧な作りがなされている。16世紀の鐮鉢が出土しているが、使用された用材が新しそうなので近代の井戸ではないかと推測する。ただし、掘り直しのあった可能性は否定できず、開削自体は中世に遡るかも知れない。

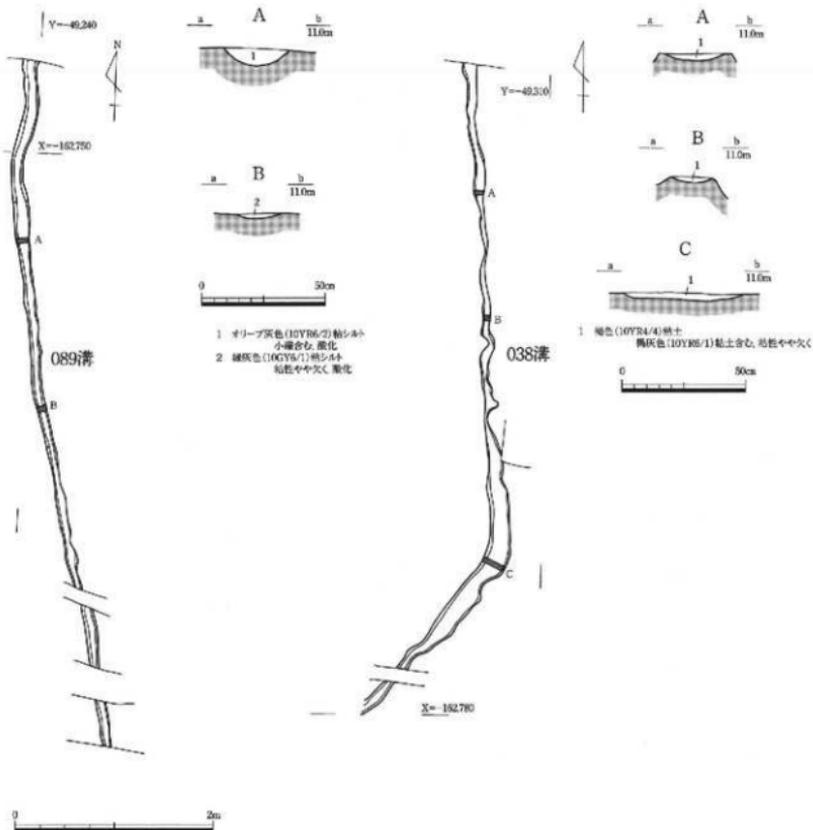
【089溝】

2区の中央で長さ15mにわたって検出された溝である。北西-南東方向に主軸をとり、直線的に延びるが、北端付近では東方に僅かに湾曲気味となっている。



- 1 黄褐色(2.5Y5/2)砂シト
粗質 砂土
- 2 緑黄色(2.5Y6/2)砂シト
小礫を含む、やや粗質
- 3 緑灰色(10Y25/1)砂シト
灰土(10B7/2)砂シト・灰色(10B/0)粘土を含む
- 4 緑灰色(10Y25/1)粘土
粗質
- 5 黄灰色(2.5Y6/1)粘土
黄褐色(2.5Y5/4)砂シトを含む、やや粗質
- 6 黄灰色(2.5Y6/1)粘土
黄褐色(2.5Y5/4)砂シト若干含む
- 7 黄灰色(2.5Y6/1)砂シト
黄褐色(2.5Y5/4)砂シトブロック若干含む
- 8 黄灰色(2.5Y6/1)砂シト
7層と同等上だが礫あり
- 9 明黄褐色(2.5Y6/3)砂シト
黄灰色(10B26/1)砂シトブロック若干含む
- 10 灰色(5Y5/1)砂質土
明黄褐色(2.5Y6/3)砂シトブロック若干含む、粗質
- 11 緑灰色(10Y25/1)砂質土
灰色(10B/0)粘土・ブロック若干含む、やや粗質
- 12 黄灰色(2.5Y6/1)粘土
に黄褐色(2.5Y6/3)砂質土を含む、粗質
- 13 灰色(7.5Y6/1)砂シト
マンガンを含む、やや粗質
- 14 黄灰色(5B26/1)砂シト
明黄褐色(10Y26/3)砂シトを含む

第12図 023井戸



第13図 038・089溝

幅は狭く、10~30cmを測るにすぎない。深さも5~10cmと浅い。堆積土は酸化した粘シルトである。出土遺物はなく、時期比定はできない。ただ、次に述べる038溝の北部部分と平行関係にあり、また規模も類似していることから、一連のものと考えられる。また、先にみた002溝とも関連する可能性がある。

【038溝】

3区南東で長さ14mにわたって検出された溝である。緩やかに「く」字状を呈して北方向に延びて行く。幅10~40cm、深さ5cm程度で、089溝と同規模である。堆積土は褐色粘土の単一層である。出土遺物はなかった。

上述したように089溝とともに一連の区画をなしているとするれば、東西約25mの範囲が囲ま

れることになる。また089溝と同じく時期を確定することはできないが、耕作痕などの方向と一致していることから、平安時代末に水田面を埋め立てたのちの溝だと考える。

3 第2面の調査

調査区全域に遺構が散在的に認められる。主な遺構は大溝、水田域、井戸、柵および掘立柱建物である。その中には重複関係がみられる遺構もあるので、異時期のものが同時に検出されていることになる。

とはいえ、この面における主な遺構は奈良～平安時代の溝とその東に広がる水田域である。旧庁舎の基礎のため検出状態は悪く、断片的にしか捉えられないものも少なくないが、全体的な様相を推測することは十分に可能である。以下、主要な遺構について記述していく。

【001溝】

調査区西辺に沿うように検出された溝である。溝は西辺が調査区外に延びているため全体の形状や規模を捉えることができないが、幅は現状でも10mほどある。

この溝は、2段の落込みからなっている。つまり、深さ10～20cmほどの掘方の中に2条の溝が走行し、さらに脇に1条の溝が沿うように延びている。2つの落込みを、西からA溝、B溝、それらを取り込んだ掘方に沿う溝をC溝と呼ぶ。

それぞれ溝には切り合い関係がなく、同時に開口していたとみられる。また本来は、各溝間に堤状の高まりのあった可能性が高いが、その痕跡は全く留めていなかった。なお地形からみて、水の流れは南から北への方向である。

A溝は西半が調査区外にあるため、全形、幅および最大深度が不明である。現状での最大幅は2.6mで、本来は5m以上と考えられる。Hベルトでは、深さは現状で最大1.4mを測る。状況的に溝の中央に近いとみられるが、湧水のため底部を確認できていないので、さらにどれほど下がるか不明である。B・Mベルトでは深さが最大1.2mほどなので、深度は1.4mを大きく上回ることはないと推測される。よって1.5m程度の深さではないかと推定する。

掘方は、上面より0.6mほど下がったあたりで掘り込み角度が強くなる。この2段掘りの状況はA・BベルトおよびMベルトでも確認されるので、部分的なものではなく、A溝全体になされた掘削形状といえる。

堆積土は主として粘土、粘シルト、砂シルトからなっている。また炭化物、有機物を含んだ層も存在する。Bベルトをみると、有段部以下ではオリーブ黒色粘土（15～18層）が主体を占め、最下層に砂質土（19層）が堆積している。これに対して有段部以上では黄褐色・灰色系の粘土・粘シルトが主流である。Mベルトにおいても有段部以下では、最下層を除いてオリーブ黒色・黒色系の粘土・粘シルトが主体であるのに対して、有段部以上ではやはり黄褐色・灰色系の粘土・粘シルトあるいは砂シルトが主流である。したがって、常時溜水していたのは有段部以下だけと考えられる。ただし、その有段部以上でも粘土や粘シルトの存在が認められるので、最終的には

上流から流された粘質土壌により埋没したとみられる。

またBベルトでは木製樋管を取り巻くように20層（黄灰色粘土）が確認された。しかしこれは木質分の腐食による変質と考えられる。したがって樋管を埋置するための掘方は設けられていない、溝の堆積過程の中で廃棄されたと考える。

木製樋管は、現状の長さが3.5m、幅は南端で36cm、中程で30cm、北端で25cmである。検出時には、導水部分を上に向けていたが、本来の位置を保っているとは考えられない。なおAMS分析によりB.P.1740±20年、B.P.1745±20年という暦年較正年代が示された。この木製樋管が本来溝に伴ったものであれば、倒木を利用して製作された可能性が考えられる。

B溝は、A溝の約2m東に位置する。ただし、2区中央では東方に弧を描きながらいったん張り出し、1区で再びA溝に平行している。この張り出し部では、溝全体の掘方も相対的に湾曲しているの、溝全体がそうした形状になるように設計されたといえる。

規模は、幅0.8～1.1m、深さは40cmほどである。「V」字状に近い断面形状を呈している。堆積土は、Aベルトでは褐色砂質土と灰白色砂・砂シルト、Bベルトでは灰白色砂、F・Gベルトでは褐色系の粘土・粘シルト・砂質土、J・Kベルトでは褐色粘土と灰色粘土・粘シルトが主体である。A溝のように、どのベルトにおいてもほぼ共通した様相が認められるという状況にはない。ただ、割合に多く認められる砂は、上流から流入した可能性がろう。

C溝は、B溝の約3m東に位置する。この溝は、1区から2区の北辺にかけては確認できるが、2区北では建物の基礎により崩され、それより南のB溝が湾曲した部分の東や、さらに3区では存在を認めることができない。C溝は、B溝が東に湾曲したのち北流するにつれて再び西に位置を寄せた付近で、B溝から分かれて北上する溝であったのかも知れない。

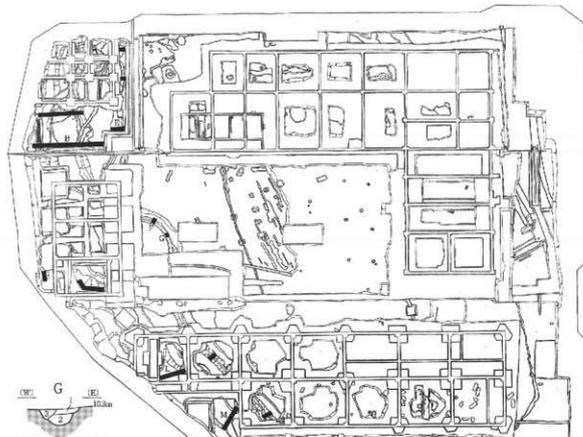
また、調査区北辺で東西方向に延びる溝の南辺が確認された。後述するように、この溝から水田域に導水がなされている。この東西溝は、C溝が調査区北辺付近で90度東に方向を変えたものと考えられる。

C溝の幅は0.5m、深さは10cmほどである。底部は比較的平坦である。堆積土は灰色系の砂・砂シルト・砂質土で、B溝内堆積土に比較的近似している。

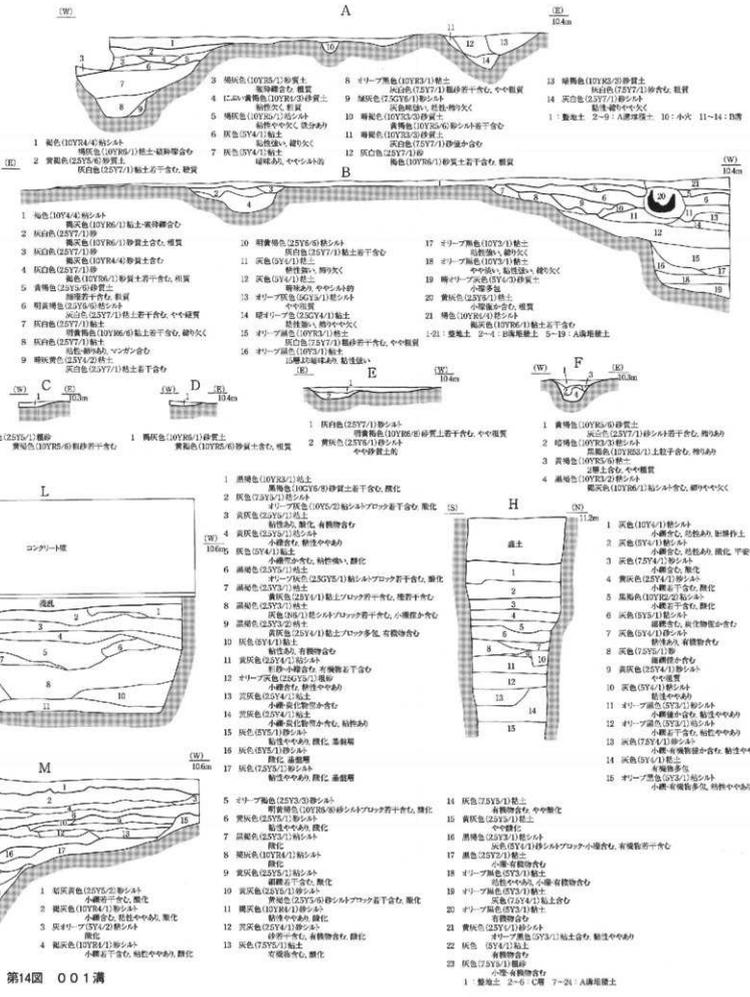
A・B・C溝および溝全体の掘方内から出土した遺物は少なくない。とはいえ、弥生土器も含んでいて、出土遺物そのものが各溝の年代を示すとは限らない。掲載した出土遺物については後述するが、全体的な傾向としては、8世紀以降の遺物が比較的多くまとまっていること、最も新しいものは12世紀代の瓦器であることから、溝全体として奈良時代に同時に開削され、平安時代末にほぼ埋没したと考えられる。

このように、ひとつの掘方内におさまった深さの異なるA溝とB溝、および調査区の北半付近から出現する、掘方に沿ったC溝が一体的な機能を果たしていたと捉えられる。そしてこのC溝はB溝から分離したものである可能性が高いのである。

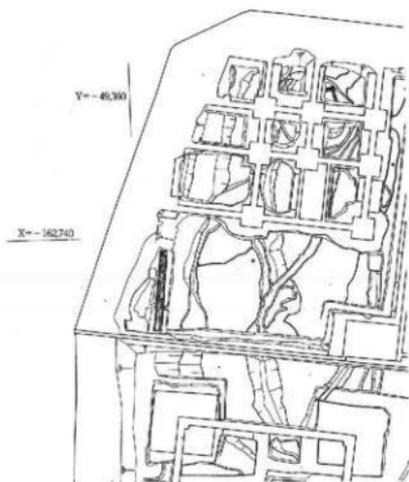
またA溝下半部における溜水状況を考えれば、3条は水を流すための溝である。つまり、溝の



- 1 褐色色(10YR5/3)砂質土
褐色色(2.5Y7/1)砂シロ土の層、砂化、腐葉層
- 2 暗褐色(10YR2/2)砂シロ土
黒褐色(10YR3/1)上粒子含む、腐葉層
- 3 黄褐色(10YR5/6)粘土
上粒子含む、やや腐葉
- 4 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 5 灰色(5Y5/1)粘土
暗褐色(10YR3/1)粘土を含む、やや腐葉
- 6 灰色(5Y5/1)粘土
暗褐色(10YR3/1)粘土を含む、粘性強い、腐葉層が多少認められる
- 7 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 8 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 9 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 10 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 11 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 12 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 13 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 14 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 15 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 16 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 17 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 18 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる
- 19 暗褐色(10YR2/2)粘土
褐色色(10YR5/1)粘土を含む、粘性やや強く、腐葉層が多少認められる

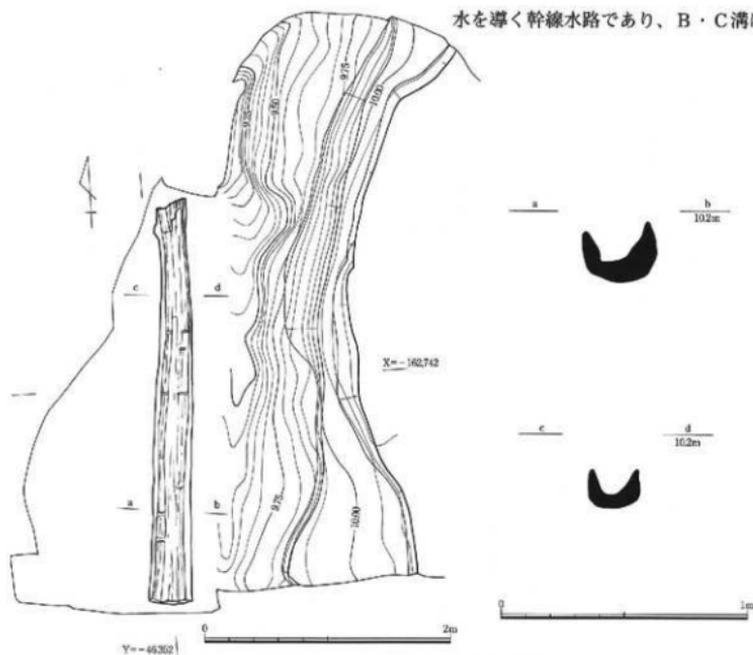


第14図 001溝

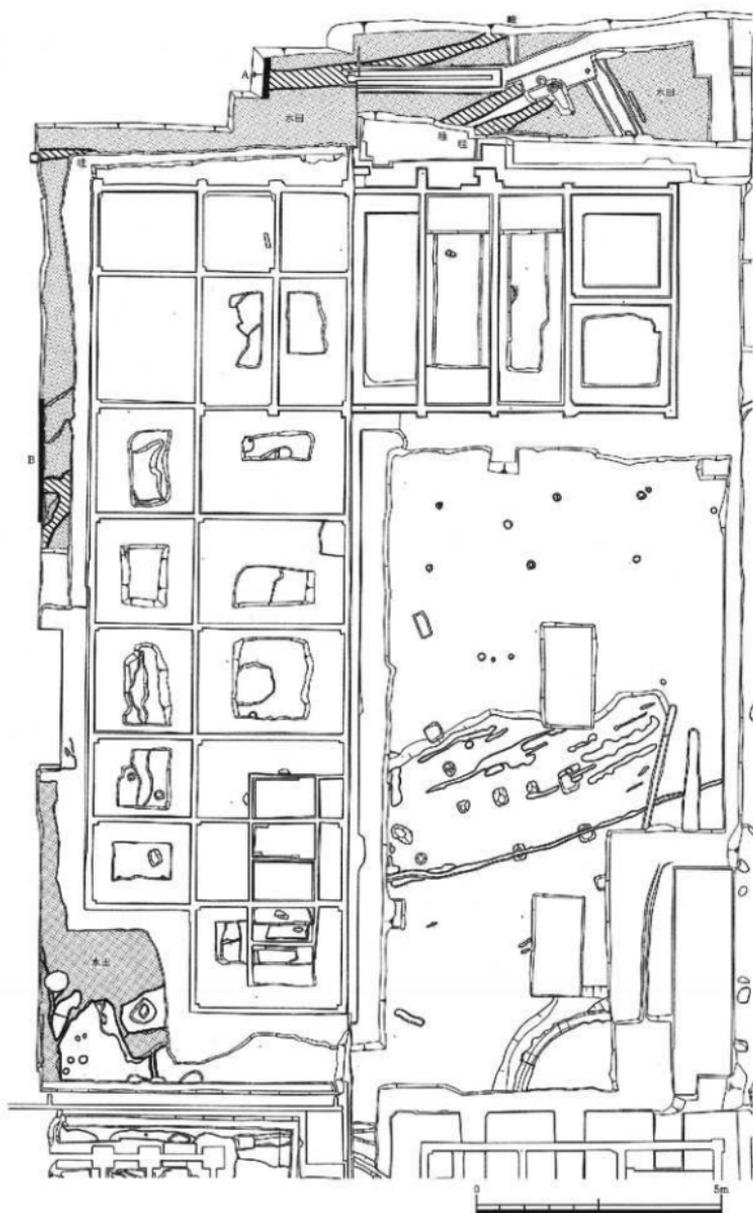


途中に堰を設けて水位を上げることによって、A溝からB溝、B溝からC溝へと順次導水され、最終的にC溝から水田に水が供給されたと考えられる。また出土した木製樋管は、A溝からB溝への導水のためのものとみられる。

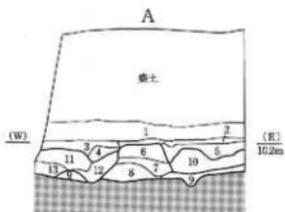
I章2「風東町4丁遺跡周辺の歴史」において、調査地から鶴田池までの間の遺跡の様相を概観した。その結果、多くの遺跡で、奈良時代に集落形成が本格化する状況が確認できた。そしてその背景には、溜池である鶴田池の構築と用水路の整備があったと結論付けた。こうした状況を踏まえれば、推定幅5m、深さ1.5mという規模をもつA溝は、鶴田池から大鳥方面に農業用水を導く幹線水路であり、B・C溝はそこ



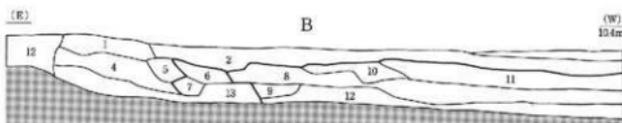
第15図 001・A溝木製樋管出土状況



第16図 水田城



- 1 褐色色(10YR4/1)粘シルト
細り欠く、粗質
- 2 灰褐色(10YR5/1)粘土
細りやや欠く、粘土
- 3 褐色色(10YR6/1)粘土
2層と同質土だが水分多い
- 4 褐色色(10YR6/1)粘シルト
やや粗質
- 5 黄灰色(2.5Y6/1)粘シルト
粗質、鉄分あり
- 6 灰褐色(N7/0)粘土
黄褐色(10YR5/6)粘土含む、細りあり
- 7 灰褐色(N6/0)粘シルト
細りあり、鉄分あり
- 8 灰褐色(N7/0)粘土
明黄褐色(10Y7/6)粘土含む、14層の再堆積土
- 9 灰褐色(N7/0)粘土
8層と同質土だが細りあり
- 10 灰褐色(N6/0)粘シルト
細り欠く、粗質
- 11 灰褐色(N6/0)粘シルト
骨格あり、細り欠く
- 12 灰褐色(N6/0)粘土
明黄褐色(10Y7/6)粘土含む、細り欠く、やや粗質
- 13 黄灰色(5.5Y6/1)砂
黄灰色(2.5Y6/1)砂含む
- 14 灰褐色(N7/0)粘土
黄褐色(10Y5/6)粘土含む、硬質、マンガン含む
1・2：中黒耕作土 3～5：盛土 6～9：粘 10～13：平安耕作土 14：黒砂



- 1 灰褐色(10G6/1)粘土
やや粗質、鉄分あり
- 2 灰褐色(10YR5/1)粘シルト
やや粗質、鉄分若干あり
- 3 灰褐色(10YR6/1)粘シルト
鉄分若干あり
- 4 黄灰色(2.5Y6/1)粘シルト
2層と類似するが鉄分少ない、硬りやや欠く
- 5 黄灰色(2.5Y6/1)粘シルト
鉄分若干あり
- 6 灰白色(2.5Y7/1)粘土
明黄褐色(2.5Y5/6)粘土多量、細りあり
- 7 褐色色(10YR6/1)粘土
明黄褐色(2.5Y5/6)粘土多量、細りやや欠く
- 8 灰褐色(7.5Y5/1)粘シルト
部分的に粘化あり、鉄分僅かあり
- 9 灰褐色(10Y6/1)粘土
粗質あり、鉄分あり
- 10 灰褐色(10Y5/1)粘シルト
やや粗質、鉄分あり
- 11 灰白色(7.5Y7/1)粘シルト
粗質、鉄分含む
- 12 灰白色(2.5Y7/1)粘土
鉄分あり、マンガン含む
- 13 灰白色(2.5Y7/1)粘土
12層と同質土だが粗質あり
1～3：肥土 4・5：盛土 6・7・13：粘 8～12：耕作土

第17図 水田城土層

から各水田に水を供給するための用水路であったと考えられる。

【水田域】

1区の水田から東にかけて水田域が検出された。基本的に、灰色系の粘土・粘シルトを耕作土としている。

既述したように、1区の北西ではC溝から水の供給を受けるための水口が3箇所認められた。3箇所が同時に開口していたかは不明であるが、いずれも黄灰色砂シルトにより埋まっていることから、同時開口の可能性は高い。この付近では、畦畔は確認できなかった。

調査区北辺に沿うように水田面が広がっている。やや東寄り付近で北西-南東に若干傾いた畦が検出された。この畦の南東延長方向で50cmほどの間隔を開けて平行する2条の畦が存在しており、同一の畦とみられる。

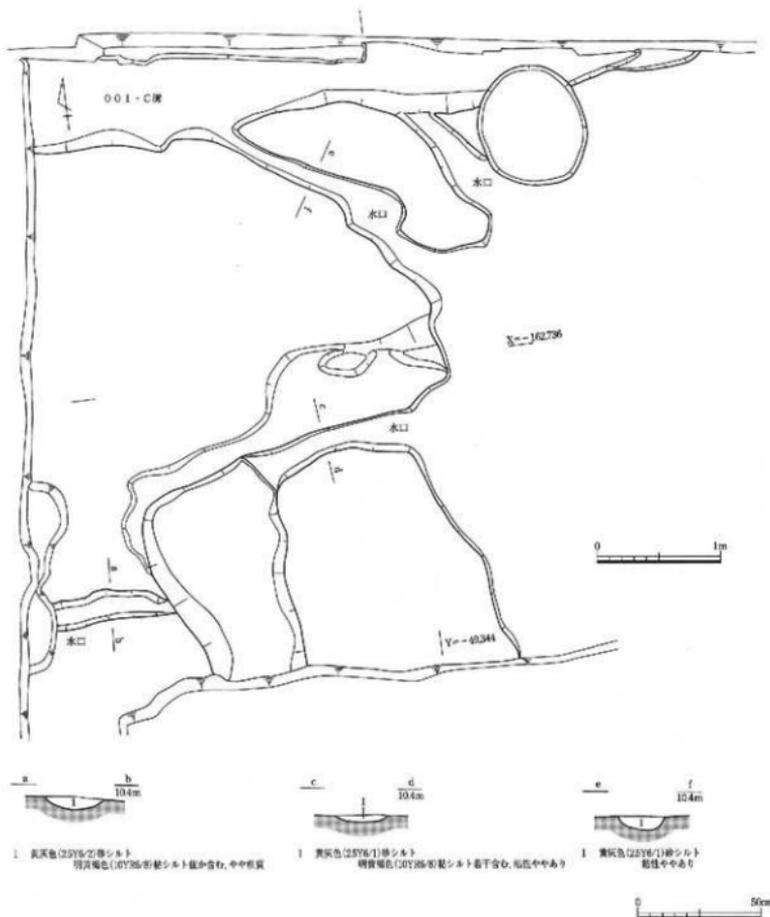
1区東では、上述の平行した2条の畦と、その2mほど東にさらに1条の畦が南北方向に伸びている。この畦は、高さ30cm、下幅60cmの規模であったことがAトレンチの土層断面から判明している。畦上部からは12世紀代の瓦器が出土している。また耕作土からは8世紀後葉の土器のほか13世紀の瓦器や須恵質土器、15世紀の瓦質播鉢も出土している。しかしながらその耕作土を覆う整地上には8～12世紀の遺物が含まれていた。したがって13世紀以降の遺物は上層からの混入

の可能性もあり、この水田城はおおむね平安時代末に廃絶されたとみられる。001溝とその東に広がる水田城とは一体のものであったといえる。

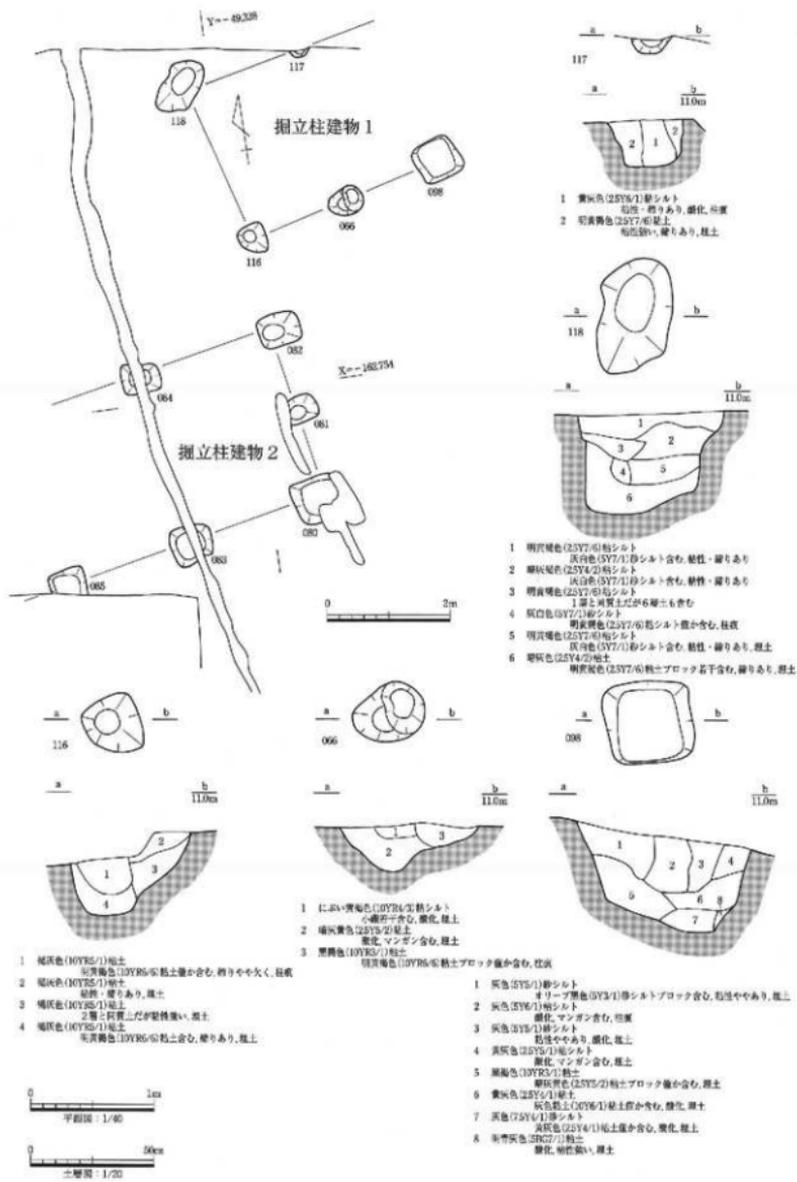
【掘立柱建物1】

柱穴である066・098・116～118土坑により形成された掘立柱建物である。南北方向に1間分、東西方向に2間分の柱穴が認められる。柱穴間の距離を勘案すると北西―南東が桁行方向である可能性が高く、とすれば総柱建物となる。柱穴の芯々距離は桁行が2.5m、梁行は1.5mである。

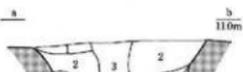
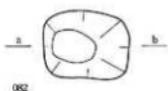
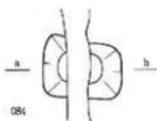
大半の柱穴で柱痕を認めることができる。その痕跡からすると直径15cm程度の柱材が使用され



第18図 001・C溝と水口



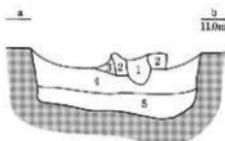
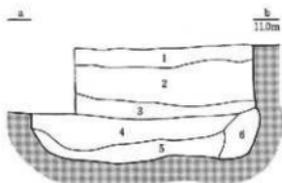
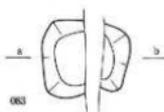
第19図 掘立柱建物 1



- 1 灰色(N6)砂シルト
やや軽質・酸化・粒状
- 2 灰色(N6)砂シルト
1層より若干下の粘性層、柱状
- 3 明褐色(S2YR5/6)シルト
粘性・細りやや大く、埋土
- 4 黒灰色(S1YR4/1)粘土
粘性・細りあり、炭化の塊を含む、埋土
- 5 灰白色(S2Y7/1)粘土
弱灰色(S1YR4/7)粘土含む、細りやや大く、埋土

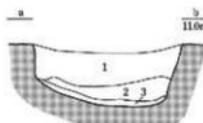
- 1 灰色(S1Y5/1)砂シルト
小礫若干含む、粘性ややあり
- 2 灰色(S1Y5/1)砂シルト
黒褐色(S1YR3/2)粘土ブロック状を含む、小礫含む、埋土
- 3 黒褐色(S1YR3/1)粘土
オリーブ褐色(S2Y7/6)・オリーブ灰色(SG1Y6/1)粘土を含む、柱状
- 4 黒灰色(S1Y4/1)粘土
黒灰色(S1Y4/6)粘土含む、小礫若干含む、埋土
- 5 黒灰色(S1Y4/1)粘土
4層と異質層下の粘性層あり、埋土

- 1 黒褐色(S1YR3/1)粘土
明褐色(S1YR5/6)粘土塊を含む、粒状やや大く、柱状
- 2 明褐色(S1YR5/6)粘土
灰白色(S1Y7/1)粘土若干含む、粒状・細りあり、埋土



- 1 明褐色(S2YR5/6)砂シルト
2層より若干含む、粒状
- 2 黒灰色(S1YR3/2)粘土
粘性やや大く、埋りあり、埋土
- 3 灰白色(S2Y7/1)砂シルト
粘性・細りやや大く、マンガン塊を含む、埋土
- 4 明褐色(S2YR5/6)粘土
灰白色(S1Y7/1)粘土、細りやや大く、埋土
- 5 明褐色(S2YR5/6)粘土
粘性・埋りあり、炭分あり、埋土
- 6 黒褐色(S1YR3/2)粘土
明褐色(S2YR5/1)粘土を含む、埋りあり、埋土

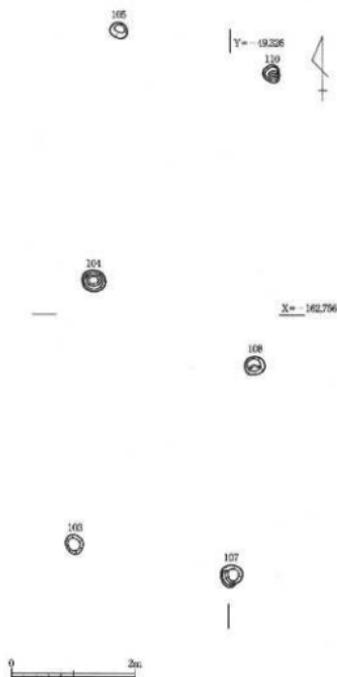
- 1 灰白色(S1Y7/1)砂シルト
粘性大く、粒状・柱状
- 2 灰白色(S1Y7/2)砂シルト
埋りあり、炭化・粒状小
- 3 灰白色(S1Y7/6)砂シルト
やや軽質、酸化・埋土
- 4 灰白色(S1Y7/1)砂シルト
5層と異質層を含む、埋土
- 5 明褐色(S2YR5/6)砂シルト
埋り層を含む、酸化・埋土



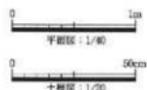
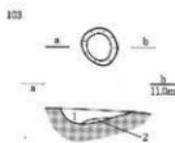
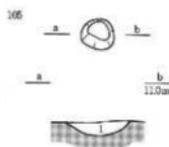
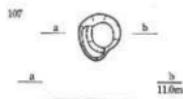
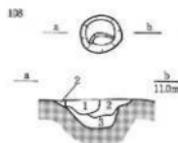
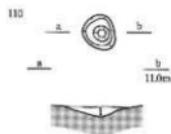
- 1 灰白色(S1Y7/1)砂シルト
明褐色(S1YR4/2)砂シルト若干含む、埋りあり、埋土
- 2 灰白色(S1Y7/1)砂シルト
灰白色(S1YR4/2)砂シルト含む、埋りあり、埋土
- 3 明褐色(S2YR5/6)砂シルト
明褐色(S1YR4/2)砂シルト塊を含む、埋りあり、埋土



第20図 掘立柱建物2



- 110
1 灰色 (SY5/1) 砂シルト
マンガン含有, 酸化
- 106
1 灰色 (SY4/1) 粘シルト
粘質やや欠く, 酸化, 柱状?
2 緑灰色 (10GY5/1) 粘シルト
粘質やや欠く, 酸化
3 明緑灰色 (10GY7/1) 粘シルト
粘質やや欠く, 炭化物含有, 酸化
- 107
1 緑灰色 (5G5/1) 砂シルト
粘質欠く, 酸化
- 105
1 明オリブ灰色 (2SGY7/1) 粘シルト
マンガン含有, 酸化
- 104
1 灰色 (SY5/1) 粘シルト
高炭化物含有, 酸化
2 オリブ灰色 (2SGY5/1) 砂シルト
粘質ややあり, 酸化
3 明緑灰色 (7SY7/1) 粘シルト
粘質やや欠く, 酸化
- 103
1 明緑灰色 (10GY4/1) 砂シルト
粘質ややあり, 炭化物含有, 酸化
2 緑灰色 (5G5/1) 粘シルト
粘質やや欠く, 酸化



第21図 欄

ていたとみられる。

【掘立柱建物2】

柱穴である080～085土坑により形成された掘立柱建物である。掘立柱建物1と同じく正方位に対して西に主軸を振っている。掘立柱建物1とは主軸方向を90度異にして、北東～南西を桁行方向としている。現状、梁行2間、桁行2間である。梁方向に拡大する可能性はないが、桁方向についてはさらに1間分拡大する可能性を残している。柱穴の芯々距離は、桁行が1.8m、梁行はやや不均一で、1.4～1.5mほどである。

掘立柱建物2でも、半数の柱穴で柱痕を認めることができる。その痕跡からすると、掘立柱建物1と同じく直径15cm程度の柱材が使用されていたようである。

2棟の掘立柱建物とも、時期比定の根拠となるほどの遺物がないため、時期不明である。ただ、建物の東には奈良～平安時代の水田が広がり、本来は建物場所も水田域であったと考えられる。したがって水田化される前の、古墳時代に構築されたのではないかと推測する。

【柵】

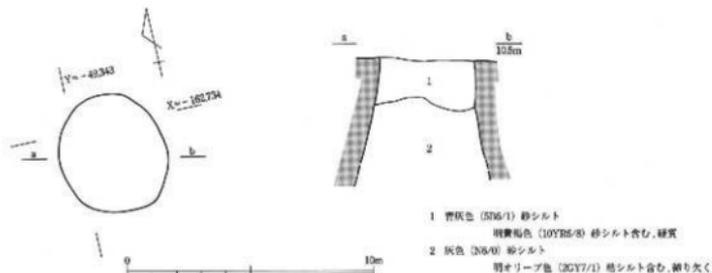
103～105小穴と107・108・110小穴からなる2列の柵である。両柵の間隔は2mほどある。杭あるいは柱を据えた掘方とみられる小穴は、直径約30cm、深さは5～15cm程度である。108小穴のみに柱痕状の堆積土が認められたが、それ以外では確認できなかった。

この柵の位置も奈良～平安時代の水田域に当たっている。ほぼ北～南方向に延び、先の掘立柱建物1・2とは主軸が異なる。平安時代あるいは中世に時期を求めることができよう。

【024井戸】

調査区北辺の西寄りで検出された素掘りの井戸である。直径0.8～1.0mを測り、この井戸も平面形は若干長円形を呈している。深さ0.9mまで確認したが、それ以下の掘削は中止した。

この井戸は、確認した範囲においては、下方ほど直径が広がっていた。堆積土は上半が青灰色砂シルト、下半が灰色砂シルトであった。出土遺物がないため時期を求めることはできないが、平安時代の水田面を整地して形成された耕地に伴う野井戸の可能性もある。



第22図 井戸24

4 出土遺物

実測図により示した遺物は267点、拓影を示したものは86点である。以下にまず実測図を掲示した遺物について、出土遺構や層ごとにみていく。なお大半の遺物が遺存率10%以下の小破片であり、ほとんどの実測図は反転復元により作成した。

1～172は001溝出土の遺物である。そのうち1～62は、幹線水路であるA溝から出土したものである。

1～3は弥生土器である。1は甕蓋、2は甕底部、3は壺底部で、いずれも詳細な時期比定はできない。4はV様式系甕の底部である。底部の突出は弱い。

土器のうち7は磨耗のため器面調整は不明であるが、胴部上半から口縁部にかけて直立し、ユビナデのため口縁部下が屈曲している。6世紀代に遡るとみられる。6・8～10は7世紀代、11～13の甕は8世紀後半代に比定できよう。8と10は類似した形態を示しているが、前者の口縁部端が直立しているのに対して、後者では丸くおさまられていて後出的である。

9の口縁部は短い、開きが強い。端部は、内面が僅かに肥厚している。また胴部の球形度は高い。

11は、口縁部の開きが強い一方、胴部の張りが乏しいため、口径が胴部最大径を上回り、鉢形を呈する。摩滅のため内外面の調整は不明である。

14は頸部が「く」字状に屈曲している。口縁部の下が強くユビナデされているため、ナデの弱い中央付近が肥厚している。端部はやや丸くおさまる。9～10世紀のものともみられる。

このように土器については、弥生時代のものも含まれているが、大半は飛鳥時代～奈良時代のもので、下限は平安時代前半であった。

須恵器は34点を掲載した。5の甕胴部は時期比定できないが、その以外のものについては5世紀後半～12世紀に時期が求められる。

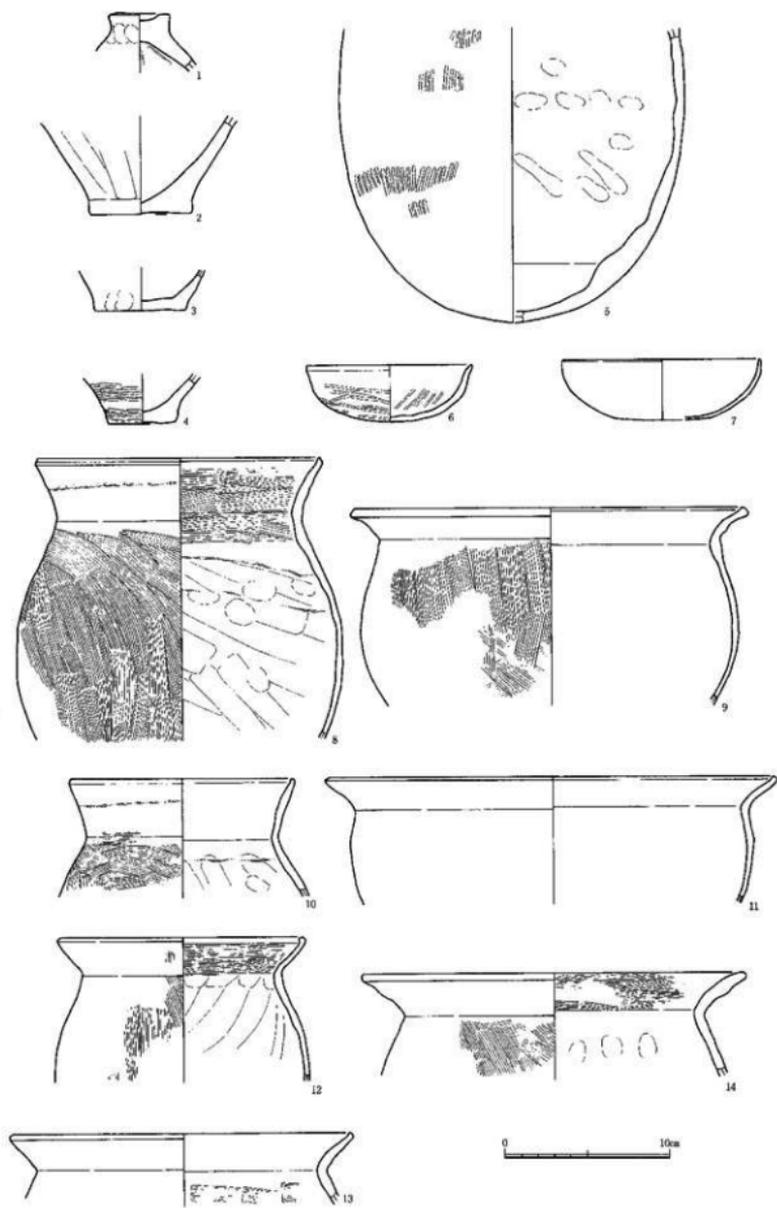
15はTK23型式、5世紀後半のものとする。A溝出土の掲載須恵器の中では、最も時期が遡る。胴部は深く、底部にかけて丸味をもつ。16の杯蓋は、15に続くTK47型式のものである。口縁部は直立し、天井部にかけて丸味をもち、器高がある。

17～23は6世紀代のものである。杯蓋は口縁部が外方に開き気味である。杯身では、胴部の深さや底部にかけての丸味が乏しくなっている。

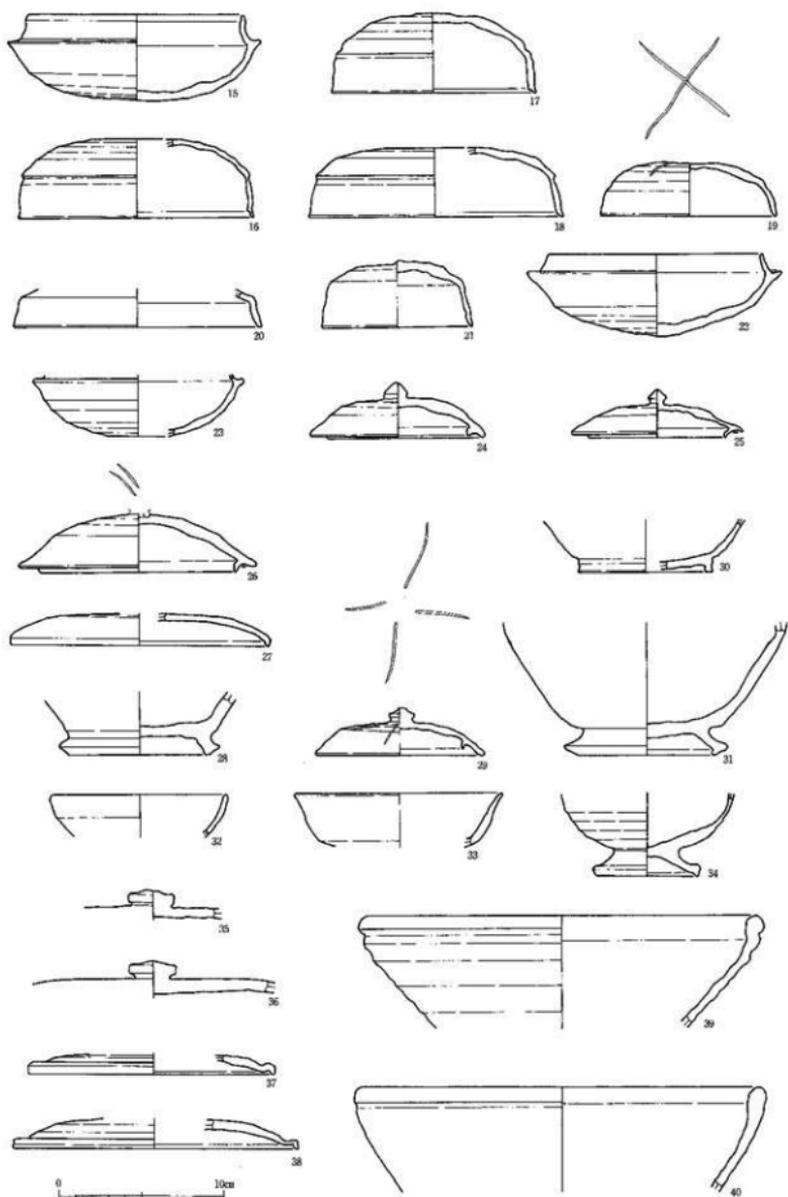
22の底部は、尖り気味になっている。23は幾分丸底に近いとみられる。

24～31は7世紀代のもともみられるが、30・31は8世紀代に下るかも知れない。32～44は8世紀代のものであるが、43・44は9世紀代に下る可能性をもつ。

26は本来、宝珠つまみの付いていた蓋である。24・25に比べると大振りである。28は胴部上半から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる杯であるとみられる。31は上半が欠損していて、形態が不明であるので、瓶類として捉えた。



第23圖 001・A清出土遺物(1)



第24图 001·A 清出土遺物 (2)

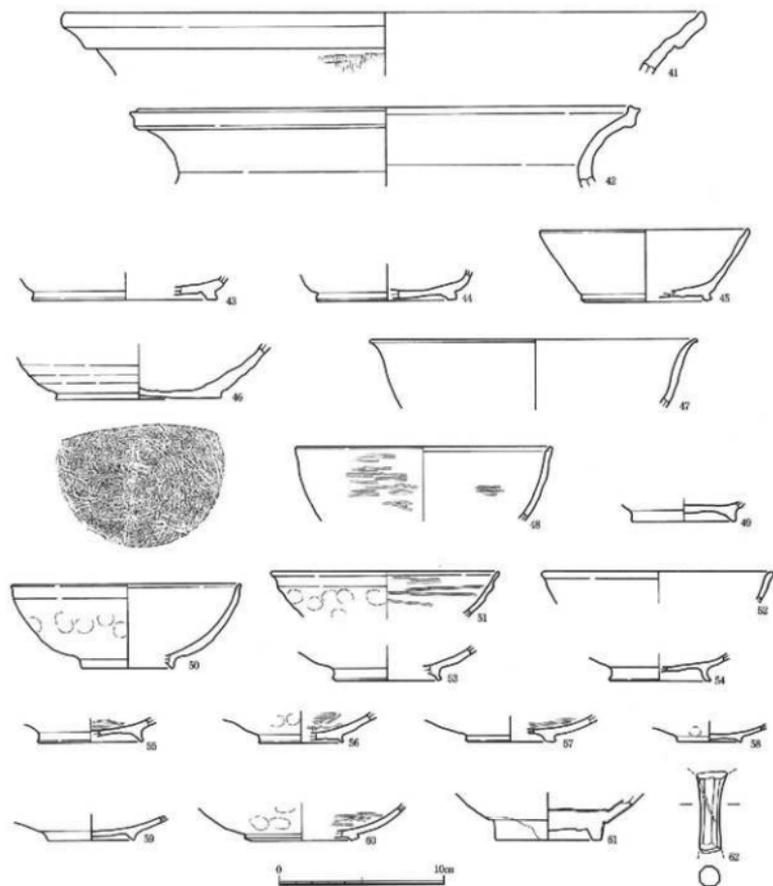
32・33は杯である。前者は口縁部が内湾気味、一方後者は外反するが、ともにMT21型式に比定できよう。

39・40は鉢である。後者の方が全体に作りが鈍い。

41・42は甕の口縁部である。前者は直線的に立ち上がり、貼付けによって有段化している。後者は「く」字状に鈍く屈曲し、端部は直立する。前者は8世紀前半、後者は8世紀後半に位置付けられる。

45・46の杯は9世紀代、47の碗は12世紀のものとする。

45は、復元実測によるが、全形を捉えることができる数少ない資料である。胴部から口縁部に



第25図 001・A 溝出土遺物 (3)

かけて直線的に立ち上がり、逆「ハ」字状を呈する。

46は高台部のない杯である。底部にかけて器厚を増し、僅かに上底気味になっている。底部に回転糸切痕を残す。

須恵器については、古墳時代中期から平安時代後半までのものがある。ただし中でも、奈良時代以降のものが半数を占めている。

48・49は黒色土器である。48はB類、49はA類。48は胴部上半から口縁部にかけて内湾し、口縁部内面がヨコナデによって段がつく。B類の中でも古相を呈するものとみられる。49の高台部は断面三角形である。48・49はともに、10世紀代に比定できよう。

50～60は瓦器碗である。全形が捉えられるのは50だけである。高台部が脆弱化した58・59は13世紀代に下ると考えられるが、その他は12世紀代に収まるであろう。

50は復元実測により全形を捉えることができる。器高をやや欠いているが、胴部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、やや丸味がある。

61は白磁碗である。今回の調査で検出された唯一の白磁である。底部、高台部ともに厚い。削り出し高台をもつ。断面は方形を呈している。高台部の一部に軸掛けが及んでいる。

62は土馬の脚部である。上馬もこの62が唯一の出上例である。奈良時代のものであろうが、確証を欠く。

63～91はA溝に平行して走行するB溝から出土したものである。土器、須恵器、黒色土器、瓦器があり、遺物の種類としてはA溝とほぼ変わらない。

63～68は土器である。63は弥生中期の壺の底部と考えられる。摩滅が著しく、器面内外の調整は不明。68は口縁部を欠いているが、庄内期新段階とみられる甕である。胴部外面には、細ハケ調整前のタタキ調整の痕跡が僅かに残っている。内面はヘラケズリがなされている。器厚は、現状最大で0.3cmにすぎず、薄い。

64は古墳時代中期の甕、65は7世紀後半の碗、66は8世紀後葉の甕、そして67は13世紀代の碗の底部と考える。

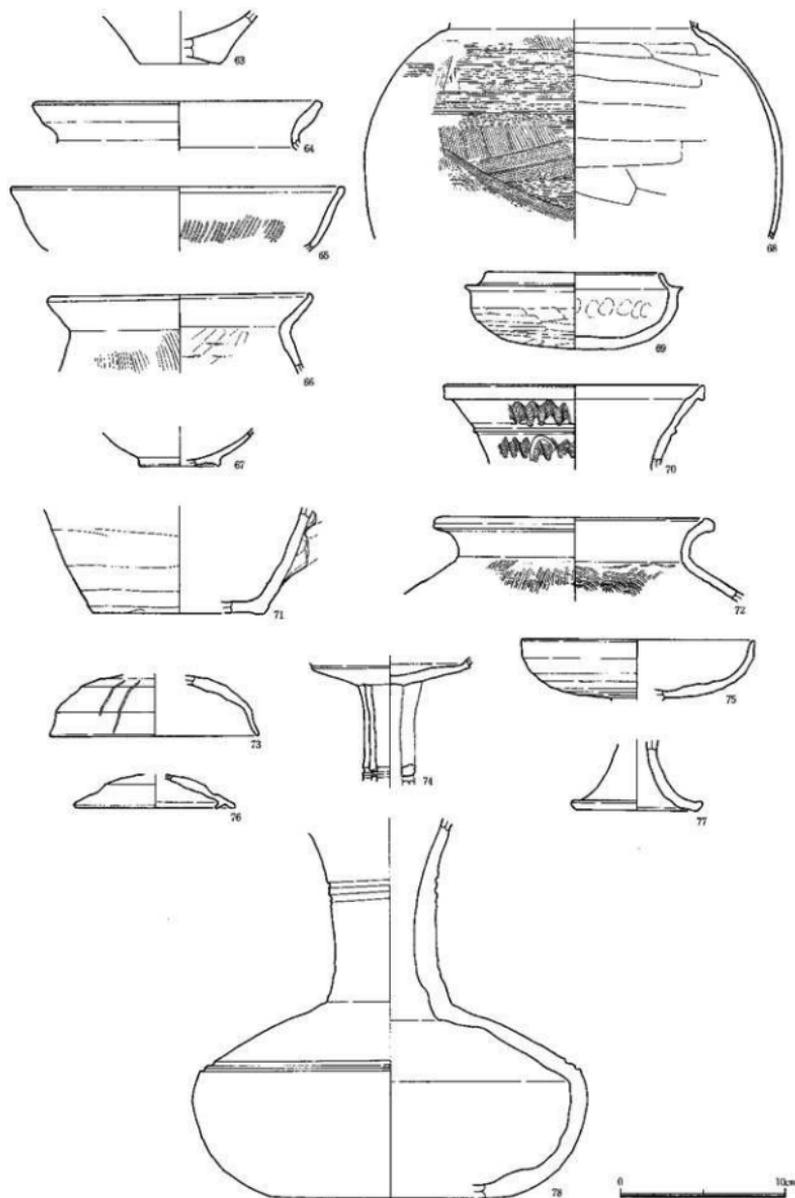
65の碗は、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部端が丸く収まる。胴部内面にはミガキによる格子状暗文が認められる。

66の甕は、頸部が「く」字状に鈍く屈曲し、口縁部の端部は肥厚する。先述の12と形態が類似していて、同時期と考えられる。

67の碗の高台部は、断面三角形を呈している。

B溝の土器には弥生時代から鎌倉時代までのものがみられ、A溝出土の土器より下限が延びている。しかし、A溝出土の遺物全体と比較すると年代幅はほぼ一致している。

B溝出土の須恵器は20点を図示した。そのうち69の杯身は土釜形を呈し、胴部外面にヘラケズリ調整を留めている。底部は平坦に近い。TK73型式に比定でき、胎土や色調から陶邑窯跡群で生産されたとみられる。



第26圖 001・B 清出土遺物 (1)

70の甕は、口縁部中央に鋭い突線を巡らせ、それを挟んで上下に波状文を施している。口縁部端正面は面をもつ。5世紀後半のTK23型式に比定できる。

71は把手付鉢である。底部は平坦であるとみられる。胴部外面には、丁寧なヘラケズリが施されている。型式比定はできないが、5世紀中葉の初期須恵器の範疇で捉えられよう。

72～75は6世紀代のもの、76～80はほぼ7世紀代のもの、81～87は8世紀代のもの、そして88は9世紀前半と考える。

72の甕は、口縁部が短く、端部は丸味をもって玉縁状に肥厚している。端部内面はユビナデのため僅かに窪む。

73の杯蓋の天井部には2本線のヘラ記号が記されていて、A溝出土26と共通する。口縁部は外反気味に開き、端部は丸く収まる。

74は長脚高杯で、2段の透孔をもつ。75は無蓋高杯。77は低脚高杯。

78は長頸壺である。胴部は扁平で上半部に2条の沈線を巡らせている。底部はほぼ平坦とみられる。

79は大型甕の口縁部である。口径は50.2cmを測り、器高は1m前後であろうと推定する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は肥厚して断面三角形を呈し、正面に面をなす。2条1対の沈線を3対巡らせて3段に仕切る。上2段に太いヘラナデを加えていて、ヘラ描き状の痕跡となっている。

80は甕の口縁部である。頸部で折損している。口縁部の長さは4.5cmほどと短い。端部上面が平坦に仕上げられている。

81の甕の口縁部は上半が緩やかに屈曲し、僅かに有段化している。2条1対の沈線を3対巡らせて口縁部を3段に分割している。その前段階に縦方向のヘラナデを施していて、それがヘラ描き状の痕跡として認められる点は、先の79と同じである。

82の鉢は40に比べるとやや浅いが、ほぼ同じ時期のものと考えられる。

83の杯は、A溝出土の杯33に形態が類似するが、胴部から口縁部にかけての立ち上がり形状から後出するとみられる。

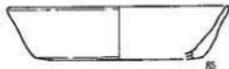
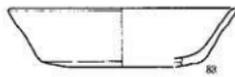
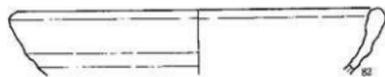
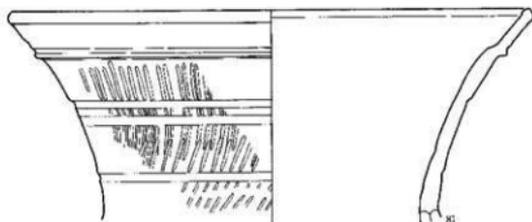
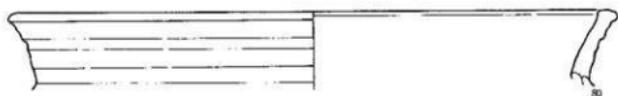
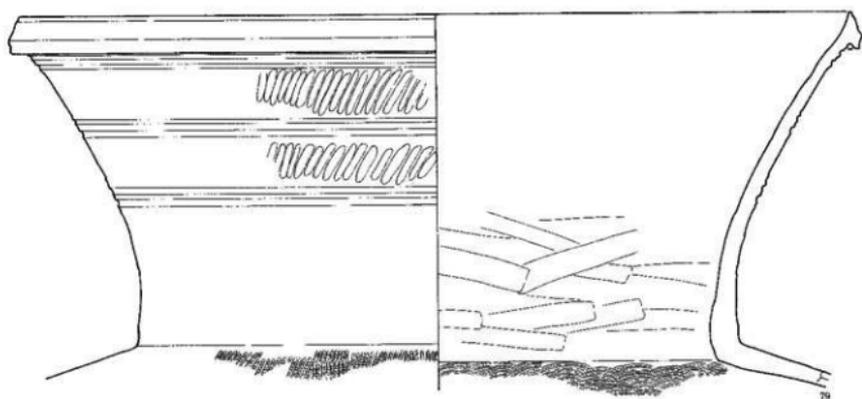
B溝出土の須恵器には、A溝で認められたような平安時代後期のものはなかった。しかし、その点を除くと、5世紀～9世紀のものであること、40%が奈良時代以降のものであることは、A溝出土の須恵器とほぼ共通している。

89はA類黒色土器である。高台部は細い長方形を呈している。10世紀代に比定できる。

90・91は瓦器碗である。90の高台部は脆弱化し、断面は三角形を呈している。13世紀代に比定できよう。

91は胴部から口縁部にかけての破片である。直線的に立ち上がる形状は形骸的な様相を示しているが、幾分深さを保っているようで、12世紀代のものと考えられる。

したがって土器碗67と瓦器碗90が13世紀代に下るが、それ以外は平安時代末までに収まるとい



第27圖 001・B溝出土遺物(2)

える。

C溝出上の遺物のうち、図示できたものは92～94の3点にすぎない。92は土器の甕で、7世紀後半とみられる。口縁部は短く、直立する。端部は尖り気味である。

93は須恵器の杯である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。8世紀後半に比定できる。B溝出上の83に形態が類似している。

94はB類黒色土器である。高台部断面は長方形を呈し、高さを保っていることから、10世紀後半～11世紀前半に位置付けられよう。

C溝出上の図示遺物は少ないが、各遺物とも平安時代末までに収まる点はA溝やB溝と一致している。したがって各溝とも埋没時期は共通していたとみられる。

95～172は001溝一括として取り上げたものである。A・B・C溝から出土したものを峻別できず一括に取り上げたものもあるが、多くは各溝が埋没し、それらの上部に堆積した全体の掘方内の覆土から出土したものである。

95～104は土器である。95は弥生時代の壺の底部。96は布留式甕の口縁部～胴部上半の破片資料である。口縁部端の内面肥厚は僅かである。口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部外面には細かなハケ調整痕が残る。内面にはユビナデ・ユビオサエがなされている。

97・100は古墳時代後期の高杯の脚部である。97は柱状脚部で、裾部は内湾気味に開く。脚部外面に幅広いヘラケズリが施されている。

98は半球形を呈する碗である。器厚は0.2cmと薄い。口縁部はやや直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。

99は、12や66と同じく口縁部端が直立する甕である。胴部外面のハケ調整は粗い。

101の甕は、口縁部が短く外反して水平に張り出したのち、端部が上方に肥厚している。102の甕は、胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する形態を呈し、口縁部端内面が肥厚している。101は、この102に近い形状であるとみられる。

103は胴部上半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる碗である。口縁部端の内面がやや肥厚している。

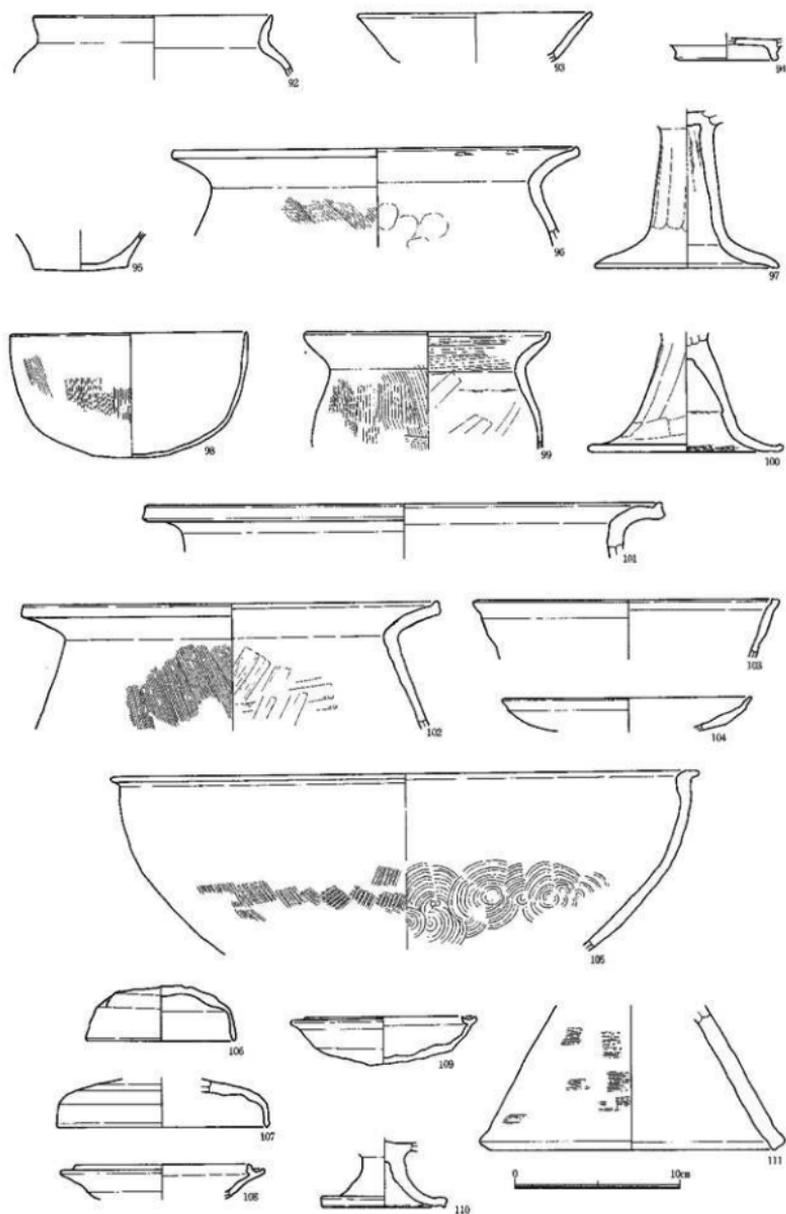
98・99・101～103は8世紀代に、104の皿は9世紀前半に、それぞれ年代を求めることができよう。

105～166は須恵器である。この中には、5世紀代に遡るものは見当たらない。105～112は6世紀代に比定できる。

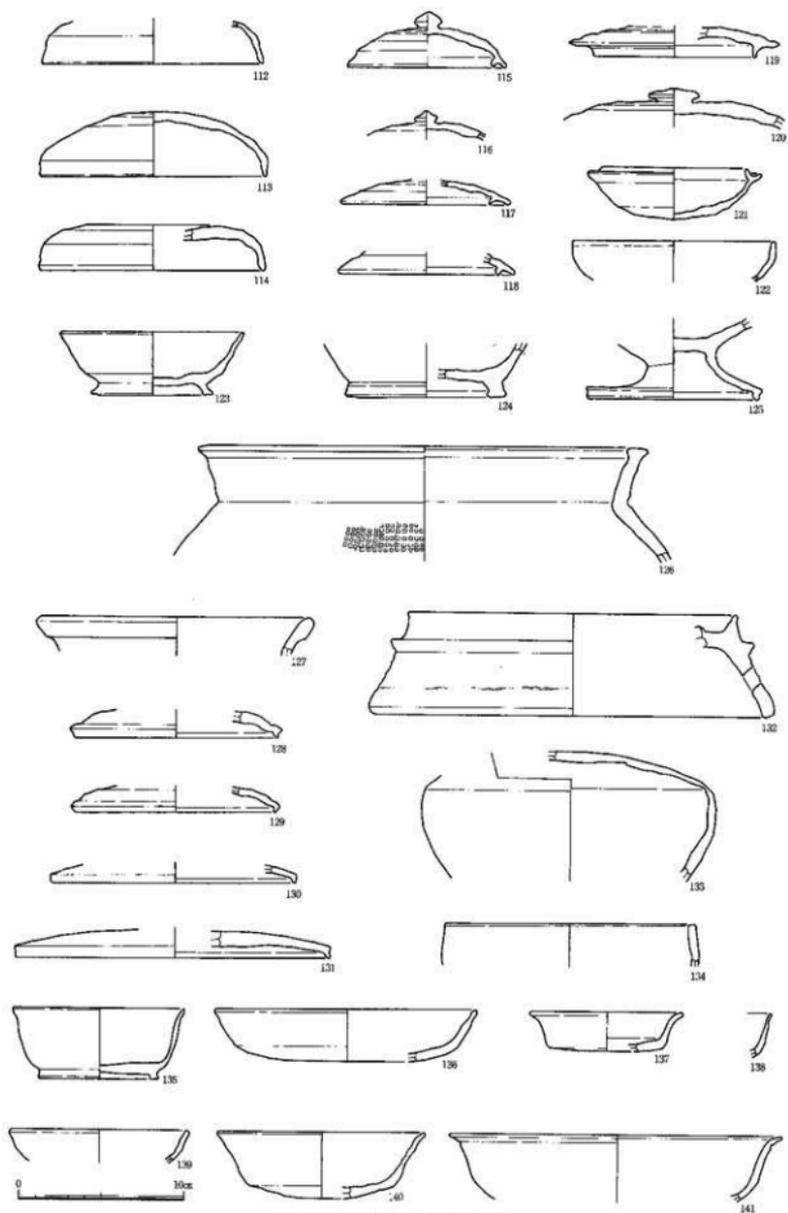
105は鉢型を呈する大型器台である。器受部上半は丸味をもって立ち上がるが、下半は丸味を欠く。端部は鋭く外反する。胴部外面下半に平行タキ痕跡、内面に当具痕を残す。

111は大型器台の脚部と考えるが、詳細は不明である。直線的に「ハ」字状を呈して立ち上がり、端部は断面方形を呈している。外面にタキ調整の痕跡を残している。

110は低脚高杯の脚部とみられるが、他器種の脚部である可能性も残る。



第28图 001·C溝出土遺物／一括遺物(1)



第29圖 001清一括遺物(2)

112の杯蓋は、口縁部から天井部にかけて幾分丸味をもって立ち上がり、口縁部はやや外反気味である。TK209型式に位置付けられよう。

113～127は、一部に8世紀代に下る可能性のあるものも含まれるが、ほぼ7世紀代に位置付けられる。

113は口縁部が短く、直立する。天井部にかけて丸味をもって立ち上がる。天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭い。TK217型式に位置付けられよう。

122は、口縁部が直立する碗である。123は、復元実測により全形を捉えることができた杯である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口径に対する身高は乏しい。TK48型式に比定できる。

124は高台部が厚く瓶類の底部と考えるが、全体の器形は不明。125は低脚高杯の脚部。

126は甕。口縁部は短く、直立気味である。端部は平坦で、内面が若干肥厚する。TK216型式に比定できよう。127は壺の口縁部である。貼付口縁部で、端部は丸く肥厚する。

128～157のうち、133が古墳時代後期とみられる以外、多少の年代幅はあるが、ほぼ8世紀代に比定できるものである。

132は円面碗である。復元実測によるが、その外形を捉えることができる。脚部中程に透穴が配され、下半は内湾する。7世紀後半に遡る可能性がある。

133は平瓶の胴部。胴部に丸味があり、肩部が張り気味である。割合に高さがある。6世紀後半に位置付けられよう。

135は杯で、8世紀中葉に比定できる。胴部上半から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁部端は丸く収まる。小片のため復元実測できない138は、ほぼ同じ形状であるとみられる。これらに比べて、胴部から口縁部への立ち上がりがなだらかな140は後出するものである。

141は、短く外反する口縁部をもつ杯である。口径20.0cmを測り、大型品である。

142は鉢の胴部下半以下の資料と捉えたが、瓶類あるいは大型杯の可能性もある。143は瓶類の底部と考えるが、全体の器形は不明である。142に似ているが、ひとまわり大きく、底部はやや丸味がある。

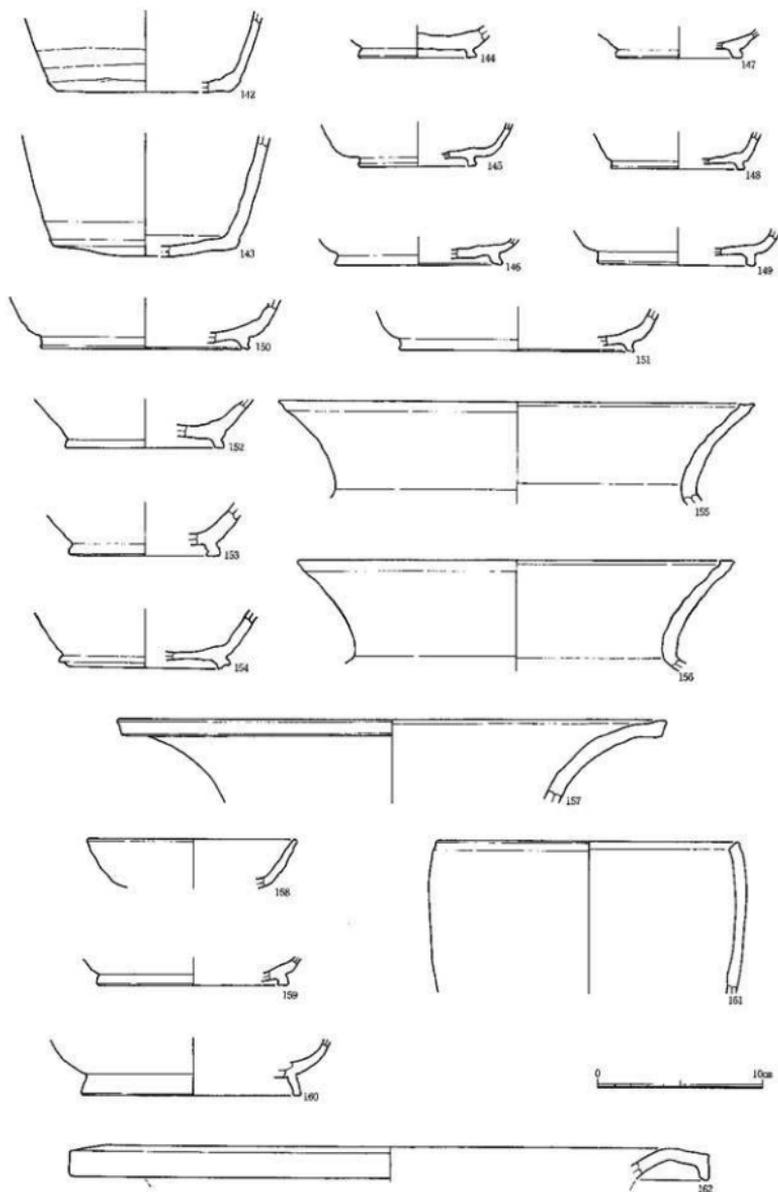
155と156は、形状の近似した甕である。ともに口縁部が大きく外反し、口縁部上端がユビナデによって水平に平坦化している。同一個体の可能性もあるが、両者は口径が若干異なり、後者のほうが少し大きい。また出土位置や検出日も異なることから、別個体とした。

158～162は9世紀代に比定できると考える。

158は杯である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。器高に乏しい。

160は高台部が高く、鉢であろう。161も深さのある鉢と考えた。胴部から口縁部にかけてやや内湾しつつ直立する。口縁部端は平坦で、内傾する。

162は、大きく開く口縁部をもつ大型甕である。端部は折り返されている。



第30圖 001清—活邊物（3）

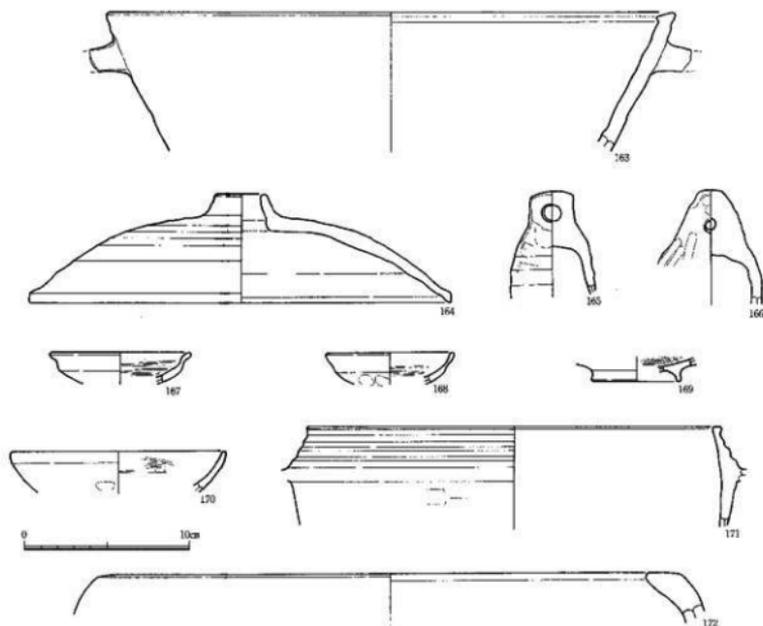
163～166も須恵器であるが、年代比定ができないものである。163は甌である。164は蓋とみられるが、突起する頂部中央に穿孔がなされている。口縁部端は若干直立している。天井部外面には回転ヘラケズリ、口縁部外面には回転ユビナデを施す。天井部から口縁部にかけて丸味があり、口縁部端は面をなす。

165・166は飯蛸壺である。

167～170は瓦器である。167は瓦器皿で、口縁部が強いユビナデのため屈曲外反する。口径に比して器高がある。168は胴部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口縁部は屈曲外反しないが、167と同様に口縁部外面にユビナデがなされていて、調整法は共通している。また口径に対する器高の割合もほぼ等しい。ともに12世紀代に位置付けられよう。

169の椀底部は断面長方形の高台部をもち、やはり12世紀代に比定できる。これに対して170の椀は、器高が浅く、口縁部が僅かに内湾する形状から13世紀代に下ろう。171・172は瓦質土器で、前者は羽釜、後者は火舎である。後者は15世紀代に位置付けられよう。

173～183は平安時代の整地上、184～189は平安時代の耕作土から出土したものである。173・174は土器である。前者は8世紀後半の皿。後者は椀の底部で、高台部の断面が三角形に形骸化していることから、平安時代のものとみられる。



第31図 001溝一括遺物(4)

175～177は須恵器である。175は8世紀代の杯、176は7世紀後葉の杯である。177は瓶としたが、全体の器形は不明である。

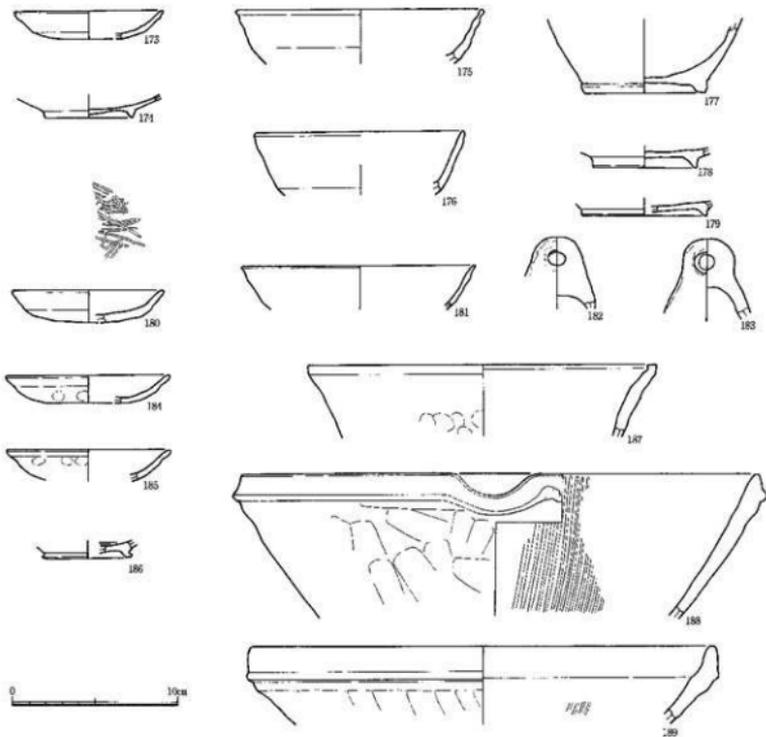
175は、胴部から口縁部にかけて僅かに内湾して立ち上がる。ユビナデにより口縁部外面には稜が立つ。端部は丸味がある。

176は、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部は尖り気味である。TK48型式に比定できる。

178・179は黒色土器の底部で、前者はA類、後者はB類である。178は10世紀代、179は11世紀代にそれぞれ年代付けられよう。180・181は瓦器である。前者は皿、後者は椀で、ともに12世紀代に比定できる。182・183は飯蛸壺である。ともに年代比定はできない。

平安時代の耕作土から出土したものには、まず184～186の瓦器がある。184・185は皿で、胴部から口縁部にかけて浅く立ち上がる形状から13世紀代のものとみられる。

186は畦上部から出土した瓦器椀である。高台部の断面は方形を呈して、12世紀代に遡る



第32図 平安整地土・耕作土出土遺物

と考える。

187は土器の甕の口縁部である。口縁部端は直立し、平坦になっている。外面に煤が付着している。8世紀後葉のものとみられる。

188・189は須恵質土器である。前者は東播系の片口播鉢で、13世紀代に比定できる。189は播鉢である。15世紀代に比定できる。

耕作土の基盤となった平安整地土からは奈良～平安時代の遺物が出土したが、より新しい時期のものは検出されなかった。これに対して平安耕作土から出土した遺物のほとんどは13～15世紀代のものであった。しかしこれらは、耕作土の上層である中世整地土・耕作土内の遺物が混入した可能性を否定できない。畦上部から出土した12世紀の瓦器碗が、耕作土形成の最終年代を示していると考えられる。

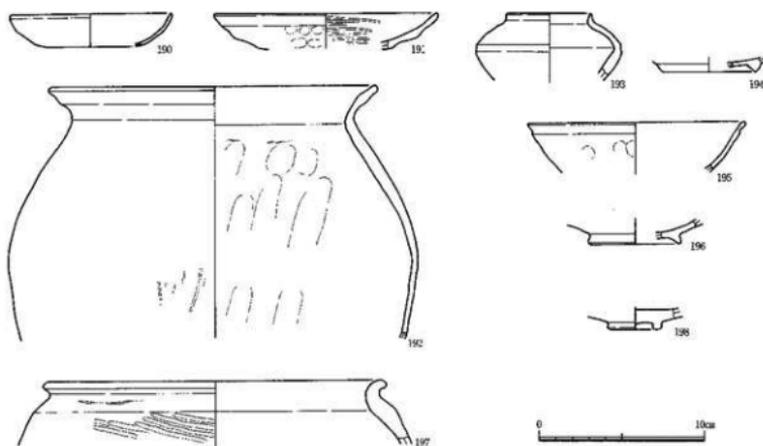
190～191は中世整地土、192～198は中世耕作土から出土したものである。

190は土器の皿、191は瓦器碗である。前者は8世紀後葉のものである。後者は器高に乏しく、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がることから、13世紀代に比定できる。

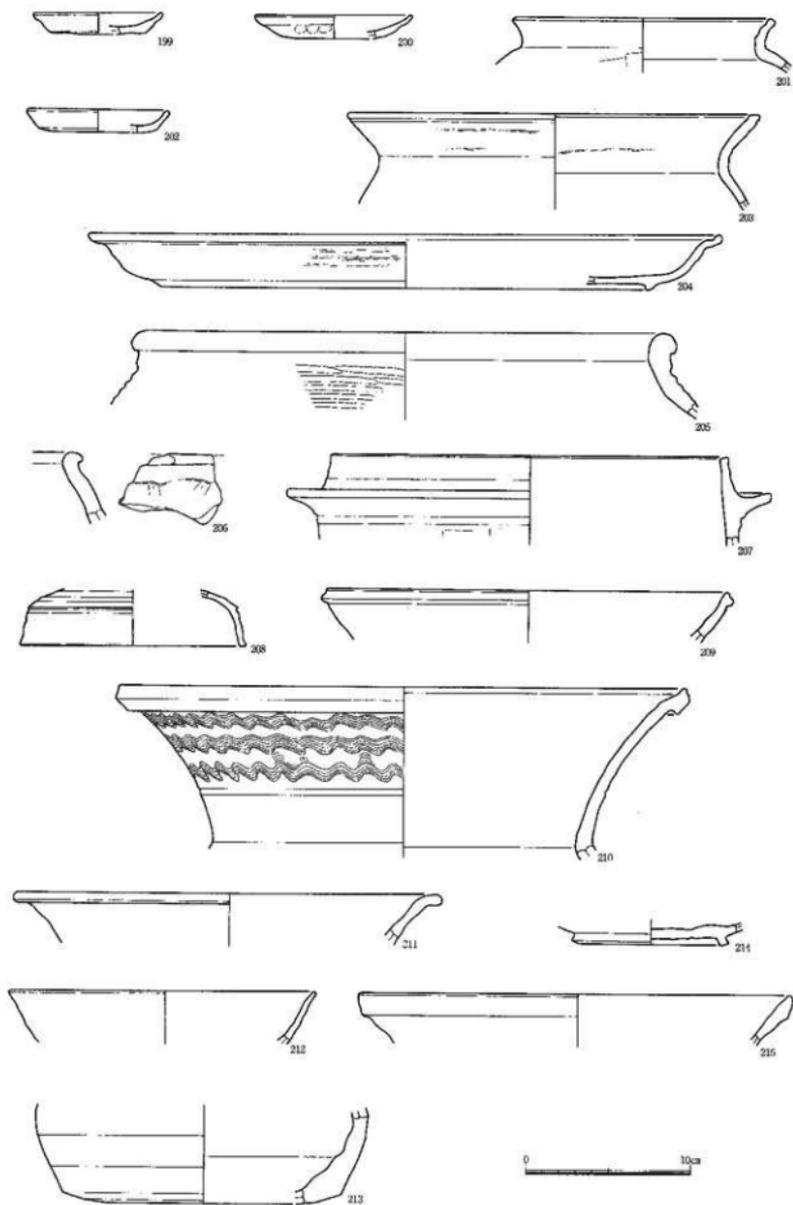
192は土器の甕、193は須恵器の小壺で、ともに6世紀代のものである。194は黒色土器B類で、高台部は脆弱化しており、11世紀代に比定できよう。

195・196は瓦器碗で、前者は胴部から口縁部にかけての立ち上がりの状態から13世紀代に、後者は方形で外方に張出す高台部の形状から12世紀代に位置付けられよう。198は陶器の碗である。

以上の出土遺物の様相から、平安時代の水田域を埋め、再度耕作地化したのは13世紀頃とみられる。



第33図 中世整地土・耕作土出土遺物



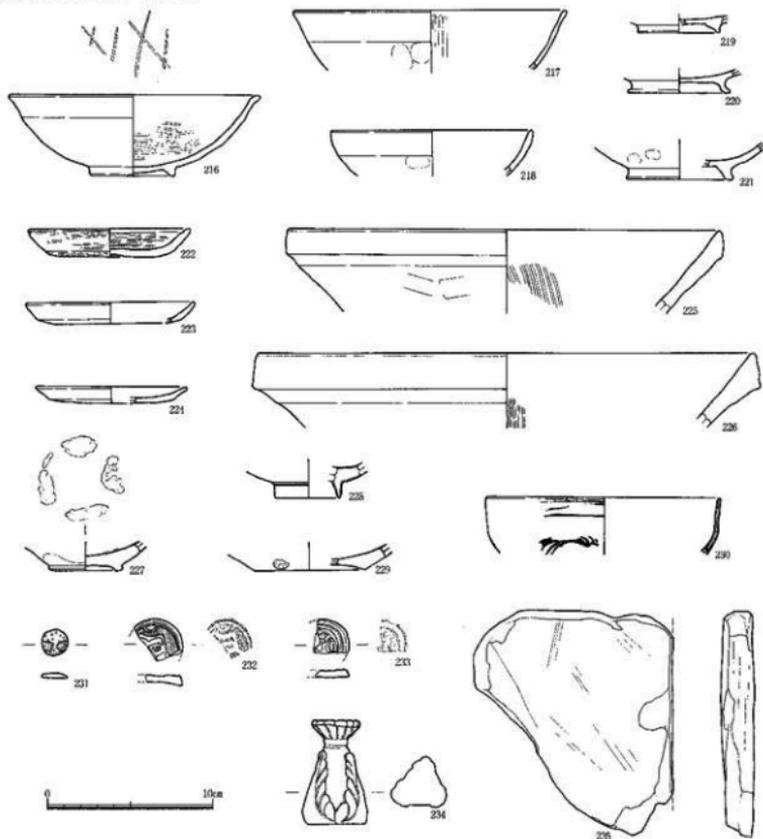
第34図 包含層出土遺物(1)

199～235は取り上げ時に古代や中世の整地土および耕作土の峻別ができず、包含層として一括して扱ったものである。したがって本遺跡の出土遺物の最大時期幅をみることができる。

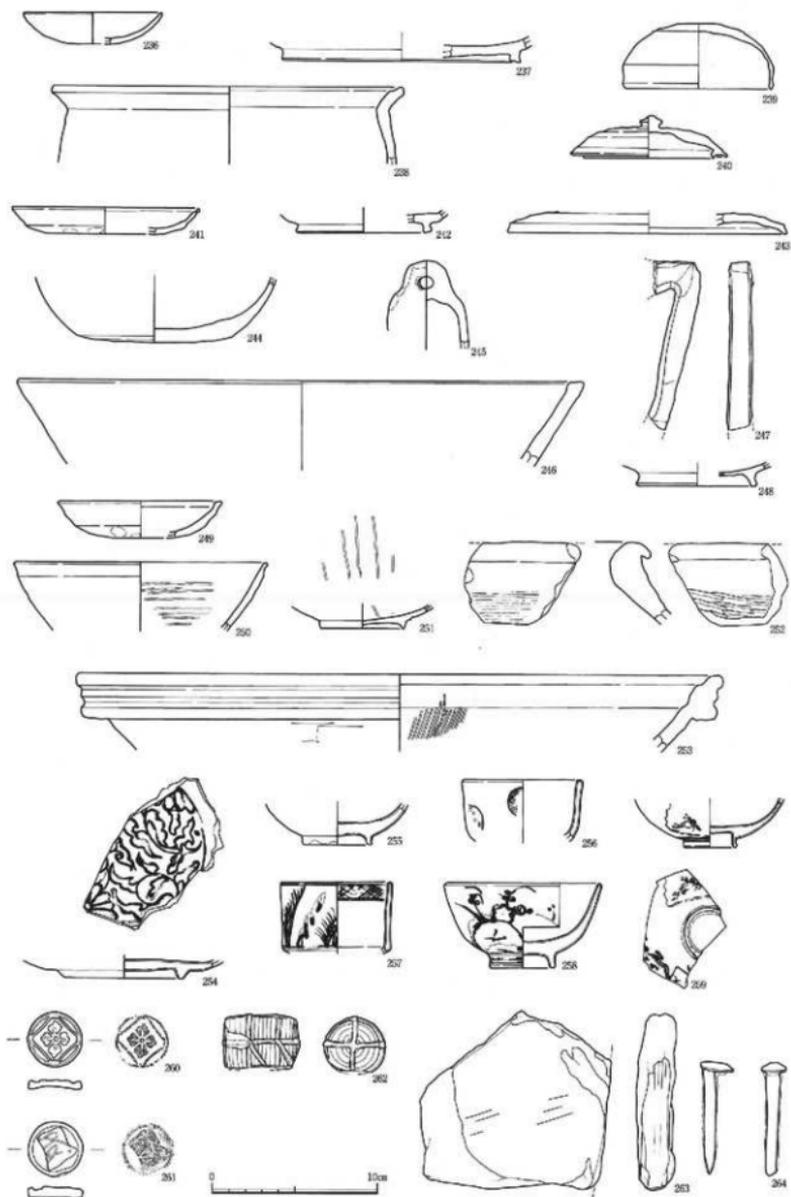
199～204は土器である。このうち202の皿が13世紀代のものとみられるほかは、いずれも8世紀代に比定できる。

205・206はともに土師質土器の在り地甕、207は土師質土器の羽釜で、いずれも16世紀代のものと考えられる。

208～214は須恵器である。208の杯蓋はT K 216型式、5世紀中葉に位置付けられる。209の鉢、210の甕は6世紀代に比定でき、これらも古墳時代に収まる。これらに対して211～213は8世紀代、214の杯は8世紀後半～9世紀前半のものと考えられ、001溝の開削時期と一致している。215は須恵質土器の捏鉢である。



第35図 包含層出土遺物(2)



第36图 搜乱土出土遺物

216～224は瓦器である。216の高台部は断面が三角形だが、張出しが強く、また胴部から口縁部にかけての形状に丸味があることから、12世紀代に収まるであろう。217・220・221～223もまた12世紀のものと考えられる。一方、口径の小さくなった218や高台部の脆弱化した219、器高の乏しい224は13世紀代に下るであろう。

225・226は瓦質の播鉢である。ともに胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部外面は直立する。15世紀代に位置付けられる。

227～234は近世の資料である。近世の資料は、出土遺物の中でも少なく、調査地周辺が集落ではなく、耕地であったことを暗示している。231は芥子面と捉えたが、玩具の一部分である可能性もある。232・233は泥面子。

235は、表裏面および側面いずれもがよく研磨され、平滑になった石製品である。用途は不明である。

236～264は攪乱土から出土したものである。堺南署の旧庁舎建設時に、遺構や包含層（耕作土・整地土）が掘削され、再度基礎の掘方内に埋まった資料である。本来、この遺跡に伴うものであり、包含層出土遺物として一括して取り上げたものと同様の扱いができる。

226～238は上器。236・237の皿、238の甕はいずれも8世紀後半のものであり、大溝の開削時期のものと捉えることができよう。

239～247は須恵器である。239が6世紀中葉、240が7世紀代に位置付けられるほかは、年代不詳の245の飯蛸壺と247の把手を除くと、8世紀代あるいは9世紀前半にそれぞれ比定でき、大溝が機能している時期のものといえる。

248はA類とみられる黑色土器の碗である。高台部は断面長方形を呈している。10世紀代に位置付けられよう。

249は瓦器皿、250・251は瓦器碗である。251の高台部の断面は脆弱化した三角形を呈している、13世紀代に位置付けられる。一方、249・250は12世紀代に収まろう。

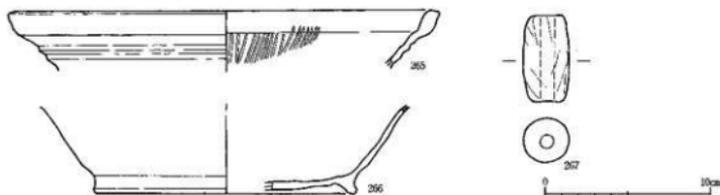
252は瓦質土器の甕である。口縁部は玉縁状をなす。胴部外面には平行タタキの痕跡が認められる。15世紀代に比定できる。

253は堺焼の播鉢である。18世紀代に位置付けられよう。

254は漳州窯系青花の皿と考えられる。255～258は近世の磁器である。259は銅版転写により絵付けされた近代の磁器碗。260・261は泥面子、262は玩具の一部分の俵である。馬形の置物の背に取り付けられたものであろうか。263は、先述の235と同じく、各面とも研磨された石板である。264は角釘である。時期比定はできないが、中～近世のものであろう。

265は023井戸から出土した播鉢である。口縁部が肥厚し、直立気味となる。16世紀代に比定できるが、井戸の埋没時期を示すかは不明である。

266は119上坑から出土した須恵器の杯である。TK7型式、8世紀後半に位置付けられよう。



第37図 遺構出土遺物

267は068土坑から出土した土鍾である。時期は不明。

268～273は金属生産関連資料である。001溝、平安整地土、包含層から出土しているので、奈良～平安時代の一時期のものである可能性が高い。268・269は羽口、270は埴埴、271～273は鉄滓である。本調査地内あるいは近接地で鉄製品の生産が行なわれていたとみられる。

274～359は、小破片であるため復元実測ができない資料や瓦類などである。断面形状と表裏面の拓影を示した。

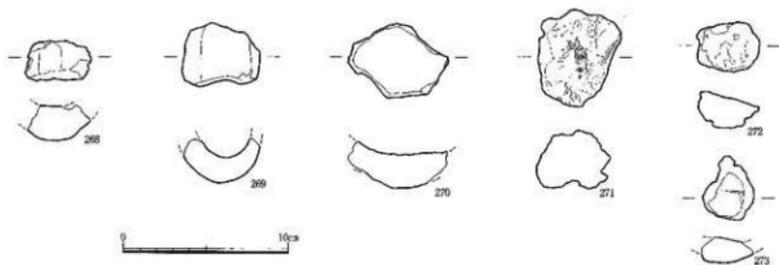
274～285は001・A溝出土資料である。

274は土器の胴部の小破片である。外面に細かなハケ調整がみられる。内面はハケ・ヘラナデ調整である。布留式甕であろう。

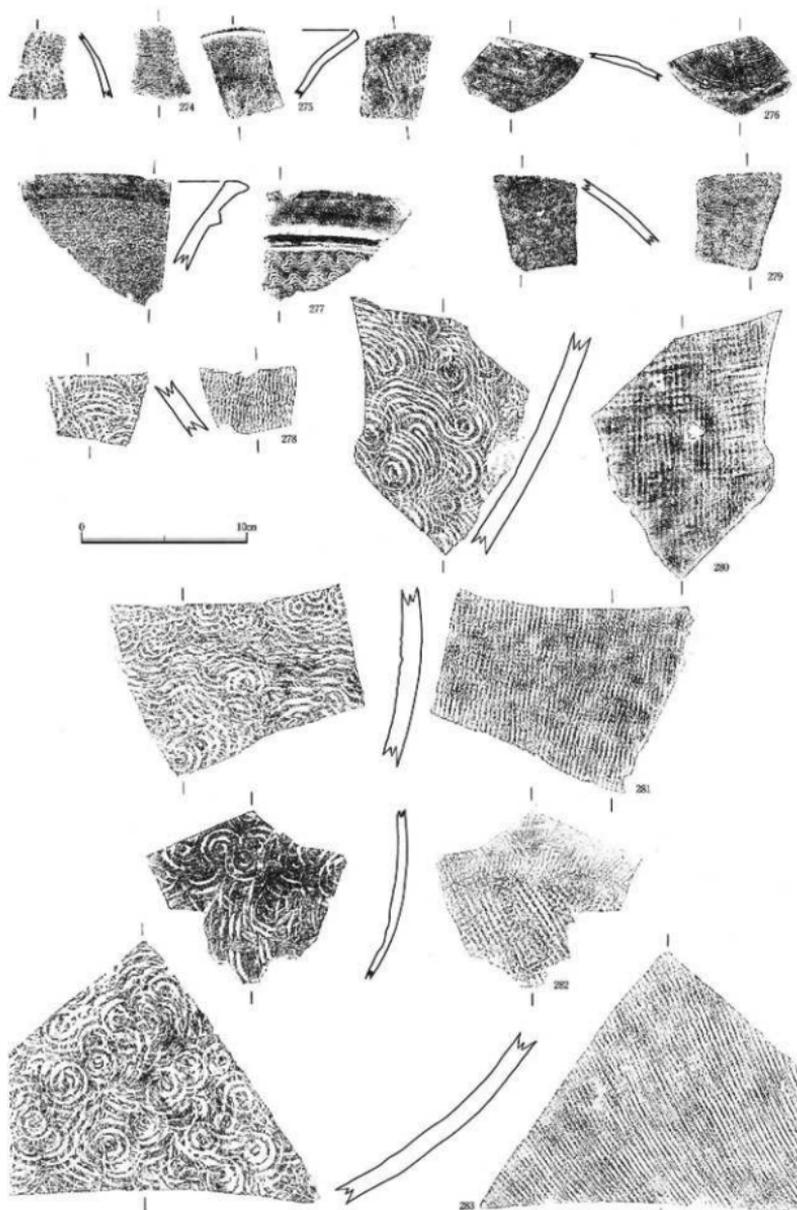
275は土器の口縁部である。外面はミガキ状にヘラナデされている。内面はユビナデ調整。口縁部端が肥厚している。庄内式甕の可能性が高い。279も上器である。胴部に波状文と櫛描直線文が描かれている。庄内期の壺とみられる。

276・277・278～283は須恵器である。276は杯蓋の天井部。277は甕の口縁部で、断面三角形の突線があり、その下に櫛描波状文を施している。口縁部端は外方に張り出し、頂部は平埴である。

278・280～283は甕の胴部破片である。278の外面には縄縵文の痕跡が残る。内面の当具痕である同心円文は磨消されずに残っている。282の外面は格子タタキ痕跡がみられ、上部にカキメが加えられているようにみえる。



第38図 金属生産関連資料



第39图 001·A清出土遺物—拓影—

284・285はともに内面に布目圧痕を残す須恵質の平瓦片で、平安時代のものの可能性がある。同様の瓦片は、以下にも数点掲載しているが、調査地南方に存在したと伝えられる白鳳期建立の長承寺との関係が推測できよう。

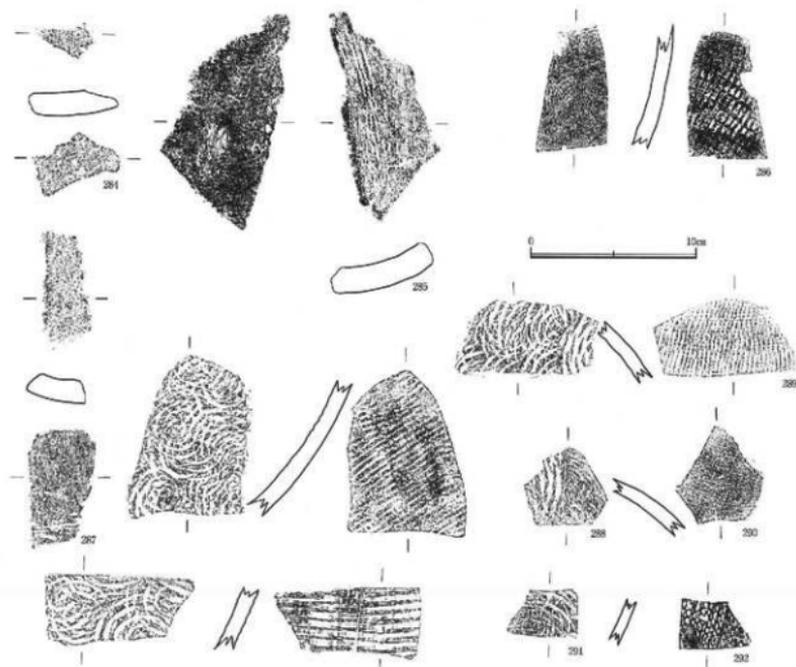
286は001・C溝から出土した須恵器甕の胴部である。内面の当具痕がユビナデにより幾分消されている。

287～290は001・B溝から出土したものである。287は先の284・285と同類の須恵質の平瓦である。

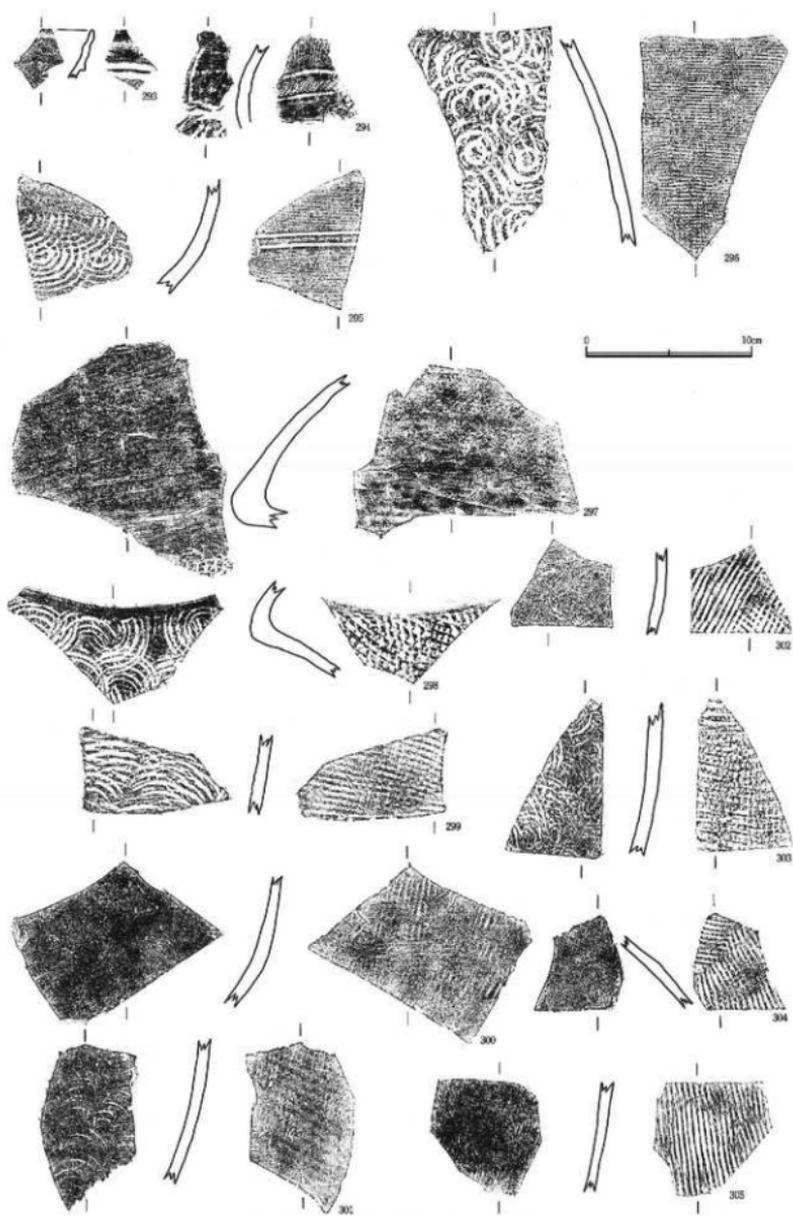
288・289は須恵器甕、290は須恵器壺の胴部破片である。290の外面には平行タキ調整とその後の板ナデによるカキメが残る。

291・292は002溝から出土した須恵器甕の胴部破片である。ともに外面のタキ痕や内面の当具痕が、調整を加えられないまま残っている。

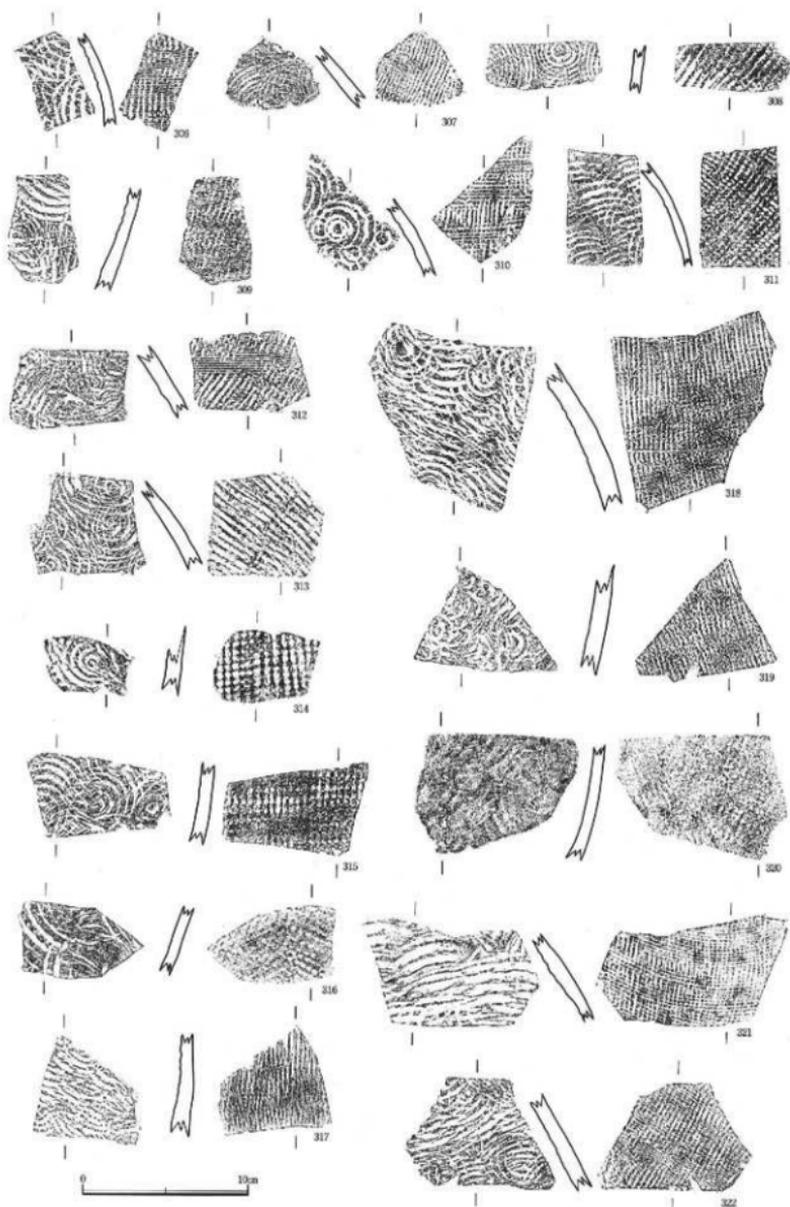
293～327は001溝一括で取り上げた資料である。いずれも須恵器である。293・294は甕の破片である。前者は口縁部資料で、屈曲して立ち上がり、端部は直立気味である。後者は頸部の破片で、2条の沈線で扶まれた間に歯刺突文が施されている。ともに5世紀後半に位置付けられ



第40図 001・A・B・C溝、002溝出土遺物一拓影一



第41圖 001滿一括遺物(1) -拓影-



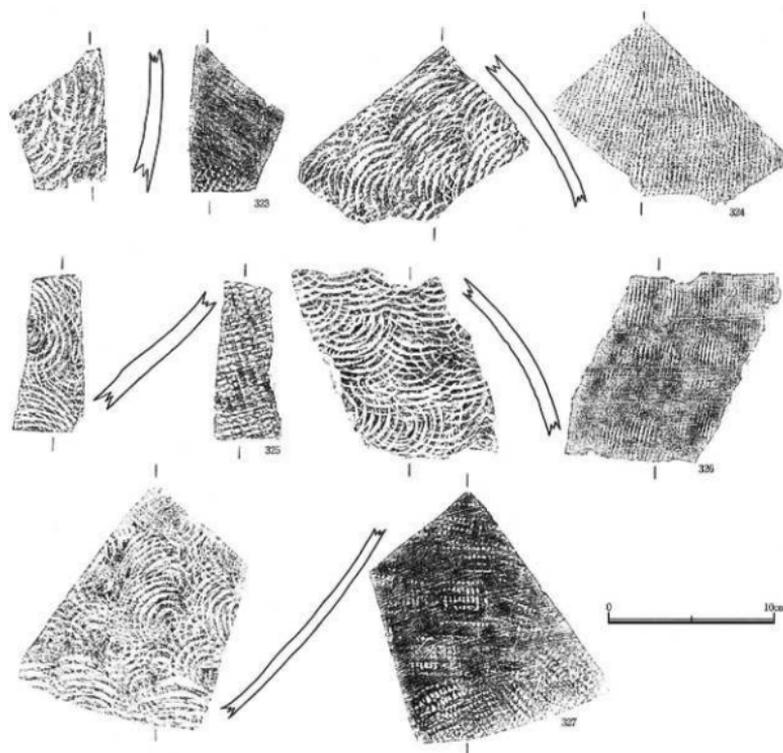
第42圖 001溝一括遺物(2) -拓影-

よう。295・296は胴部外面にカキメが施され、器厚が割合に薄いことから、壺であるとみられる。時期比定はできない。

297～327はいずれも甕の胴部破片である。このうち300では内外面、304・312では内面に磨消調整がなされている。また301と311の内面の当具痕は青海波状を呈している。これらの甕は5世紀代のものの可能性がある。これら以外については、胴部外面に平行タタキあるいは格子タタキの痕跡を、内面には当具痕の同心円文を残している。大半は古墳時代のものと考えられるが、具体的な年代の比定はできない。

328～338は平安整地土から出土したものである。そのうち328～330は、いずれも胴部外面にハケ調整、内面にヘラケズリを施して、しかも器厚が薄い。布留式甕の胴部破片と考えられる。

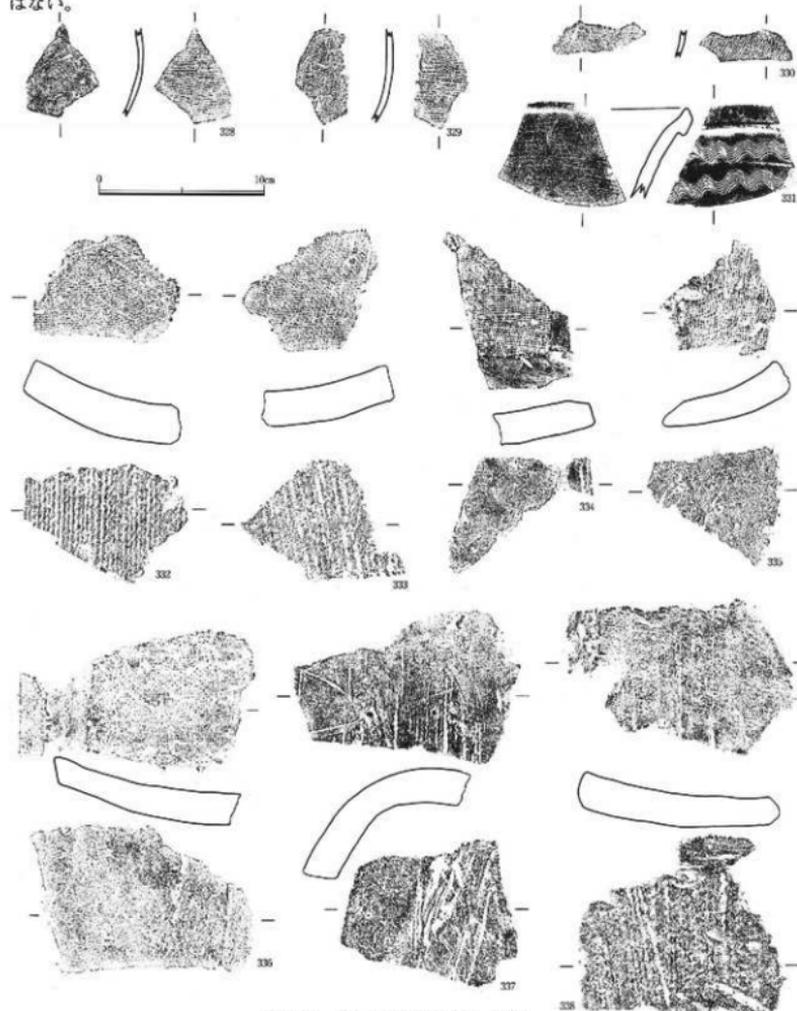
331は、須恵器甕の口縁部破片である。口縁部端は肥厚し、内面がユビナデにより窪む。外面には現状2段の波状文が認められる。



第43図 001溝一括遺物(3)一拓影一

332～338は瓦片で、337は丸瓦、それ以外は平瓦である。平瓦はいずれも内面に布目圧痕を残している。外面は、縄目タタキ痕を残すもの（332・333・338）と、ヘラケズリによりタタキ痕跡が消されているもの（334～336）がある。いずれも平安時代のものであろう。337の丸瓦も、内外面の調整は平瓦と差異がない。

339～340は、平安耕作土から出土した平瓦の破片である。平安整地土から出土したものと違いはない。



第44図 平安整地土出土遺物一拓影一

341・342は中世整地土から出土したものである。ともに胴部に平行タタキ痕跡を残す瓦質土器の甕である。15世紀代に比定できよう。

343～355は包含層一括、356～359は攪乱土出土の資料である。343は布留式甕の口縁部である。口縁部端面が丸く肥厚している。

344～349は須恵器破片である。そのうち344は波状文と2条の沈線を施している碗の口縁部である。口縁部は直立気味で、端部は平坦である。TK208型式、5世紀後半に収まると考える。

345は甕の口縁部である。端部を欠いているが、直線的に立ち上がっている。2条の突線を巡らせた下に波状文を施している。これも5世紀後半代に位置付けられよう。

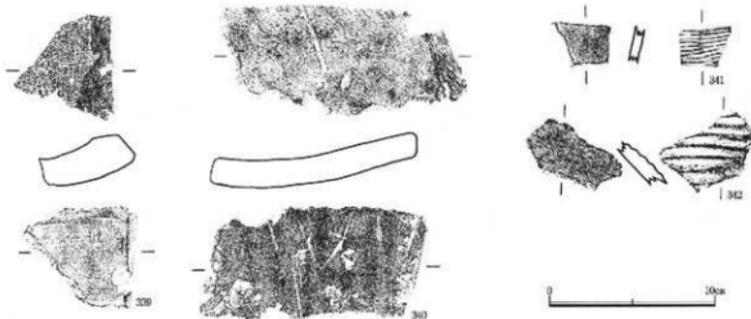
346は甕の口縁部である。口縁部端外面が肥厚し、その下に波状文を施す。これも含め、甕の破片は時期比定できない。

350は瓦質土器の甕の胴部である。外面に平行タタキ痕跡を残す。351は瓦質土器の火舎である。350・351はともに小破片のため年代比定が難しいが、15世紀頃のものと考えられる。352は軒丸瓦、353～355は平瓦である。

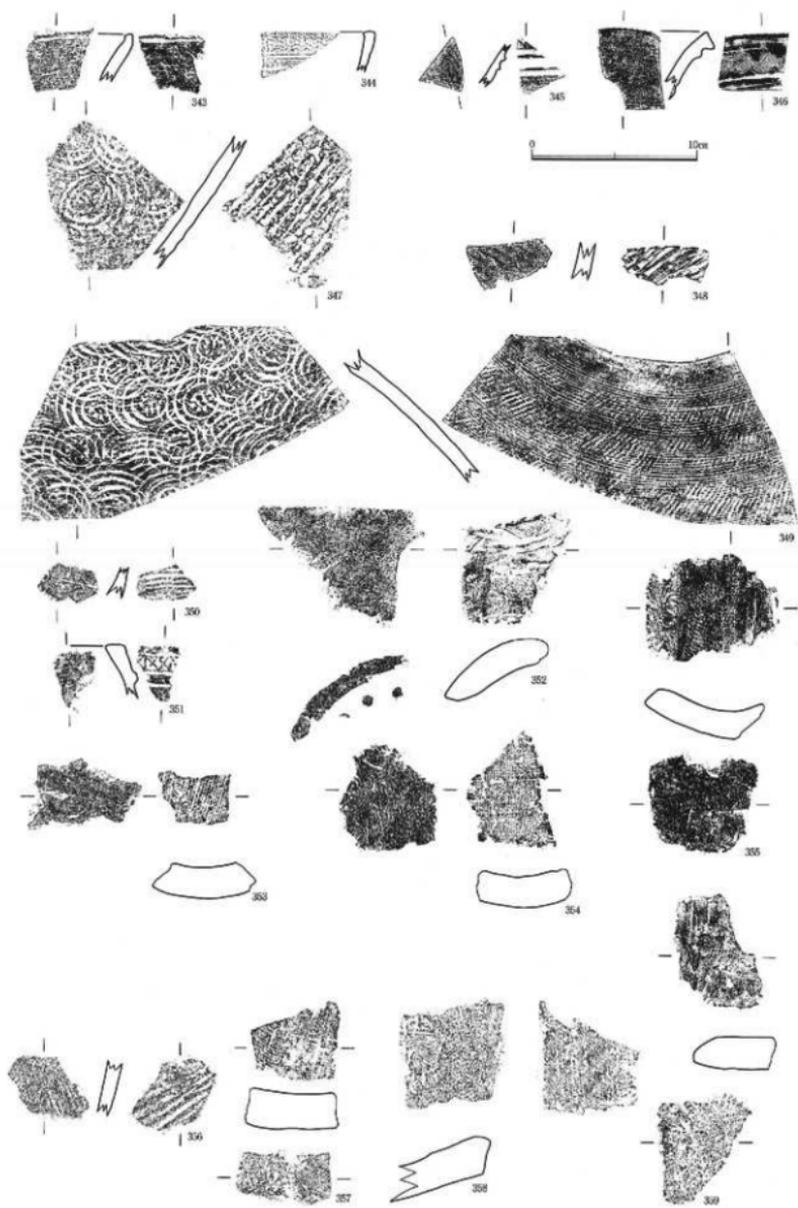
攪乱土から出土したもののうち、356は弥生後期、あるいはV様式系の甕である。357～359は内面に布目圧痕を残す須恵質の平瓦破片で、いずれも平安時代のもと考えられる。

以上の出土遺物に加えて、縄文時代後・晩期の上器および石器も出土している。よって本調査区では縄文時代後期以降、近代までの遺物が出土したことになる。

001溝が機能していた奈良・平安時代およびその上に耕作土が形成された鎌倉・室町時代の遺物は無論であるが、古墳時代の須恵器の多さには留意する必要がある。2棟の掘立柱建物は、既述したようにその構築時期を限定することはできない。ただし出土遺物や検出の状況からすると、古墳時代後期の可能性が高い。そうだとすれば、古墳時代後期以降にこの調査地周辺では集落の形成が始まり、奈良時代になって大溝が開削され、水利が整備されたことで本格的な地域開発が進められたと考えられる。そしてまた、縄文・弥生時代や近世については、今回は遺構が検出されなかったが、近接地に存在している可能性はある。



第45図 平安耕作土、中世整地土出土遺物一拓影一



第46圖 包含層・攪乱土出土遺物一拓影-

IV 中央トレンチ（縄文時代）の調査成果

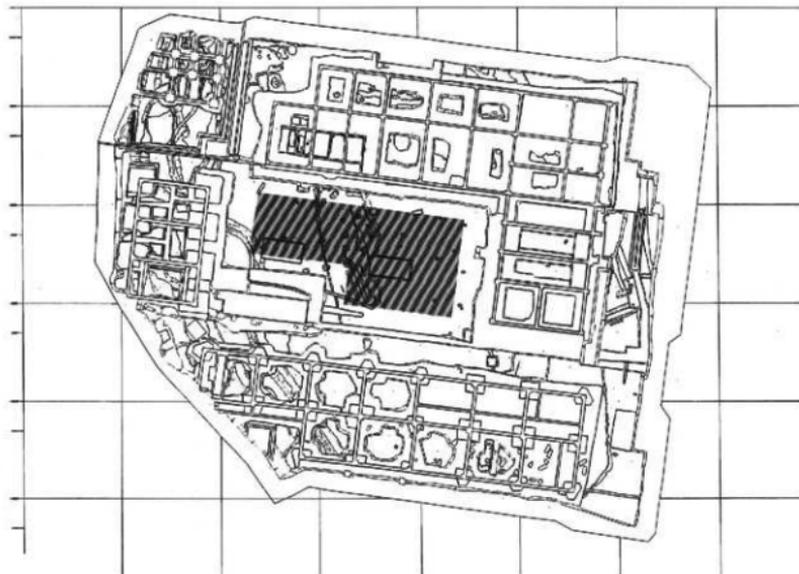
1 中央トレンチの調査

第2面の基盤面となる緑灰色・灰色粘土およびその下の黄褐色・オリーブ灰色・青灰色系粘土の中にササカイト片が含まれていると観察されたことから、旧庁舎の基礎がない範囲にトレンチを設定し、遺物および遺構の有無について確認調査を行なった。

当遺跡の東に位置する鳳東町遺跡においても、地山とみられた黄褐色粘質土から縄文時代の石器が出土し、また縄文晩期の土器も見つかっている。このことから、当調査地でも当該期の遺構・遺物の存在する可能性が考えられた。

2区中央部の基礎のない範囲に調査トレンチを設定し、中央トレンチと呼称した。この中央トレンチを最大範囲で設定するため、北辺21m、南辺11m、東辺10m、西辺6mの鏡形の形状となった。その内部を基本的に1辺2mの正方形に区画割りしたが、東端1列分は1×2mの大きさにせざるを得なかった。この結果、総計45枠のグリッドを設定できた。

調査は20cm単位で掘り下げ、遺構・遺物の存在確認を行なった。出土遺物は、その出土地点を極力記録し、各面の状況については図化した。



第47図 中央トレンチの位置

掘り下げ開始面から20cm下までの間を1段、その20cm下の面を2段上面と呼び、それ以下6段上面まで、1mにわたってトレンチ調査を実施した。

また掘り下げに先立って、各グリッドの中央において1辺30cm、厚さ20cm規模でサンプル土を採取し、0.25cm目のフルイにかけて微細遺物の抽出に努めた。ただ、サヌカイトの小剥片と僅かな炭化物が検出されただけ、注目される微細遺物は認められなかった。

なおトレンチ内の各壁の土層図を作成するため、壁面に沿って50cmほどの深さでさらに掘り下げた。よって、壁面の深度と、トレンチ掘り下げの深度とは異なる。

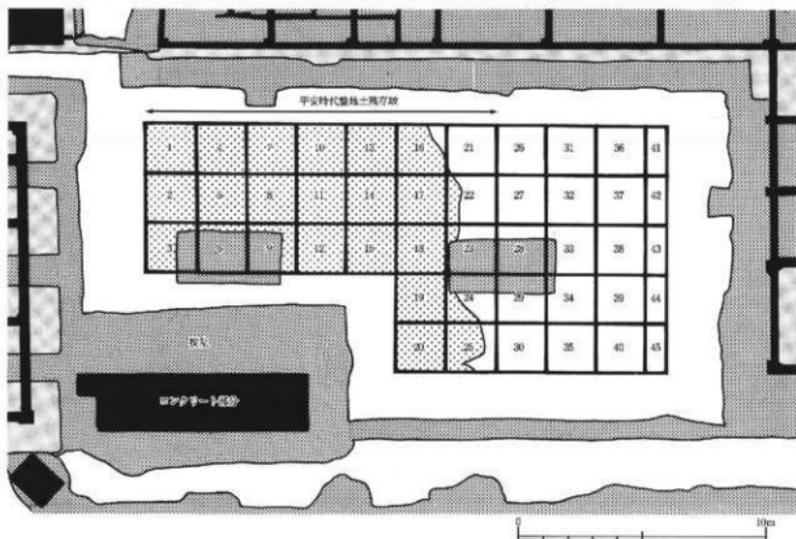
トレンチ調査の結果、各面で縄文後期の土器と石器が出土した。なお各段に含まれた遺物は、各掘削上面に投影した（2段上面～3段上面間の遺物は、2段上面に投影）。

2段上面で記録した遺物は、南で見つかった2点に留まった。しかし、トレンチを掘り下げるにつれて出土遺物量が増加した。

3段上面では、破片化した同一個体4点を含め、17点の遺物の出土を確認した。この面では、トレンチ範囲全体に分布がみられるが、その中でも南東にやや集中が認められた。

4段上面では、記録遺物数は29点を数えた。ただし、南東に遺物が集中する傾向は、3段上面と同じである。

5段上面では、さらに遺物の出土量が多くなり、40点以上を数えた。この面では、2・3段上面と異なり、北西～北中央にかけて集中域が認められる。ただし、南東にも一定の集中がみられるので、この面より上では北西～北中央での出土が減少し、それによって南東での集中が相対的

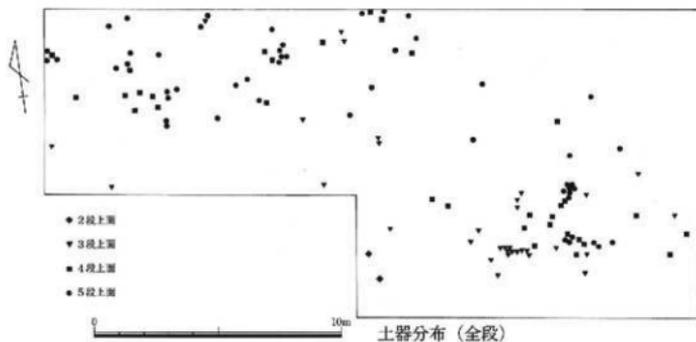
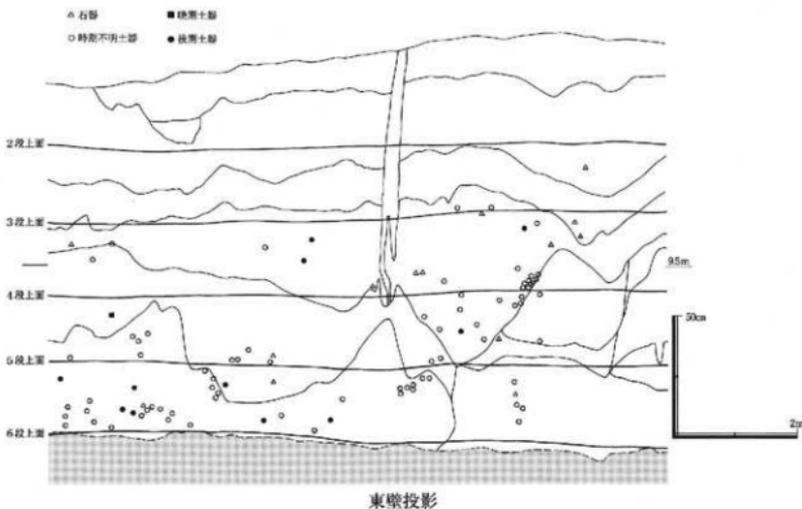


第48図 中央トレンチグリッド位置

に目立つようになったといえる。

しかし、1 m下の6段上面以下では遺物の出土は認められなかった。そしてそれと対応するよ
うに、それ以下では地質が異なる。このように、包含層は1 mほどの厚みであり、地山にあたる
面（6段上面）まで遺物が含まれていた。

なお上部遺物と下部遺物との間に時期差が認められないことから、この1 m間は比較的短期間
内で形成された遺物包含層であるといえる。また3～5段上面における遺物分布状況についてみ
ると、特定場所に偏在するという傾向は認められなかった。

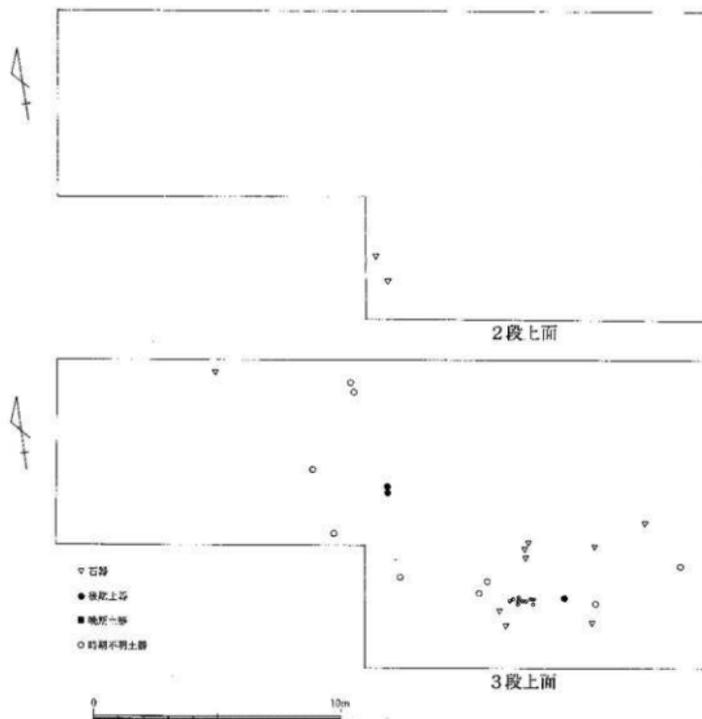


第49図 中央トレンチ遺物出土状況（全体）

遺構はどの面においても検出されなかった。ただ、自然河道が時間とともに北に押されながら埋没していく状況を捉えることができた。遺物は河道の内部だけではなく、埋まりつつある層からも出土している。したがって、出土した遺物自体は、このトレンチ内に遺棄されたのではなく、河道によって流され、埋没したものの可能性が高い。

トレンチ内堆積土は灰白色粘土、褐色粘土、褐灰色粘土、明黄褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、灰色粘シルト、灰白色砂シルト、灰白色粗砂からなる。このうち灰白色の砂シルトと砂が河道内堆積土の主体であり、それ以外は周辺から河道を埋没させた堆積土である。また6段上面の南で検出された硬質の灰白色粘土が、本来の地山である。

2段上面では、灰白色粘土と褐色粘土のみが確認された。大半が灰白色粘土である。この面では自然河道の存在は認められない。そのため両粘土層とも軟質であったが、一見すると安定的な基盤層のようにみえた。3段上面では、2段上面で検出された堆積土に加え、褐灰色粘土が部分的に存在している。この面でも自然河道の存在は認められず、2段上面と同様に安定的な基盤層



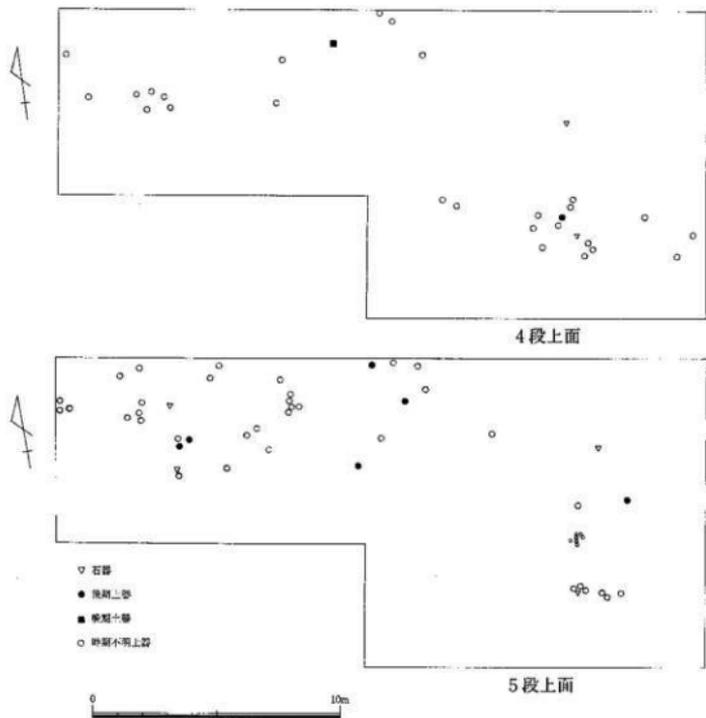
第50図 2・3段上面遺物出土状況

のようであった。

ところが4段上面になると、トレンチ北半で灰白色砂シルトが広がりを見せた。この面において、自然河川が存在が捉えられたとともに、2・3段上面において大半を占めていた灰白色粘土は、自然河川を覆った堆積土であることが明らかとなった。

5段上面では自然河道の幅が広がったとともに、河道内堆積上の中心が灰白色粗砂であることが判明した。この状況は6段上面でも捉えられたが、この面では上述したようにトレンチ南で地山土の存在も確認された。

中央トレンチ西壁(⑥)において、河道の堆積状況が明確に捉えられる。そこでは比較的穏やかな流れにより堆積土が運ばれ、埋没した状況が窺える。急流により一気に堆積した、あるいは堆積と侵食が繰り返されたという状況は認められなかった。河道内外に同一時期の土器・石器が散在的に広がる様相からも、そうした堆積状況を追認できる。出土遺物の中には、石鏃や石刃などのサヌカイト製石器もあるが、多量のサヌカイトの剥片も存在している。未成品は見つかつて

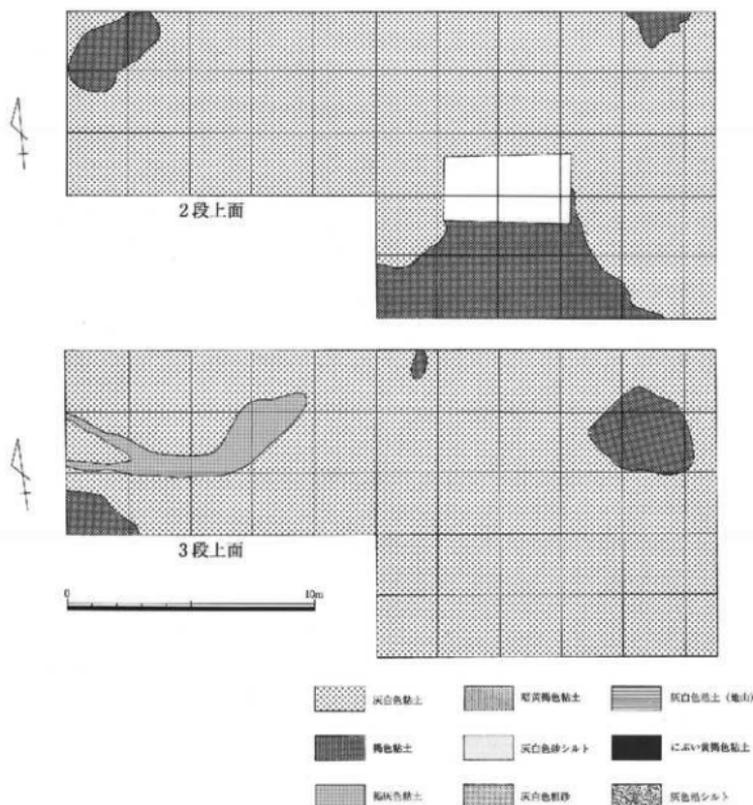


第51図 4・5段上面遺物出土状況

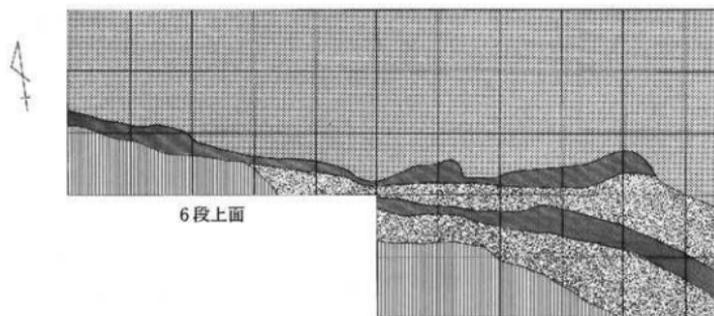
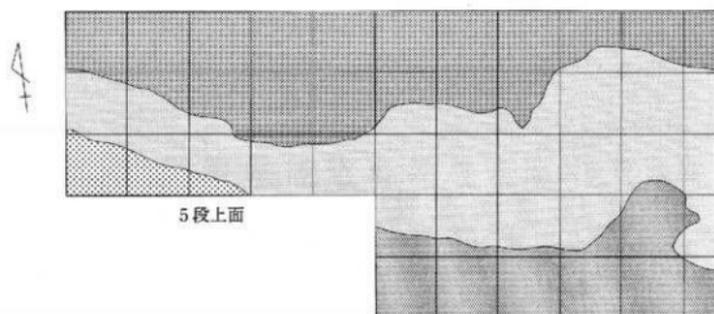
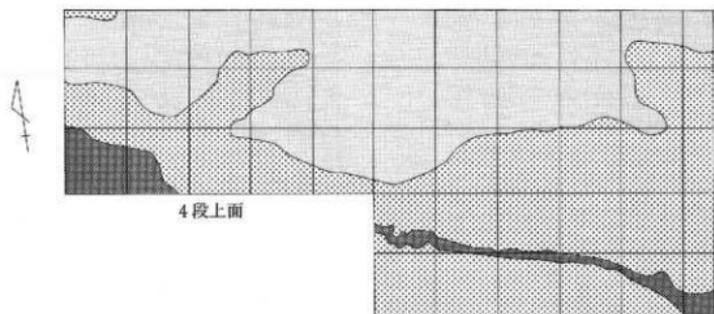
いないが、当該地周辺で石器製作が行なわれていたことを暗示している。石器製作は、この中央トレンチ内でも行なわれていたかも知れない。しかし、トレンチ内全域におよぶ河道の存在を考えると、仮にトレンチ内で石器製作が行なわれたとしても、その時に排出された剥片の大半は河道下流に流されたであろう。そしてこの場所で発見された剥片は、上流で排出されたものが新たに流入してきたと考えられる。

なお堆積土の状況から、河道は南東から北西方向に流れていたとみられる。ただし調査区西には岸線がせまれているので、調査区北西隅付近で向きを変えて北流したのであろう。

いずれにせよ調査区を含む周辺で石器製作が行なわれ、さらに鳳東町遺跡を含む200m近い範囲で縄文時代の生活痕跡が検出される可能性は高い。



第52図 2・3段上面堆積土状況



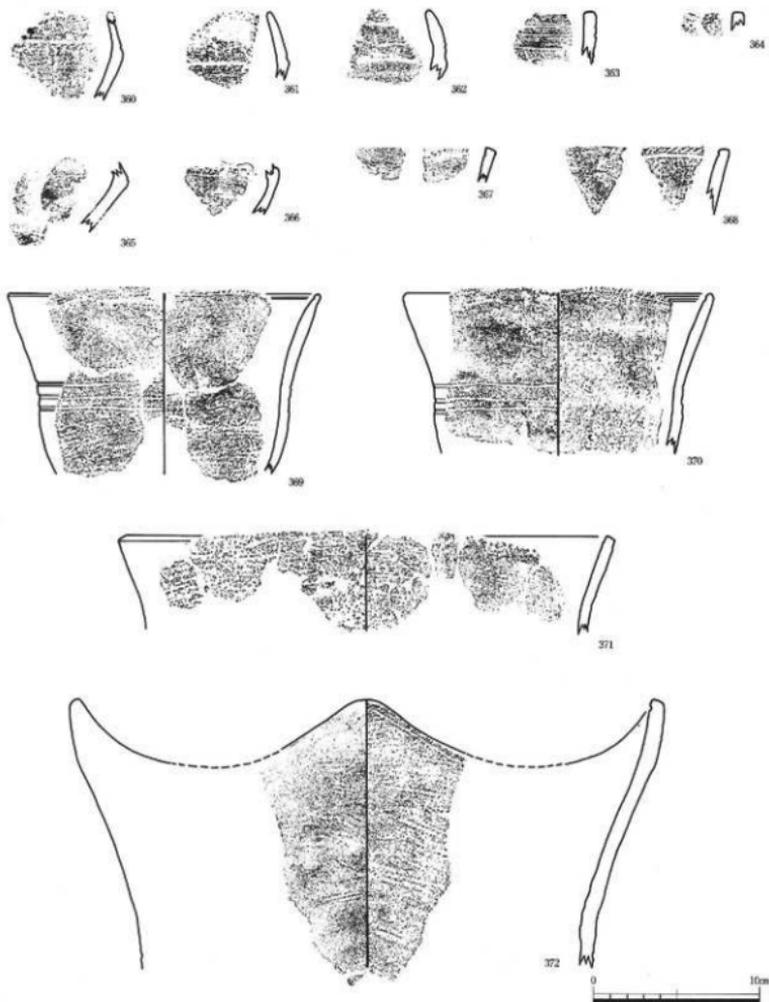
0 10m

第53圖 4・5・6段上面堆積土狀況

2 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

本遺跡からは、3 cm×3 cm以上の破片数にして176片の縄文土器が出土した。長原式にあたる2点を除き、他ほぼ全ての有文土器が元住吉山Ⅰ式の範疇に収まる。元住吉山Ⅰ式土器は、本遺



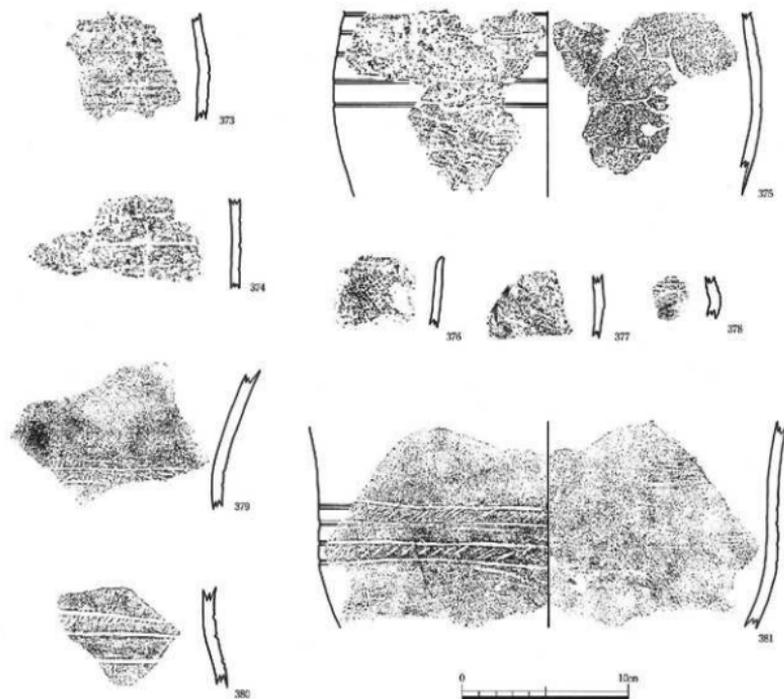
第55図 縄文土器 (1)

跡周辺では西浦橋遺跡、三軒屋遺跡、向出遺跡、石津町東遺跡、春木八幡山遺跡、森の宮遺跡、池島・福万寺遺跡、山ノ内遺跡などで出土している。以上の遺跡は、一乗寺K式や元住吉山Ⅱ式といった、前後の時期の土器も出土している。本遺跡では、有文土器の出土量がそれほど多いとは言えず、そのため、必ずしも元住吉山Ⅰ式期の良好な一括資料であるとは言えない。しかし、本遺跡では、その前後の型式に該当するような土器が出土していない。つまり、時期的には、元住吉山Ⅰ式期に限定される。それゆえに、泉州地域における元住吉山Ⅰ式期の土器の、無文土器をも含めた、その器種構成の様相を考える上での1参考事例になりうると考えられる。

報告するにあたり、有文土器については出土全点、無文土器については部位の判断が可能な残りのよいものを選んで図化・掲載した。

出土した縄文土器の各々について詳述する前に、全体的な様相を概観した上での、特記事項を挙げると、

(1) 赤色顔料の付着した無文深鉢が1点出土



第56図 縄文土器 (2)

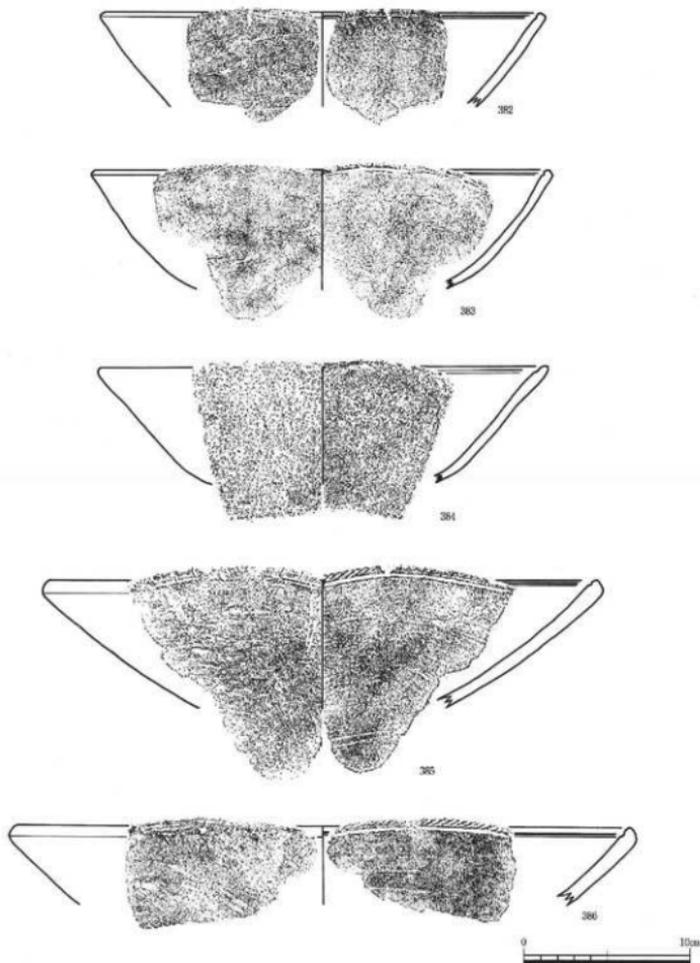
(2) 176点中、16点の土器に炭化物・ススが付着している

(3) 176点中、46点の土器が胎土に角閃石を含む

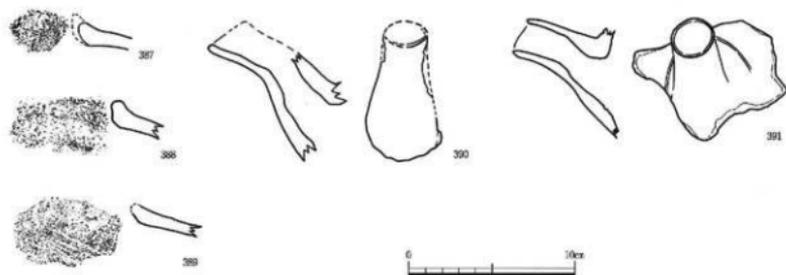
といった点を挙げる事ができる。以下、各遺物について詳述する。

360～452は縄文後期中葉、元住吉山Ⅰ式期の土器。

360～391は有文土器。有文土器では器種として深鉢、浅鉢、注口土器が出土した。調整手法の傾向に無文土器と違いがあり、有文土器には条痕が観察されるものが少ない。



第57図 縄文土器 (3)

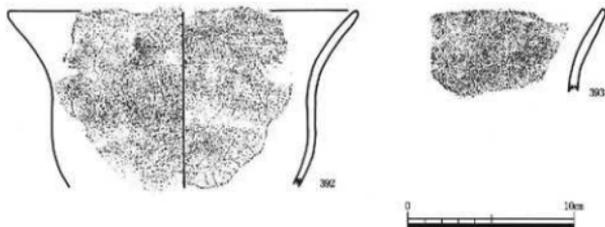


第58図 縄文土器 (4)

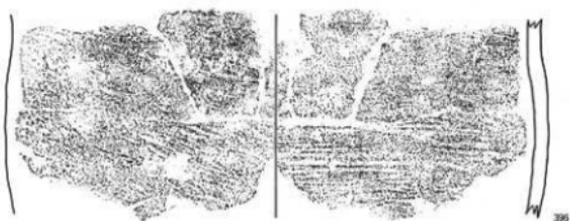
360～381は有文深鉢。口縁部の外面に文様を施しているか、内面に文様を施しているかで大きく2つに分類することができる。

360～366は口縁部の外面に文様を持つ個体。いずれも破片であるが、他遺跡出土例を参考にすると、口縁部外面に文様を持つものは、完形ならば口縁部が内湾、又は直立する個体であったと考えられる。360は内湾する口縁部外面に2本の沈線を引く。374と同一個体か。胎土に角閃石らしきものを含む。摩滅のため調整不明。361は内湾する口縁部外面に1本の沈線を引き、その上部には巻貝による擬縄文らしきものが確認されるが、摩滅のためよくわからない。胎土に角閃石を含む。摩滅のため調整不明。362は内湾する口縁部外面に3本の沈線を引き、2本目の沈線を上弦の連弧状にしている。胎土に角閃石を含む。摩滅のため調整不明。363は直立する口縁部外面に4本の沈線を引き、その内最も下の沈線を上弦の連弧状にしている。沈線間に縄文帯 (RL) を2帯形成している。内外ともにナデ調整。362、363は浅鉢の可能性もある。364、365は同一個体。内湾する口縁部外面を2本の沈線で区画し、その上下に左下がりの刻みを施す。口縁端部を面取りしている。内外ともにナデ調整。366は1本の沈線の下に左下がりの刻みを施す。外面はナデ、内面に巻貝条痕が見られる。

367～372は口縁部の内面に文様を持つ個体。いずれも完形ならば、369、370のような口縁部が外に広がる個体であったと考えられる。367は口縁部内面に沈線を引き、口端との間を垂直に刻む。内外ともにナデ調整。368は口縁部内面に沈線を引き、口端との間を左下がりに刻む。内外

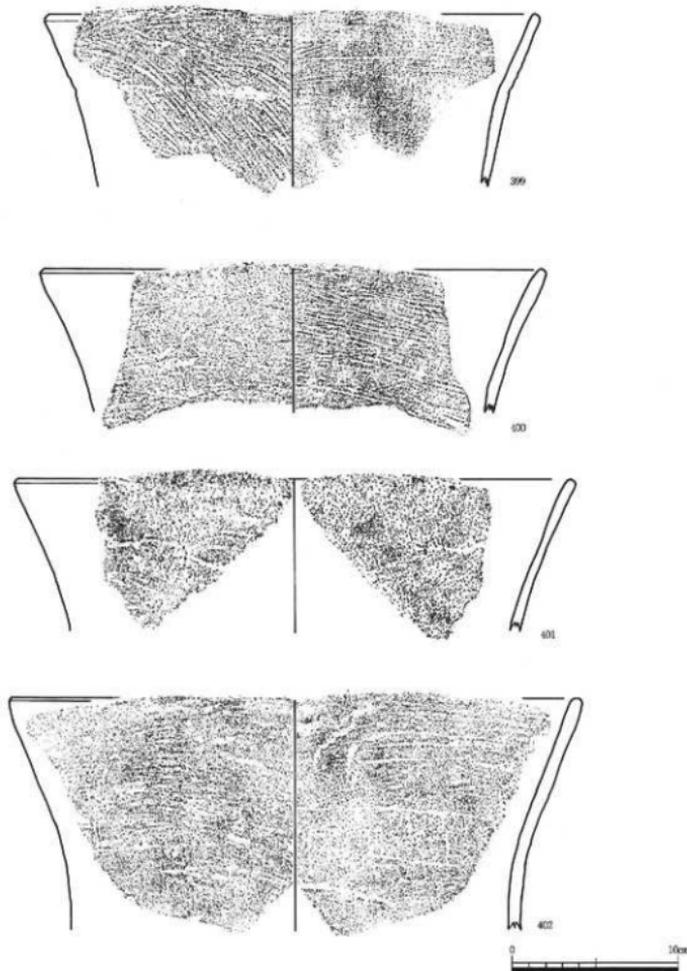


第59図 縄文土器 (5)



第60図 縄文土器 (6)

ともにナデ調整。367、368ともに浅鉢の可能性もある。369、370は口縁部内面に沈線を引き、口端との間にやや左下がりの刻みを施す。胴部外面に3本の沈線を引き、その間に巻貝による擬縄文帯を持つ。369は外面及び内面頸部以上はナデ調整、内面胴部以下もナデではいるが、縦方向のケズりらしき痕跡も見られる。370は369とほぼ同様の調整だが、縦方向のケズりらしき痕跡が内面頸部以上にも見られる。また、370は口縁部内面直下にめぐらす沈線が不連続になっている。371は内面に垂直の刻みを入れるのみで、沈線は省略されている。内外ともに巻貝による調整後



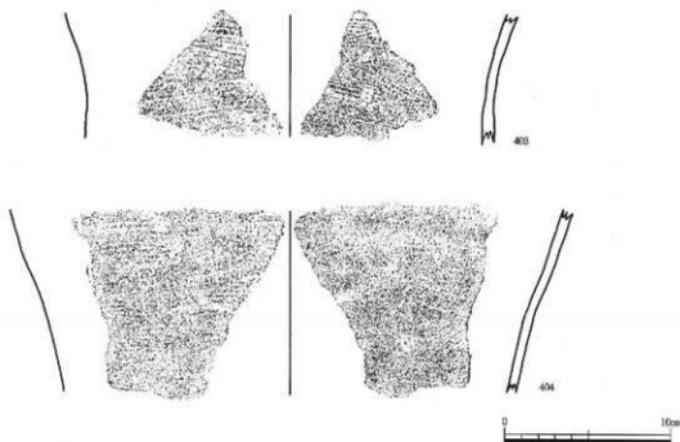
第61図 縄文土器 (7)

にナデか。375と同一個体。372は波状口縁。波頂部内面に刺突を加え、その点より沈線を引き、口縁端部との間を左下がりに刻む。胴部上半まで残存し、胴部にわずかであるが沈線らしきものが1本確認できる。内外ともに巻貝で器面調整した後にナデで仕上げていると思われる。胎土に角閃石を含む。

369、370は一見、元住吉山Ⅰ式によく見られる文様構成の土器に見える。ただし、胴部外面の沈線は4本以上引くものが一般的であり、369、370のような胴部外面に3本の沈線を引くものは珍しく、向出遺跡、春木八幡山遺跡にのみ類例がある。ただし、向出出土例は、高さにして2倍以上サイズの大きいものであり、また擬縄文帯ではなく、LRの縄文帯を持ち、上弦の連弧文を施すといった違いがある。春木八幡山出土例は、大きさの違いについてはよくわからないが、こちらも上弦の連弧文であり、縄文帯ではなく、沈線間は刻んでいる。元住吉山Ⅰ式がまとめて出土した兵庫県佃遺跡や京都府森山遺跡、滋賀県穴太遺跡の報告に1点も3本の沈線のもが存在しないことを考えると、和泉地域の特徴を示している可能性があるのかもしれない。

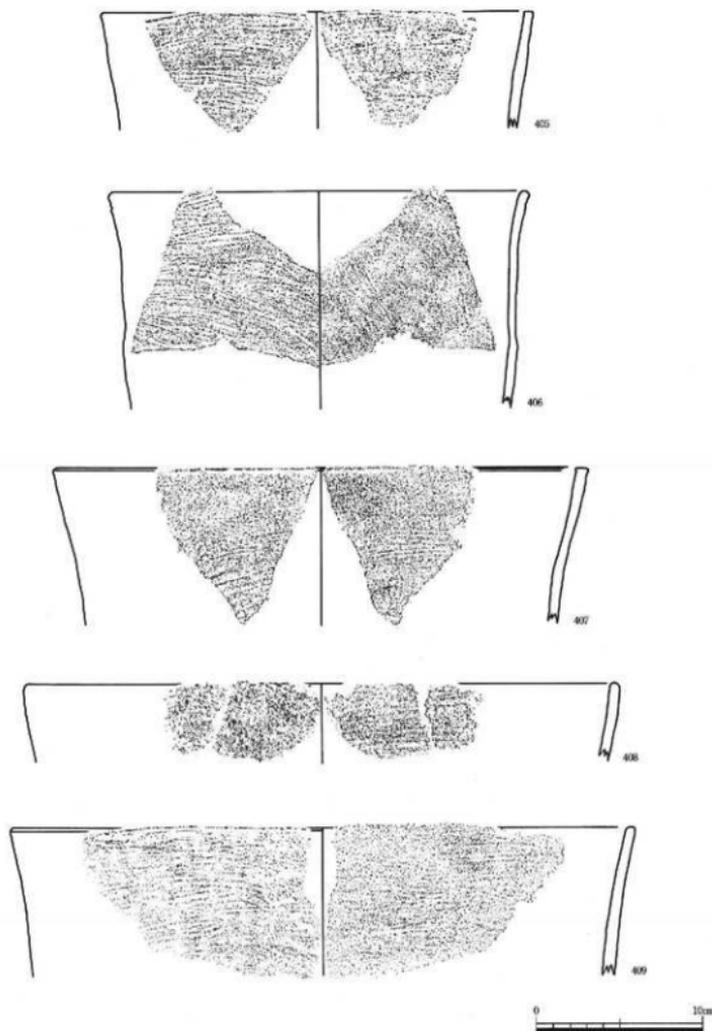
371、372についても詳細に観察すれば、類例の少ないものである。371のような口縁部内面の沈線を省略しているものは私見の及ぶ範囲で類例がない。また、372のような、内面施文で波状口縁となる深鉢は、私見の及ぶ範囲では穴太遺跡に1点しか類例を見ず、珍しい個体であると考えられる。

373～381は有文深鉢の胴部。373、375～378は縄文、379は擬縄文、380、381は刻みが沈線間に施文されている。373は3本の沈線、2帯の縄文帯（RL）が見られる。内外ともにナデ調整。374は3本の沈線が引かれる。調整は不明。胎土に角閃石らしきものを含む。360と同一個体か。

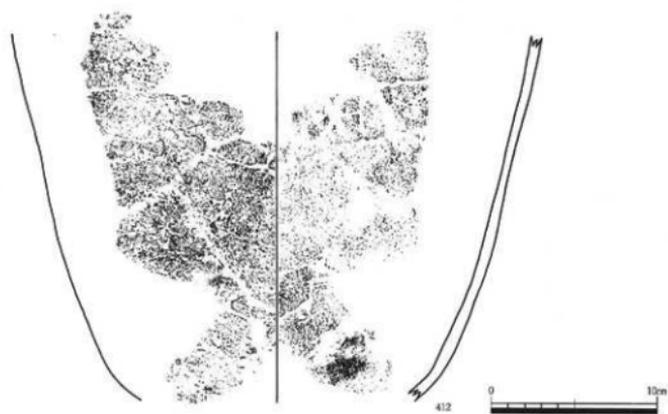
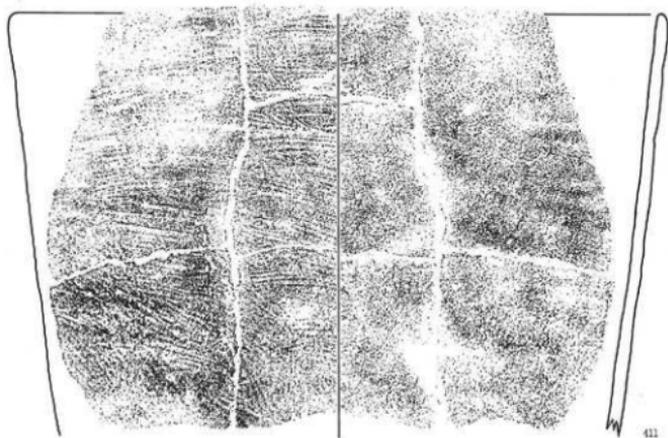
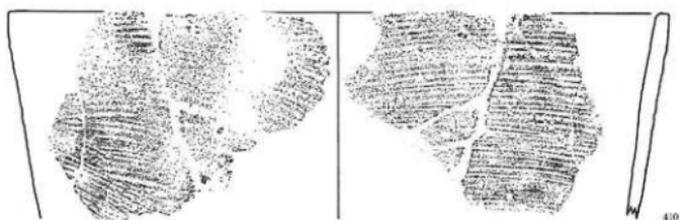


第62図 縄文土器（8）

375は5本の沈線を引き、3帯の縄文帯（LR）を形成する。また、最下端の縄文帯には帯を形成する区画となる沈線の下方を欠く。内外ともに巻貝による調整後にナデ調整か。371と同一個体。376、377は摩滅が激しく調整不明、わずかに縄文（RLか）の痕跡が確認されるのみである。376は口縁部の可能性がある。378は上半に縄文（RL）が残る。内外ともにナデ調整。379は2

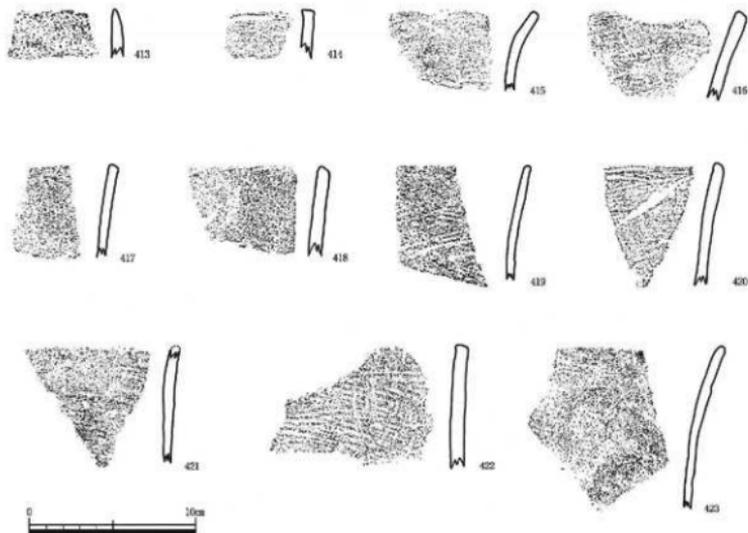


第63図 縄文土器（9）

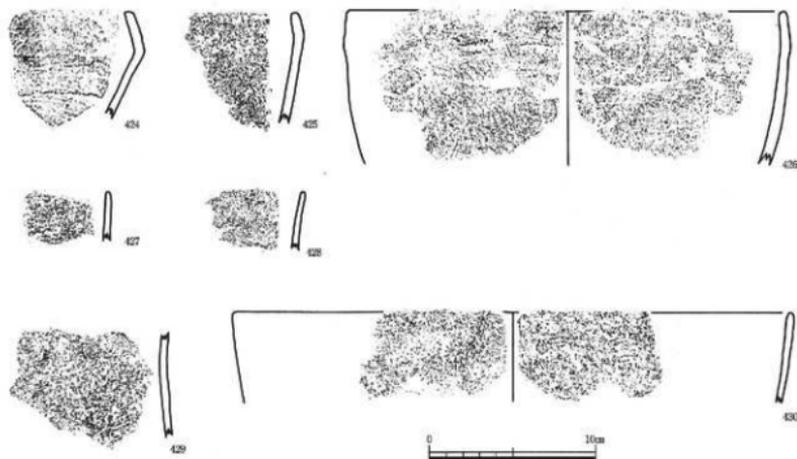


第64図 縄文土器 (10)

本の沈線、2帯の巻貝擬縄文帯を持つ。内外ともにナデ調整。外面に炭化物付着。380は3本の沈線が引かれている。最も上の沈線は、刻みというよりは爪形文に見える文様を切るように引かれている。また、最も下の沈線の下には、刺突らしきものも見られる。私見の及ぶ範囲では他に類例を見ず、珍しい個体であると考え。外面はナデ、内面の上半はナデ、下半はケズリ後にナ



第65図 縄文土器 (11)



第66図 縄文土器 (12)

デて仕上げているようだ。外面に炭化物付着。381は4本の沈線を引き、その間に左下がりの刻みを充填した2帯の文様帯を持つ。内外ともにナデ調整。外面に炭化物付着。

382～386は有文浅鉢。いずれも内面に1本の沈線を引き、口端との間を刻む。調整は内外ともにナデ調整。382は沈線と口端との間の刻み目が他のものよりも細く、垂直に刻んでいる。383は口端の摩滅が激しく、左下がりの刻みをわずかに確認できるのみである。384は口縁部内面に1本の沈線を施しているが、口端との間の刻みを確認できない。また口縁部が丸く膨らむといった特徴を持つ。胎土にクサリ礫を含む。385、386は左下がりの刻み目を施す。385の内面、沈線内には炭化物が残存している。

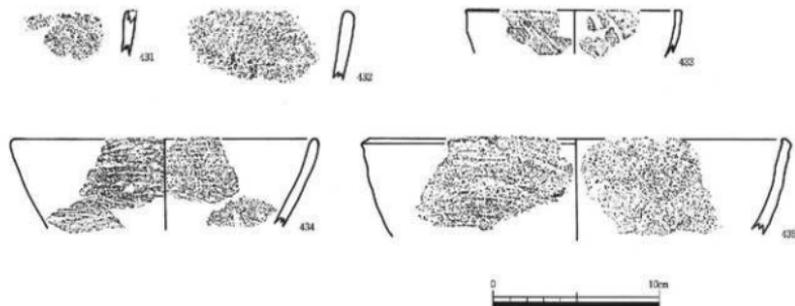
387～391は注口土器。いずれも内外ともにナデ調整。387～389は口縁部。387は小破片であるため、他器種の他部位である可能性がある。389は粘土の貼り付けの痕跡と考えられるものが2ヶ所観察できる。外面には、何らかの条痕が一部に見られる。390、391は注口部。391は胴部との接統部に1本の沈線らしきものをめぐらすようだが、摩滅のためによく分からない。胎土に角閃石を含む。

392～435は無文土器。無文土器には、深鉢と浅鉢が出土。調整手法としては、巻貝によると思われる条痕が多く個体に観察される。

392～430は無文深鉢。他遺跡の出土事例も参考にすると、法量、口縁部の立ち上がり、胴部の形状から、数種類のヴァリエーションが存在していたと考えられる。本遺跡で出土した土器については、以下の6種類に分類した。しかし、本遺跡での出土個体には、完形のもものが無く、分類の適用が困難なものもあり、今回の分類は、あくまでも目安程度の分類である。

392、393は小型の個体。一般的なサイズの1/2～2/3程度になると思われる。392は口端を丸く収める。頸部からこれほど急な角度で外反するものは少ない。胎土に角閃石を含む。内外ナデ調整。393は口縁部。内外ともにナデ調整。胎土に角閃石を含む。

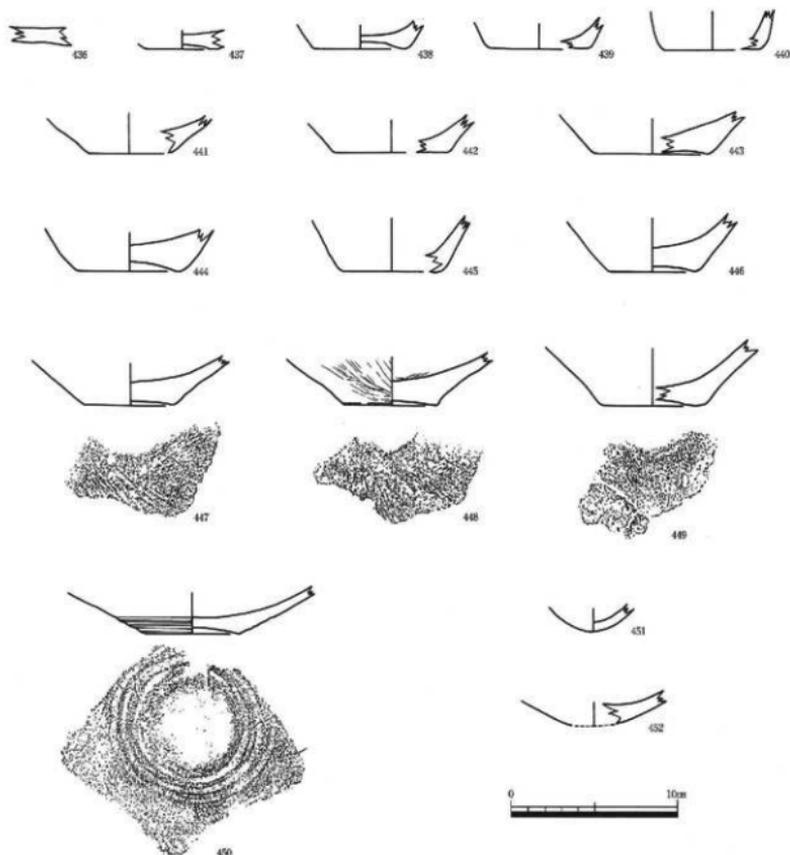
394～398は胴部にやや膨らみが見られる個体。394は胴部まで残る個体。口縁部は外に広がる。



第67図 縄文土器 (13)

内外ともに水平の巻貝条痕が見られ、部分的に右下がりのところもある。395は口端を欠くが、口縁部から胴部まで残る。口縁部は外に広がり、内外とも水平に二枚貝条痕が見られる。胴部外面は右下がりの二枚貝条痕が見られ、胴部内面はナデ調整。396～398は胴部。396は外面、水平に巻貝条痕、内面を巻貝による調整後ナデているようだ。外面にスス付着。397は外面を巻貝による調整後にナデており、内面はナデ調整。398は外面には水平に何らかの条痕、内面はナデ調整。外面に炭化物付着。

399～404は口縁部が外に広がる個体。胴部に膨らみがあるかどうかは分からない。399は外面口端より約4cm下までは、水平に巻貝条痕が見られるが、それより下は右下がりの巻貝条痕。内面は全体的にほぼ水平に巻貝条痕が見られる。胎土に角閃石を含む。外面に炭化物付着。400は



第68図 縄文土器 (14)

内外ともほぼ水平に巻貝条痕が見られる。401は摩滅があるが、内外ともナデ調整しているようだ。402は外面口端の直下は水平に巻貝条痕、それより下は右下がりの巻貝条痕が見られる。内面はナデ調整。胎土に雲母が多量に確認され、明らかに他と異なる材料で作られている。外面に炭化物付着。403は内外とも部分的に右下がりの巻貝条痕が見られるが、全体的にはほぼ水平に巻貝条痕。404は外面上半は水平に何らかの条痕、下半は左下がりの何らかの条痕。内面はナデ。外面に炭化物付着。

405～412は口縁部が垂直に近く立ちあがる個体。胴部に膨らみがないと考える。405は内外とも水平の巻貝条痕、口端を面取りしている。406は外面上半には水平に巻貝条痕、下半より右下がりに条痕。内面はナデ調整。胎土に角閃石を含む。外面に炭化物付着。407は外面に赤色顔料が塗布されていた個体。赤色顔料は右半部に部分的に残るのみである。外面口端近くは水平に巻貝条痕、その下からは左下がりの巻貝条痕が見られる。内面に水平に巻貝条痕が見られる。口端を面取りしている。408は摩滅のため外面の調整は不明。内面には水平に巻貝条痕が見られる。409は内面および外面上半は水平に巻貝条痕、外面下半から右下がりに巻貝条痕が見られる。胎土に角閃石を含む。外面に炭化物付着。410は内面および外面上半は水平に巻貝条痕、外面下半から右下がりに巻貝条痕が見られる。411は内面にはナデ、外面はほぼ全て水平に巻貝条痕、下部ではやや右下がりの巻貝条痕が見られる。412は摩滅のためよくわからないが、内外ナデ調整と思われる。

413～423は口縁部。小さい破片のため、判断が難しいものもあるが、412、413、417、420、421は口縁部が垂直に近く立ちあがる個体。それ以外は、口縁部が外反する個体であると考え。413は摩滅により調整不明。胎土にクサリ礫を含む。414は内外ともにナデ調整、口端を面取りしている。415は外面ナデ、内面は何らかの条痕後にナデしているようだ。416は内外ともにナデ調整、胎土にクサリ礫を含む。417、418は内外ともにナデ調整。419は内面ナデ、外面には口端近くには条痕が見られないが、やや下から左下がりの巻貝条痕が見られる。胎土に角閃石を含む。外面に炭化物付着。420は内外ともに水平の巻貝条痕が見られる。421は内外ともにナデ調整、胎土に角閃石を含む。422は外面に左下がり、右下がり2方向の何らかの条痕が見られる。内面はナデ。423は内外ともにナデ調整、胎土に角閃石を含む。

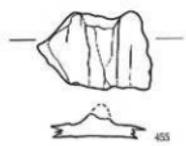
424～426は口縁部が内側に曲がる個体。424はその中でも曲りが鋭い。外面屈曲部より上はナデ、屈曲部より下には部分的に巻貝条痕が見られる。内面はナデ調整。425は外面ナデ、内面に巻貝条痕が見られる。426は摩滅のためわかりにくい、外面は巻貝により器面調整していたようである。内面はナデ調整。

427～430はやや薄手の上器群。427は内外ともに調整不明。胎土に角閃石を含む。428は内外ともに調整不明。429は内外ともにナデ調整か。胎土に角閃石を含む。430は外面ナデ、内面の調整は不明。

431～435は無文浅鉢。431は内外ともに調整不明。口端外面側を欠くが、口端は面取りし



第69図 縄文土器 (15)



第70図 土製品

ていたようである。432は内外ともに調整不明。胎土に角閃石を含む。433は小型。内外ともにナデ調整か。口端を面取りしている。434は外面に水平に巻貝条痕が見られ、内面上半はナデ、下半には巻貝条痕が見られる。外面にスス付着。435は外面に巻貝条痕が見られる、雑な調整のため器面には凹凸が残り平滑さを欠く。内面はナデ調整。内外ともに炭化物が付着している。

436~452は底部。判断が難しいものもあるが、深鉢には凹底、平底両方存在していたようだ。437、438、441、445、451は胎土に角閃石を含む。443は胎土にクサリ礫を含む。基本的にナデ調整しか見られないが、447、448には外面に巻貝条痕、449の外面に縄文(RLか)の圧痕らしきものが見られる。450は

底部に3条の凹線をめぐらす。胴部への広がりかたから見て、浅鉢の底部か。私見の及ぶ範囲では、他に類別を見ず、珍しい個体であると考え。451、452は丸底。

453、454は晩期末、凸帯末期の土器。摩滅を考慮に入れても、凸帯に厚みがあったとは考えられないことから、長原式のものと考えられる。ともに胎土に角閃石を含む。

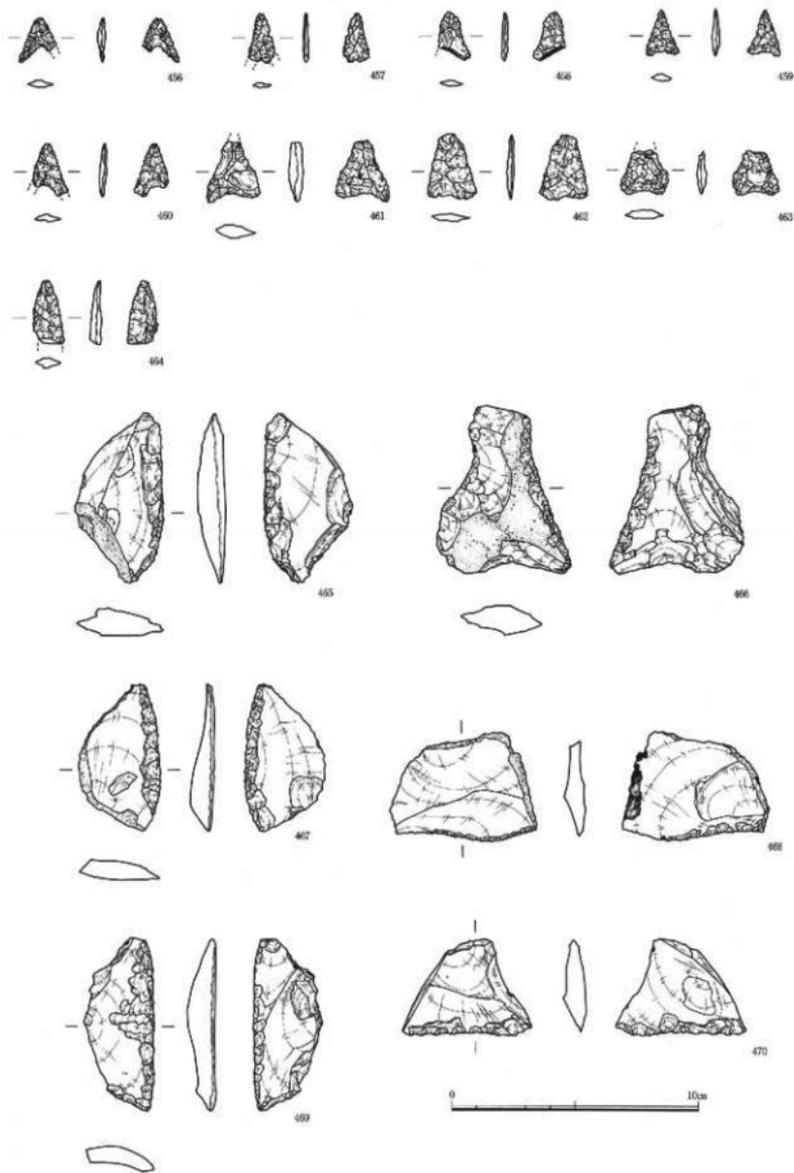
455は不明土製品、土面の鼻部か。同一個体と思われる小破片が1点存在するが、接合せず、全体の形状はわからない。土面であるならば、本遺跡の周辺では、仏並遺跡において中期末と考えられる土面が2点出土しており、仏並遺跡との関係性が考えられる。

(2) 縄文石器

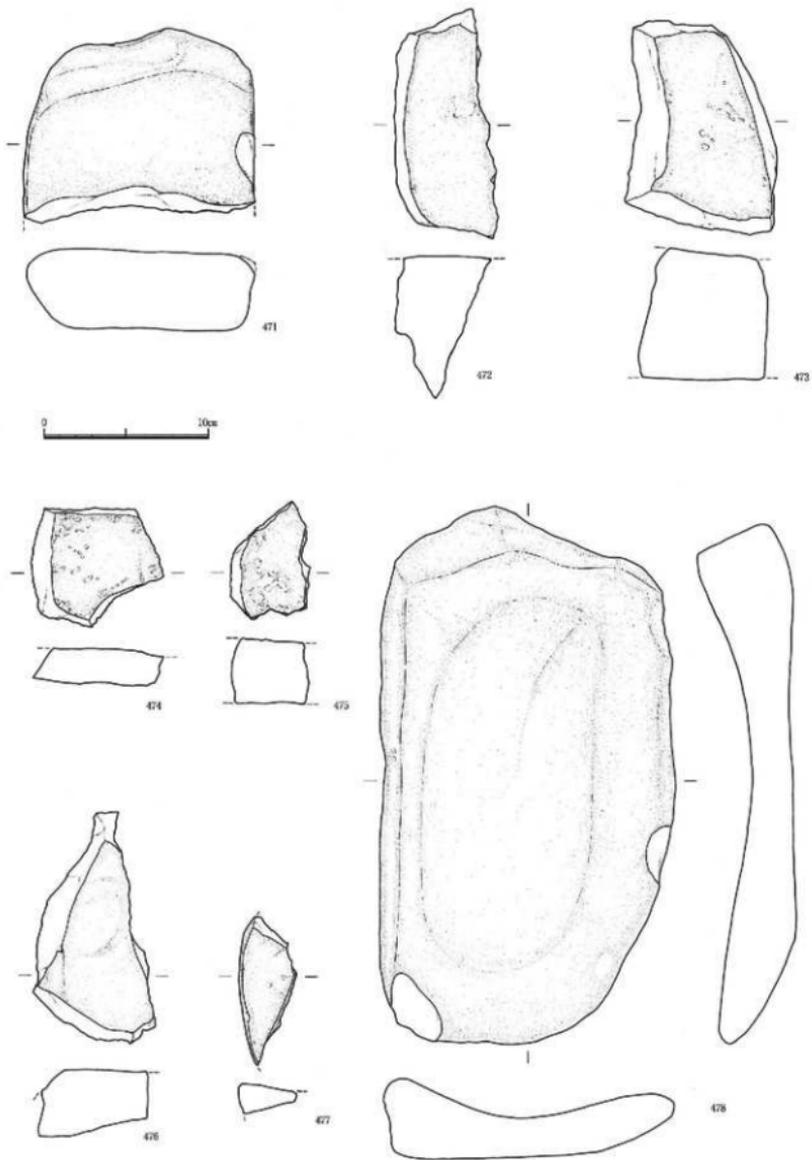
縄文時代の石器には石鏃、石刃、石皿、磨石、石棒および剥片がある。また剥片のうち675の1点は緑色結晶片岩である。これは中央トレンチNo3区の3段目より出土していることから、弥生時代のものではなく、縄文時代の剥片である。ここで掲示した220点の石器は全て縄文時代のものであり、出土土器との関係から後・晩期のものといえる。

456~464は石鏃である。458・464は茎部を欠いているため形態を捉えたいが、その他は全て無茎式である。また456・460・461では明瞭に脚部を作り出している。457もまた本来は脚部を作っていたであろう。464は側辺の細部調整が粗い。茎部欠損のため判然としなが、無茎長三角形を呈していたのではないかとみられる。

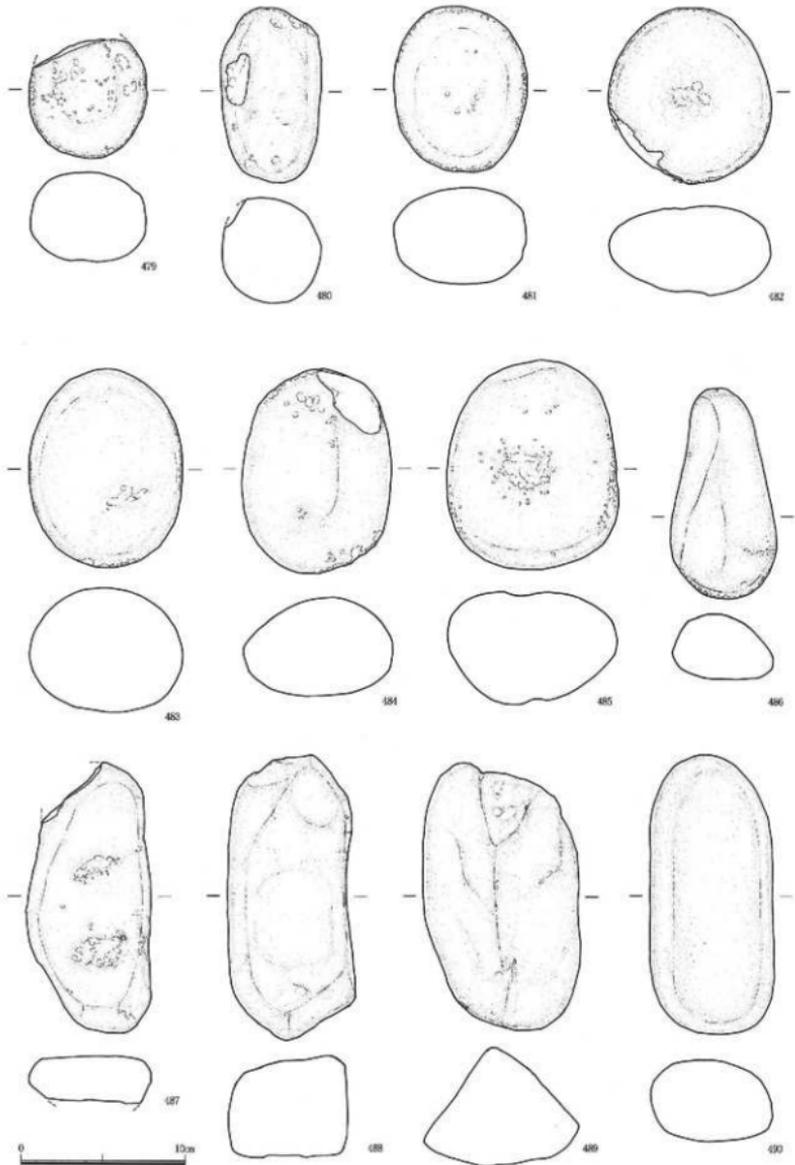
465~470は石刃である。1辺に両面から押圧剥離による細部調整を施し、刃部を作り出している。468・470はやや形状の整わない剥片を使用しているが、466を除いて二等辺三角形あるいは二等辺台形になるように形作られ、長辺を刃部としている。465~468では原石面が残っていることから、荒割りして得られた剥片をそのまま素材として使用していることがわかる。466では刃部以外にも細部調整が認められるので、形状を整えるための加工もなされたと思われるが、原石面に近い素材を用いたため、形状加工が必要になったのであろう。



第71图 绳文石器(1)



第72図 縄文石器(2)



第73図 縄文石器(3)

471~478は石皿である。大半のものが破損のため小破片となっているなかで、478はほぼ原形を保っている。長さ33.20cm、幅17.88cmを測る。最大厚は5.85cmであるが、中央部分は窪んでいるために薄く、2.4cm程である。底面はほぼ平坦であるが、四周が反り上がり、そのため中央部分が窪み、ボール状を呈している。表面中央はよく磨れている。この478に限らず、破片化したいずれの資料においても、その表面中央部分はよく磨れて窪んでいる。

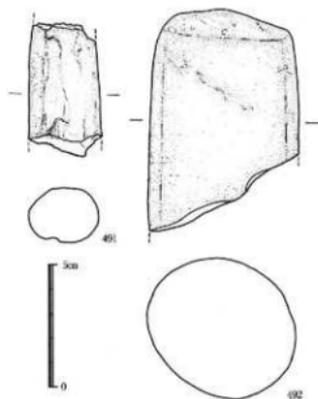
479~490は磨石である。球形のものは側面全体が、長球形のものは片側頂部が磨れるという傾向がみられる。これらは先の石皿と組み合わせ、粉砕具として使用されたものであろう。なお482と485には、表裏面ともに径2cmほどの大きさの浅い窪みがみられる。これらは凹石としても使用された可能性が考えられる。

491・492は石棒である。前者は断面径3.0×2.2cm、後者は断面径6.1×5.8cmを測る。ともに石材は緑色結晶片岩である。後者には基部が遺存している。

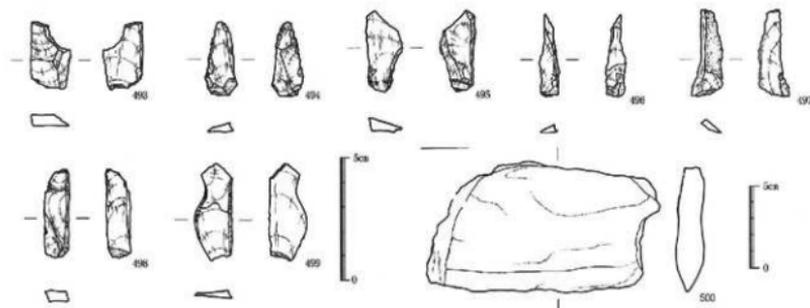
493~675は剥片である。片側に原石面を留めるものは501・502・503のように剥離後の2次加工が残るものと、672のように石核からの剥離面のみが認められるものがある。この違いは、剥片の大きさに関係し、1辺4cm以上の剥片は、小形石器製作のための素材も含まれる可能性が高く、1辺2cm以下のものは石器製作の過程で出た剥片そのものと考えられる。504や505では、剥離時に生じた以外の調整面が表裏に認められることから、加工途中であったとみられる。

また607・608・628では、1側面に細部調整が加えられていて、クサビ形石器である可能性もある。ただし、こうしたものは掲示した資料の中では数少ない。

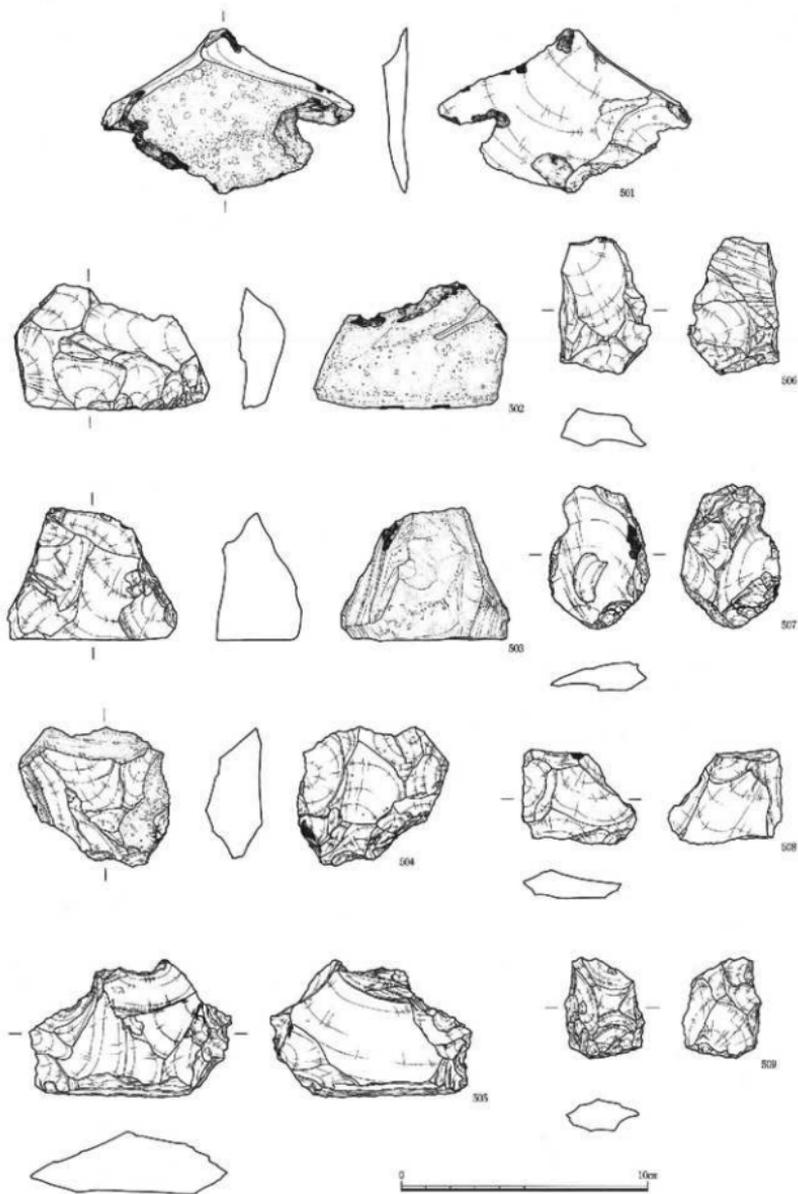
500は、剥片の中では唯一の緑色結晶片岩である。製品の特定はできない。



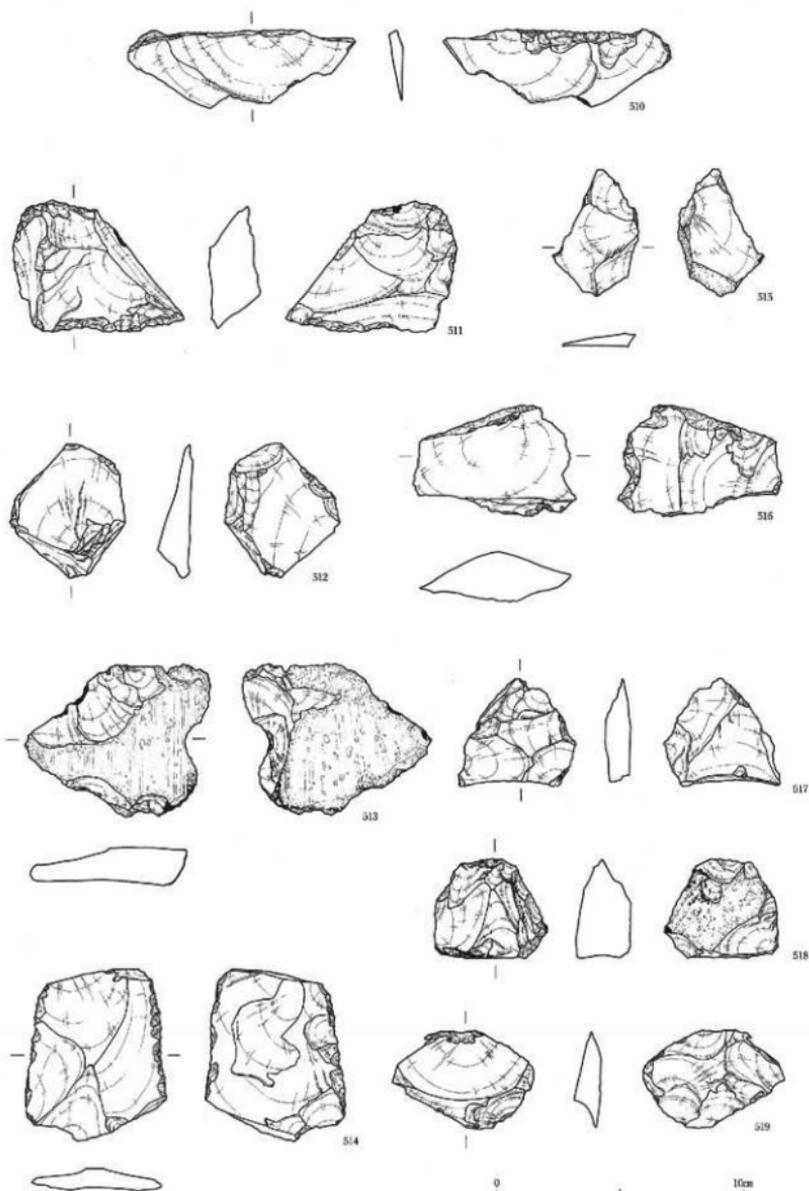
第74図 縄文石器 (4)



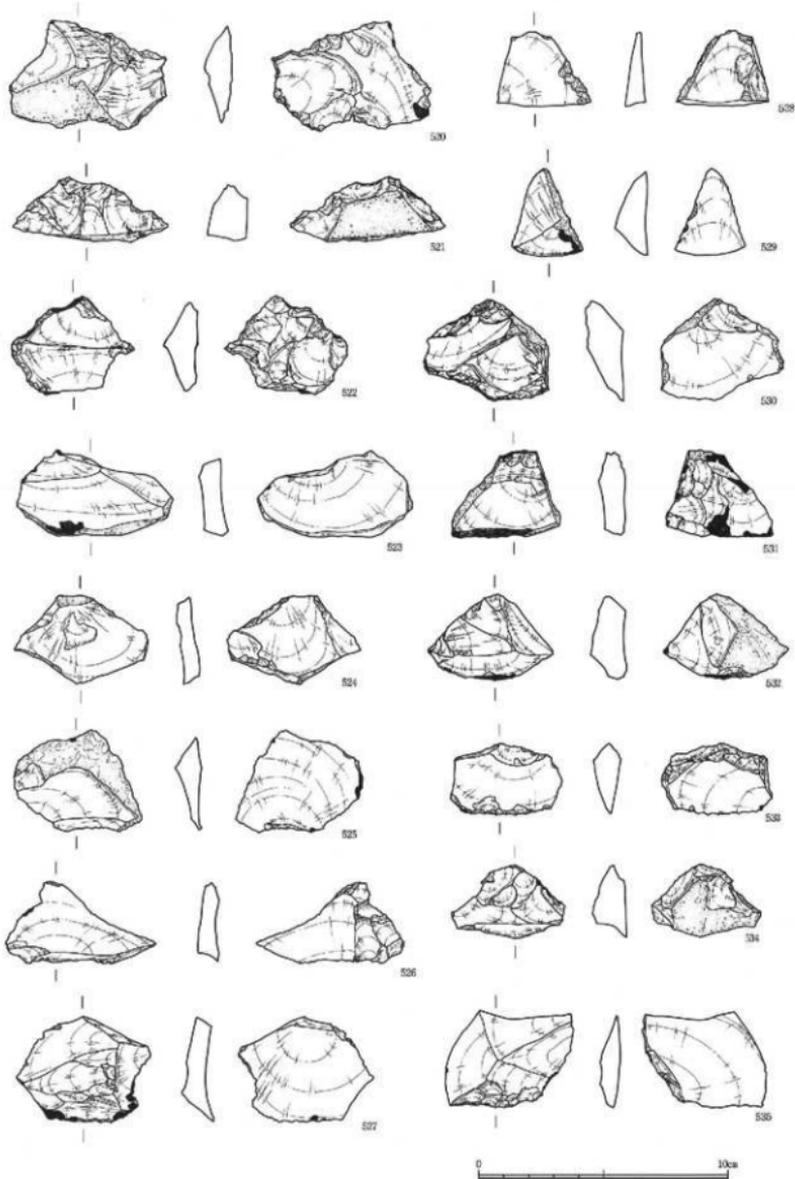
第75図 縄文石器 (5)



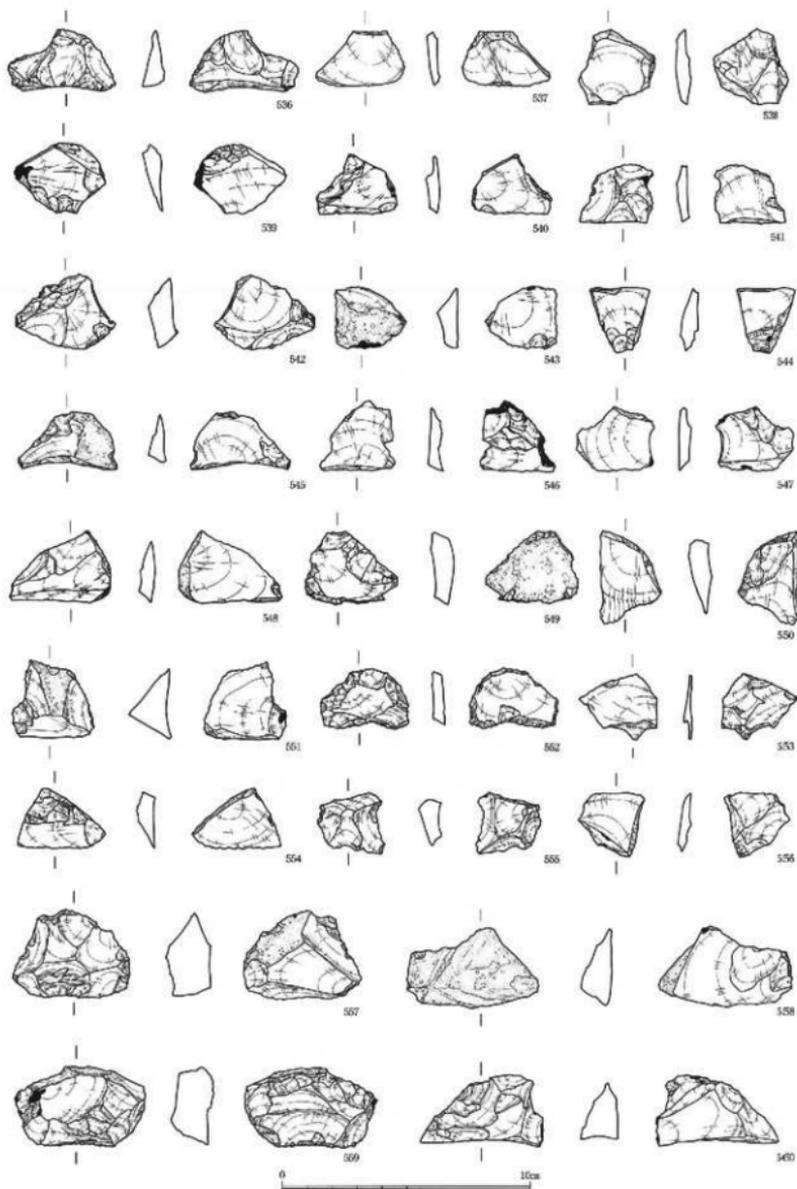
第76图 绳文石器(6)



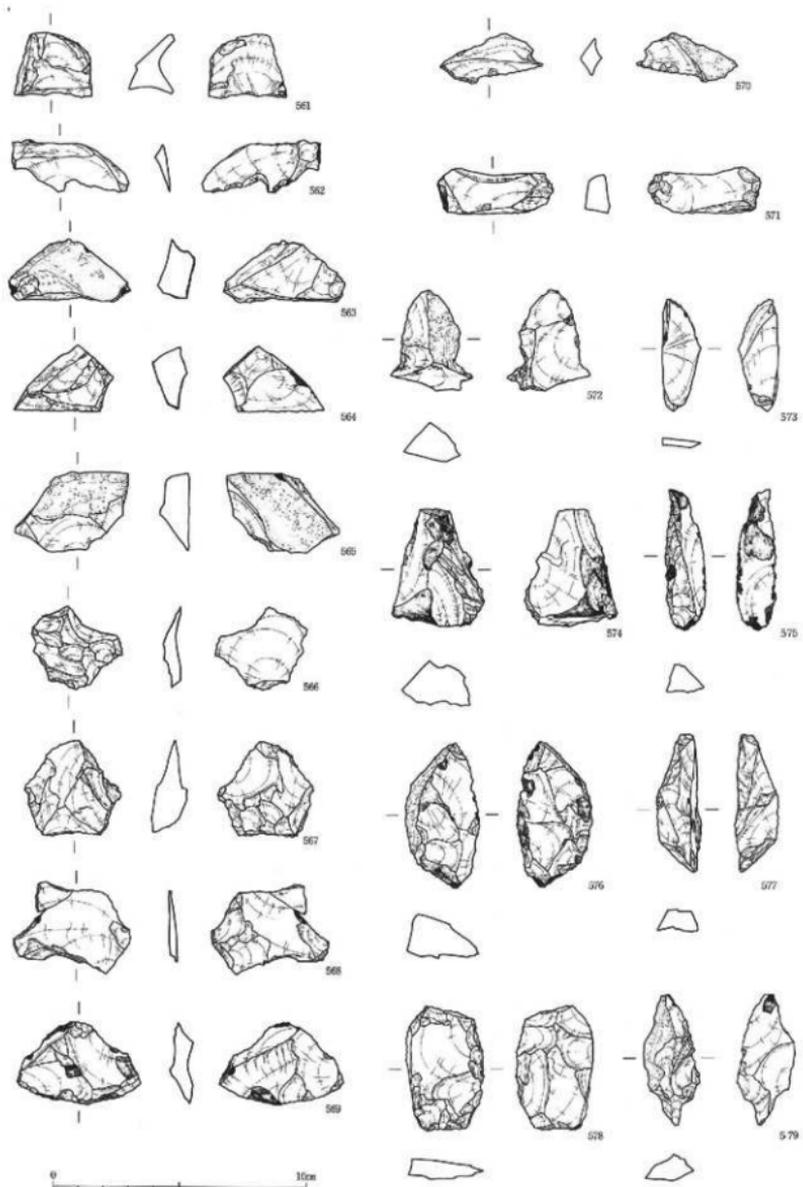
第77図 縄文石器 (7)



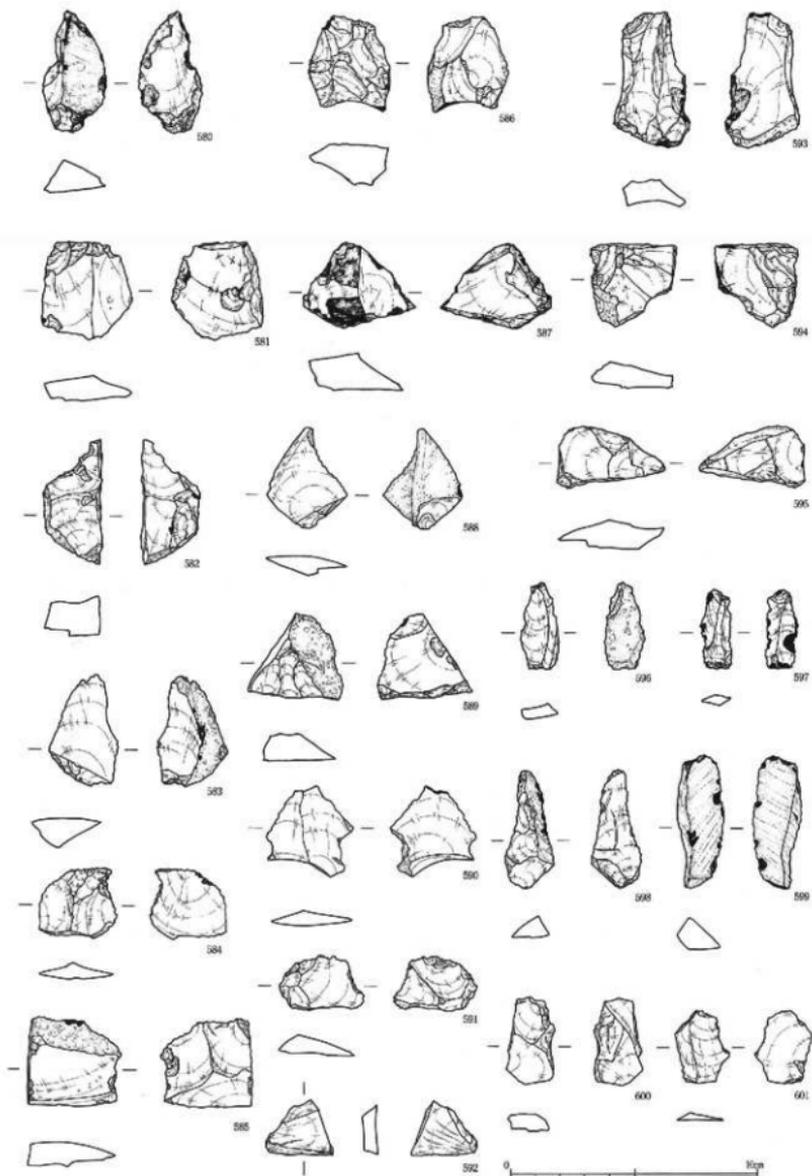
第78図 縄文石器 (8)



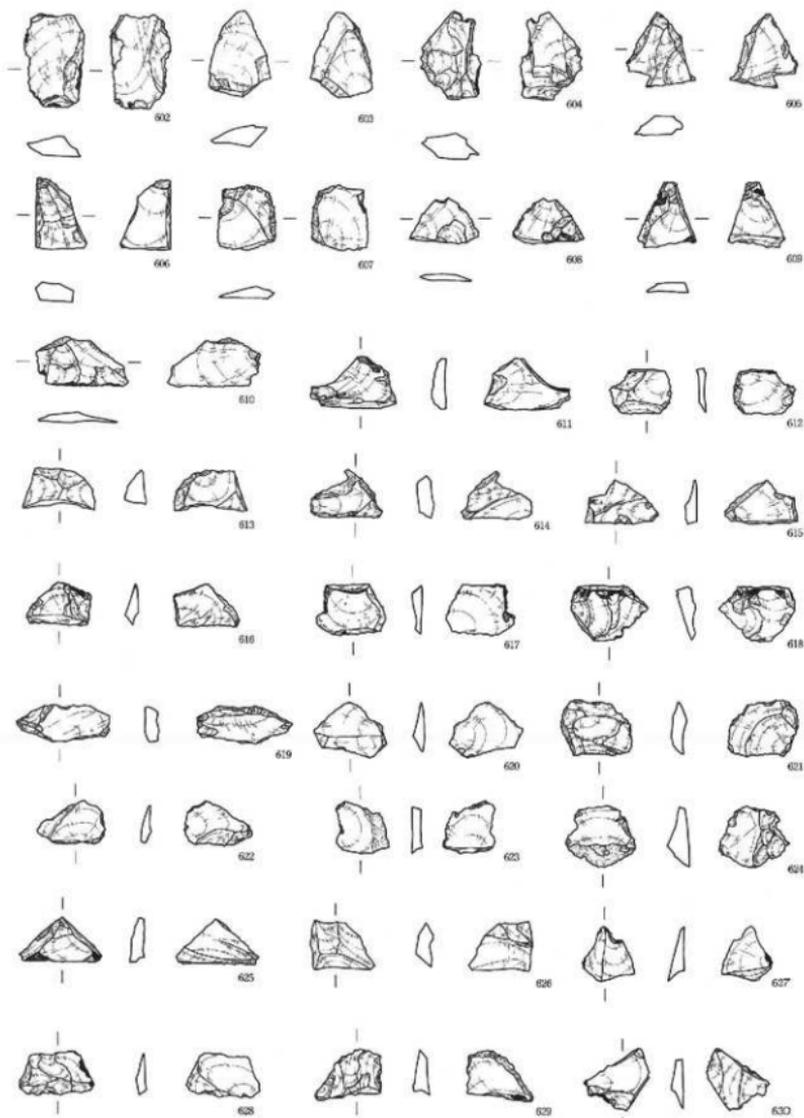
第79図 縄文石器 (9)



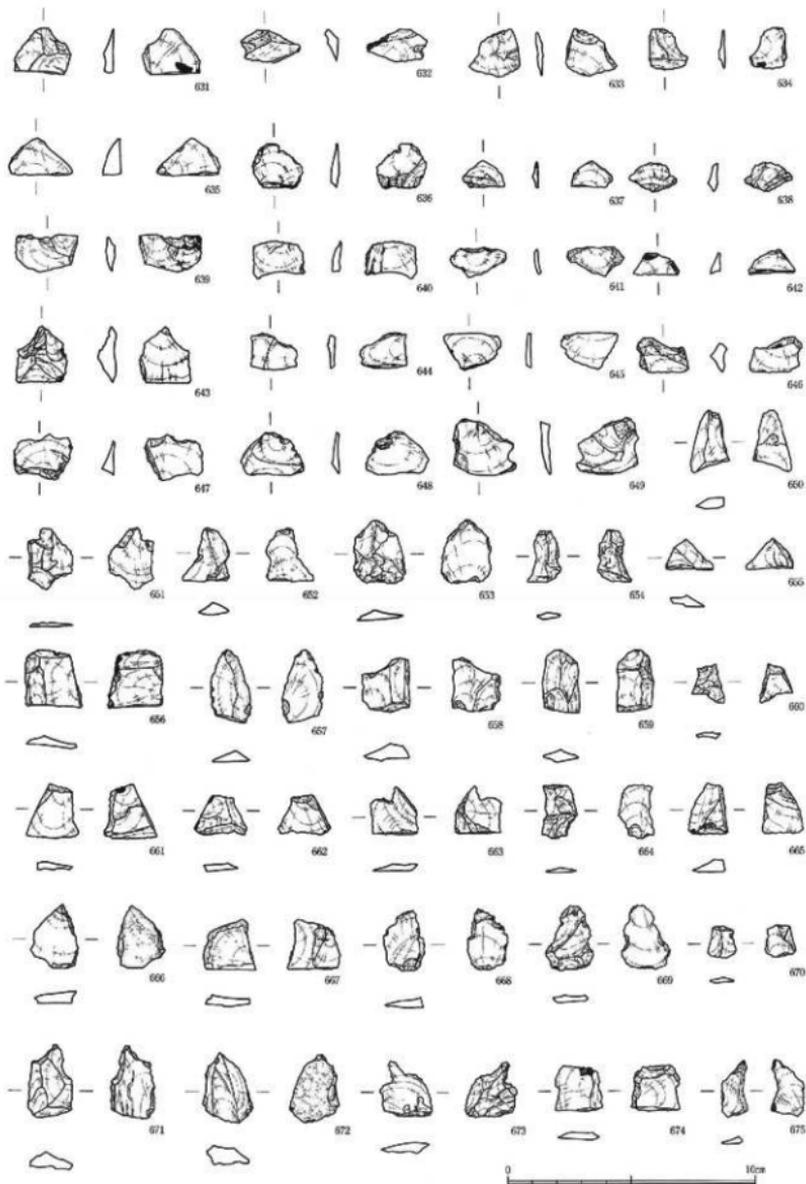
第80回 縄文石器 (10)



第81図 縄文石器 (11)



第82図 縄文石器 (12)



第83図 縄文石器 (13)

V 縄文土器の胎土分析の成果

(1) はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村2001)。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したバレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが(藤根1998)、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きいが、こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

鳳東町4丁遺跡は、堺市鳳東町地内に所在する遺跡であるが、調査では縄文時代後期の土器が出土している。ここでは、鳳東町4丁遺跡から出土した縄文時代の土器について、その胎土の材料を検討した。

分析No	取土No	種別	胎土材料の分類
1	277	縄文土器	A類 (断層ガウジ)
2	658-1		A類 (断層ガウジ)
3	658-2		B類 (水成粘土)
4	502		A類 (断層ガウジ)
5	554		B類 (水成粘土)
6	536		A類 (断層ガウジ)
7	564		B類 (水成粘土)
8	545		B類 (水成粘土)
9	533		A類 (断層ガウジ)
10	633		B類 (水成粘土)

表1 分析資料一覧表および胎土分類 (計数結果による)

(2) 試料と方法

試料は、鳳東町4丁遺跡から出土した縄文時代の土器10試料である(表1)。

これら試料は次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成し、偏光顕微鏡による粒子毎の岩石・鉱物組成を調べた。(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により

乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にその平面の固化処理を行った。(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

上器胎土中の岩石・鉱物組成は、松田ほか(1999)による粒子ポイント法に従った。同定は、顕微鏡下300倍の倍率において行った。なお、試料は、薄片全面について微化石類(珪藻化石、骨針化石)や計数外の岩石片の特徴について観察・記載を行なった。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10~数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行なわれている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[植物珪酸体]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10~50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10~30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[多結晶石英]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多い。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石

構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[火山ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考えるが、凝灰岩中にも含まれる。

[安山岩類]

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるものである。ここでは、斑晶質の岩石を安山岩とした。

[凝灰岩類]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山碎屑物などから構成され、非晶質でモザイク的な文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[多結晶石英]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。なお、片理構造を示す岩石は結晶片岩とした。

[砂岩および粘土岩]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。なお、微細で結晶度の高い岩石はチャートとした。

(3) 結果

以下に、土器胎土について計数結果(表2・3)および計数以外の特徴について述べる。

No 1：粒度組成は、極細粒砂および粗粒シルトが多く、砂粒の占める割合は極めて高い。岩石・鉱物組成は、角閃石類が特徴的に多く、はんれい岩および花崗岩類からなる。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。斜長石は粒子内断層やたわみなどの変形双晶からなり、尖った形状を示す鉱物が多い。

No 2：粒度組成は、極細粒砂および粗粒シルトが多く、角閃石類が特徴的に多く、砂粒の占める割合は極めて高い。岩石・鉱物組成は、はんれい岩および花崗岩類からなる。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。斜長石は粒子内断層やたわみなどの変形双晶からなり、尖った形状を示す鉱物が多い。

No 3：粒度組成は、細粒シルトが多く、砂粒の占める割合は極めて低い。岩石・鉱物組成は、石英や長石のほか砂岩や花崗岩類からなる。また、片岩類を少量含む。微化石類は骨針化石や湖沼浮遊生指標種群 *Melosiragranulata*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Stephanodiscusastrae* が含まれていた。なお、植物遺体やイネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。

No 4：粒度組成は、極細粒砂および粗粒シルトが多く、角閃石類が特徴的に多く、砂粒の占める割合は極めて高い。岩石・鉱物組成は、はんれい岩および花崗岩類からなる。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。斜長石は粒子内断層やたわみなどの変形双晶からなり、尖った形状を示す鉱物が多い。なお、カタクラサイトも見られた。

No 5：粒度組成は、細粒シルトが多く、砂粒の占める割合は比較的高い。岩石・鉱物組成は、石英や長石のほか砂岩や花崗岩類からなる。微化石類は、骨針化石や湖沼浮遊生指標種群 *Melosiragranulata*、海水種 *Thalassiosira* 属 / *Coscinodiscus* 属、不明種が含まれていた。なお、イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。

No 6：粒度組成は、極細粒砂および粗粒シルトが多く、角閃石類が特徴的に多く、砂粒の占める割合は極めて高い。岩石・鉱物組成は、はんれい岩および花崗岩類からなる。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。斜長石は粒子内断層やたわみなどの変形双晶からなり、尖った形状を示す鉱物が多い。

No 7：粒度組成は、細粒シルトが多く、砂粒の占める割合は極めて低い。岩石・鉱物組成は、石英や長石のほか砂岩や花崗岩類からなる。微化石類は、骨針化石や湖沼浮遊生指標種群 *Melosiragranulata*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Stephanodiscusastrae*、内湾指標種群 *Cyclotellastrolum*、海水種 *Thalassiosira* 属 / *Coscinodiscus* 属が含まれていた。なお、植物遺体

やイネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。

№8：粒度組成は、極細粒砂および細粒シルトが多く、砂粒の占める割合は比較的高い。岩石・鉱物組成は、石英や長石のほか砂岩からなる。また、花崗岩類も含まれていた。微化石類は、骨針化石や湖沼浮遊生指標種群 *Melosiragranulata*、淡水種 *Melosiraambigua* が含まれていた。なお、イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。

№9：粒度組成は、極細粒砂～中粒シルトが多く、角閃石類が特徴的に多く、砂粒の占める割合は極めて高い。岩石・鉱物組成は、はんれい岩および花崗岩類からなる。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。斜長石は粒子内断層やたわみなどの変形双晶からなり、尖った形状を示す鉱物が多い。

№10：粒度組成は、細粒シルトが多く、砂粒の占める割合は極めて低い。岩石・鉱物組成は、石英や長石のほか砂岩からなる。また、花崗岩類も含まれていた。微化石類は、骨針化石や湖沼浮遊生指標種群 *Melosiragranulata*、淡水種 *Pinnularia* 属、海水種 *Thalassiosira* 属/*Coscinodiscus* 属が含まれていた。なお、植物遺体やイネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。

(4) 考察

i) 胎土材料の特徴

検討した縄文土器の胎土は、粘土および鉱物・岩石の特徴から、大きく A 類、B 類に分類される (表 1)。

A 類は、角閃石類およびはんれい岩を主体とした組成からなる 5 試料である。

A 類は、これらの胎土は、角閃石やはんれい岩を含むほか、斜長石内の微小断層が見られるものが多く、その他の石英などの粒子も尖った形状を呈するなど断層岩特有の粒子が見られた。このことから、これらは生駒西麓産土器 (河内の土器) と呼ばれる土器群の特徴と一致する (藤根・小坂 1997)。藤根・小坂 (前出) が検討した土器では、5 μ m 未満の粒子の占める割合が 37 体積%と低く、断層内物質の特徴と共通することから、これら土器群が断層内物質をそのまま利用して作られた土器と考えられている。また、生駒山西麓には、生駒はんれい岩類が分布し、長さ 21km に及ぶ生駒断層が存在するが、かつてこの断層により生成した断層粘土 (断層ガウジ) が採取でき、同質の土器ができたことから、この断層粘土が利用されたものと考えられている (藤根・小坂、前出)。

B 類は堆積岩類を主体として花崗岩類を伴う組成で、淡水成粘土からなる 5 試料である。

これらの試料中には、淡水種珪藻化石のほか、骨針化石が含まれていることから、粘土材料は淡水成粘土上使用している。なお、分析 №5、№7、№10 では、海水種珪藻化石が含まれていた。

ii) 遺跡周辺の地質と胎土組成の比較

土器胎土の材料は、生駒西麓産土器のように本来砂粒物を含んだ粘土を使用した場合もあるが、一般的には粘土と砂粒などの混和材からなる人工物と理解される。このうち、粘土は、段丘堆積物としての粘土層のほか、山間部谷部において基盤岩石が風化して堆積した粘土堆積物も考えら

れる。混和材は、周辺岩石が主に河川により細粒化した段丘堆積物としての砂や火山灰など利用されたことが考えられる。

遺跡周辺には、大阪層群および段丘堆積物が広く分布し、海成粘土および段丘成粘土など良質の粘土が見られる。B群とした土器胎土中には、骨針化石や海水種珪藻化石などが含まれることから、在地材料である可能性が高い。

一方、A群の土器は、その特徴から角閃石はんれい岩などが母材と推定される。前述したように、隣接地域では、生駒山西麓に分布することが知られる（藤根・小坂、前出）が、こうした特徴をもつ土器群は、同様の地質学的条件が他地域においても存在することから、今後十分な検討が必要である。

(5) おわりに

ここでは、鳳東町4丁遺跡から出土した縄文時代の土器について、その胎土の材料を検討した。その結果、大きくA類、B類に分類された。A類は、角閃石およびはんれい岩を主体とした組成であり、断層ガウジを利用している。また、B類は堆積岩類を主体として花崗岩類を伴う組成であり、水成粘土を利用している。

今後は、遺跡周辺において段丘堆積物などの材料に関する地質調査を行うことにより、より精緻な検討ができるものと考えている。

引用文献

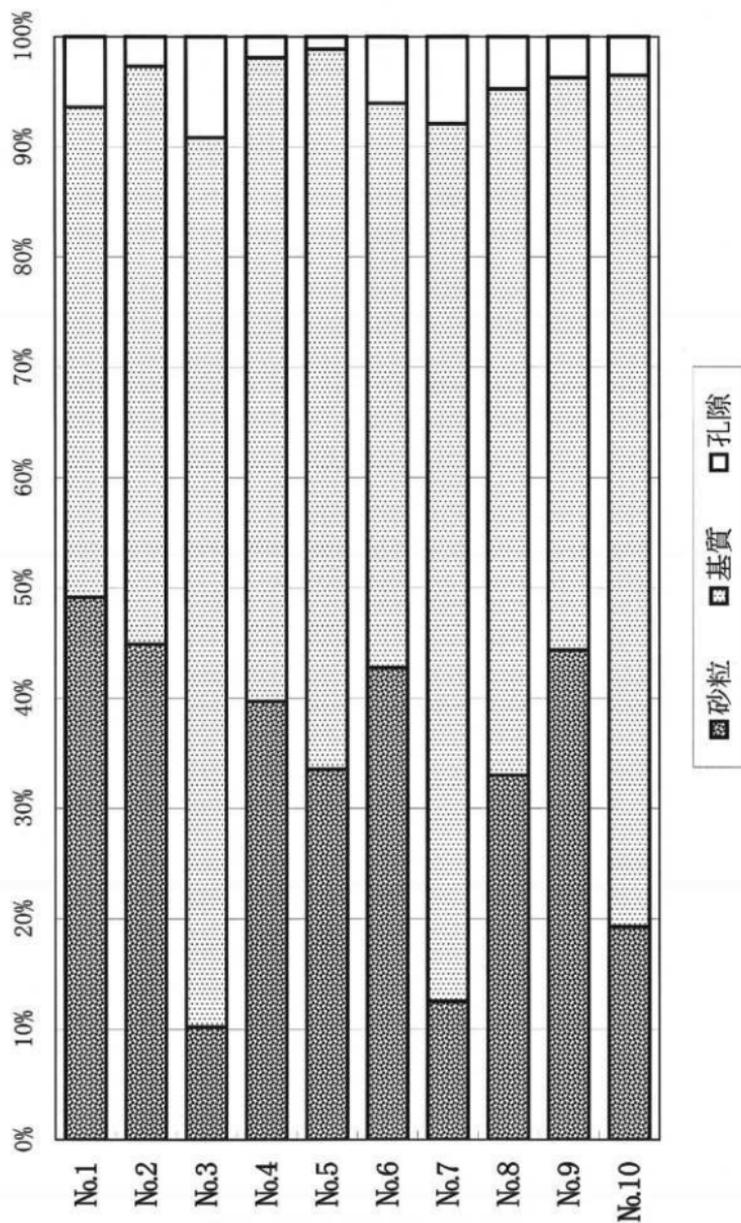
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, 2, 73-88.
- 藤根久・小坂和夫 (1997) 生駒西麓 (東大阪市) 産の縄文土器の胎土材料 - 断層内物質の可能性 -。第四紀研究, 36: 55-62.
- 藤根久 (1998) 東海地域 (伊勢-三河湾周辺) の弥生および古墳土器の材料。第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.
- 藤根久・今村美智子 (2001) 第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴。「波志江中宿遺跡」、日本道路公団・伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.262-277.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.
- 松田順一郎・三輪若菜・別所秀高 (1999) 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の上器薄片の観察-岩石学・堆積学的による-。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集、120-121.

頁	砂粒区分	砂粒の種類構成																備考											
		板状片						岩片				その他																	
		石英	カリ長石	斜長石	黒斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	不明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	火山岩	多結晶石英		花崗岩類	はんれい岩	ホルンfels	結晶片岩	粘土岩	理髪化石	骨化化石	珪子化石	火山ガラス	揮発性液体	合計
1	細砂																											0	斜長石の変形双晶 突った結晶含む
	粗粒砂															1												1	
	細粒砂															1												1	
	中粒砂		1				4																					5	
	粗粒砂	7	2	2			18		1							1												31	
	粗粒シルト	6		3			45		2	2															2			63	
	中粒シルト	7		3			47		2	2	1																5	67	
合計	25	3	8			142		5	4	1						3									3	6	200		
石膏																191												181	
孔隙																26												26	
2	細砂																											0	斜長石の変形双晶 突った結晶含む
	粗粒砂																1											1	
	中粒砂	1					5		2							1												2	
	粗粒砂	3	1				5		2							1												13	
	細粒砂	8		1			16		3	4						2	1											37	
	粗粒シルト	3	7	2			49		6	2						1												70	
	中粒シルト	2	5	1			61		1	1																		71	
合計	17	13	4			155		12	10						5	1	2										219		
石膏																256												256	
孔隙																13												13	
3	細砂									2																		2	骨針化石 淡水種群化石
	粗粒砂										2					1												9	
	粗粒砂	1	2								2					1	6											12	
	中粒砂	3	2								2					1												8	
	粗粒砂	1					3				1					1	2								1			9	
	粗粒シルト	7	7	2			2		4	1	13															2	6	44	
	粗粒シルト	14	32	1	6	2	3	1	1	1	3													2	2			21	
合計	3	11		4	5	1			1	1														2	2		8	34	
石膏	29	36	3	10	7	9	1	5	2	2	22					3	13					1		2	2	3	35	207	
石膏																1636												1636	
孔隙																186												186	
4	細砂																											0	斜長石の変形双晶 突った結晶含む
	粗粒砂																											0	
	粗粒砂		1				1																					2	
	中粒砂	3	1				10									1												15	
	粗粒砂	3		2			13											1										21	
	粗粒シルト	10	3	4	1		45		2							1												69	
	粗粒シルト	1	6	1	1		68		2																			4	
合計	2					28																					30		
石膏	19	13	7	2		198		4								2	1									4	210		
石膏																309												309	
孔隙																10												10	
5	細砂																											0	骨針化石 淡水種群化石
	粗粒砂	1																										1	
	粗粒砂	1														3			1	1								6	
	中粒砂		1													2			1	4								9	
	粗粒砂	3	2													5										1		10	
	粗粒シルト	11	6	1												6				1								25	
	粗粒シルト	59	46	1	3		1	1	1	3	11									1				1	1		15	135	
合計	5	5		1	1				4	6																	22		
石膏	71	60	2	4		2	1	1	7	33						408							1	1	1	15	208		
石膏																7												408	
孔隙																7												7	

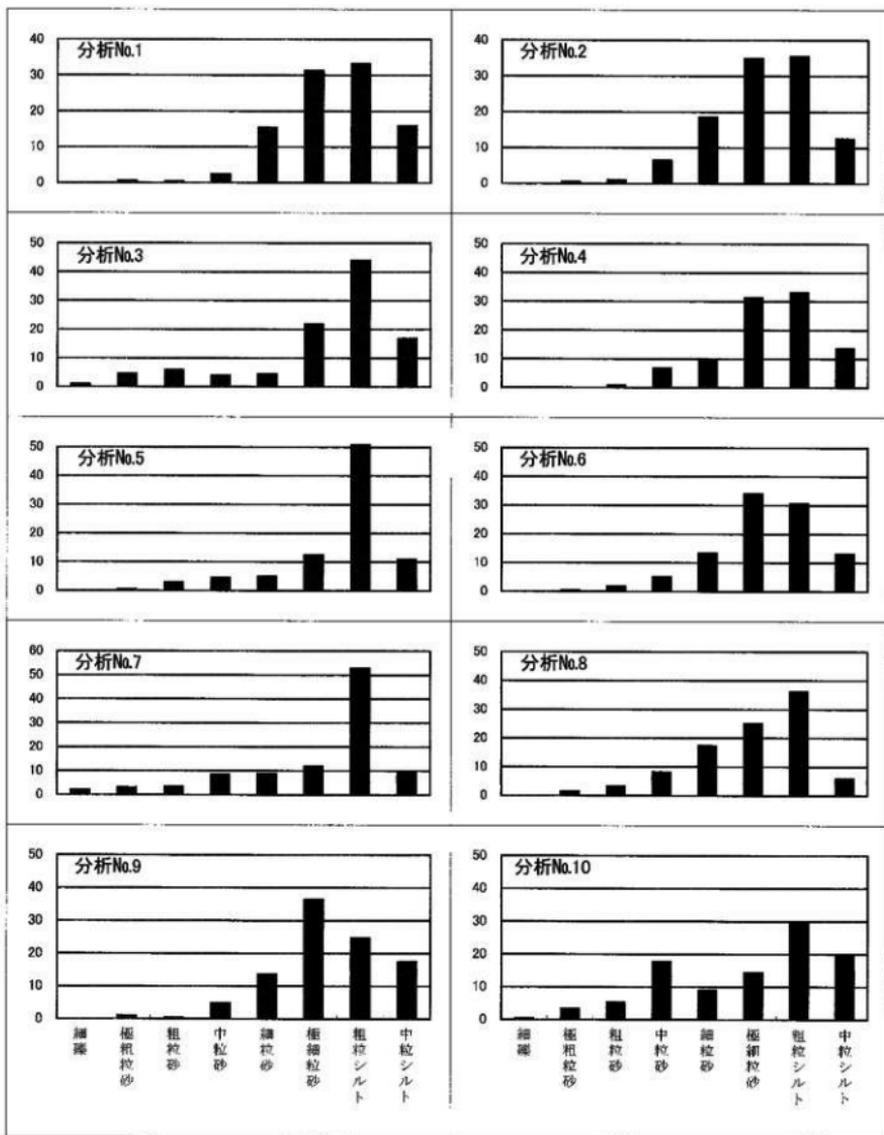
表2 薄片観察結果(1)

資料	砂粒区分	砂粒の埋藏構成																備考											
		鉱物片						岩石片				その他																	
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャリト	砂岩	凝灰岩	泥岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		はんれい岩	本ルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	香針化石	胞子化石	火山ガラス	植物碎胞体			
6	細砂																									0	新長石の雲母双晶 尖った結晶含む		
	極粗粒砂																1									1			
	粗粒砂																2	1								4			
	中粒砂	1															1	1	1							11			
	細粒砂	3	1														2									29			
	極細粒砂	6		2													1									73			
	粗粒シルト	6	1																					1		66			
	中粒シルト			4	1																					2		28	
	合計	16	6	3													4	4	2							3		212	
	石膏																											254	
孔隙																										30			
7	細砂																										4	骨針化石多量 淡水種珪藻化石 海水種珪藻化石	
	極粗粒砂																1										6		
	粗粒砂																1	6								7			
	中粒砂	6	1														1	3								17			
	細粒砂	3	2														3	6						1		18			
	極細粒砂	4	5	2													8	3						1		24			
	粗粒シルト	35	28	1	3	2	1										2	2	11					3	2	13	107		
	中粒シルト	2	11		3																				1	3	20		
	合計	50	47	3	6	2	2										2	2	23	2	24	1			3	1	3		203
	石膏																										1289		
孔隙																										126			
8	細砂																										0	骨針化石 淡水種珪藻化石	
	極粗粒砂																1										3		
	粗粒砂	1		1																							7		
	中粒砂	3	3	1														1	2								17		
	細粒砂	6	7	1													9		1								36		
	極細粒砂	19	21														8										52		
	粗粒シルト	15	19														9										75		
	中粒シルト	2	7																								12		
	合計	37	57	3	0	0	6	0	2	2	0	0	26	0	0	1	2	3	0	0	2	0	0	0	0	38	21		392
	石膏																										381		
孔隙																										29			
9	細砂																										0	新長石の雲母双晶 尖った結晶含む	
	極粗粒砂																										2		
	粗粒砂	1																									1		
	中粒砂			4																							10		
	細粒砂	1	1	3													4										28		
	極細粒砂	10	7														51	7									76		
	粗粒シルト	7	1														39	2	2								51		
	中粒シルト																										36		
	合計	19	11	15													149	15	2								203		
	石膏																										238		
孔隙																										17			
10	細砂																										1	淡水種珪藻化石 海水種珪藻化石 骨針化石多量 胞子化石	
	極粗粒砂																										7		
	粗粒砂	1	2	1																							11		
	中粒砂	6	5														19	3	2								37		
	細粒砂	3	6														8										19		
	極細粒砂	9	11														5										30		
	粗粒シルト	17	24		4	3											1	1									62		
	中粒シルト	9	21		3																						41		
	合計	45	70	1	7	1											1	3	5	44							208		
	石膏																										833		
孔隙																										38			

表3 薄片観察結果(2)



第85図 土器胎土の孔隙・砂粒・基質の割合



第86図 土器胎土中の砂の粒径組成

VI 総括

平成16年度に試掘調査を行ない、新規発見の遺跡として周知化した鳳東町4丁遺跡であるが、平成17年度に発掘調査を実施して明らかとなった遺跡の内容は、これまで述べてきた通りである。このことにより、本遺跡の性格付けが可能となったが、特に注目したい点は次の2つである。第1は古代の大溝の発見であり、第2は縄文時代の土器、石器の出土である。この総括では、そのうちの第1の点を取り上げ、検討を加えたい。

調査によって発見された溝は、規模や底の高さが異なる3条からなっている。推定される幅5m、深さ1.5mの大型のA溝は、調査区西辺の段丘崖線際を走行している。このA溝こそが001溝の中でも本流であり、南から北方面に導水する役割を担っていた。しかも、崖線際に位置することから、段丘上の雨水を集める機能も併せ持っていたであろう。

一方、東に位置するC溝は、3条の中でも最も規模が小さく、しかも底位置が低い。そしてこの溝と水田が直接つながっていたことが、調査によって判明している。つまりこのC溝は、水田へ供水する役割を担っていた。

そしてA溝とC溝の間に位置するB溝は、規模の上からも両者の中間にある。このB溝の性格を直接示す状況を調査から得ることはできなかったが、恐らくA溝の要所に設けられた堰より上昇した用水を、水田と直結したC溝に導くという水位調整の役割を果たしていたと考えられる。

このように、役割の異なる3条の溝が一体化して、ひとつの機能を果たしていたとみられる。つまり、001溝は泉北丘陵から大鳥方面へ灌漑用水を導くための幹線水路であり、同時にその周辺に広がる水田に供水する用水路でもあったと考えられる。そしてその水源は、第1章で述べたように、鶴山池だと考える。

この001溝からは数多くの遺物が出土している。しかし、遺物には年代幅が認められ、弥生時代から13世紀代の瓦器まで存在する。したがって、周囲の土中に包含されていた遺物が溝の掘削時に混入した可能性、あるいは溝の埋没土内に上層に含まれた遺物が混入した可能性など、幾つかの状況が考えられ、溝の掘削時期を断定することは難しい。ただ、8世紀代を境にしてそれ以降の遺物が急増していることから、ここに溝の掘削時期を求めることができるのではないかと考える。

一方、埋没時期に関しては、一定度時期のまとまりがみられる12世紀後半とすることができると考える。とすればこの溝は、奈良時代に構築され、そして平安時代末まで機能していたことになると思われる。

ところで、当遺跡の周辺では奈良時代になり、集落形成が顕在化することを先に確認した。このことから、灌漑水路の設置と集落の拡大とが連動していたとみることができると考えられる。生産域の安定化と居住域の整備・拡大とが表裏の関係となっていたといえるのである。このように、奈良時代

が調査地周辺の開発の重要な画期であったと考えられる。

この遺跡所在地は、古代においては大鳥郡大鳥郷にあつている。大鳥郷は6邑からなり、そのうちの大鳥邑に該当している。

本遺跡が位置する石津川流域には、日下部首・日下部、大鳥連、蜂田連、和太連、石津連、蜂田兼師の各氏族が存在していたと新撰姓氏録に記されている。大鳥連は、「和泉国でも有力な地方豪族であったと推定される。しかし律令体制下の中央においては特に傑出した人物を排出しておらず、一族は専ら中下級官吏の任にあつている」(財)大阪府文化財調査研究センター1996)という評価もある。とすれば、在地首長のもとで地域開発が順調に進められていなかった可能性を推測できる。

こうしたなかで、和泉地域における開発の立役者として名前を挙げることができる人物に行基がいる。本調査地の1.5km北東に位置する家原寺は、行基の生家を建て直した寺と伝えられ、大鳥郡を中心とした地域の開発に、早くから行基が関わったといわれている(大阪府立狭山池博物館2003)。

行基の業績については史実・伝承入り乱れているが、和泉国と行基との関わりを示す事項は幾つかある(表4)。このなかで、本遺跡との関係において注目されるのが、天平9(737)年の鶴田池院の起工である。院の設立は、近在する池(溜池)との関係からなされたものであることから、8世紀中葉に既に鶴田池が構築されていた可能性が極めて高い。そしてこの一連の事業に起因して、石津川流域における奈良時代の飛躍的な集落形成の状況が生まれたと捉えることができよう。

鶴田池と同じく、行基によって築かれたと伝えられる久米田池が平成19年に発掘調査された。築造当初の盛土が検出され、一種の敷葉工法が採用されていたことを確認することができた。

池の築造時期を直接示す具体的な証拠は見つからなかったようだが、「敷葉工法が特に7、8世紀頃に堤や道路築造工事で多く行われていたことから奈良時代の築造の可能性が指摘され」(岸和田市教育委員会2007)得るといふ。行基年譜によると、久米田池脇の陸池院の建設が天平6(734)

年	西暦	事 項
天智七年	668	河内大鳥郡蜂田里に生まれる
天武十一年	682	出家する
慶雲元年	704	生家を改め家原寺となす
慶雲三年	706	蜂田寺(和泉国和泉郡)建てる
和銅元年	708	神風寺(和泉国大鳥郡)建てる
神龜元年	724	清浄土院(高渚寺、大鳥郡)・同尼院(同郡)建てる
神龜三年	726	檜池院(大鳥郡)建てる。大野寺・同尼院(大鳥郡)起工
天平二年	731	狭山池院・同尼院(河内国丹比郡)起工。狭山池修造はこの頃
天平六年	734	陸池院(和泉国和泉郡)・深井尼院(同大鳥郡)建てる
天平九年	737	鶴田池院(和泉国大鳥郡)起工
大平勝宝元年	749	菅原寺にて臨終

井上1959より作成

表4 行基関連記事

年なので、記事内容と発掘成果との間に矛盾はない。とすれば、鶴田池に関しても、池管理の役割も担った院の設立と大差ない頃に構築されたとみてもよさそうである。したがって、上述のように、遅くとも8世紀中葉頃には鶴田池は築造されていたのであろう。

ところで、現在の鶴田池から延びる水路をみると、2方向への灌漑がなされている。ひとつは、本遺跡も立地する石津川下流域の大鳥方面、いまひとつは西方の谷に沿った大園方面である。大園方面への水路は不規則な毛細血管状を呈している。これは大野池から延びる水路についても共通している。これに対して大鳥方面への水路は、石津川西岸の条里区画にほぼ沿った形状で設定され、北上しつつ東を流れる石津川に排水している。

この水路配置の違いは、地形の影響がまず考えられる。それとともに、水路設置の時期差を示しているかも知れないとの推測もできる。ただしその具体的な根拠はない。

「鶴田池は谷をせき止めた溜池であるが、その谷の下流ではなく、隣の石津川流域の微高地開発に利用され」（大阪府立狭山博物館2003）たとの指摘がある。これに従えば、大鳥方面の開発が大園方面の開発より遅れた二次的なもの、ではなかったといえる。つまり鶴田池の構築は、大鳥方面の開発を主目的にしたものであったと理解できる。

鶴田池の構築によって、周囲の土地開発が進み、行基の業績が史実かどうかは別にしても、それらが奈良時代のことであったと結論付けた。しかし、こうした水路の整備は、周辺地域の生産性の向上が中心目的ではなかった。そのこと以前に、和泉地域における古代の早魃・飢饉の多さから窺えるように、生産基盤の安定化を図ることこそが溜池と灌漑水路の設定の第一目的ではな

年次		記 事	出 典
	西暦		
慶雲三年	706	河内・摂津・出雲・安芸・紀伊・讃岐・伊予七国飢	続日本紀
		河内・出雲・備前・安芸・淡路・讃岐・伊予等国飢疫	続日本紀
和銅二年	709	河内・摂津・山背・伊豆・甲斐五国連雨損苗	続日本紀
天平四年	732	賑給和泉監俗姓	続日本紀
天平五年	733	和泉監・紀伊・淡路・阿波等国遭旱殊甚	続日本紀
天平六年	734	天平四年亢旱以来、百姓貧乏	続日本紀
天平神護元年	765	和泉国飢、賑給之	続日本紀
天平神護二年	766	和泉国飢、賑給之	続日本紀
神護景雲元年	767	和泉国五穀不登	続日本紀
寶龜六年	775	和泉国飢、賑給之	続日本紀
延暦元年	782	和泉国飢、賑給之	続日本紀
延暦九年	790	和泉…等十四国飢、賑給之	続日本紀
寶龜九年	778	和泉云々等十四国飢賑給之	続日本紀
弘仁十四年	823	奉和泉国大鳥、積川阿社幣以祈雨也	日本紀略
天長九年	832	賑給和泉国飢民	日本紀略
承和四年	837	和泉淡路两国飢、賑給之	続日本後記
白河五年	863	大和和泉阿国飢疫、賑給之	続日本後記
元慶元年	877	京師及畿内諸国飢饉、河内和泉為尤甚	続日本後記
元慶二年	878	賑給百姓、以去旱飢世	続日本後記
元慶二年	878	京師及畿内諸国飢饉、河内和泉為尤甚	続日本後記
万寿二年	1025	諸国旱、和泉・淡路殊甚	小右記
承暦四年	1080	近日早魃、任國民等不能耕作云々	水左記
寛治六年	1092	和泉・紀伊今年早魃、大木破々	後二條御通記

表5 和泉国の飢饉史料



第87図 現況の水路

かったのだろうか。

史料にみる和泉国の飢饉関連記事を挙げる(表5)と、8世紀代12回、9世紀代7回、10世紀代3回を数える。

また、「山低く谷が浅く、すぐに海に臨む和泉地方では、洪水の恐れも多く、また治水工事は困難であった。それに加えて和泉国の和泉郡・大鳥郡の須恵器生産は燃料としての立木を次々と伐採して、天然の貯水条件を悪化し、洪水と早魃を繰返させ、飢饉を慢性化する傾向を強めた」(和泉市史編纂委員会1965)といわれている。水利の悪さと、それに起因する凶作・飢饉が頻発していたことは明らかである。天長3(826)年、和泉国内に5つの池を築いたのも、その対策のひとつである。それは遑って、奈良時代前半期の行基の業績とされる各地の池溝開発にも当てはまるであろう。

ところで、001溝を鶴田池から大鳥方面に灌漑用水を引くための幹線水路と位置付けたが、この溝は平安時代末にはほぼ埋没し、役割を終えている。その原因は不明であるが、ひとつの可能性として考えられるのが、溝の位置の問題である。

001・A溝で顕著に認められたように、001溝は段丘崖線に沿った位置に築造されたために、本遺跡付近では段丘方向に入り込む地形に合わせて溝も西方に湾曲しつつ北流することになった。こうした状況下では、水流の圧力が溝壁面にかかり、その上部にあたる崖面も侵食されやすくなる。そのため、溝内への土砂の流入も著しかったことであろう。これに対して、溝内の通水を常に保つためには、頻繁な浚渫が必要となる。

こうした煩雑さを解消するために、平安時代末になって、溝を東方に移動させ、直線的な流れに改修したのではないかと推測する。ところが、移動した新たな溝の西側では、用水の確保ができなくなる。用水は常に東の石津川方向に排水されるためである。そこで調査地周辺では水田を捨てて畠地化されたのであろう。本調査地で認められたような中世耕作土は、まさにそうした状況を示している。そしてこの状況が、近世まで続いていたとみられる。

今回の発掘調査により、奈良時代における石津川西岸流域の開発状況の一端を垣間見ることができた。しかも、行基に関わる伝承の信憑性も増した。少なくとも、鶴田池の構築が行基の生きていた時代の出来事であったことだけは間違いのないようである。

参考文献

【論文・著書】

- 和泉市史編纂委員会『和泉市史 第一巻』1965
- 井上 薫『行基』（吉川弘文館）1959
- 太田 亮『日本国誌資料叢書 和泉』1925
- 大阪府立狹山池博物館『行基の構築と救済』2003
- 古代の土器研究会（編）『古代の土器1 都城の土器集成』1992
- 古代の土器研究会（編）『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996
- 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店）1981
- 中世土器研究会（編）『概説 中世の土器・陶磁器』（真陽社）1995
- 中村浩『和泉陶器窯の研究』（柏書房）1981
- 中村浩『古墳時代須恵器の編年的研究』（柏書房）1993
- 福島雅哉『溜池の水利慣行と管理』『日本古代文化の探求 池』1978

【報告書】

- 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成13年度』2002
- 大阪府教育委員会『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要—堺市菱木所在—』1980
- 大阪府教育委員会『鶴田池東遺跡発掘調査概要・Ⅱ—堺市菱木所在—』1982
- 大阪府教育委員会『土遺跡発掘調査概要—堺市上・草部所在—』1985
- 大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし—陶器の須恵器—』2006
- 岸和田市教育委員会『大阪府指定史跡名勝 久米田池発掘調査現地説明会資料』2007
- 堺市教育委員会「3. 鳳東町遺跡発掘調査報告—堺市鳳東町7丁 OH4地点—」『堺市文化財調査報告』第42集 1983
- 堺市教育委員会「5. 鶴田池東遺跡発掘調査報告—堺市菱木1040番地所在—」『堺市文化財調査報告』第42集 1983
- 堺市教育委員会『鈴の宮Ⅲ —都市計画街路 南花田鳳西町線建設予定地内—』（堺市文化財調査報告第11集）1983
- 堺市教育委員会「4. 鶴田池東遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第52集 1991
- 堺市教育委員会「3. 鳳遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第19冊 1991
- 堺市教育委員会「4. 鳳東町遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第19冊 1991
- 堺市教育委員会「1. 鳳南町遺跡発掘調査概要報告—東急車輛製造株式会社大阪工場内—」『堺市文化財調査概要報告』第29冊 1992
- 堺市教育委員会「2. 鶴田池東遺跡発掘調査概要報告—堺市菱木1034所在（YPE-3）—」『堺市

- 文化財調査概要報告」第36冊 1993
- 堺市教育委員会「鳳東町遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第43冊 1994
- 堺市教育委員会「2. 草部遺跡発掘調査報告-KSB-2地点 草部341番地」『堺市文化財調査報告』第69集 1998
- (財)大阪文化財センター「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-西浦橋遺跡-」1984
- (財)大阪文化財センター「池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII -92-1・2・3・4・5調査区の概要-」1993
- (財)大阪文化財センター「日置荘遺跡-近畿自動車道松原ささみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-」1995
- (財)大阪府文化財調査研究センター「下田遺跡-都市計画西道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書-」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第18集) 1996
- (財)大阪府文化財調査研究センター「向出遺跡 一般国道26号(第2阪和国道)の建設に伴う発掘調査報告書」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第55集) 2000
- (財)大阪府文化財センター「2005年度 (財)大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会 須恵器生産の成立と展開」2006
- (財)大阪府埋蔵文化財協会「主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う仏並遺跡発掘調査報告書」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第5輯) 1986
- (財)大阪府埋蔵文化財協会「主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第24輯) 1988
- 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会「一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う 穴太遺跡発掘調査報告書2」1997
- 城陽市教育委員会「森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第6集』1977
- 城陽市教育委員会「城陽市埋蔵文化財調査報告書 森山遺跡発掘調査報告書」(城陽市埋蔵文化財調査報告書 第32集) 1997
- 帝塚山大学考古学研究室「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」(帝塚山大学考古学研究報告1) 1965
- 難波宮址顕彰会「森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書」1978
- 兵庫県教育委員会「佃遺跡 本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ」(兵庫県文化財調査報告 第176冊) 1998

実測遺物観察表

縄文土器観察表

縄文石器観察表

No.	図版 No.	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
1		86	3区	63	0 0 1 A溝	第14図B 15~19層	土器	弥生前~中期	甕	(頂部)3.6 (高)現3.6	顶部窪む
2		85	3区	63	0 0 1 A溝	第14図B15 ~19層	土器	弥生中期	甕	(底)6.0 (高)現5.9	底面平坦
3		180	3区	65	0 0 1 A溝	灰色砂	土器	弥生中期	甕	(底)5.4 (高)現2.5	平底
4		91	3区	63	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	土器	V様式系	甕	(底)4.0 (高)現3.0	底部平坦
5		2	3区	65	0 0 1 A溝	灰色粘土黒 灰色粘土	須恵器	—	壺	(高)現18.0	尖底気味
6	24	243	3区	65	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	土器	7世紀中葉	椀	(口)10.0 (高)3.5	底部丸味あり
7	24	212	2区	120	0 0 1 A溝	第14図H6 層	土器	6世紀	杯	(口)11.8 (高)現3.7	器壁薄い
8	23	242	3区	65	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	土器	7世紀中葉	甕	(口)17.0 (高)現17.2	口縁部曲く乏しい・肩部直立
9	23	249	2区	96	0 0 1 A溝	最上層	土器	7世紀	甕	(口)23.5 (高)現12.0	胴部球形
10	23	246	3区	65	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	土器	7世紀	甕	(口)13.3 (高)現7.3	口縁部開き乏しい
11	23	244	2区	104	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	土器	8世紀後半	甕	(口)26.8 (高)現7.7	胴部張りなし
12	23	248	2区	101	0 0 1 A溝	一括	土器	8世紀後半	甕	(口)14.6 (高)現8.9	胴部張りなし
13	24	78	3区	66	0 0 1 A溝	一括	土器	8世紀後葉	甕	(口)20.4 (高)現4.4	口縁部端直立気味
14	23	194	2区	109	0 0 1 A溝	灰色砂シル ト	土器	9~10世紀	甕	(口)23.0 (高)現6.3	頸部く字状に屈曲
15	17	208	3区	65	0 0 1 A溝	一括	須恵器	TK23	杯身	(口)12.8 (高)5.2	口縁部端内面削げ る
16	15	76	3区	65	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	須恵器	TK47	杯蓋	(口)14.0 (高)4.8	器高ある
17	15	179	3区	65	0 0 1 A溝	灰色砂	須恵器	MT15	杯蓋	(口)12.2 (高)4.8	口縁部直立
18	15	173	3区	65	0 0 1 A溝	一括	須恵器	MT15	杯蓋	(口)15.2 (高)現1.2	口縁部直立
19	15	169	3区	65	0 0 1 A溝	一括	須恵器	MT15	杯蓋	(口)10.5 (高)3.3	天井部いびつ
20		259	2区	107	0 0 1 A溝	褐色色砂シ ルト	須恵器	TK10	杯蓋	(口)14.8 (高)2.3	口縁部短く外反
21	16	77	3区	65	0 0 1 A溝	褐色色粘土	須恵器	TK10	蓋	(口)9.0 (高)4.1	器高ある
22	17	209	2区	109	0 0 1 A溝	茶褐色砂質 土	須恵器	MT85	杯身	(口)12.8 (高)5.1	底部尖り気味・口 縁部長さ留める
23	17	92	3区	63	0 0 1 A溝	黒灰色粘土	須恵器	TK10	杯身	(受)12.6 (高)現3.7	受部短い
24	16	168	3区	65	0 0 1 A溝	黒褐色粘土	須恵器	TK217	蓋	(口)8.5 (高)3.4	宝珠形つまみ
25	16	82	3区		0 0 1 A溝	第14図L4 ~6層	須恵器	TK217	蓋	(口)8.2 (高)2.9	宝珠形つまみ
26	16	167	1区		0 0 1 A溝	黒褐色粘土	須恵器	TK217	蓋	(口)11.8 (高)現3.6	口縁部返り大きい
27		58	2区	102	0 0 1 A溝	褐色色砂シ ルト	須恵器	TK217	蓋	(口)15.4 (高)現1.9	立上り低い
28	21	186	3区	65	0 0 1 A溝	灰色粘シル ト	須恵器	TK217	杯	(高台)8.5 (高)現3.9	高台断面方形
29	16	84	3区		0 0 1 A溝	第14図L4 ~6層	須恵器	TK46	蓋	(口)7.6 (高)2.9	宝珠形つまみ
30	18	94	3区	60	0 0 1 A溝	灰色シルト	須恵器	7世紀後半~ 8世紀前半	杯	(高台)8.0 (高)現3.2	高台部断面長方形
31	21	223	2区	103	0 0 1 A溝	最上層	須恵器	7世紀後半~ 8世紀	瓶	(高台)8.1 (高)現8.1	高台部強調し強い
32		83	3区		0 0 1 A溝	第14図L4 ~6層	須恵器	MT21	杯	(口)10.4 (高)現2.6	口縁部内湾気味
33	18	93	3区	60	0 0 1 A溝	灰色シルト	須恵器	MT21	杯	(口)12.4 (高)現3.3	口縁部外反
34		211	2区	100	0 0 1 A溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀	長頭 瓶	(高台)6.0 (高)現5.0	胴部下平丸味あり

実測遺物観察表 1

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No.	残存 率	備考
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ヘラナデ		やや不良	10YR6/2	10YR6/1	86	B	
【胴部】(外) ヘラナデ・ヘラケズリ (内) ユビナデ		良好	10YR7/3	10YR4/1	85	B	
【胴部】(外) エビオサエ (内) —		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	180	A	
【底部】(外) タタキ (内) —		良好	2.5Y4/1	10YR4/1	91	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) ユビナデ・ユビオサエ		良好	N5/0	N4/0	2	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ミガキ (内) ミガキ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	243	C	
【口縁部】(外) — (内) — 【胴部】(外) — (内) —		やや不良	5YR6/6	5YR6/6	212	B	
【口縁部】(外) ヘラナデ (内) ハケ 【胴部】(外) ハケ (内) エビオサエ・ヘラナデ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	242	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ハケ (内) ヘラナデ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	249	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ハケ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	246	A	
【口縁部】(外) — (内) — 【胴部】(外) — (内) —		良好	2.5Y7/3	10YR6/6	244	B	
【口縁部】(外) ハケ (内) ハケ 【胴部】(外) ハケ (内) ヘラケズリ・ユビナデ		良好	2.5Y4/2	7.5YR6/4	248	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) — (内) ヘラナデ		やや不良	5YR5/3	5YR5/2	78	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ハケ 【胴部】(外) ハケ (内) ユビナデ・ユビオサエ		良好	10YR5/2	10YR6/2	194	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	208	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	76	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N5/0	179	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N5/0	173	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ・ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB5/1	5PB5/1	169	D	ヘラ記号
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5Y7/1	5Y8/1	259	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	77	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	209	D	
【胴部】(外) 回転ユビナデ・回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N5/0	N4/0	92	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB7/1	5Y6/1	168	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	82	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB6/1	N6/0	167	C	ヘラ記号
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	58	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	5Y6/1	186	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	84	D	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	94	B	
【胴部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	223	A	
【口縁部】(外) — (内) — 【胴部】(外) — (内) —		良好	10YR7/2	2.5Y7/2	83	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	93	B	
【胴部】(外) ユビナデ・ヘラケズリ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	211	B	

No.	図版 No.	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
35	16	107	3区	62	001 A溝	茶灰色砂シ ルト層	須恵器	MT21	蓋	(高) 現17	宝珠形つまみ
36		170	3区	65	001 A溝	一括	須恵器	8世紀前半	蓋	(高) 現20	宝珠形つまみ
37		175	3区	66	001 A溝	灰色粘土	須恵器	8世紀	蓋	(口) 14.6 (高) 現1.2	口縁部直立
38		59	2区	102	001 A溝	褐灰色砂シ ルト	須恵器	8世紀後葉	蓋	(口) 17.0 (高) 現1.8	立上り低い
39	19	106	3区	62	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	須恵器	8世紀	鉢	(口) 23.6 (高) 現6.9	口縁部直立
40		264	2区	98	001 A溝	褐灰色砂シ ルト	須恵器	8世紀中葉	鉢	(口) 24.0 (高) 現6.4	口縁部直立・丸く 肥厚
41	22	185	3区	65	001 A溝	灰色粘シル ト	須恵器	8世紀前半	甕	(口) 26.0 (高) 現3.8	口縁部有段
42		176	3区	66	001 A溝	灰色粘土	須恵器	8世紀後半	甕	(口) 29.7 (高) 現5.0	口縁部直立
43		197	3区	60	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 11.0 (高) 現1.5	高台断面方形
44		196	2区	109	001 A溝	褐灰色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 8.4 (高) 現1.8	高台断面方形
45	18	102	3区	66	001 A溝	灰色粘土	須恵器	9世紀前半	杯	(口) 12.4 (高) 現4.4	口縁部一胴部直線 的
46	19	106	3区	62	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	須恵器	9世紀前半	杯	(蓋) 10.0 (高) 現3.3	底部僅か上げ底
47		104	3区	62	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	須恵器	12世紀	碗	(口) 19.4 (高) 現4.2	口縁部外反
48	26	198	3区	60	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	黒色土 器	10世紀	碗	(口) 15.4 (高) 現4.6	口縁部端内削り ける
49	26	199	3区	60	001 A溝	茶灰色砂シ ルト	黒色土 器	10世紀	碗	(高台) 6.2 (高) 現1.2	高台断面三角形
50	26	138	3区	63	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(口) 13.6 (高) 5.1	口縁部一胴部僅か に内湾
51	27	134	3区	63	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(口) 13.6 (高) 現2.8	口縁部一胴部直線 的
52		131	3区	66	001 A溝	第14回M1 層	瓦器	13世紀	碗	(口) 13.6 (高) 現1.9	口縁部僅かに外反
53	27	135	3区	63	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.2 (高) 現2.1	高台断面方形
54	26	132	3区	66	001 A溝	第14回M1 層	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.0 (高) 現1.7	高台断面長方形
55	27	101	3区	66	001 A溝	灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.2 (高) 現1.4	高台断面長方形
56	27	136	3区	63	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 5.0 (高) 現1.8	高台断面三角形
57	27	137	3区	63	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 5.2 (高) 現1.7	高台断面方形
58		190	3区	60	001 A溝	黄灰色粘土	瓦器	13世紀	碗	(高台) 3.8 (高) 現1.1	高台断面三角形
59		267	3区	65	001 A溝	黄灰色粘質 土	瓦器	13世紀	碗	(高台) 5.1 (高) 現1.2	口縁部断面三角 形
60	27	103	3区	66	001 A溝	灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.0 (高) 現2.2	高台部低い
61		189	3区	60	001 A溝	黄灰色粘土	白磁	14～15世紀	碗	(高台) 6.4 (高) 現2.8	高台部方形・直立
62		271	2区	108	001 B溝	褐灰色砂シ ルト	土製品	奈良時代?	土馬	(高) 現4.9	
63		110	1区		001 B溝	第14回B20 層	土器	弥生中期	甌	(底) 4.8 (高) 現3.2	上底
64	24	65	1区		001 B溝	灰色砂	土器	5世紀中葉	甕	(口) 17.0 (高) 現3.0	口縁部内湾気味
65	24	196	3区	60	001 B溝	第14回M10 ～15層	土器	7世紀後半	碗	(口) 20.0 (高) 現4.0	口縁部一胴部直線 的
66	24	64	1区		001 B溝	灰色砂	土器	8世紀後葉	甕	(口) 15.6 (高) 現4.9	口縁部輪肥厚
67	27	201	3区	58	001 B溝	黄灰色粘土	土器	13世紀	碗	(高台) 4.8 (高) 現2.3	口縁部断面三角 形
68		251	1区		001 B溝	木樋下	土器	庄内	甕	(高) 現13.3	球圓形

天淵遺物観察表 2

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【須部】(外) 回転ヘラケズリ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	107	A	
【天井部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	170	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	175	A	
【天井部】(外) 回転ヘラケズリ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	59	A	
【天井部】(外) 回転ヘラケズリ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N6/0	105	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	5Y8/1	5Y8/1	264	A	
【胴部】(外) 回転ヘラケズリ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N5/0	185	A	
【胴部】(外) ヘラナデ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N6/0	176	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	197	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	196	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	102	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ							
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N6/0	106	A	
【底弁】(外) 回転糸切(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	104	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ(内) 回転ユビナデ							
【口縁部】(外) ユビナデ・ミガキ(内) ヨコナデ		良好	N2/0	N2/0	198	A	B類
【胴部】(外) ユビナデ・ミガキ(内) ユビナデ・ミガキ							
【胴部】(外) (内) ミガキ?		不良	N8/0	10YR7/2	199	A	A類
【口縁部】(外) ユビナデ(内) —		良好	N4/0	N5/0	138	B	
【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ(内) —							
【口縁部】(外) ユビナデ(内) ミガキ		良好	N7/0	N8/0	134	B	
【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ(内) ミガキ							
【口縁部】(外) ユビナデ(内) ユビナデ		良好	N8/0	N5/0	131	A	
【胴部】(外) ユビナデ(内) ユビナデ		良好	N8/0	N8/0	135	A	
【胴部】(外) ユビナデ(内) —		良好	N7/0	N5/0	132	B	
【胴部】(外) ユビナデ(内) ミガキ		良好	N7/0	N6/0	101	A	
【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ(内) ミガキ		良好	N4/0	N4/0	136	A	
【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ(内) ミガキ		良好	N8/0	N8/0	137	A	
【胴部】(外) (内) —		良好	5Y7/1	5Y7/1	190	A	
【胴部】(外) ユビナデ(内) —		良好	N8/0	N5/0	267	A	
【胴部】(外) ユビオサエ(内) ミガキ		良好	2.5Y6/1	2.5Y8/1	103	B	
【胴部】(外) 施釉(内) 施釉		良好	(釉)	5Y8/1	189	A	
【器由】(外) ヘラケズリ		良好	2.5GY6/1		271	A	
【胴部】(外) (内) —		不良	10YR4/3	2.5YR4/4	110	A	
【口縁部】(外) (内) —		良好	2.5Y7/1	10YR4/1	65	A	
【口縁部】(外) ユビナデ(内) ユビナデ		良好	2.5Y8/2	10YR7/2	195	A	
【胴部】(外) (内) ミガキ							
【口縁部】(外) (内) —		やや不良	10YR7/3	5YR7/4	64	A	
【胴部】(外) ハケ(内) ヘラケズリ							
【胴部】(外) (内) —		不良	2.5Y8/1	2.5Y7/4	201	A	
【胴部】(外) タタキ・ハケ(内) ヘラケズリ		良好	2.5Y7/2	2.5Y7/2	251	A	

No.	国版 No.	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
69	17	160	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	TK73	杯身	(口)10.5 (高)4.6	受部短い
70	19	164	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	TK23	壺	(口)15.6 (高)現5.1	口縁部直線的
71	20	115	1区		001・ B溝	第14図B20 層	須恵器	5世紀中葉	把手 付鉢	(底)10.4 (高)現6.6	口縁部-胴部直線的
72	22	165	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	TK10	鉢	(口)16.7 (高)現5.1	口縁部端肥厚
73		161	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	MT85	杯蓋	(口)12.5 (高)現3.7	口縁部外反
74	20	163	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	MT85～ TK209	高杯	(口)12.5 (高)現7.5	杯底部平坦的
75		162	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	6世紀後半	高杯	(口)14.0 (高)現3.7	口縁部直立気味
76		63	1区		001・ B溝	灰色砂	須恵器	TK217	蓋	(口)7.2 (高)現2.0	口縁部内面返り
77	20	7	1区		001・ B溝	1層	須恵器	6世紀後半～ 7世紀後半	高杯	(幅)7.4 (高)現4.3	脚部込め
78	24	1	3区	58	001・ B溝	第14図M1 層	須恵器	TK48	長頸 壺	(高)現23.3	胴部扁平
79	22	3	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	TK217	甕	(口)50.2 (高)現22.8	大型品
80		159	3区	60	001・ B溝	第14図M2 ～6層	須恵器	7世紀後半～ 8世紀前半	甕	(口)35.6 (高)現4.7	口縁部端平坦
81	22	166	1区		001・ B溝	黒褐色粘土	須恵器	8世紀前半	甕	(口)31.4 (高)現13.0	口縁部外反
82	19	98	3区	62	001・ B溝	灰色シルト	須恵器	8世紀	鉢	(口)21.8 (高)現3.9	口縁部肥厚
83		60	1区		001・ B溝	茶褐色シル ト	須恵器	8世紀後半	杯	(口)13.7 (高)現3.6	口縁部やや外反
84		158	3区	60	001・ B溝	第14図M2 ～6層	須恵器	8世紀後半	壺	(口)20.6 (高)現2.0	口縁部端直立
85	18	113	1区		001・ B溝	南バルト・ I層	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(口)13.2 (高)現3.2	口縁部-胴部直線
86	21	97	3区	62	001・ B溝	灰色シルト	須恵器	8世紀後半	盤	(高台)19.4 (高)現2.6	高台断面方形
87	18	111	1区		001・ B溝	第14図B20 層	須恵器	8世紀前半	杯	(高台)8.8 (高)現3.0	高台断面方形
88	21	114	1区		001・ B溝	第14図B20 層	須恵器	9世紀前半	杯	(高台)10.6 (高)現2.3	高台断面長方形
89	26	112	1区		001・ B溝	第14図B20 層	黒色土 器	10世紀	碗	(高台)6.6 (高)現1.2	高台部細長方形
90	27	200	3区	58	001・ B溝	黄灰色粘土	瓦器	13世紀	碗	(高台)4.8 (高)現1.5	口縁部断面三角形
91		262	3区	58	001・ B溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(口)14.9 (高)現3.4	口縁部-胴部直線的
92		11	1区	24	001・ C溝	灰色粘土	土器	7世紀後半	甕	(口)14.4 (高)現3.7	口縁部短い
93		258	1区		001・ C溝	黄灰色粘土	須恵器	8世紀後半	杯	(口)14.0 (高)3.0	口縁部-胴部上半 直線的
94	26	12	1区	24	001・ C溝	灰色粘土	黒色土 器	10世紀後半～ 11世紀前半	碗	(高台)6.4 (高)現1.4	高台部断面長方形
95		213	2区	23	001溝	黒灰色粘土	土器	弥生	壺	(底)2.3 (高)現5.7	平底
96	23	215	2区	23	001溝	黒灰色粘土	土器	布留式	甕	(口)24.4 (高)現6.0	口縁部端肥厚作か
97		96	1区	35	001溝	黒灰色粘土	土器	古墳後期	高杯	(幅)11.0 (高)現9.6	脚部柱状
98		245	1区		001溝	茶褐色砂質 土	土器	8世紀前半	碗	(口)14.1 (高)7.7	丸底、器壁薄い
99	24	50	1区		001溝	茶褐色シル ト	土器	8世紀後葉	甕	(口)14.7 (高)現7.3	口縁部端直立
100		214	2区	23	001溝	黒灰色粘土	土器	古墳後期	高杯	(脚)11.2 (高)現7.3	脚部部間く
101	24	130	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	土器	8世紀後半	甕	(口)31.0 (高)現3.1	口縁部端直立
102	23	51	1区		001溝	茶褐色シル ト	土器	8世紀後葉	甕	(口)25.1 (高)現6.8	口縁部端直立

実測遺物観察表 3

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ・ヘラナデ (内) 回転ユビナデ・ユビオサエ		良好	N6/0	N5/0	160	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	波状文	良好	N5/0	N5/0	164	A	ヘラ記号
【胴部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	115	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 平行タタキ・ヘラナデ (内) 当具痕 (同心円文)		良好	5Y5/1	5Y6/1	165	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	161	B	ヘラ記号
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) ユビナデ	3方透孔	良好	N6/0	N5/0	163	A	
【杯部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	2.5Y5/2	5Y5/1	162	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5Y7/1	5Y7/1	63	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N6/0	7	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	頸部2沈線	良好	N6/0	N6/0	1	C	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) イタナデ 【胴部】(外) 格子タタキ (内) 当具痕 (同心円文)	口縁部6条沈線	良好	N6/0	N4/0	3	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N8/0	N8/0	159	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ・ヘラナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB6/1	5PB6/1	166	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	98	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	60	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	158	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	113	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	97	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	111	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	114	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	10YR3/1	10YR7/2	112	A	A類
【胴部】(外) (内) —		不良	2.5Y7/1	2.5Y7/2	200	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ (内) ミガキ		良好	N6/0	N8/0	262	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) (内) 回転ユビナデ		良好	10YR6/2	5YR6/4	11	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	258	A	
【胴部】(外) (内) — 【高台部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/2	N5/0	12	B	B類
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/3	2.5Y7/3	213	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ハケ (内) ユビナデ・ユビオサエ		良好	2.5Y7/3	2.5Y7/3	215	A	
【胴部】(外) ヘラケズリ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/2	10YR6/1	96	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) — 【胴部】(外) ハケ (内) —		良好	7.5YR7/4	7.5YR7/4	245	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ハケ 【胴部】(外) ハケ (内) ヘラケズリ		やや不良	10YR5/2	10YR5/2	50	B	
【胴部】(外) ヘラケズリ・ユビナデ (内) ユビナデ・ヘラナデ		良好	7.5YR8/2	7.5YR8/2	214	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) —		良好	7.5YR6/2	5YR4/3	130	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ハケメ (内) ハケメ・ヘラケズリ		やや不良	7.5Y5/4	10YR7/3	51	A	

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
103		62	1区		001溝	茶褐色シル ト	土器	8世紀後半	碗	(口)183 (高)現36	口縁部内面窪む
104		232	1区		001溝	茶褐色砂質 土	土器	9世紀前半	皿	(口)149 (高)現20	立上り短い
105	19	220	2区	23	001溝	黒灰色粘土	須恵器	6世紀	器台	(口)34.0 (高)現11.0	口縁部僅かに外反
106	16	5	1区		001溝	黒灰色粘土	須恵器	6世紀	蓋	(口)9.0 (高)現3.4	小型品
107	15	27	1区		001溝	第14回A11 ~19層	須恵器	MT85	杯蓋	(口)12.6 (高)現2.9	口縁部直立
108		218	2区	23	001溝	黒灰色粘土	須恵器	TK209	杯身	(口)10.4 (高)現2.1	口縁部立上りが低い
109	17	217	2区	23	001溝	黒灰色粘土	須恵器	TK209	杯身	(口)9.4 (高)3.0	口縁部立上りが低い
110	20	6	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	6世紀後半~ 7世紀後半	高杯 ?	(口)7.4 (高)現4.0	脚部低い
111	20	240	1区	34	001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	6世紀	器台 ?	(脚)17.1 (高)現8.8	直線的に立上る
112	15	26	1区		001溝	第14回A11 ~19層	須恵器	TK209	杯蓋	(口)13.2 (高)現2.6	口縁部外反気味
113	15	25	1区		001溝	第14回A11 ~19層	須恵器	TK217	杯蓋	(口)13.5 (高)4.0	口縁部直立
114	15	35	1区	31	001溝	黒灰色粘土	須恵器	TK217	杯蓋	(口)13.4 (高)2.8	扁平
115	16	238	1区	34	001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	TK217	蓋	(口)9.4 (高)2.4	宝珠形つまみ
116		145	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK46	蓋	(高)現1.8	宝珠形つまみ
117	16	89	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK46	蓋	(口)7.7 (高)現1.5	器高低め
118		127	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK217~ TK46	蓋	(口)8.6 (高)現1.3	口縁部返り大きい
119	16	144	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK46~ TK48	蓋	(口)9.6 (高)現1.8	口縁部返り大きい
120	16	141	1区	34	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	MT21	蓋	(高)現2.5	宝珠形つまみ
121	17	239	1区	34	001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	TK217	杯身	(口)8.7 (高)3.2	底部尖り気味
122		268	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	7世紀前半	碗	(口)12.0 (高)現2.6	口縁部直立気味
123	17	87	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK48	杯	(口)11.0 (高)3.9	口縁部~胴部直線的、高台部長方形
124	21	236	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	7世紀後半~ 8世紀	瓶	(高台)8.0 (高)現3.3	高台部断面方形
125	20	79	1区		001溝	黒灰色粘土	須恵器	TK217	高杯	(口)10.2 (高)現4.9	脚部低い
126	22	146	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	TK217	蓋	(口)25.0 (高)現7.0	口縁部端平坦
127		219	2区	23	001溝	黒灰色粘土	須恵器	7世紀後半~ 8世紀	蓋	(口)16.2 (高)現2.3	口縁部端丸く肥厚
128	16	139	1区	34	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀中葉	蓋	(口)12.2 (高)現1.7	器壁厚い
129		142	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	蓋	(口)12.0 (高)現1.6	口縁部端内傾
130		187	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀~ 9世紀前半	蓋	(口)14.5 (高)現1.1	口縁部端直立
131		172	2区	97	001溝	オリープ色 シルト	須恵器	8世紀後半	蓋	(口)18.8 (高)現1.7	器高低め
132	20	231	2区	94	001溝	黒色シルト	須恵器	7世紀後半~ 8世紀	碗	(上辺)19.8 (高)現6.2	脚部内面汚気味
133	19	216	2区	23	001溝	黒灰色粘土	須恵器	6世紀後半	平飯	(高)現7.9	胴部やや高め
134		10	1区	32	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀中葉	杯	(口)15.0 (高)現2.5	口縁部内面汚気味
135	18	61	1区		001溝	茶褐色シル ト	須恵器	8世紀中葉	杯身	(口)10.2 (高)7.0	口縁部外反
136	18	149	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	杯	(口)15.6 (高)現3.2	口縁部~胴部上半直線的

実測遺物観察表 4

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ	やや不良	7.5YR7/4	7.5YR7/4	62	A		
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ	やや不良	2.5Y5/1	2.5Y5/1	232	A		
【口縁部】(外) ユビナデ・平行タタキ (内) 当具覆 (同心円文)	良好	N6/0	N6/0	220	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N5/0	N5/0	5	D		天井部に ヘラ記号
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	5PB6/1	5PB5/1	27	B		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	218	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	217	D		
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	6	B		
【胴部】(外) タタキ・ユビナデ (内) ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	240	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) —(内)—	良好	N5/0	N5/0	26	B		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	5Y7/1	N7/0	25	C		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N5/0	N5/0	35	B		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N5/0	N6/0	238	D		
【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N4/0	N4/0	145	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	89	B		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	7.5YR6/4	7.5YR7/4	127	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N5/0	N6/0	144	B		
【胴部】(外) 回転ヘラケズリ・回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	141	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N8/0	N7/0	239	C		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ	良好	N8/0	N7/0	268	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ	良好	N6/0	N5/0	87	C		
【胴部】(外) ヘラケズリ? (内) ユビナデ	良好	N7/0	N6/0	236	A		
【杯部】(外) 回転ユビナデ・ヘラナデ (内) 回転ユビナデ 【脚部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	79	B		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 格子タタキ (内) ユビナデ	良好	N5/0	N5/0	146	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	219	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	139	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ・ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	142	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N7/0	N6/0	187	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ユビナデ (内) ユビナデ	良好	N7/0	N7/0	172	A		
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	長方形透孔	良好	N6/0	N5/0	231	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	216	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N5/0	N5/0	10	A		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	5Y7/1	5Y7/1	61	C		
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	良好	N6/0	N6/0	149	B		

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
137		171	2区	97	001溝	オリーブ色 シルト	須恵器	8世紀後半	杯	(口) 9.0 (高) 現2.4	口縁部外反
138		269	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀後半	杯	(高) 現2.7	口縁部外反
139		90	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀中葉	杯	(口) 10.6 (高) 現2.0	口縁部～胴部内湾
140	18	122	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	杯	(口) 12.4 (高) 4.1	口縁部～胴部外反
141	18	143	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	杯	(口) 20.0 (高) 現4.0	口縁部端外反
142		128	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	杯	(底) 10.6 (高) 現5.0	平底
143	20	174	1区		001溝	第14回B 5・6層	須恵器	8世紀～9世 紀前半	瓶	(底) 11.0 (高) 現7.5	底部やや丸味あり
144		8	1区	32	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀中葉	杯	(高台) 7.0 (高) 現1.9	高台部低い
145		266	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀前葉	杯	(高台) 7.0 (高) 現2.7	高台部断面方形
146		235	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀	杯	(高台) 9.8 (高) 現1.6	高台部端丸味あり
147	21	140	1区	34	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 7.2 (高) 現1.8	高台断面方形
148	18	125	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 8.0 (高) 現2.3	高台断面方形
149	21	182	1区	37	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 9.4 (高) 現2.3	高台断面方形
150	21	124	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 12.4 (高) 現3.0	高台断面長方形
151		188	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 14.0 (高) 現2.7	底部広い
152	21	109	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀～ 9世紀前半	杯	(高台) 9.4 (高) 現3.0	高台部断面方形
153	21	148	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 9.2 (高) 現3.3	高台断面方形
154	21	108	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀	杯	(高台) 9.0 (高) 現3.6	高台部断面方形
155	22	88	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀	甕	(口) 28.6 (高) 現6.2	口縁部端平坦
156	22	129	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀	甕	(口) 26.2 (高) 現6.7	口縁部端平坦
157	22	34	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	8世紀後半	甕	(口) 33.0 (高) 現5.0	口縁部大きく外反
158	18	123	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	9世紀前半	杯	(口) 12.4 (高) 現3.0	口縁部～胴部直線的 的
159	21	126	1区		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	9世紀前半	杯	(高台) 11.2 (高) 現1.8	高台断面方形
160	9	1区	32		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	9世紀	鉢	(高台) 13.0 (高) 現3.4	高台部高い
161	4	1区	37		001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	9世紀	鉢	(口) 18.2 (高) 現9.2	口縁部内湾気味
162	22	181	1区	37	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	9世紀前半	甕	(口) 38.4 (高) 現1.9	折返し口縁部
163	20	147	1区	35	001溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	—	瓶	(口) 34.0 (高) 現8.5	口縁部端平坦
164		49	1区		001溝	茶褐色シル ト	須恵器	—	壺	(口) 25.5 (高) 6.6	頂部穿孔
165		55	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	—	飯椀 壺	(高) 現6.6	鈕部方形
166	28	237	1区		001溝	茶褐色砂質 土	須恵器	—	飯椀 壺	(高) 現7.0	鈎鐘形
167	27	154	3区	58	001溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	皿	(口) 8.4 (高) 現2.0	口縁部外反
168		155	3区	62	001溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	皿	(口) 7.8 (高) 現2.1	口縁部～胴部僅かに内湾
169	27	116	3区	65	001溝	黄灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 5.2 (高) 現1.4	高台断面長方形
170	27	233	1区		001溝	茶褐色砂質 土	瓦器	13世紀前半	碗	(口) 12.8 (高) 現2.5	口縁部内湾気味

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率 B	備考
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	171	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	269	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) ー		良好	N7/0	N6/0	90	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	122	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ・ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N6/0	143	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	128	B	
【胴部】(外) ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	174	A	
【高台部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	8	B	
【胴部】(外) ユビナデ・ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	N6/0	266	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	235	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	140	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	125	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	182	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N7/0	124	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	188	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	109	A	
【胴部】(外) ヘラナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	148	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	108	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	88	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	129	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5Y7/1	5Y7/1	34	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	123	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	126	A	
【高台部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB6/1	5PB6/1	9	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	7.5Y7/1	4	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB5/1	5PB5/1	181	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N7/0	147	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ヘラケズリ		良好	N5/0	N5/0	49	B	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	55	B	
【胴部】(外) タタキ・ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	237	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	N4/0	N6/0	154	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ (内) ミガキ		良好	N3/0	N4/0	155	B	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	N3/0	N3/0	116	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ (内) ミガキ		良好	N5/0	N5/0	233	A	

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
171		68	1区	22	001溝	緑灰色粘土	瓦質土器	15世紀	羽釜	(口) 25.0 (高) 現6.1	口縁部直線的内傾
172		69	1区	22	001溝	緑灰色粘土	瓦質土器	15世紀	火舎	(口) 35.0 (高) 現3.1	口縁部内傾
173		227	2区	94	平安整地	灰色シルト	土器	8世紀後半	皿	(口) 9.0 (高) 現1.7	胴部内湾
174	25	95	2区	108	平安整地	灰色シルト	土器	平安?	碗	(高台) 5.2 (高) 現1.4	高台部断面三角形
175		157	2区	96	平安整地	灰色シルト	須恵器	8世紀	杯	(口) 14.8 (高) 現3.3	口縁部一胴部僅かに内湾
176		226	2区	95	平安整地	灰色シルト	須恵器	T K 48	杯	(口) 12.5 (高) 現3.9	口縁部一胴部直線的
177	25	210	2区	72	平安整地	にぶい黄褐色粘土	須恵器	8世紀	瓶	(底) 7.2 (高) 現4.5	高台退化気味
178	26	234	1区		平安整地	灰色シルト	黒色土器	10世紀	碗	(高台) 6.2 (高) 現1.2	高台部断面三角形
179	26	202	2区	73	平安整地	にぶい黄褐色粘土	黒色土器	11世紀	碗	(高台) 7.5 (高) 現0.9	口縁部断面三角形
180		183	2区	106	平安整地	灰色シルト	瓦器	12世紀	皿	(口) 9.0 (高) 現2.0	口縁部やや外反
181		263	2区		平安整地	灰色シルト	瓦器	12世紀	碗	(口) 14.0 (高) 現2.7	口縁部外反気味
182	28	229	2区	107	平安整地	灰色シルト	土器	—	飯蛸查	(高) 現4.4	釣鐘形
183	28	203	2区	73	平安整地	にぶい黄褐色粘土	須恵器	—	飯蛸查	(高) 現4.9	釣鐘形
184	27	23	1区	24	平安耕作	灰色粘シルト	瓦器	13世紀	皿	(口) 9.8 (高) 現1.7	口縁部内湾気味
185	27	22	1区	24	平安耕作	灰色粘シルト	瓦器	13世紀	皿	(口) 9.8 (高) 現1.9	口縁部直線的
186		118	1区	1	畦		瓦器	12世紀	碗	(高台) 4.8 (高) 現1.1	高台断面方形
187		21	1区	24	平安耕作	灰色粘シルト	土器	8世紀後半	亮	(口) 21.0 (高) 現4.4	口縁部端直立・端部平直
188		71	1区	1	平安耕作	灰色砂シルト	須恵質土器	13世紀	片口 槽鉢	(口) 26.2 (高) 現8.8	口縁部肥厚
189		52	1区	22	平安耕作	灰色砂シルト	瓦質土器	15世紀	槽鉢	(口) 28.0 (高) 現4.8	口縁部端直立
190		228	2区	86	中世整地	緑灰色粘土	土器	8世紀後半	皿	(口) 9.6 (高) 現2.0	胴部内湾
191	27	24	1区	4	中世整地	緑灰色粘土	瓦器	13世紀	碗	(口) 13.4 (高) 現2.2	口縁部直線的
192	25	247	3区	59	中世耕作	黄褐色粘土	土器	6世紀	亮	(口) 19.5 (高) 現15.5	胴部球形
193		177	2区		中世耕作	黄褐色粘土	須恵器	T K 10	小壺	(口) 5.0 (高) 現4.0	胴部鉢蓋玉形
194	26	117	3区	59	中世耕作	黄褐色粘土	黒色土器	11世紀	碗	(高台) 5.6 (高) 現0.9	高台断面三角形
195	27	119	2区	95	中世耕作	黄褐色粘土	瓦器	13世紀	碗	(口) 13.0 (高) 現3.1	口縁部一胴部僅かに内湾
196	27	133	2区	93	中世耕作	黄褐色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 5.2 (高) 現1.5	高台断面方形
197		156	2区	85	中世耕作	黄褐色粘土	瓦質土器	15世紀	亮	(口) 20.0 (高) 現3.9	口縁部直線的
198		99	2区	86	中世耕作	黄褐色粘土	陶器	中世	碗	(高台) 2.9 (高) 現1.3	高台部断面方形
199		47	1区	37	包含層	褐灰色粘土	土器	8世紀後半	皿	(口) 7.7 (高) 現1.3	立上り型
200		72	1区	36	包含層	褐灰色粘土	土器	8世紀後半	皿	(口) 9.4 (高) 現1.4	口縁部一胴部直線的
201		224	2区	73	包含層	黄褐色粘土	土器	8世紀後半	亮	(口) 15.4 (高) 現3.3	口縁部立ち気味
202		257	1区	22	包含層	褐灰色粘土	土器	13世紀	皿	(口) 8.4 (高) 1.5	口縁部短く外反
203		225	2区	73	包含層	黄褐色粘土	土器	8世紀後半	皿	(口) 24.8 (高) 現5.9	口縁部立ち気味
204	25	221	2区	96	包含層	褐灰色粘土	土器	8世紀中葉	盤	(口) 37.8 (高) 3.3	口縁部外反・端部肥厚、高台低い

実測遺物観察表6

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 寸法	残存 率	備考
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) — 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) —		やや不良	5Y5/1	5Y5/1	68	A	
【口縁部】(外) —(内) —		良好	5Y5/1	5Y5/1	69	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ・ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	10YR6/4	10YR6/4	227	A	
【胴部】(外) —(内) —【高台部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	10YR6/4	7.5YR7/2	95	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	157	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	226	A	
【胴部】(外) ヘラナズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5Y8/1	5Y8/1	210	A	
【胴部】(外) —(内) —		良好	2.5Y2/1	10YR8/2	234	A	A類
【胴部】(外) —(内) ミガキ?		やや不良	N3/0	2.5Y8/2	202	A	B類
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	N5/0	5Y7/1	183	B	
【口縁部】(外) —(内) — 【胴部】(外) —(内) —		良好	5Y8/1	5Y8/1	263	A	
【胴部】(外) ヘラナデ? (内) ユビナデ		良好	2.5Y8/1	2.5Y8/1	229	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		やや不良	5Y8/1	N8/0	203	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ナデ (内) ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	23	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ナデ (内) ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	22	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	N4/0	N4/0	118	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	10YR7/2	10YR5/2	21	A	外面煤付着
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) —		良好	N6/0	N6/0	71	A	東播系
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ (内) —		やや不良	N5/0	N5/0	52	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ・ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	5YR7/4	10YR7/1	228	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ヘラミガキ 【胴部】(外) ユビオサエ・ナデ (内) ヘラミガキ		良好	5Y8/1	5Y8/1	24	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ミガキ (内) ユビオサエ・ユビナデ		良好	2.5Y8/2	2.5Y8/2	247	B	外面煤付着
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB7/1	5PB6/1	177	B	
【胴部】(外) ユビナデ (内) —		良好	N4/0	N3/0	117	A	B類
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ (内) — 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/3	5Y4/1	119	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) 平行タタキ (内) ユビナデ		良好	2.5Y7/1	N4/0	156	A	
【胴部】(外) 扁軸 (内) 扁軸		良好	(胎) 2.5Y8/1		99	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) —(内) —		やや不良	10YR5/4	2.5Y7/2	47	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ (内) ユビナデ		やや不良	10YR7/4	7.5YR8/3	72	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ヘラケズリ? (内) ヘラナデ		良好	N4/0	10YR8/3	224	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	7.5YR7/6	7.5YR7/4	257	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ヘラナデ 【胴部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	10YR8/3	10YR8/3	225	A	
【口縁部】(外) ユビナデ・ミガキ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	10YR5/2	10YR4/2	221	A	

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
205		74	1区	36	包含層	褐灰色粘土	土師質 土器	16世紀	甕	(口) 31.0 (高) 現5.2	口縁部肥厚
206		73	1区	26	包含層	褐灰色粘土	土師質 土器	16世紀	甕	(高) 現4.4	口縁部肥厚
207		191	1区	24	包含層	灰色粘土	土師質 土器	16世紀	羽釜	(口) 24.0 (高) 現5.3	口縁部やや外反
208		255	1区	35	包含層	黒灰色粘土	須恵器	T K216	杯蓋	(口) 13.5 (高) 現3.5	口縁部外反気味
209		70	1区	35	包含層	褐灰色粘土	須恵器	6世紀	鉢	(口) 24.3 (高) 現3.1	口縁部端直立
210	25	222	2区	96	包含層	褐灰色粘土	須恵器	6世紀後葉	甕	(口) 34.0 (高) 現10.4	口縁部端断面方形
211		66	1区	24	包含層	褐灰色粘土	須恵器	8世紀	甕	(口) 25.5 (高) 現3.1	口縁部外反
212		270	1区		包含層	茶褐色砂質 土	須恵器	8世紀後半	杯	(口) 18.2 (高) 現3.2	口縁部外反
213	25	46	1区	37	包含層	褐灰色粘土	須恵器	8世紀	瓶	(底) 16.8 (高) 現5.9	底部丸味あり
214		193	1区	24	包含層	灰色粘土	須恵器	8世紀後半～ 9世紀前半	杯	(高台) 9.5 (高) 現1.4	高台部断面方形
215		54	1区	4	包含層	灰色粘土	須恵質 土器	11(～12)世 紀	埋鉢	(口) 26.0 (高) 現3.1	口縁部外面直立
216	26	184	1区	36	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(口) 15.0 (高) 5.0	高台部断面三角形
217		256	1区	37	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(口) 16.3 (高) 現3.6	口縁部やや外反
218		254	1区	11	包含層	灰白色粘シ ルト	瓦器	13世紀	碗	(口) 12.0 (高) 現2.8	口縁部やや内湾
219	27	67	1区	24	包含層	褐灰色粘土	瓦器	13世紀	碗	(高台) 5.0 (高) 現1.0	高台部断面三角形
220	26	19	1区	37	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.1 (高) 現1.4	高台部断面長方 形・端部外反気味
221	26	20	1区	37	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	碗	(高台) 6.3 (高) 現2.3	高台部断面長方形
222	27	18	1区	37	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	皿	(口) 9.6 (高) 1.8	口縁部直線的
223		261	1区	26	包含層	褐灰色粘土	瓦器	12世紀	皿	(口) 10.0 (高) 現1.3	立上り短い
224		48	1区	37	包含層	褐灰色粘土	瓦器	13世紀	皿	(口) 9.1 (高) 1.0	立上り短い
225		192	1区	24	包含層	灰色粘土	瓦質土 器	15世紀	楕鉢	(口) 26.0 (高) 現5.1	口縁部～胴部直線 的
226		260	1区	24	包含層	褐灰色粘土	瓦質土 器	15世紀	楕鉢	(口) 30.0 (高) 5.2	口縁部外面直立
227		39	1区	1	包含層	黒褐色粘土	陶器	近世	碗	(高台) 4.4 (高) 現1.8	高台低い
228		57	3区	33	包含層	黒褐色粘土	磁器	近世	碗	(高台) 3.9 (高) 現2.2	高台高い
229		40	1区	1	包含層	黒褐色粘土	陶器	近世	土版	(底) 6.6 (高) 現1.5	上底
230		56	3区	33	包含層	黒褐色粘土	磁器	近世	碗	(口) 14.0 (高) 現3.4	大碗、丸腰形
231		75	1区	35	包含層	褐灰色粘土	土製品	近世	芥子面	(縦) 1.6 (厚) 0.4	表面平坦
232		205	1区	11	包含層	黒褐色粘土	土製品	近世	泥面子	(径) 3.4	表面窪む
233		206	1区	11	包含層	黒褐色粘土	土製品	近世	泥面子	(径) 3.0	表面窪む
234		204	2区	73	包含層	灰色粘土	土製品	近世	燗合	(高) 5.4	上部花卉状
235		45	1区	26	包含層	褐灰色粘土	石製品			(長) 現13.8 (厚) 2.1	扁平
236		38	1区		攪乱土		土器	8世紀後葉	皿	(口) 8.3 (高) 現1.9	胴部丸味あり
237		44	1区		攪乱土		土器	8世紀後半	皿	(高台) 14.4 (高) 現1.6	高台部断面方形
238		43	1区		攪乱土		土器	8世紀後葉	寛	(口) 21.0 (高) 4.7	胴部の張り弱い

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	25Y7/2	25Y7/2	74	A	漆焼
【胴部】(外) 平行タタキ (内) —		良好	10YR7/3	10YR7/3	73	A	漆焼
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	25Y7/3	25Y6/2	191	A	
【胴部】(外) ユビナデ・イタナデ (内) ユビナデ		良好	—	—	—	—	—
【口縁部】(外) ユビナデ (内) —		良好	—	—	—	—	—
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	255	A	
【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	—	—	—	—	—
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB7/1	5PB7/1	70	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	—	—	—	—	—
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ	液状文3段・沈線1条	良好	5Y7/1	5Y7/1	222	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	5PB6/1	N4/0	66	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	270	A	
【胴部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	46	B	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N6/0	N7/0	193	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	54	A	
【口縁部】(外) — (内) —		良好	N4/0	N4/0	184	B	
【胴部】(外) — (内) ミガキ		良好	N4/0	N4/0	256	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	254	A	
【胴部】(外) ユビオサエ (内) ミガキ		良好	N4/0	N4/0	254	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	254	A	
【胴部】(外) ユビオサエ (内) —		やや不良	25Y6/4	5Y5/1	67	A	
【高台部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	19	B	
【胴部】(外) ユビオサエ・ナデ (内) — 【高台部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N8/0	N5/0	20	B	
【口縁部】(外) ヘラミガキ (内) ユビナデ		良好	N5/0	N6/0	18	B	
【胴部】(外) ヘラミガキ (内) ヘラミガキ		良好	25Y8/3	25Y7/6	261	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		やや不良	N4/0	N4/0	48	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		やや不良	N5/0	N4/0	192	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) スリ目		良好	N5/0	N5/0	260	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	(胎) 25Y6/1		39	B	内面砂目
【胴部】(外) 灰釉 (内) 灰釉		良好	(胎) N8/0		57	A	
【底径】(外) 施釉 (内) 施釉 【高台部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉		良好	25Y7/2		56	A	
【胴部】(外) — (内) 施釉		良好	5Y7/1		75	D	
【口縁部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉		良好	5YR6/6	5YR6/6	205	B	
【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉		良好	5YR6/3	75YR5/2	206	B	
【器面】(表) ユビナデ (裏) ユビオサエ	金太郎	良好	10YR8/3	75YR7/3	204	D	
【器面】(表) ユビナデ (裏) ユビナデ		良好			45		砂岩
【器面】(表) ユビナデ (裏) ユビナデ		良好					
【口縁部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		やや不良	75YR7/3	10YR7/3	38	B	
【胴部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N7/0	N5/0	44	A	
【高台部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		やや不良	5Y6/1	5Y5/1	43	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ							
【胴部】(外) — (内) —							

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
239		81	2区		攪乱土		須恵器	T K 10	蓋	(口) 88 (高) 40	全体に丸味あり
240	25	80	2区		攪乱土		須恵器	T K 217	蓋	(口) 78 (高) 26	宝珠形つまみ
241		121	3区		攪乱土		須恵器	9世紀前半	杯	(口) 112 (高) 1.7	器高低め
242		30	1区		攪乱土		須恵器	8世紀後半	杯	(高台) 8.1 (高) 現1.4	高台部断面方形
243		29	1区		攪乱土		須恵器	8世紀	蓋	(口) 168 (高) 現1.3	扁平
244		37	1区		攪乱土		須恵器	8世紀	瓶	(底) 93 (高) 現4.0	底部丸味あり
245	28	230	2区		攪乱土		須恵器		飯蛸 蓋	(高) 現5.4	釣鐘形
246		28	1区		攪乱土		須恵器	8世紀中華	鉢	(口) 34.0 (高) 現5.2	口縁部端肥厚
247		153	1区		攪乱土		須恵器		把手	(高) 現10.2	断面方形
248	26	151	1区		攪乱土		黒色土 器	10世紀	椀	(高台) 7.0 (高) 現1.5	高台断面長方形
249	27	120	3区		攪乱土		瓦器	12世紀	皿	(口) 96 (高) 2.3	口縁部～胴部内湾
250	27	152	1区		攪乱土		瓦器	12世紀	椀	(口) 15.0 (高) 現4.2	口縁部～胴部僅かに内湾
251	27	150	1区		攪乱土		瓦器	13世紀	椀	(高台) 5.0 (高) 現1.5	高台断面三角形
252		16	1区		攪乱土		瓦質土 器	15世紀	寛	(高) 現5.0	口縁部丸く収まる
253		15	1区		攪乱土		陶器	18世紀	播鉢	(口) 29.1 (高) 現4.7	口縁部
254		36	1区		攪乱土		磁器	近世	皿	(高台) 7.2 (高) 現1.2	高台部断面方形
255		41	1区	2	攪乱土		磁器	近世	碗	(高台) 4.1 (高) 現2.5	丸腰形
256		31	1区		攪乱土		磁器	近世	碗	(口) 7.1 (高) 現3.8	丸腰形
257		13	1区	14	攪乱土		磁器	近世	碗	(口) 6.6 (高) 現4.3	筒形
258		100	3区		攪乱土		磁器	近世	碗	(口) 9.2 (高) 5.2	丸腰形
259		14	1区		攪乱土		磁器	近代	碗	(高台) 3.1 (高) 現3.0	丸形
260		253	3区		攪乱土		土製品	近世	泥面 子	(径) 3.3 (厚) 0.5	裏面窪む
261		252	3区		攪乱土		土製品	近世	泥面 子	(径) 3.3 (厚) 0.7	裏面窪む
262		32	1区		攪乱土		土製品	近世	玩具	(長) 4.7 (幅) 3.8	俵
263		33	1区		攪乱土		石製品			(長) 現11.4 (厚) 2.4	板状
264		207	2区	72	攪乱土		鉄製品	近世?	釘	(長) 6.9 (幅) 0.7	
265		53	1区	28	0 2 3井 戸	灰色粘土	陶器	16世紀	播鉢	(口) 26.0 (高) 現3.6	口縁部肥厚
266	24	250	2区	96	1 1 9土 坑	黒褐色粘シ ルト	須恵器	T K 7	杯	(高台) 15.7 (高) 現5.4	口縁部外反気味、 高台端丸味あり
267	28	241	2区	88	0 6 8土 坑	緑灰色粘土	土製品		土鉢	(長) 5.3 (径) 2.9	大型品
268	28	275	2区	96	0 0 1溝	オリーブ黒 色シルト	土製品		羽口	(厚) 2.1	内径大きめか?
269	28	273	1区	24	包含層	灰色粘シル ト	土製品		羽口	(厚) 1.5	内径1.5cmほど
270	28	274	1区	24	包含層	灰色粘シル ト	土器		増埴	(厚) 2.0	浅い碗状
271	28	272	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	鉄製品		鉄滓	(長) 5.9 (幅) 4.9	
272	28	523	2区	108	平安堂地 土	灰色シルト	鉄製品		鉄滓	(長) 3.7 (幅) 3.0	

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No.	残存 率	備考
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N6/0	N6/0	81	B	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ・ユビナデ		良好	N5/0	N6/0	80	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N4/0	N5/0	121	B	
【高台部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	N7/0	N7/0	30	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5P6/1	5P6/1	29	A	
【胴部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【底部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	5Y7/1	5Y7/1	37	B	
【胴部】(外) ヘラナデ (内) ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	230	A	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ 【胴部】(外) — (内) —		良好	5Y7/1	5Y7/1	28	B	
【花部】(外) ヘラケズリ		良好	N5/0		153	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) —		良好	N3/0	N3/0	151	A	A類
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ユビオサエ・ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N5/0	N4/0	120	B	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) ヘラナデ (内) ミガキ		良好	2.5Y7/1	2.5Y7/1	152	A	平載?
【胴部】(外) ユビナデ (内) ミガキ		良好	N6/0	N5/0	150	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ 【胴部】(外) 平行タタキ (内) ハケメ		やや不良	N8/0	N6/0	16	A	
【口縁部】(外) ヘラナデ (内) ヘラナデ 【胴部】(外) 平行タタキ (内) ハケ		良好	N5YR5/3	7.5YR5/1	15	A	塚焼
【胴部】(外) — (内) 染付		良好	(胎) 5YR/1		36	A	砂日高・津 州窯系
【胴部】(外) 施釉 (内) 施釉		良好	(胎) N8/0		41	B	底部内面 施釉
【口縁部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉 【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉		良好	(胎) 7.5YR/1		31	A	
【口縁部】(外) 染付・施釉 (内) 染付・施釉 【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 染付・施釉	外面草文、内 面四方巻文	良好	(胎) N8/0		13	A	
【口縁部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉 【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉		良好	(胎) N8/0		100	D	
【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉 【胴部】(外) 染付・施釉 (内) 施釉	外面梅木	良好	(胎) N8/0		14	B	銅版転写
【器面】(表) ユビナデ (裏) ユビオサエ	紫文?	良好	7.5YR5/4	7.5YR5/4	253	D	
【器面】(表) ユビナデ (裏) ユビオサエ	紫文?	良好	5YR6/6	5YR6/6	252	D	
(外) ユビナデ		良好	10YR7/2		32	A	
【表】研雷【裏】紋打・研雷【器】備前					33		砂岩
					207	D	
【口縁部】(外) 回転ユビナデ (内) 回転ユビナデ		良好	10YR4/1	10YR4/1	53	A	
【胴部】(外) — (内) —		良好	7.5YR6/6	7.5YR6/6	250	A	
【胴部】(外) ヘラナデ		良好	2.5Y8/2	2.5Y8/2	241	D	
【器面】(表) ヘラケズリ		良好	10YR8/2	N5/0	275	A	
【器面】(表) ヘラケズリ		良好	5YR8/3	5YR8/3	273	A	
【胴部】(外) — (内) —		良好	10YR6/6	10YR8/4	274	A	
			7.5YR6/6		272	D	炭付着
			10YR5/1		523	D	

No.	図版 No.	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
273	28	522	2区	95	平安整地 土	灰色シルト	鉄製品		鉄鉢	(長) 3.9 (幅) 3.1	
274		350	1区	37	0 0 1・ A溝	茶褐色砂シ ルト	土器	布留	甕	(厚) 0.5	
275		314	1区		0 0 1・ A溝	黒褐色粘土	土器	庄内?	甕	(厚) 0.5	口縁部端肥厚
276		315	1区		0 0 1・ A溝	黒褐色粘土	須恵器		杯蓋	(厚) 0.5	
277		308	2区		0 0 1・ A溝	暗オリーブ 粘シルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
278		296	3区	60	0 0 1・ A溝	灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.0	
279		305	3区	63	0 0 1・ A溝	暗褐色砂質 土	土器	庄内	壺	(厚) 0.6	
280		297	3区	60	0 0 1・ A溝	灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.1	
281		313	1区		0 0 1・ A溝	黒褐色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.2	
282		318	1区		0 0 1・ A溝	黒褐色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.6	
283		316	1区		0 0 1・ A溝	黒褐色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.1	
284		276	3区	66	0 0 1・ A溝	灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.3	
285		294	3区	60	0 0 1・ A溝	灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.5	
286		307	1区		0 0 1・ 世紀溝	一括	須恵器		甕	(厚) 1.0	
287		277	3区	60	0 0 1・ B溝	第14回J1 層	瓦		平瓦	(厚) 1.4	
288		332	1区		0 0 1・ B溝	灰色砂	須恵器		甕	(厚) 1.1	
289		345	1区		0 0 1・ B溝	灰色シルト	須恵器		甕	(厚) 0.8	
290		306	1区		0 0 1・ B溝	第14回B2 層	須恵器		甕	(厚) 0.9	
291		339	1区		0 0 2溝	一括	須恵器		甕	(厚) 0.9	
292		338	1区		0 0 2溝	一括	須恵器		甕	(厚) 0.6	
293		357	1区		0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器	5世紀後半	甕	(厚) 0.4	口縁部屈曲
294		344	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器	5世紀後半	甕	(厚) 0.8	沈線・歯歯刺突文
295		358	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕?	(厚) 1.0	
296		336	1区	37	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕?	(厚) 0.7	
297		311	1区	28	0 0 1溝	灰色砂シル ト	須恵器		甕	(厚) 1.2	
298		348	1区	35	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.5	
299		355	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 0.9	
300		327	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.9	
301		359	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 0.7	
302		325	1区		0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.7	
303		354	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 0.9	
304		360	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 0.7	
305		353	1区	35	0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.7	
306		329	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.7	

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率 D	備考
			5Y7/1		522		
【胴部】(外) ハケメ (内) ハケメ・ヘラナデ		良好	10YR8/3	10YR5/4	350	A	
【口縁部】(外) ミガキ (内) ユビナデ		良好	7.5YR8/4	7.5YR8/4	314	A	
【天井部】(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	315	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ	波状文	良好	N7/0	5Y6/2	308	A	
【胴部】(凹) 縄縷文 (凸) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N5/0	296	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ	波状文・縄縷直線文	良好	2.5Y7/2	7.5Y8/3	306	A	
【胴部】(外) 格子タタキ・カキメ? (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N5/0	297	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	2.5GY5/1	2.5GY5/1	313	A	
【胴部】(外) 格子タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	5Y8/1	2.5Y6/1	318	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N6/0	316	A	
【平部】(凹) 布目 (凸) ユビナデ?		良好	2.5Y2/1	N6/0	276	A	
【平部】(凹) 布目 (凸) ヘラケズリ		良好	5Y4/1	5Y4/1	294	B	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)・ユビナデ		良好	N8/0	5Y5/1	307	A	
【平部】(凹) ヘラケズリ・布目 (凸) ヘラケズリ		良好	10YR5/3	10YR8/2	277	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N7/0	332	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N6/0	345	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N7/0	306	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N5/0	339	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N8/0	338	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N5/0	N5/0	357	A	
【胴部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N6/0	N5/0	344	A	
【胴部】(外) (タタキ) カキメ (内) 同心円文 (当具痕)・磨消	沈線	良好	N5/0	N5/0	358	A	
【胴部】(外) カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N6/0	336	A	
【胴部】(外) ヘラナデ (内) ヘラナデ		良好	N6/0	N5/0	311	A	
【口縁部】(外) ユビナデ (内) ユビナデ		良好	N6/0	N7/0	348	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N6/0	355	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N6/0	327	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・磨消 (内) 同心円文 (当具痕)・磨消		良好	N6/0	N5/0	359	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)・青濁波状		良好	N6/0	N5/0	359	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)・ユビナデ		良好	N4/0	N4/0	325	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)・磨消		良好	5PB5/1	N5/0	354	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)・磨消		良好	N6/0	N6/0	360	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N4/0	N4/0	353	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N5/0	329	A	

No.	国取 No.	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
307		347	1区	34	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.8	
308		319	1区	29	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.7	
309		335	1区	37	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
310		340	1区		0 0 1溝	第14図B 5・6層	須恵器		甕	(厚) 0.7	
311		330	1区		0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.6	
312		356	1区	45	0 0 1溝	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 1.0	
313		341	1区		0 0 1溝	南ベルト・ 日層	須恵器		甕	(厚) 0.9	
314		300	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
315		324	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.8	
316		323	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.7	
317		317	1区	29	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.2	
318		331	1区		0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.3	
319		337	1区	37	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
320		342	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.9	
321		310	1区		0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 1.0	
322		326	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.9	
323		352	1区	35	0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
324		334	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.0	
325		346	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 1.1	
326		333	1区		0 0 1溝	茶褐色砂シ ルト	須恵器		甕	(厚) 0.8	
327		349	1区	35	0 0 1溝	黒灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.7	
328		320	2区	97	平安整地 土	灰色シルト	土器	布留	甕	(厚) 0.4	
329		322	2区	97	平安整地 土	灰色シルト	土器	布留	甕	(厚) 0.4	
330		321	2区	97	平安整地 土	灰色シルト	土器	布留	甕	(厚) 0.4	
331		304	2区	97	平安整地 土	灰色シルト	須恵器		甕	(厚) 0.8	
332		289	2区	96	平安整地 土	灰色シルト	瓦		平瓦	(厚) 2.3	
333		286	2区	110	平安整地 土	灰色シルト	瓦		平瓦	(厚) 2.1	
334		282	2区	73	平安整地 土	にぶい黄色 粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.9	
335		281	2区	73	平安整地 土	にぶい黄色 粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.9	
336		283	2区	95	平安整地 土	灰色シルト	瓦		平瓦	(厚) 2.0	
337		287	2区		平安整地 土	灰色シルト	瓦		丸瓦	(厚) 2.1	
338		279	3区	59	平安整地 土	黒灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 2.1	
339		278	1区	17	平安耕作 土	黒灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 2.2	
340		280	1区		平安耕作 土	黄褐色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.7	

実測遺物観察表10

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N6/0	347	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N5/0	319	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N6/0	335	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	N7/0	340	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕・首海波状)		良好	N4/0	5Y6/1	330	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)・ 拍子		良好	N7/0	N7/0	356	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N5/0	341	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	5Y7/1	300	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N7/0	324	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N6/0	323	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	N4/0	317	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	7.5Y6/1	N4/0	331	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N6/0	5Y6/1	337	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		不良	2.5Y8/1	2.5Y8/1	342	A	生焼け
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		不良	10YR8/2	10YR8/2	310	A	生焼け
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	2.5Y6/1	326	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	5Y8/1	5Y8/1	352	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	5PB6/1	5PB6/1	334	A	
【胴部】(外) 格子タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N6/0	346	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N5/0	N5/0	333	A	
【胴部】(外) 格子タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N4/0	N4/0	349	A	
【胴部】(外) ハケメ (内) ヘラケズリ		良好	10YR7/2	10YR7/2	320	A	
【胴部】(外) ハケメ (内) ヘラケズリ		良好	10YR7/2	10YR7/2	322	A	
【胴部】(外) ハケメ (内) ヘラケズリ		良好	10YR7/2	10YR7/2	321	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) エビナデ	波状文	良好	2.5Y7/2	N7/0	304	A	
【平部】(四) 布目 (凸) 縄目タタキ		良好	2.5Y7/1	2.5Y7/1	289	B	
【平部】(四) 布目 (凸) 縄目タタキ		良好	N7/0	N7/0	286	A	
【平部】(四) 布目 (内) ヘラケズリ		良好	5Y7/1	5Y7/1	282	A	
【平部】(四) 布目 (内) ヘラケズリ		良好	5Y7/1	5Y6/1	281	A	
【平部】(四) 布目 (内) ヘラケズリ		良好	N7/0	N7/0	283	C	
【筒部】(四) 布目・ヘラケズリ (凸) ヘラケズリ		良好	2.5Y8/2	2.5Y8/2	287	B	
【平部】(四) ヘラケズリ・布目 (凸) 縄目タタキ		良好	2.5Y8/2	2.5Y8/2	279	B	
【平部】(四) ヘラケズリ・布目 (凸) エビナデ?		良好	2.5Y6/1	2.5Y6/1	278	A	
【平部】(四) ヘラケズリ・布目 (凸) ヘラケズリ		良好	N2/0	N4/0	280	B	

No	図版 No	実測 番号	調査区	グリ ッド	遺構	層位・土層	種別	時期・系統	器種	法量 (cm)	器形の特徴
341		301	1区	1	中世耕作 土	黄褐色粘土	瓦質土 器		甕	(厚) 0.6	
342		312	2区	89	中世耕作 土	黄褐色粘土	瓦質土 器		甕	(厚) 0.8	
343		265	1区	35	包含層	茶褐色砂シ ルト	土器	布留式	甕	(高) 現3.1	口縁部端丸く肥厚
344		17	1区	37	包含層	褐灰色粘土	須恵器	TK208	甕	(高) 現2.6	口縁部端平坦
345		299	3区	66	O O I A溝	灰色粘土	須恵器	5世紀後半	甕	(厚) 0.5	口縁部やや開く
346		303	1区	25	包含層	褐灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.8	
347		295	1区	24	包含層	灰色粘土	須恵器		甕	(厚) 0.9	
348		328	1区	35	包含層	茶褐色砂質 土	須恵器		甕	(厚) 0.9	
349		309	2区	96	包含層		須恵器		甕	(厚) 0.8	
350		302	1区	27	包含層	灰色粘シル ト	瓦質土 器		甕	(厚) 0.9	
351		293	1区	24	包含層	灰色粘土	瓦質土 器		火舎	(長) 現3.5 (幅) 現2.9	
352		290	1区	3	包含層	黒褐色粘土	瓦		丸瓦	(径) 14.2	
353		292	1区	24	包含層	灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.9	
354		291	1区	24	包含層	灰色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.9	
355		288	1区	24	包含層	灰褐色粘土	瓦		平瓦	(厚) 1.6	
356		351	1区		攪乱土		土器	弥生V様式 (系)	甕	(厚) 0.8	
357		284	1区		攪乱土		瓦		平瓦	(厚) 2.1	
358		42	1区	2	攪乱土		瓦	古代	平瓦	(厚) 2.4	
359		285	1区		攪乱土		瓦		平瓦	(厚) 1.9	

実測遺物観察表11

器・成形の特徴	文様の特徴	焼成	内	外	実測 図No	残存 率	備考
【胴部】(外) 平行タタキ (内) エビナデ		良好	N4/0	N4/0	301	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) エビナデ?		良好	N4/0	N4/0	312	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) —		不良	10YR8/1	10YR4/2	265	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) エビナデ	波状文、沈 線2条	良好	25Y7/2	N6/0	17	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) エビナデ?	波状文	良好	N6/0	N6/0	299	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) エビナデ	波状文	良好	5Y6/1	N6/0	303	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	25Y8/2	25Y8/2	295	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) 同心円文 (当具痕)・磨消		良好	N6/0	N6/0	328	A	
【胴部】(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円文 (当具痕)		良好	N7/0	5Y8/1	309	A	
【胴部】(外) 平行タタキ (内) エビナデ		良好	5Y8/1	5Y8/1	302	A	
【口縁部】(外) エビナデ (内) エビナデ?	菱形繫文	良好	25Y7/1	25Y7/2	293	A	
【底凸】(外) エビナデ (内) エビナデ	珠文	良好	N5/0	N5/0	290	A	
【丸底】(外) ヘラナデ (内) ヘラケズリ		良好	5Y5/1	5Y6/1	292	A	
【平部】(凹) 布目 (凸) ヘラケズリ?		良好	25Y6/1	25Y6/1	291	A	
【平部】(凹) 布目・ヘラケズリ (凸) ヘラケズリ?		良好	N5/0	N5/0	288	A	
【胴部】(外) タタキメ (内) ハケメ		良好	25Y5/2	25Y5/1	351	A	
【平部】(凹) 布目 (凸) ヘラケズリ		良好	N6/0	N6/0	284	A	
【外面】 布目、エビオサエ 【内面】 縄目タタキ		良好	N7/0	N7/0	42	A	
【平部】(凹) 布目・ヘラケズリ (凸) ヘラケズリ		良好	5Y7/1	5Y7/1	285	A	

残存率 A: ~10%、B: 10~50%、C: 50~90%、D: 90%~

No	図版 No	出土地点	有文/ 無文	器種	部位	口径/ 底径 (cm)	残存 高 (cm)	器厚 (cm)	混入鉱物	色調			
										外面	内面	断面	
360	29	3区トレンチ3-1	3	有文	深鉢	口縁部～ 胴部	—	5.0	0.6	角閃石?	10YR5/2	10YR3/2	10YR4/2
361	29	中央トレンチNo18 3層		有文	深鉢	口縁部	—	4.2	0.6	角閃石	10YR4/4	10YR6/3	10YR4/4
362	29	中央トレンチNo17 4段		有文	深鉢	口縁部	—	4.2	0.7	角閃石	10YR4/3	10YR4/2	10YR5/1
363	29	中央トレンチNo38 5段		有文	深鉢	口縁部	—	3.3	0.7		N2/0	N2/0	N7/0
364	29	中央トレンチNo34 3段		有文	深鉢	口縁部	—	0.9	0.7		10YR4/1	7.5YR3/1	7.5YR5/1
365	29	中央トレンチNo34 3段		有文	深鉢	胴部	—	4.3	0.7		10YR6/1	10YR5/1	2.5Y6/2
366	29	中央トレンチNo37 6段		有文	深鉢	胴部	—	3.3	0.6		10YR5/1	2.5Y6/1	2.5Y6/1
367	29	中央トレンチNo10 5段		有文	深鉢	口縁部	—	1.7	0.7		2.5Y6/1	2.5Y3/1	2.5Y6/1
368	29	中央トレンチNo14 5段		有文	深鉢	口縁部	—	4.0	0.7		10YR5/2	2.5Y7/2	2.5Y7/1
369	30	中央トレンチNo08 5段		有文	深鉢	口縁部～ 胴部	18.8	10.9	0.7		2.5Y7/2	2.5Y3/1	10YR6/2
370	30	中央トレンチNo05 5段		有文	深鉢	口縁部～ 胴部	18.4	8.5	0.7		10YR5/3	10YR5/1	10YR6/2
371	32	中央トレンチNo34 4段		有文	深鉢	口縁部～ 胴部	29.2	5.5	0.7		10YR8/3	10YR2/1	10YR6/3
372	31	中央トレンチNo01 6段		有文	深鉢	口縁部 (波状) ～胴部	35.2	16.3	0.9	角閃石?	7.5YR3/1	10YR3/1	7.5YR3/1
373	31	黄褐色粘土		有文	深鉢	胴部	—	6.4	0.6		2.5Y7/2	2.5Y5/1	2.5Y6/1
374	29	3区トレンチ3-1 3層	3	有文	深鉢	胴部	—	5.5	0.5	角閃石?	10YR5/2	10YR3/2	10YR4/2
375	32	中央トレンチNo34 4段		有文	深鉢	胴部～胴 部	29.2	11.3	0.6		10YR8/4	10YR2/1	10YR5/2
376		中央トレンチ 4段 一括		有文	深鉢	口縁部?	—	4.3	0.5	角閃石	10YR3/1	10YR3/2	10YR2/1
377		中央トレンチNo34 5段		有文	不明	不明	—	3.9	0.6	角閃石	10YR3/3	10YR5/3	10YR3/1
378		中央トレンチNo24 4段		有文	不明	不明	—	2.6	0.6		2.5Y6/2	2.5Y6/1	2.5Y6/1
379	30	中央トレンチNo08 6段		有文	深鉢	胴部～胴 部	—	8.4	0.7		10YR3/1	7.5YR4/2	10YR4/1
380	31	中央トレンチNo05 4段		有文	深鉢	胴部～胴 部	—	6.2	0.7		10YR3/1	2.5Y6/2	2.5Y5/2
381	30	中央トレンチNo04 6段		有文	深鉢	胴部	—	12.0	0.7	角閃石	10YR3/1	10YR3/1	10YR3/1
382	34	中央トレンチNo10 5段		有文	浅鉢	口縁部	26.2	5.7	0.6		10YR7/2	10YR4/1	10YR5/1
383	33	中央トレンチNo04 6段		有文	浅鉢	口縁部～ 胴部	27.6	7.2	0.5		2.5Y8/1	2.5Y8/1	2.5Y5/1
384	34	中央トレンチNo04 5段		有文	浅鉢	口縁部～ 胴部	27.0	7.1	0.6	クサリ礫	10YR7/2	10YR5/2	10YR5/2
385	33	中央トレンチNo16 5段		有文	浅鉢	口縁部～ 胴部	33.2	7.8	0.8		10YR5/2	10YR6/2	10YR5/2
386	33	中央トレンチNo16 5段		有文	浅鉢	口縁部	37.0	4.8	0.7		10YR7/2	2.5Y7/1	10YR4/1
387	38	中央トレンチNo01 5段		不明	注口土 器	口縁部	—	0.4	1.0		2.5Y5/3	10YR3/1	10YR4/1
388	38	中央トレンチNo17 5段		不明	注口土 器	口縁部?	—	1.5	0.8		10YR7/3	2.5Y7/2	10YR4/1
389	38	中央トレンチNo34 4段		有文	注口土 器?	口縁部	—	1.7	0.7		10YR7/2	10YR6/3	10YR5/1
391	37	中央トレンチNo15 3段		有文?	注口土 器	注口部	—	7.3	0.6	角閃石	10YR5/2	10YR5/2	10YR3/1
392	35	中央トレンチNo07 5段		無文	深鉢	口縁部～ 胴部	21.0	10.7	0.5	角閃石	10YR3/1	10YR2/1	10YR3/1

縄文土器観察表 1

器面調整		文様の特徴	備考	類例	取上No
外面	内面				
不明	不明	沈線	374と同一個体 分析No1	「向出遺跡」第18図37など	277-1
不明	不明	沈線、巻貝縄縄文	分析No4		502-1
不明	不明	沈線（連弧文）			551
ナデ	ナデ	沈線（連弧文）、磨消縄文（RL）		「向出遺跡」第19図54など	629
ナデ	ナデ	口縁部外面刻み	365と同一個体		519-1
ナデ	ナデ	沈線	364と同一個体		519-2
ナデ	巻貝条痕	沈線、刻み			655
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線			609-2
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線		「向出遺跡」第19図74	603
ナデ	ケズリ、ナ デ	【口縁部】内面直下刻み、沈線 【胴部】沈線、巻貝縄縄文		「向出遺跡」第20図75	595-1
ナデ	ケズリ、ナ デ	【口縁部】内面直下刻み、沈線 【胴部】沈線、巻貝縄縄文		「向出遺跡」第20図75	594
巻貝条痕 後、ナデ	巻貝条痕 後、ナデ	口縁部内面刻み	375と同一個体		572-1
巻貝条痕？ 後ナデ	巻貝条痕？ 後ナデ	【口縁部】波頂部内面刺突、内面 直下刻み、沈線 【胴部】沈線？		「穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 図113-496	659-1
ナデ	ナデ	沈線、磨消縄文（RL?）		「向出遺跡」第19図48など	451-1
不明	不明	沈線	360と同一個体 分析No1	「向出遺跡」第19図48など	277-2
ナデ	ナデ	沈線、磨消縄文（LR）	371と同一個体		572-4
不明	不明	縄文（RL?）			547
不明	不明	縄文（RL）			620
ナデ	ナデ	縄文（RL）			563
ナデ	ナデ	胴部沈線、巻貝縄縄文	炭化物付着		667
ナデ	ケズリ後ナ デ	沈線、刺突？、沈線刻み	炭化物付着		539
ナデ	ナデ	沈線、刻み	炭化物付着		658-4
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線			610
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線	分析No3	「向出遺跡」第235図685など	658-1
ナデ?	不明	口縁部内面直下沈線			586
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線	炭化物付着	「向出遺跡」第19図74など	632
ナデ	ナデ	口縁部内面直下刻み、沈線		「向出遺跡」第19図74	598
不明	ナデ				583
不明	不明			「向出遺跡」第19図60	602
条痕後、ナ デ	ナデ	粘土貼り付け			573
ナデ?	ナデ?	沈線?			500
ナデ	ナデ				592

No	図版 No	出土地点	有文/ 無文	器種	部位	口径/ 底径 (cm)	残存 高 (cm)	器厚 (cm)	混入鉱物	色調		
										外面	内面	断面
393		中央トレンチNo.22 6段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	—	5.1	0.6	角閃石	7.5YR3/1	7.5YR4/2	7.5YR3/1
394	36	中央トレンチNo.16 4段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	26.2	15.5	0.7		10YR3/1	10YR3/1	10YR3/1
395		中央トレンチNo.13 4段	無文	深鉢	口頸部～ 胴部	—	12.8	0.7		10YR7/2	10YR5/2	10YR6/2
396	36	中央トレンチNo.34 5段	無文	深鉢	胴部	—	12.1	0.8		10YR6/2	2.5Y7/2	2.5Y5/2
397	36	中央トレンチNo.29 3段	無文	深鉢	胴部	—	11.3	0.5		10YR7/3	10YR3/1	10YR6/3
398		中央トレンチNo.33 5段	無文	深鉢	胴部	—	9.6	0.6		10YR6/2	2.5Y8/2	2.5Y8/2
399	35	中央トレンチNo.02 7段	無文	深鉢	口縁部～ 頸部	29.2	10.5	0.7	角閃石	7.5YR2/1	7.5YR2/1	10YR3/1
400	35	中央トレンチNo.05 4段	無文	深鉢	口縁部	30.0	8.8	0.8		10YR4/1	10YR4/1	10YR5/1
401	36	中央トレンチNo.10 6段	無文	深鉢	口縁部～ 頸部	33.4	9.3	0.6		10YR5/1	5Y8/1	5Y8/1
402	35	中央トレンチNo.01 5段	無文	深鉢	口縁部～ 頸部	34.2	14.1	0.8	雲母	10YR4/2	10YR5/3	10YR5/2
403		中央トレンチNo.05 4段	無文	深鉢	口頸部～ 胴部	—	7.7	0.7		10YR3/1	10YR5/1	10YR4/1
404	36	中央トレンチNo.05 5段	無文	深鉢	口頸部～ 胴部	—	11.0	0.6		10YR6/3	2.5Y6/1	2.5Y7/2
405	36	中央トレンチNo.07 4段	無文	深鉢	口縁部	26.0	7.2	0.7		10YR5/1	10YR6/2	10YR4/1
406	35	中央トレンチNo.04 5段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	25.2	13.2	0.6	角閃石	10YR3/1	10YR5/2	10YR3/1
407	36	中央トレンチNo.04 5段	無文	深鉢	口縁部	31.8	9.5	0.7		10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2
408		黄褐色粘土	無文	深鉢	口縁部?	35.4	4.8	0.6		10YR3/1	10YR3/1	10YR2/1
409	35	中央トレンチNo.07 4段	無文	深鉢	口縁部	37.4	9.0	0.7	角閃石	7.5YR2/1	7.5YR3/1	7.5YR4/3
410		中央トレンチNo.29 4段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	39.0	12.6	1.0		10YR7/3	5Y8/1	2.5YR5/1
411	34	中央トレンチNo.11 5段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	39.0	25.8	0.8		10YR4/2	2.5Y5/2	2.5Y4/1
412		中央トレンチNo.29 4段	無文	深鉢	胴部	32.0	22.2	0.7		10YR4/2	10YR4/1	10YR5/1
413		中央トレンチNo.11 6段	無文	深鉢	口縁部	—	2.9	0.7	クサリ礫	5Y7/2	N8/0	5Y8/1
414		中央トレンチNo.14 4段	無文	深鉢	口縁部	—	3.0	0.7		2.5Y5/1	2.5Y7/1	2.5Y6/1
415		中央トレンチNo.43 4段	無文	深鉢	口縁部	—	4.8	0.6		2.5Y7/2	10YR7/2	2.5Y6/1
416		中央トレンチNo.01 4段	無文	深鉢	口縁部	—	5.4	0.8	クサリ礫	10YR7/2	2.5Y8/2	2.5Y8/2
417		攪乱一括	無文	深鉢	口縁部	—	5.6	0.6		10YR4/1	10YR3/1	10YR4/3
418		中央トレンチNo.16 4段	無文	深鉢	口縁部	—	5.5	0.8		10YR3/1	10YR4/1	2.5Y4/1
419		中央トレンチNo.04 5段	無文	深鉢	口縁部?	—	7.0	0.5	角閃石	10YR3/2	2.5Y3/1	2.5Y3/1
420		中央トレンチNo.05 4段	無文	深鉢	口縁部	—	7.3	0.7		7.5YR3/1	7.5YR3/1	7.5YR2/1
422		023	無文	深鉢	口縁部	—	7.5	0.8		2.5Y6/2	2.5Y7/2	2.5Y8/2
423		中央トレンチNo.11 5段	無文	深鉢	口縁部～ 胴部	—	9.8	0.5	角閃石	7.5YR2/1	7.5YR4/2	7.5YR2/1
424	36	中央トレンチNo.14 4段	無文	深鉢	口縁部	—	6.6	0.6		2.5Y8/2	N4/0	2.5Y7/2
425		中央トレンチNo.13 5段	無文	深鉢	口縁部	—	6.9	0.6		7.5YR4/2	7.5YR2/1	7.5YR2/1

器面調整		文様の特徴	備考	類例	取上No
外面	内面				
ナア	ナア				662
巻貝条痕?	巻貝条痕?				566
二枚貝条痕?	二枚貝条痕?		分析No9		533
巻貝条痕	巻貝条痕後、ナア		スス付着 分析No10		633
巻貝条痕後、ナア	ナア				515-1
巻貝条痕	ナア		有機物付着		618
巻貝条痕	巻貝条痕		炭化物付着		669-1
巻貝条痕	巻貝条痕				542
ナア?	ナア?				663
巻貝条痕?	ナア		炭化物付着		584
巻貝条痕後、ナア	巻貝条痕後、ナア				537
条痕	ナア?		炭化物付着		593
巻貝条痕	巻貝条痕				536-2
巻貝条痕	ナア		炭化物付着		596
巻貝条痕	巻貝条痕	赤色顔料塗布			581
不明	巻貝条痕				451-4
巻貝条痕	巻貝条痕		炭化物付着		536-1
巻貝条痕	巻貝条痕		分析No8		545
巻貝条痕?	ナア			「向州遺跡」第72回301	588-1
ナア	ナア			「向州遺跡」第72回301	562
不明	不明				664
ナア	ナア				554-2
ナア	条痕				565
ナア	ナア				540
ナア?	ナア?				184
ナア	ナア				570
巻貝条痕	ナア		炭化物付着		582
巻貝条痕後、ナア	巻貝条痕後、ナア				541
条痕	ナア				117
ナア	ナア				589
巻貝条痕後、ナア	ナア				554-1
巻貝条痕後、ナア	巻貝条痕				648

No	図版 No	出土地点	有文/ 無文	器種	部位	口径/ 底径 (cm)	残存 高 (cm)	器厚 (cm)	混入鉱物	色調		
										外面	内面	断面
426	37	中央トレンチNo29 3段	無文	深鉢	口縁部	26.2	8.4	0.7		10YR4/1	10YR4/1	10YR3/1
427		黄褐色粘土	無文	深鉢	口縁部	—	3.0	0.4	角閃石	10YR3/2	10YR3/2	10YR2/2
428		中央トレンチNo29 5段	無文	深鉢	口縁部	—	3.6	0.4		N6/0	N7/0	N4/0
429		黄褐色粘土	無文	深鉢	胴部	—	6.3	0.5	角閃石	10YR3/1	10YR3/2	10YR3/2
430		黄褐色粘土	無文	深鉢	口縁部	33.6	5.5	0.4		2.5Y5/1	10YR5/1	10YR4/1
431		中央トレンチNo07 5段	無文	浅鉢	口縁部	—	2.8	0.7		7.5YR7/4	7.5YR7/4	10YR6/2
432		中央トレンチNo15 2段	無文	浅鉢	口縁部	—	4.3	0.8	角閃石	7.5YR4/3	10YR5/2	10YR3/3
433		中央トレンチNo24 3段	無文	浅鉢	口縁部	13.0	2.6	0.4		10YR6/2	10YR7/2	10YR4/1
434	37	023	無文	浅鉢	口縁部	18.6	5.3	0.6		10YR5/1	10YR5/2	10YR5/1
435	37	中央トレンチNo02 7段	無文	浅鉢	口縁部	25.0	5.8	0.6		2.5Y7/3	2.5Y4/2	2.5Y5/1
436		1区 オリーブ灰色 砂シルト	不明	不明	底部	3.2	1.0	0.9		7.5YR6/4	10YR5/1	10YR5/1
437		中央トレンチNo16 5段	不明	不明	底部(凹 底)	4.2	1.3	1.0	角閃石	10YR5/2	10YR4/2	10YR5/2
438	39	中央トレンチNo11 5段	不明	不明	底部(凹 底)	5.6	1.5	0.7	角閃石	10YR5/3	10YR3/1	10YR3/1
439	39	中央トレンチNo03 3段	不明	不明	底部(平 底)	6.0	1.6	0.5		5YR6/6	10YR2/1	10YR4/1
440		中央トレンチNo35 3段	不明	深鉢	底部(平 底?)	6.0	2.4	0.5		2.5YR5/6	7.5YR5/4	7.5YR6/3
441		中央トレンチNo08 5段	不明	不明	底部	5.0	2.2	0.5	角閃石	10YR3/3	10YR2/1	10YR2/1
442		中央トレンチNo01 6段	不明	深鉢	底部(平 底)	6.8	1.9	0.7		10YR6/2	10YR7/2	10YR6/2
443		中央トレンチNo03 3段	不明	深鉢	底部(凹 底?)	7.0	2.3	0.7	クサリ礫	2.5YR5/6	10YR7/2	10YR5/2
444	39	中央トレンチNo44 2段	不明	深鉢	底部(凹 底)	6.2	2.6	0.7		7.5YR6/4	10YR7/3	10YR5/1
445		中央トレンチNo11 5段	不明	深鉢	底部(平 底)	5.8	3.2	0.6	角閃石	10YR7/2	10YR3/1	10YR3/1
446	39	中央トレンチNo10 4段	不明	深鉢	底部(凹 底?)	5.3	3.1	0.8		5YR6/6	2.5Y7/2	10YR3/1
447	39	中央トレンチNo05 5段	不明	深鉢	底部(平 底)	5.4	2.6	0.6		2.5Y7/2	2.5Y8/2	2.5Y7/2
448	39	中央トレンチNo29 4段	不明	深鉢	底部(凹 底)	5.7	2.9	0.7		10YR6/2	10YR2/1	10YR7/4
449	39	中央トレンチNo39 4段	不明	深鉢	底部(凹 底)	6.0	3.5	0.8		2.5Y7/3	2.5Y7/3	10YR5/3
450	37	中央トレンチNo08 5段	有文	浅鉢	底部(凹 底)	5.7	2.5	0.5		2.5Y5/3	2.5Y5/3	2.5Y5/3
451	39	中央トレンチNo38 3段	不明	浅鉢	底部(丸 底)	—	1.5	0.6	角閃石	10YR5/3	10YR3/2	10YR3/1
453		001・A溝	凸帯文	深鉢	胴部	不明	2.9	0.5	角閃石	10YR5/3	10YR4/2	10YR4/2
454		001・A溝	凸帯文	深鉢	胴部	不明	2.7	0.5	角閃石	10YR5/2	10YR4/2	10YR4/2
455	38	灰色粘土		土製品	鼻部	—	4.4	0.8		7.5YR5/4	2.5Y3/1	7.5YR5/2

器面調整		文様の特徴	備考	類例	取上No.
外面	内面				
巻貝条痕	ナデ				527-6
不明	不明				451-5
不明	不明				619
ナデ?	ナデ?				451-2
ナデ	不明				451-3
不明	不明				569
不明	不明				488
ナデ?	ナデ?				505
ナデ	ナデ		スス付着		114
巻貝条痕	ナデ		炭化物付着		669-2
不明	ナデ?				163
不明	ナデ				628
ナデ	ナデ				590
不明	不明				493-2
不明	不明				526
ナデ	ナデ				595-2
不明	不明				659-3
不明	不明				493-1
不明	ナデ?				477
ナデ	ナデ				588-2
ナデ	ナデ				530
巻貝条痕	ナデ				591
巻貝条痕	ナデ		分析No.7		564
ナデ 縄文 (RL)	ナデ				567
ナデ	ナデ	3条の凹線で同心円を描く			577
ナデ	ナデ				518
不明	不明				403-1
不明	不明				403-2
ナデ	ナデ		土面か?		119

縄文石器観察表 1

No	図版 No	実測 No	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	出土遺構・層	石材
456	40	362	石鏃	1.80	1.50	0.30	中央トレンチNo28・3段	サヌカイト
457	40	379	石鏃	2.00	1.05	0.20	2-108区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
458	40	551	石鏃	2.00	1.30	0.22	1区001・C溝	サヌカイト
459	40	361	石鏃	1.85	1.35	0.30	中央トレンチNo30・3段	サヌカイト
460	40	507	石鏃	2.15	1.40	0.30	2区一括	サヌカイト
461	40	505	石鏃	2.42	2.20	0.55	2区一括	サヌカイト
462	40	369	石鏃	2.60	1.98	0.30	3-38区北辺トレンチ延長部	サヌカイト
463	40	371	石鏃	1.80	1.92	0.40	中央トレンチNo5・4段	サヌカイト
464	40	506	石鏃	2.55	1.30	0.40	2区一括	サヌカイト
465	40	374	石刃	6.85	3.60	1.10	中央トレンチNo4・2段	サヌカイト
466	40	564	石刃	6.90	5.45	1.20	1-14区灰色粘土	サヌカイト
467	40	527	石刃	6.00	3.30	0.80	1区トレンチ3・黄褐色粘土	サヌカイト
468		570	石刃	4.50	6.00	0.85	1-28区001溝(灰色砂シルト)	サヌカイト
469	40	386	石刃	6.92	2.85	1.05	2-102区001・A溝(灰色砂)	サヌカイト
470	40	569	石刃	3.95	5.25	0.90	1-3区オリーブ灰色砂シルト	サヌカイト
471	41	521	石皿	11.80	14.10	5.00	中央トレンチNo34・4段	砂岩
472		581	石皿	14.00	6.40	8.70	中央トレンチNo22・2段	砂岩
473		519	石皿	12.95	9.30	8.05	中央トレンチNo13・3段	砂岩
474		394	石皿	8.00	7.40	2.35	中央トレンチNo25・2段	砂岩
475		391	石皿	7.32	4.85	3.95	中央トレンチNo34・3段	砂岩
476	41	577	石皿	14.10	7.50	4.18	2-108区001・A溝(暗灰色粘土)	砂岩
477		567	石皿	8.92	3.52	1.85	3-58区001・B溝	砂岩
478	41	582	石皿	33.20	17.88	5.85	中央トレンチNo20・2段	砂岩
479		571	磨石	7.20	7.20	5.50	1区001・C溝	砂岩
480		572	磨石	10.60	6.20	6.50	1-25区	砂岩
481		520	磨石	10.00	8.10	5.98	中央トレンチNo45・42層	砂岩
482		578	磨石	10.65	10.00	5.50	中央トレンチNo19・2段	砂岩
483		573	磨石	12.05	9.38	7.65	中央トレンチNo19・3段	砂岩
484		579	磨石	12.48	9.25	6.10	中央トレンチNo7・3段	砂岩
485		517	磨石	12.72	10.50	6.95	中央トレンチNo35・3段	砂岩
486		393	磨石	12.62	6.50	4.05	3-66区001・A溝(褐灰色粘土)	砂岩
487		518	磨石	16.42	7.68	2.90	中央トレンチNo13・3段	砂岩
488		575	磨石	17.35	7.80	6.20	2-83区106小穴	砂岩
489		580	磨石	16.25	9.70	7.25	中央トレンチNo20・2段	砂岩
490		574	磨石	17.00	7.60	4.95	2-85区102小穴	砂岩
491		390	石棒	5.40	3.00	2.20	中央トレンチNo3・2段	結晶片岩
492		576	石棒	9.05	6.10	5.80	2-104区001・A溝(灰色砂シルト)	結晶片岩
493		431	剥片	2.75	1.60	0.48	2-94区中世耕作土・黄褐色粘土	サヌカイト
494		549	剥片	3.05	1.30	0.40	3区攪乱一括	サヌカイト
495		407	剥片	3.30	1.50	0.60	3-54区耕作土下層	サヌカイト
496		441	剥片	3.35	0.80	0.32	3区北辺トレンチ一括	サヌカイト
497		500	剥片	3.50	1.25	0.55	2区一括	サヌカイト
498		408	剥片	3.65	1.00	0.50	2区攪乱一括	サヌカイト
499		414	剥片	4.00	1.52	0.30	中央トレンチNo4・5段	サヌカイト
500		392	剥片	7.90	14.25	1.80	中央トレンチNo3・3段	結晶片岩
501		387	剥片	6.70	10.30	1.00	2-102区001・A溝(灰色砂)	サヌカイト
502	41	510	剥片	5.10	7.85	1.90	2区一括	サヌカイト

縄文石器観察表 2

No	図版 No	実測 No	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	出土遺構・層	石材
503		566	剥片	5.45	6.90	3.50	1-1区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
504		568	剥片	5.65	6.15	2.30	1-4区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
505		480	剥片	5.60	8.20	2.48	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
506		464	剥片	5.60	3.75	1.50	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
507		377	剥片	5.80	4.10	1.15	2-108区001・A溝 (暗灰色粘土)	サヌカイト
508		475	剥片	3.80	4.60	1.15	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
509		563	剥片	4.05	3.25	1.30	1-14区灰色粘土	サヌカイト
510		483	剥片	3.20	9.20	0.52	2-74区黄褐色粘土	サヌカイト
511		486	剥片	5.30	6.92	2.08	2-74区黄褐色粘土	サヌカイト
512		457	剥片	5.42	4.72	1.50	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
513		462	剥片	6.10	7.60	1.60	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
514		455	剥片	7.00	5.70	0.90	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
515		368	剥片	5.20	3.45	0.50	中央トレンチNo.38・3段	サヌカイト
516		479	剥片	4.45	6.65	2.00	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
517		375	剥片	4.40	4.70	1.10	中央トレンチNo.13・6段	サヌカイト
518		453	剥片	4.00	4.62	2.22	中央トレンチNo.15・3段	サヌカイト
519	41	550	剥片	3.95	5.80	1.10	1-4区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
520		554	剥片	4.40	6.40	1.10	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
521		556	剥片	2.65	6.30	1.65	3区一括	サヌカイト
522		555	剥片	4.00	4.95	1.35	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
523		474	剥片	3.45	6.30	1.10	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
524		560	剥片	3.60	5.40	0.90	1-4区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
525	41	524	剥片	4.10	5.15	1.00	1区一括	サヌカイト
526		366	剥片	3.30	6.00	0.80	中央トレンチ一括	サヌカイト
527	41	553	剥片	4.35	5.40	1.25	1-22区一括	サヌカイト
528		498	剥片	3.05	3.75	0.85	2区一括	サヌカイト
529		514	剥片	3.50	2.90	1.30	2-106区001・A溝・褐灰色砂シルト	サヌカイト
530	41	552	剥片	4.15	5.00	1.50	1区攪乱土内	サヌカイト
531		565	剥片	3.55	4.38	1.05	3-58区001・B溝	サヌカイト
532		562	剥片	3.40	5.00	1.45	1-14区灰色粘土	サヌカイト
533	41	533	剥片	2.95	4.50	1.10	1-17区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
534	41	543	剥片	3.00	4.55	1.35	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
535	41	525	剥片	3.85	5.10	0.80	1-4区オリブ灰色砂シルト	サヌカイト
536	41	536	剥片	2.45	4.38	0.90	1区001溝 (茶褐色砂質土)	サヌカイト
537		395	剥片	2.20	3.60	0.50	中央トレンチNo.25・2段	サヌカイト
538		437	剥片	3.10	3.08	0.60	2-109区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
539		382	剥片	2.80	3.70	0.80	中央トレンチNo.20・2段	サヌカイト
540	41	542	剥片	2.45	3.25	0.55	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
541		535	剥片	2.35	2.90	0.50	1区001溝 (茶褐色砂質土)	サヌカイト
542		541	剥片	3.00	4.00	1.15	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
543	41	537	剥片	2.55	2.90	0.85	3-65区001・A溝 (黒褐色粘土)	サヌカイト
544		546	剥片	2.60	2.40	0.75	1区001溝 (茶褐色砂質土)	サヌカイト
545		548	剥片	2.35	4.00	0.70	1区001溝 (茶褐色砂質土)	サヌカイト
546		487	剥片	2.90	3.00	0.60	2-102区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
547	41	402	剥片	2.60	3.10	0.50	2区一括	サヌカイト
548		481	剥片	2.90	4.10	0.60	2-97区001溝 (オリブ黒色シルト)	サヌカイト
549		482	剥片	2.90	3.70	0.95	2-97区001溝 (オリブ黒色シルト)	サヌカイト

縄文石器観察表3

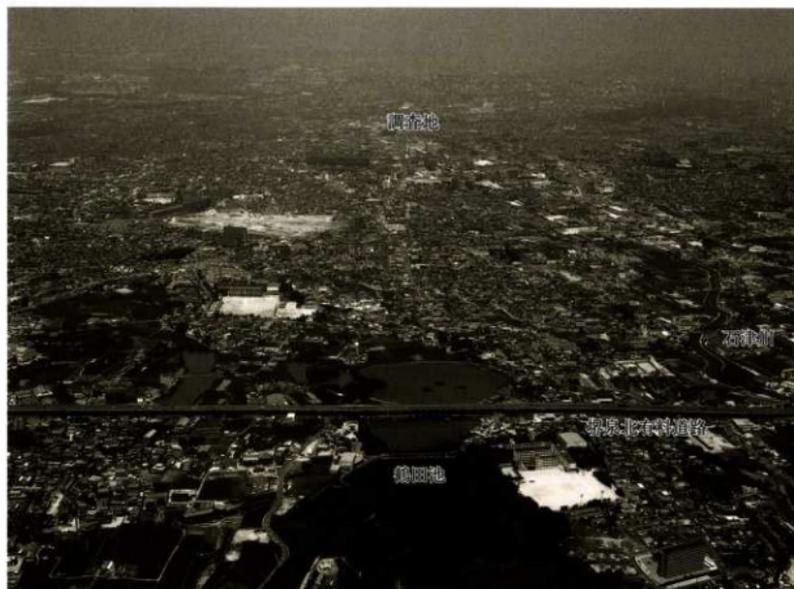
No	図版 No	実測 No	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	出土遺構・層	石材
550		397	剥片	3.75	2.45	0.90	3-65区001・A溝 (灰色粘土)	サヌカイト
551		473	剥片	3.15	3.30	1.70	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
552		515	剥片	2.40	3.52	0.50	2-86区中世耕作土・黄褐色粘土	サヌカイト
553		372	剥片	2.70	3.10	0.35	中央トレンチ№28・1段	サヌカイト
554		421	剥片	2.45	3.50	0.70	中央トレンチ№32・4段	サヌカイト
555		471	剥片	2.42	2.65	0.95	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
556		465	剥片	2.55	2.62	0.50	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
557		443	剥片	3.55	4.70	1.80	2-102区001・A溝 (灰色砂シルト)	サヌカイト
558		472	剥片	3.30	5.35	1.22	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
559		442	剥片	3.30	5.28	1.70	3区北辺トレンチ一括	サヌカイト
560		454	剥片	2.85	5.00	1.50	3-58区黄オリブ粘土 (D層)	サヌカイト
561		496	剥片	2.60	3.15	1.85	2-102区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
562		477	剥片	2.15	4.80	0.60	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
563		492	剥片	2.55	4.90	1.50	2-102区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
564		432	剥片	2.75	4.05	1.30	2-94区中世耕作土・黄褐色粘土	サヌカイト
565		373	剥片	3.22	4.55	1.20	中央トレンチ№5・5段	サヌカイト
566		459	剥片	3.40	3.65	0.70	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
567		445	剥片	3.90	3.85	1.40	2-102区001・A溝 (灰色砂シルト)	サヌカイト
568		370	剥片	3.68	4.65	0.30	3-38区北辺トレンチ延長部	サヌカイト
569		401	剥片	3.30	4.98	0.90	2区一括	サヌカイト
570		470	剥片	2.00	4.10	0.85	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
571		516	剥片	1.90	4.55	1.00	3-63区001・A溝 (黒灰色粘土)	サヌカイト
572		463	剥片	4.12	3.30	1.58	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
573		538	剥片	4.62	1.60	0.40	3-65区001・A溝 (黒褐色粘土)	サヌカイト
574		512	剥片	4.80	3.70	1.80	2区一括	サヌカイト
575		380	剥片	5.75	1.60	1.10	2-108区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
576		388	剥片	5.85	3.00	1.85	2-93区中世耕作土・黄褐色粘土	サヌカイト
577		400	剥片	5.58	1.80	0.90	中央トレンチ№7・6段	サヌカイト
578		385	剥片	5.00	3.10	0.85	3-66区001・A溝 (暗灰色粘土)	サヌカイト
579		458	剥片	5.25	2.25	1.08	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
580		513	剥片	5.02	2.60	1.35	2-94区中世耕作土・灰色シルト	サヌカイト
581		422	剥片	4.00	3.70	1.05	2-97区001・A溝	サヌカイト
582		561	剥片	5.15	2.40	1.68	3-54区C層下部	サヌカイト
583		378	剥片	4.50	2.80	1.20	3-56区北辺トレンチ	サヌカイト
584	41	528	剥片	2.81	3.10	0.68	1区001溝 (茶褐色砂シルト)	サヌカイト
585		381	剥片	3.60	3.70	1.05	2-108区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
586		509	剥片	3.95	3.30	1.70	2区一括	サヌカイト
587		406	剥片	3.42	4.50	1.55	2-102区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
588		416	剥片	4.08	3.25	0.80	中央トレンチ№39・3段	サヌカイト
589		384	剥片	3.52	3.80	1.10	中央トレンチ№35・2段	サヌカイト
590		367	剥片	3.70	3.45	0.60	中央トレンチ№25・1段	サヌカイト
591		478	剥片	2.20	3.40	0.80	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
592		418	剥片	2.20	2.70	0.65	中央トレンチ一括	サヌカイト
593		399	剥片	5.58	3.02	1.10	2-93区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
594		497	剥片	3.45	3.42	1.05	2-102区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
595		494	剥片	2.51	4.30	1.20	2-102区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト
596		449	剥片	3.50	1.58	0.60	2-120区001・A溝 (褐灰色砂シルト)	サヌカイト

縄文石器観察表 4

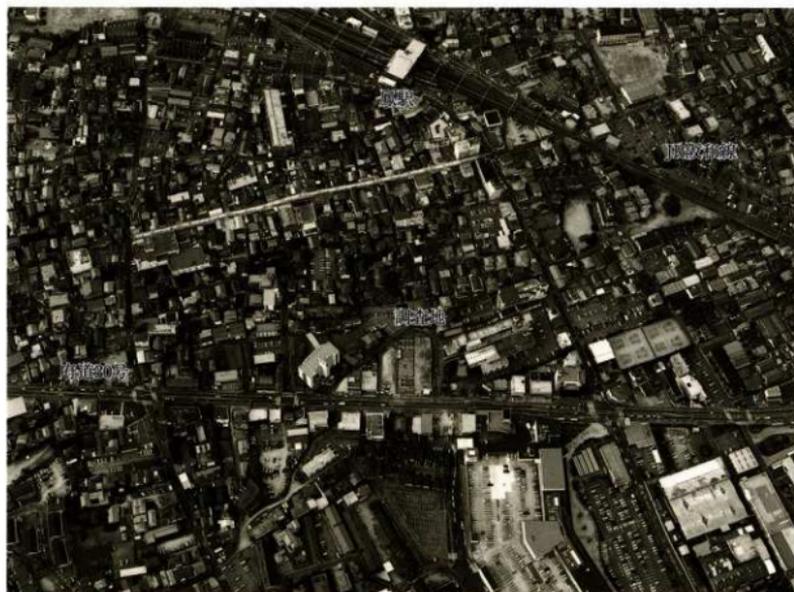
No	図版 No	実測 No	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	出土遺構・層	石材
597		376	剥片	3.22	1.30	0.45	2-120区001・A溝一括	サヌカイト
598		532	剥片	4.90	2.00	0.89	2区1層中	サヌカイト
599		398	剥片	5.50	1.90	1.28	2-89区中世耕作土・黄褐色粘土	サヌカイト
600		460	剥片	3.60	1.95	0.70	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
601		415	剥片	3.00	2.20	0.30	中央トレンチNo34・5段	サヌカイト
602		389	剥片	3.80	2.50	0.80	2-102区中世耕作土・灰褐色粘土	サヌカイト
603		440	剥片	3.42	2.45	0.88	3区北辺トレンチ一括	サヌカイト
604		461	剥片	3.55	2.45	1.10	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
605		558	剥片	3.00	2.80	0.80	1区001・C溝	サヌカイト
606		424	剥片	2.85	2.05	0.80	中央トレンチNo32・5段	サヌカイト
607		364	剥片	2.70	2.30	0.50	中央トレンチNo18・3段	サヌカイト
608		363	剥片	1.85	2.80	0.30	中央トレンチNo31・2段	サヌカイト
609		476	剥片	2.68	2.35	0.40	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
610		365	剥片	3.70	2.00	0.45	中央トレンチNo6・2段	サヌカイト
611		485	剥片	2.08	3.45	0.60	2-109区001・A溝(茶褐色砂質土)	サヌカイト
612		526	剥片	1.85	2.50	0.40	1区攪乱上内	サヌカイト
613	41	531	剥片	1.65	2.90	0.90	1区024(青灰色砂シルト)	サヌカイト
614		540	剥片	1.90	2.90	0.72	1区001溝(茶褐色砂シルト)	サヌカイト
615		539	剥片	1.80	2.90	0.50	1区001溝(茶褐色砂シルト)	サヌカイト
616		545	剥片	1.70	2.58	0.55	1区001溝(茶褐色砂シルト)	サヌカイト
617		559	剥片	2.05	2.80	0.40	1区001・C溝	サヌカイト
618		403	剥片	2.28	3.10	0.80	2-98区001・A溝(暗オリーブ粘シルト)	サヌカイト
619		495	剥片	1.50	3.75	0.60	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
620		488	剥片	2.25	3.00	0.45	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
621		450	剥片	2.30	2.80	0.60	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
622		447	剥片	1.75	2.65	0.40	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
623		499	剥片	2.10	2.15	0.45	2区一括	サヌカイト
624		493	剥片	2.50	2.80	0.90	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
625		433	剥片	1.80	3.22	0.60	中央トレンチNo2・3段	サヌカイト
626		469	剥片	2.01	2.58	0.75	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
627		466	剥片	2.18	2.10	0.70	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
628		468	剥片	1.80	2.90	0.40	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
629		490	剥片	2.02	2.70	0.70	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
630		491	剥片	2.45	2.60	0.50	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
631		467	剥片	1.82	2.30	0.40	2-72区黄褐色粘土	サヌカイト
632		489	剥片	1.30	2.40	0.50	2-102区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
633		412	剥片	1.90	2.05	0.30	中央トレンチNo6・1段	サヌカイト
634		530	剥片	1.65	1.50	0.25	1区001・東溝	サヌカイト
635		435	剥片	1.50	2.55	0.75	2-109区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
636		434	剥片	1.80	2.00	0.30	2-109区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
637		451	剥片	1.08	1.65	0.20	2-98区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
638		446	剥片	1.20	1.90	0.40	2-120区001・A溝(褐色砂シルト)	サヌカイト
639		557	剥片	1.55	2.45	0.38	1区001・C溝	サヌカイト
640		504	剥片	1.50	2.05	0.35	2区一括	サヌカイト
641		411	剥片	1.20	2.28	0.20	中央トレンチNo34・5段	サヌカイト
642		511	剥片	0.90	1.85	0.40	2区一括	サヌカイト
643	41	404	剥片	2.25	2.02	0.70	2-98区001・A溝(暗オリーブ粘シルト)	サヌカイト

縄文石器観察表5

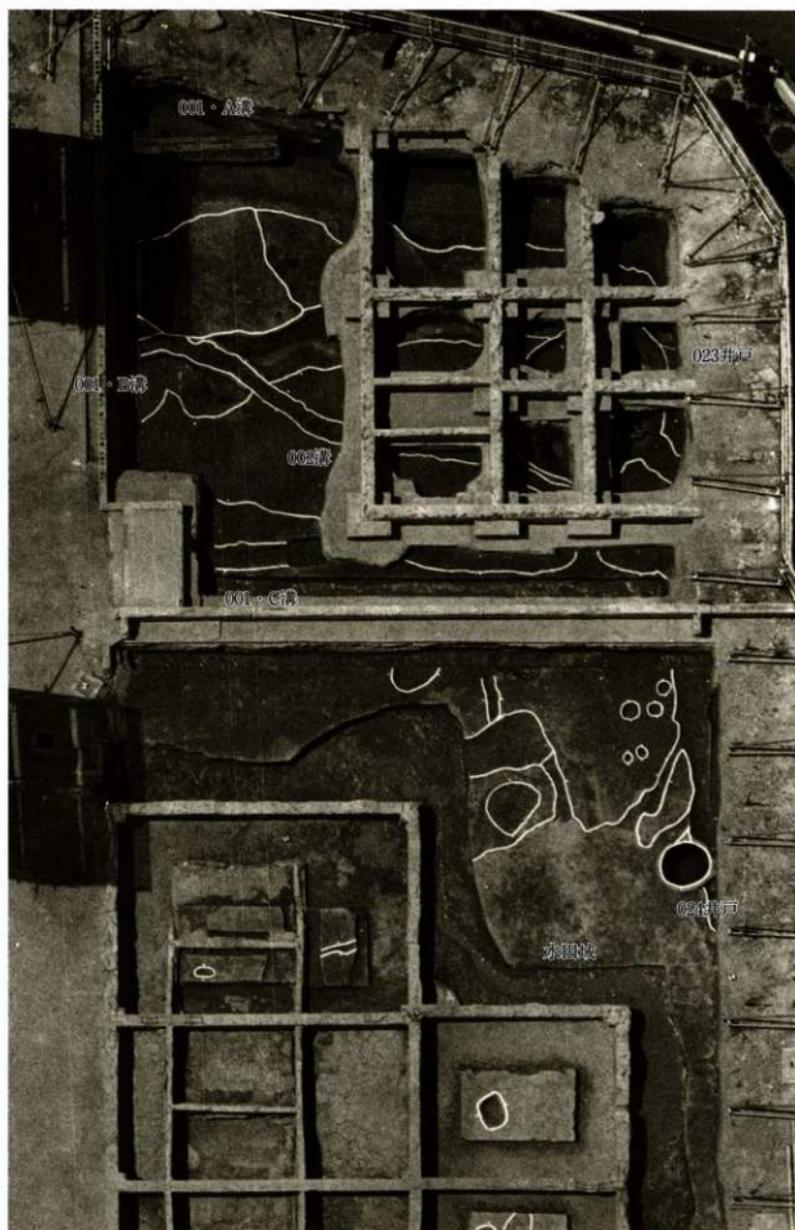
No	図版 No.	実測 No.	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	出土遺構・層	石材
644		503	剥片	1.45	1.90	0.30	2区一括	サヌカイト
645		502	剥片	1.50	2.30	0.22	2区一括	サヌカイト
646		430	剥片	1.40	2.05	0.60	2区調査区東壁7層	サヌカイト
647		452	剥片	1.88	2.32	0.50	2-98区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
648		534	剥片	1.70	2.50	0.30	1区001溝一括	サヌカイト
649		410	剥片	2.25	2.50	0.40	3区竈土一括	サヌカイト
650		409	剥片	2.55	1.50	0.45	3区竈土一括	サヌカイト
651		423	剥片	2.50	1.80	0.20	中央トレンチNo30・3段	サヌカイト
652		529	剥片	2.15	1.89	0.50	1-25区褐灰色粘土	サヌカイト
653		383	剥片	2.60	2.00	0.40	2-108区平安整地土・灰色シルト	サヌカイト
654		420	剥片	2.12	1.38	0.30	中央トレンチNo16・5段	サヌカイト
655		484	剥片	1.28	1.80	0.45	2-109区001・A溝(茶褐色砂質土)	サヌカイト
656		425	剥片	2.35	2.25	0.50	2-89区一括	サヌカイト
657		544	剥片	2.90	1.60	0.45	1区001溝(茶褐色砂シルト)	サヌカイト
658		547	剥片	2.20	1.90	0.70	1区001溝(茶褐色砂質土)	サヌカイト
659		448	剥片	2.50	1.50	0.50	2-120区001・A溝(褐灰色砂シルト)	サヌカイト
660		419	剥片	1.55	1.25	0.25	2区中世耕作土一括・黄褐色粘土	サヌカイト
661		417	剥片	2.18	2.10	0.38	2-101区001溝(褐灰色砂シルト)	サヌカイト
662		413	剥片	1.60	2.12	0.30	3-55区トレンチ3-1	サヌカイト
663		439	剥片	1.90	1.90	0.30	3区北辺トレンチ一括	サヌカイト
664		438	剥片	2.12	1.40	0.20	3区北辺トレンチ一括	サヌカイト
665		429	剥片	2.05	1.52	0.48	2区調査区東壁7層	サヌカイト
666		508	剥片	2.60	1.90	0.55	2区一括	サヌカイト
667		456	剥片	2.05	2.10	0.45	3-53区北辺トレンチ	サヌカイト
668		436	剥片	2.45	1.60	0.40	2-109区001・A溝(褐灰色砂シルト)	サヌカイト
669		396	剥片	2.55	1.90	0.30	2-98区001・A溝(褐灰色砂シルト)	サヌカイト
670		427	剥片	1.30	1.10	0.20	2-102区001・A溝(灰色砂)	サヌカイト
671		444	剥片	2.90	1.72	0.70	2-102区001・A溝(灰色砂シルト)	サヌカイト
672		501	剥片	2.80	2.00	0.80	2区一括	サヌカイト
673		426	剥片	2.22	2.05	0.45	2-102区001・A溝(灰色砂)	サヌカイト
674		428	剥片	1.82	1.92	0.30	2区調査区東壁7層	サヌカイト
675		405	剥片	2.25	1.15	0.25	2-98区001・A溝(暗オリーブ粘シルト)	サヌカイト



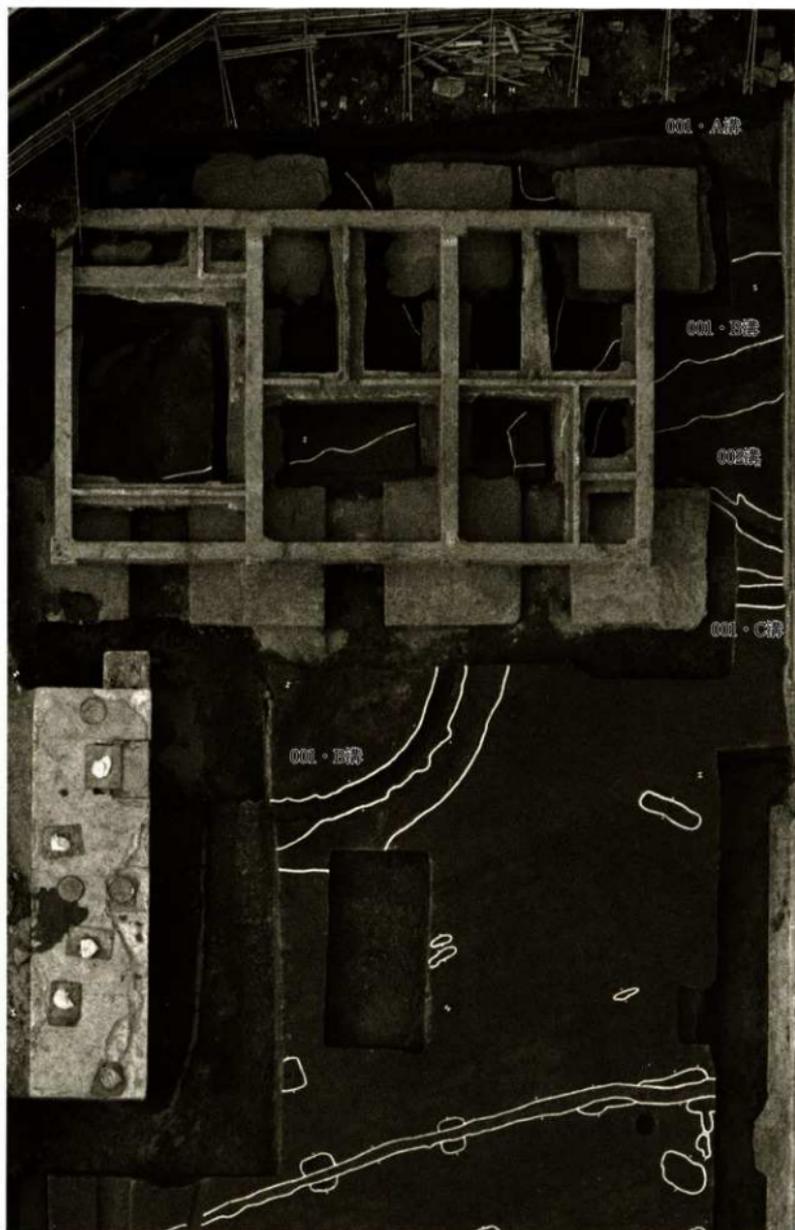
鳳東町4丁遺跡遠景（南から）

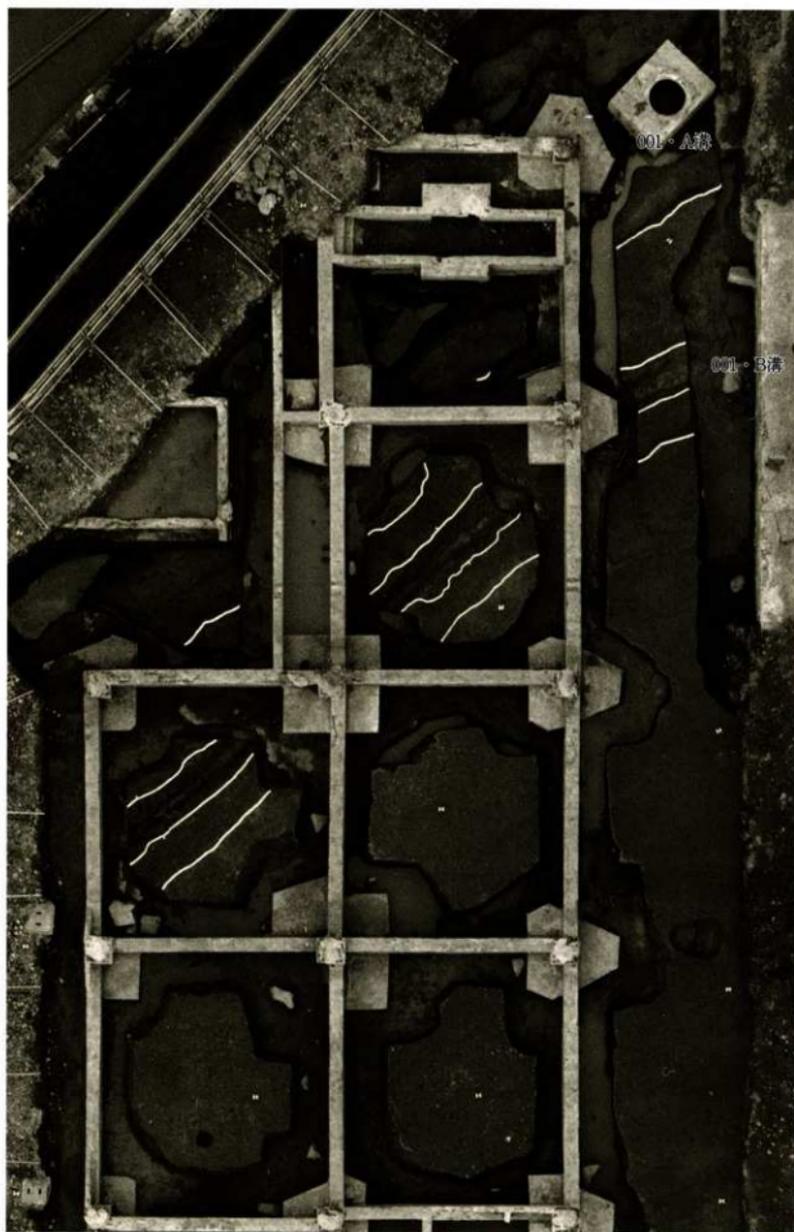


鳳東町4丁遺跡遠景（垂直）

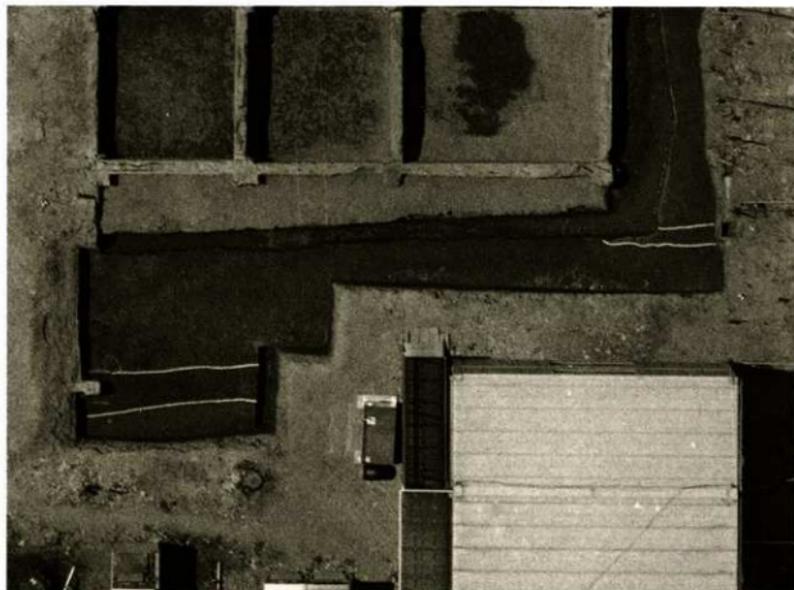


1区 001溝・002溝・023井戸・024井戸・水田城





3区 001溝



1区 水田城



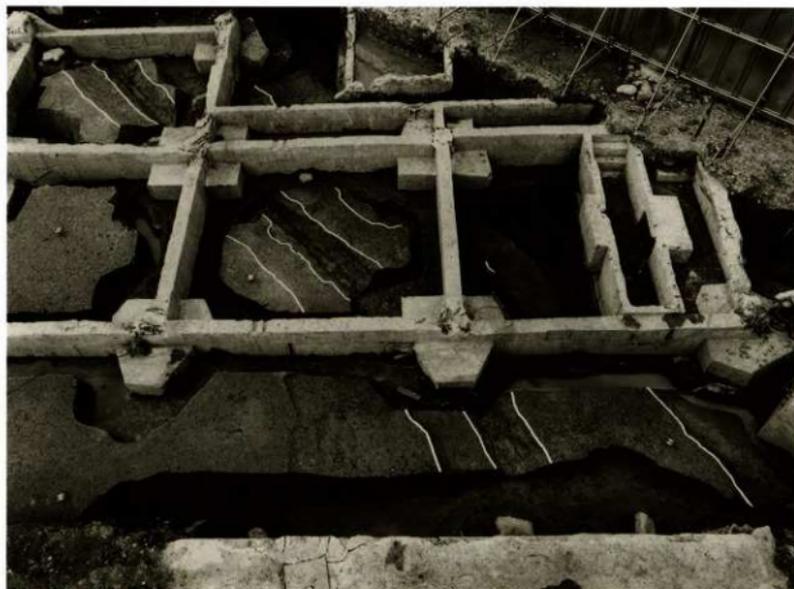
2区 水田城・畦



1区 001溝全景 (南から)



1区 001溝全景 (南東から)



3区 001溝全景 (北から)



3区 001溝全景 (北西から)



1区 木製樋管検出状況（北から）



1区 001・A津土層断面（北から）



1区 001溝 木製樋管検出状況（北から）



1区 001溝 木製樋管検出状況（東から）



1区 023井戸 木柁検出状況（東から）



1区 024井戸 半截状況（南から）



3-58区 001・B溝 (北から)



3-60区 001・B溝 (北から)



3区 001・B溝Kベルト断面 (南から)



3区 001・B溝Jベルト断面 (北から)



3区 001・A溝Lベルト断面 (北から)



3区 001・A溝Mベルト断面 (南から)



1区 001・B溝Aベルト断面 (南から)



2区 001・B溝Fベルト断面 (南から)



1区 水田域・畦 (南から)



1区 畦土層断面 (南から)



1区 水田城全景 (南から)



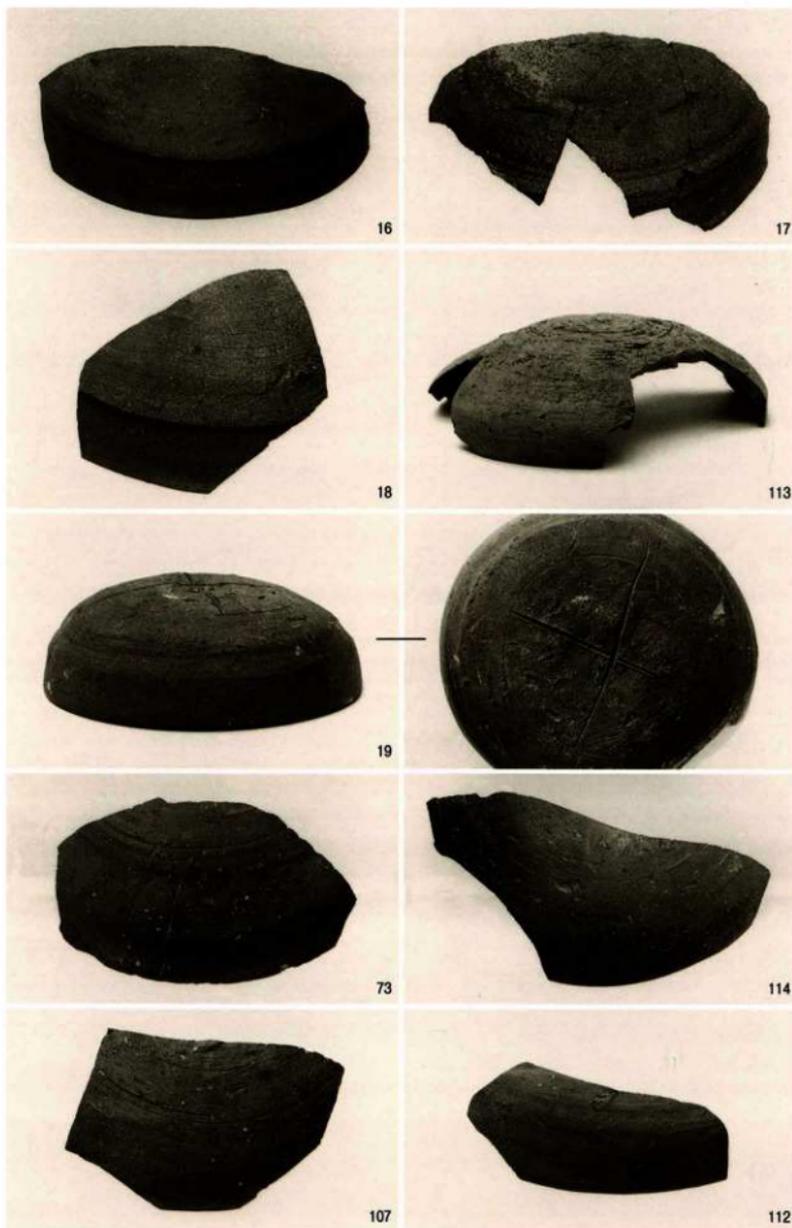
2区 水田城全景 (北から)

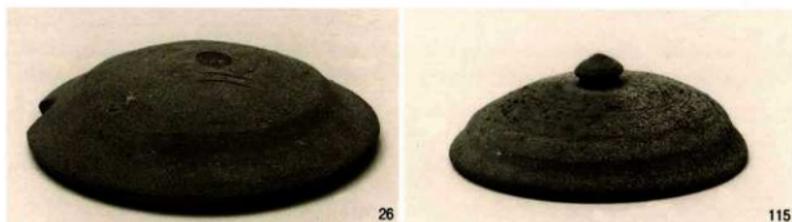


中央トレンチ 南壁西半（北東から）



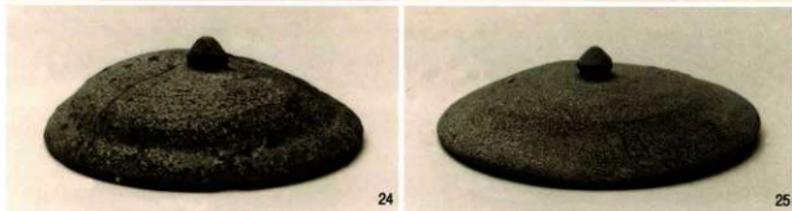
中央トレンチ 北壁（南西から）





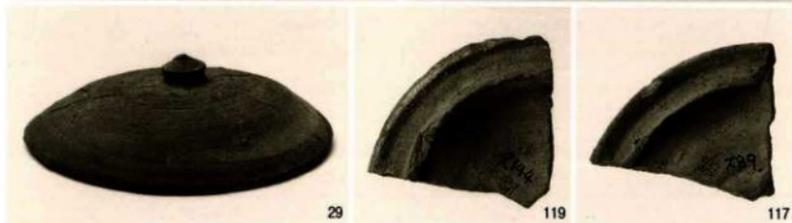
26

115



24

25

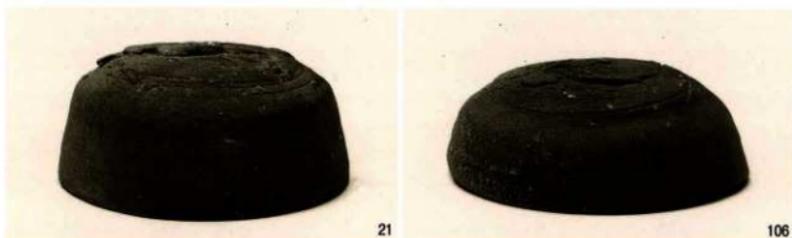


29

119

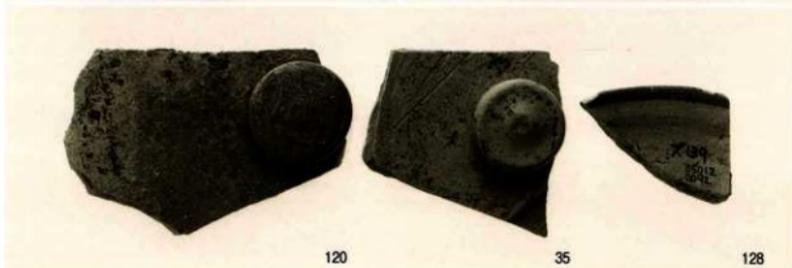
117

001溝出土遺物 須恵器



21

106



120

35

128

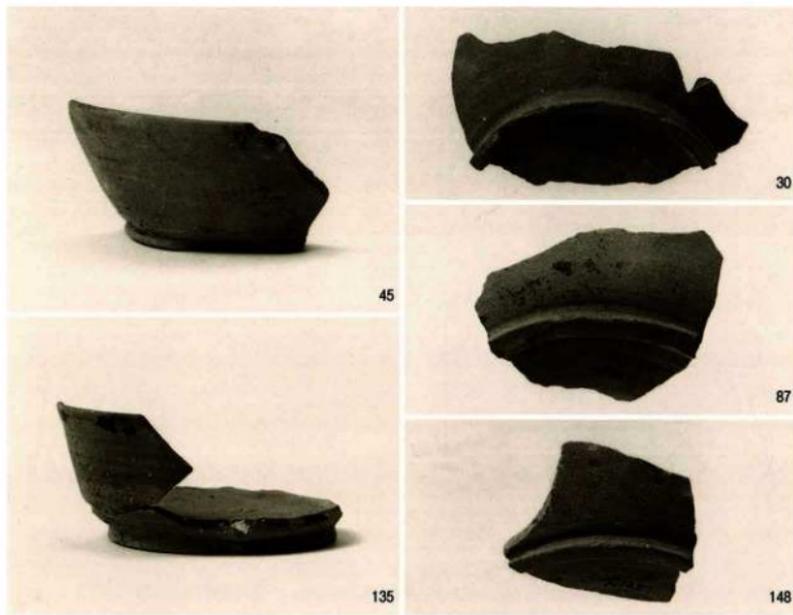
001溝出土遺物 須恵器



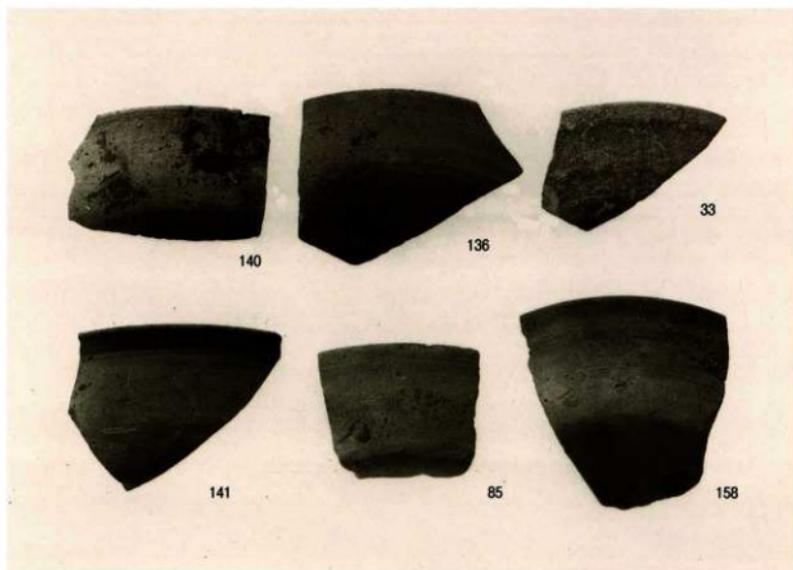
001溝出土遺物 須恵器



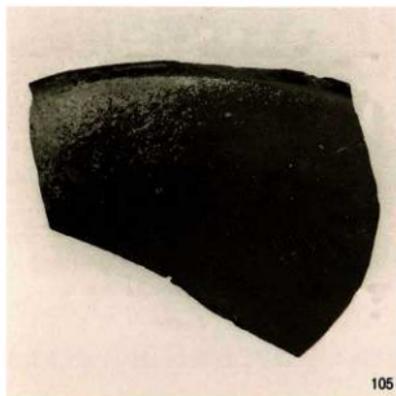
001溝出土遺物 須恵器



001溝出土遺物 須恵器



001溝出土遺物 須恵器



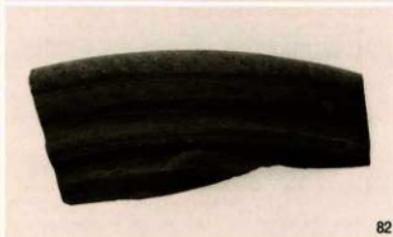
105



46



39



82



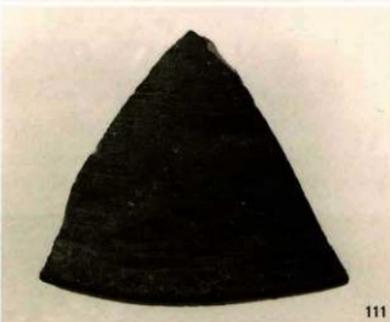
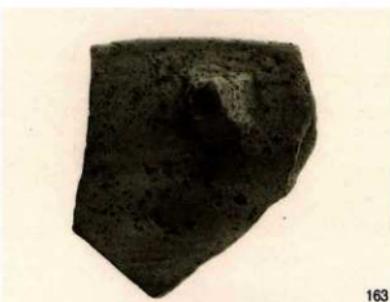
133



78

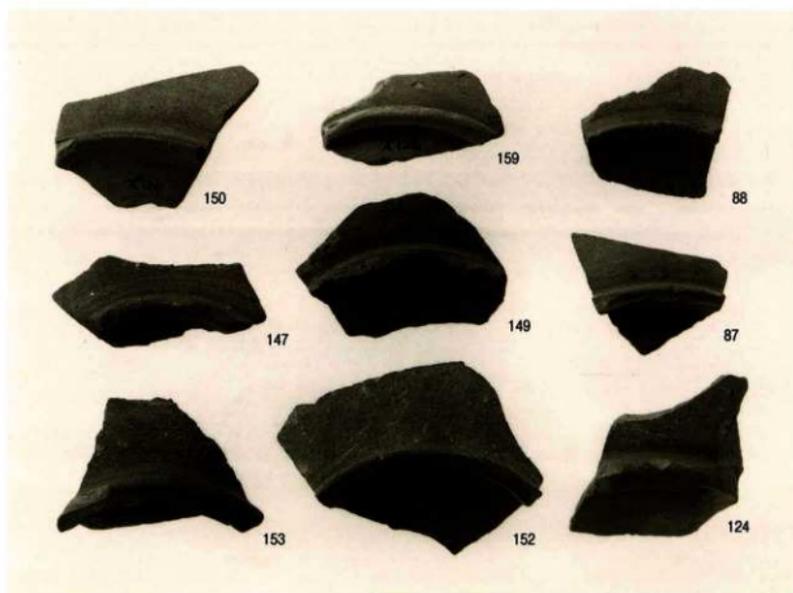


70

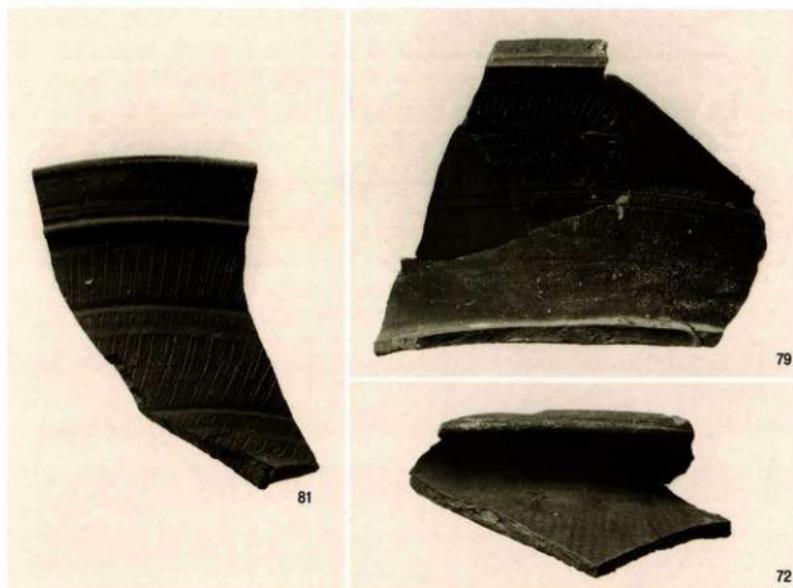




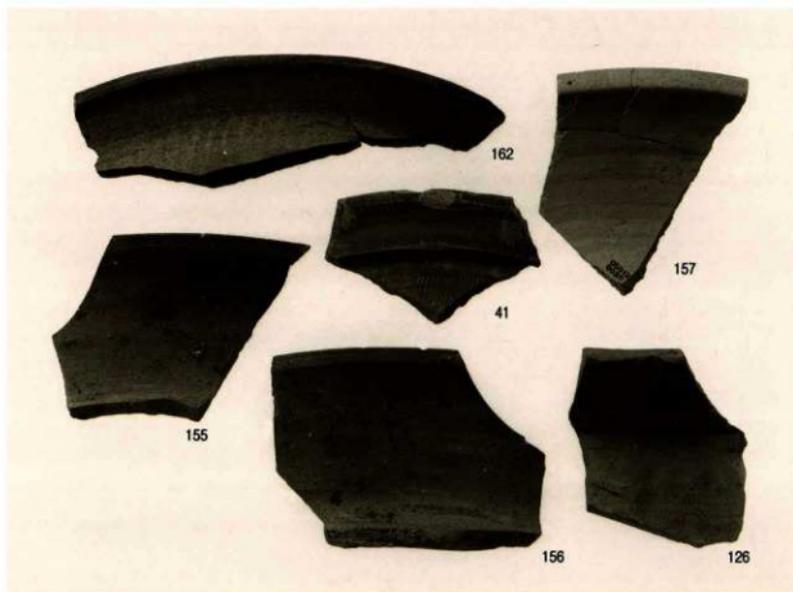
001溝出土遺物 須恵器



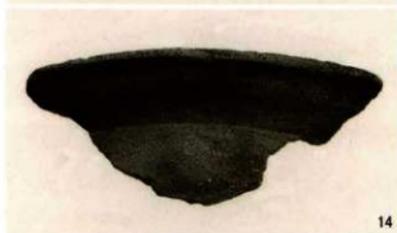
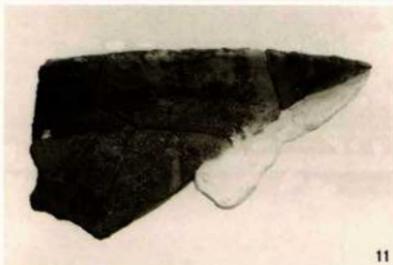
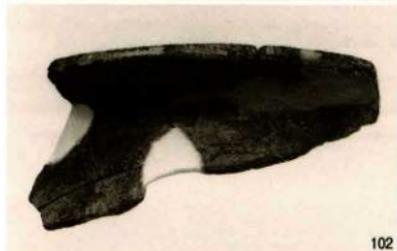
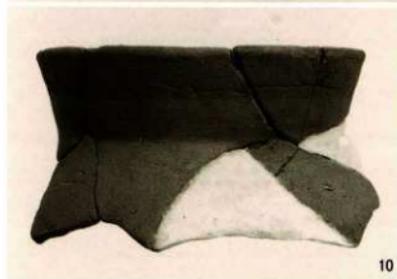
001溝出土遺物 須恵器

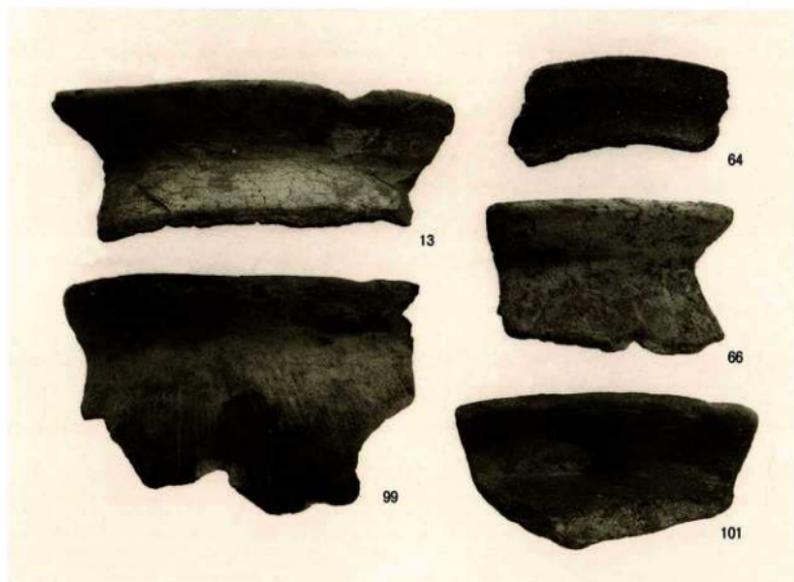


001溝出土遺物 須恵器



001溝出土遺物 須恵器





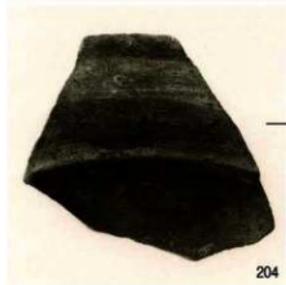
001溝出土遺物 土器



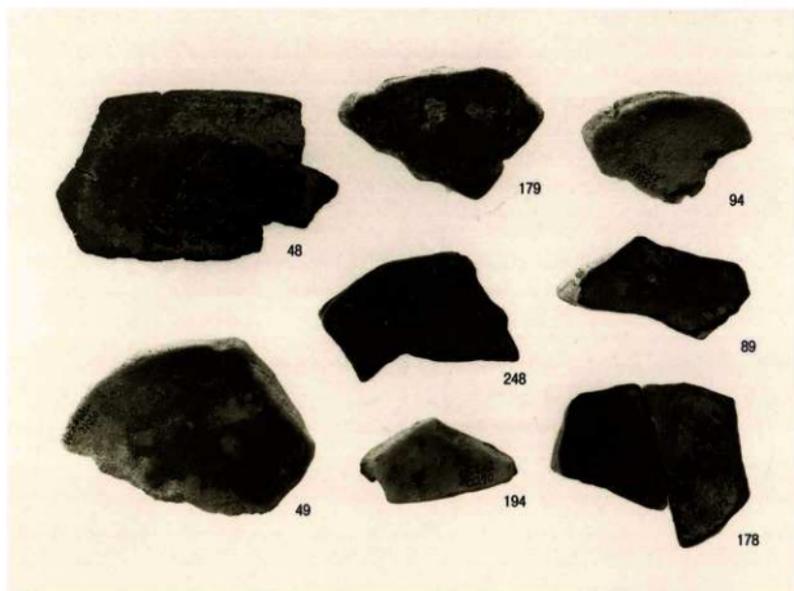
001溝出土遺物 土器



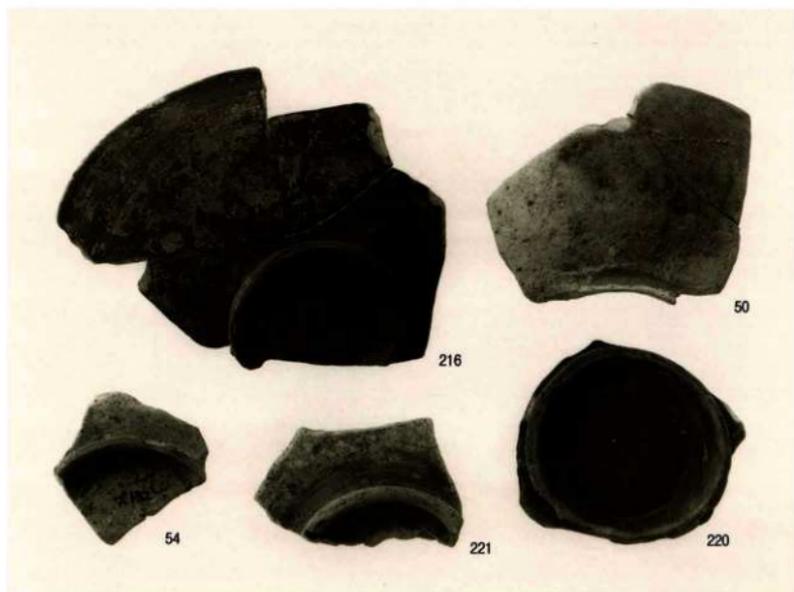
出土遺物 須恵器



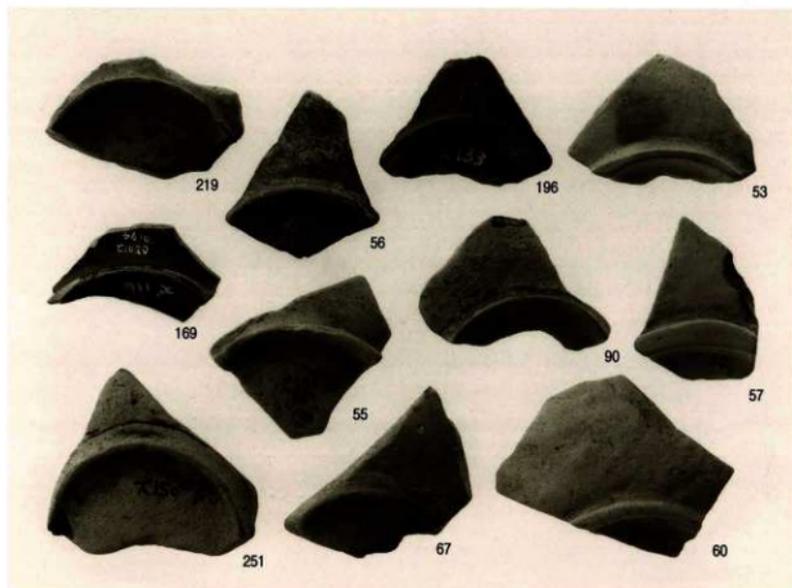
出土遺物 土器



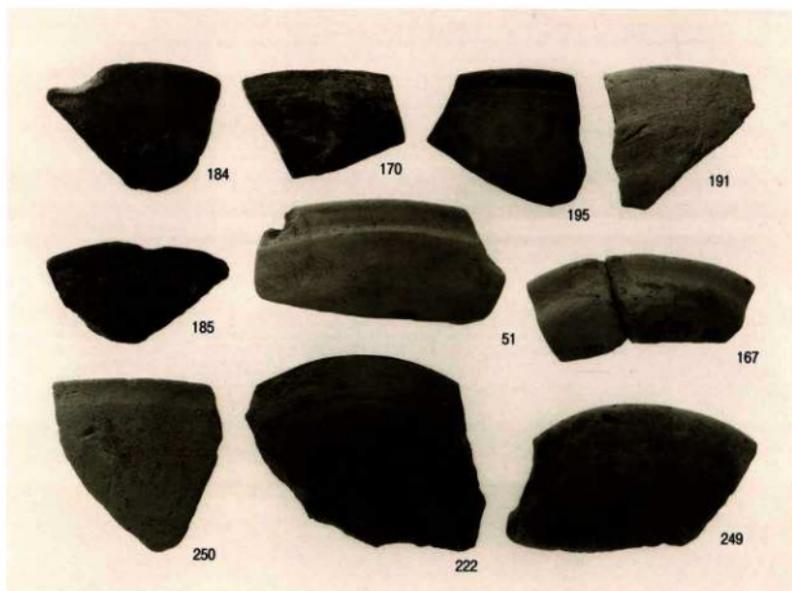
出土遺物 黑色土器



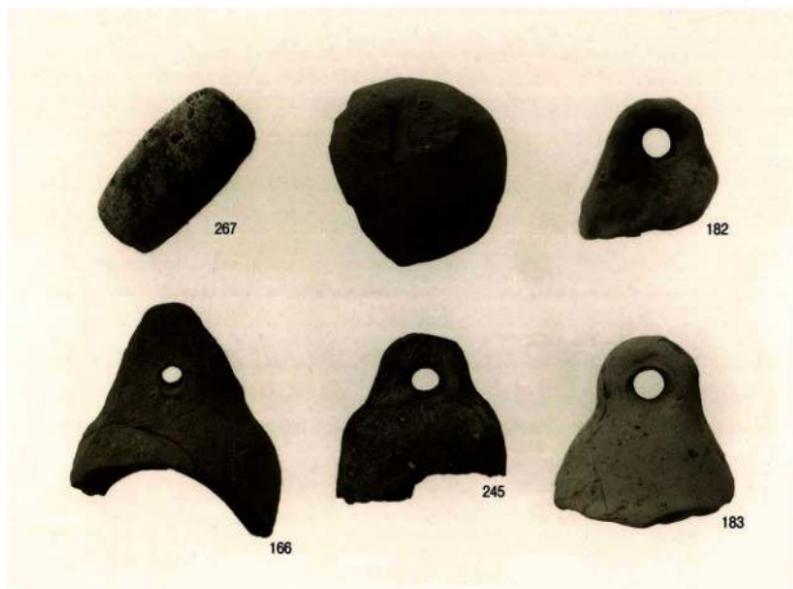
出土遺物 瓦器



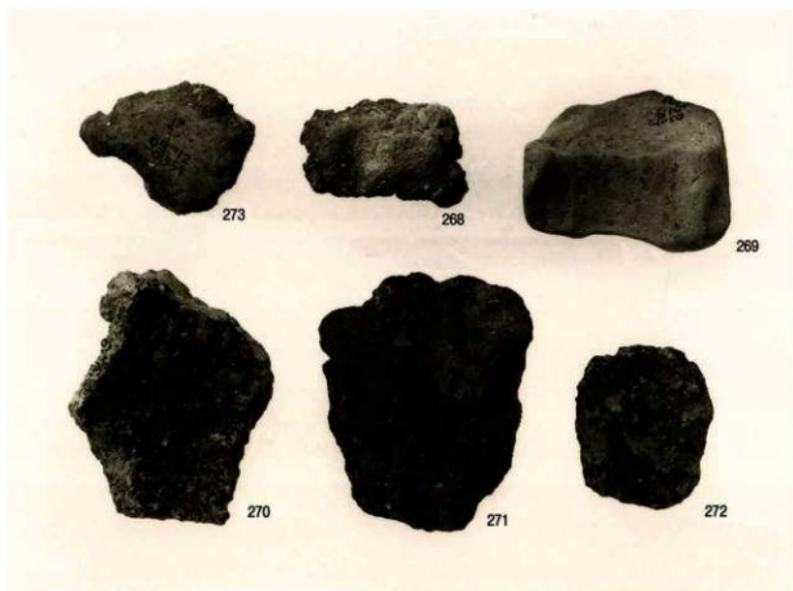
出土遺物 瓦器



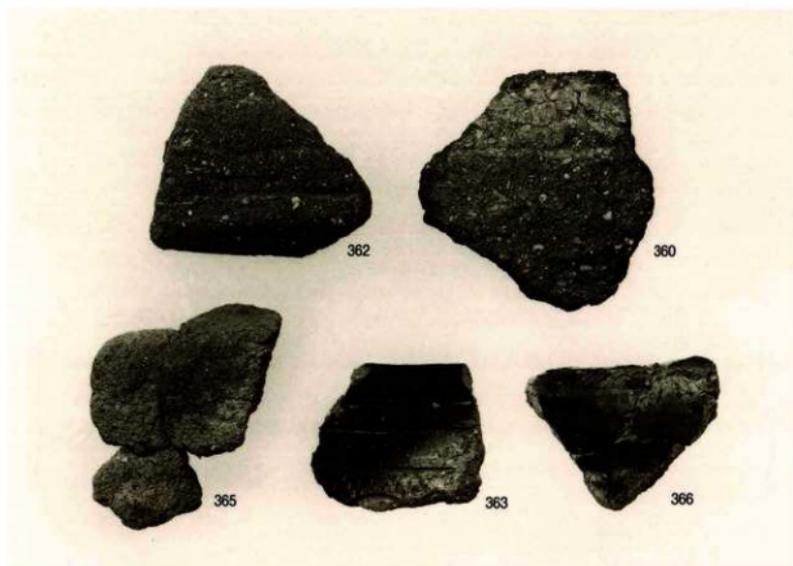
出土遺物 瓦器



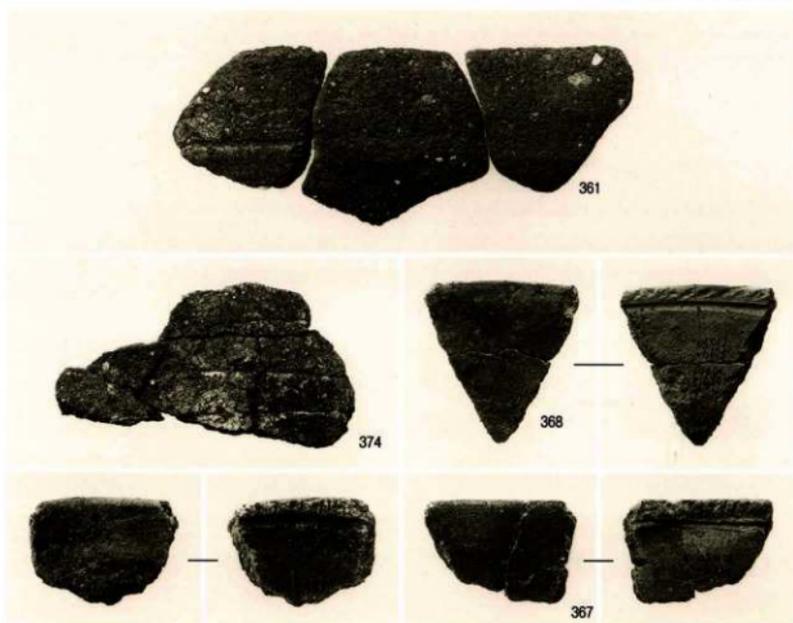
出土遺物 蛸壺・土錘



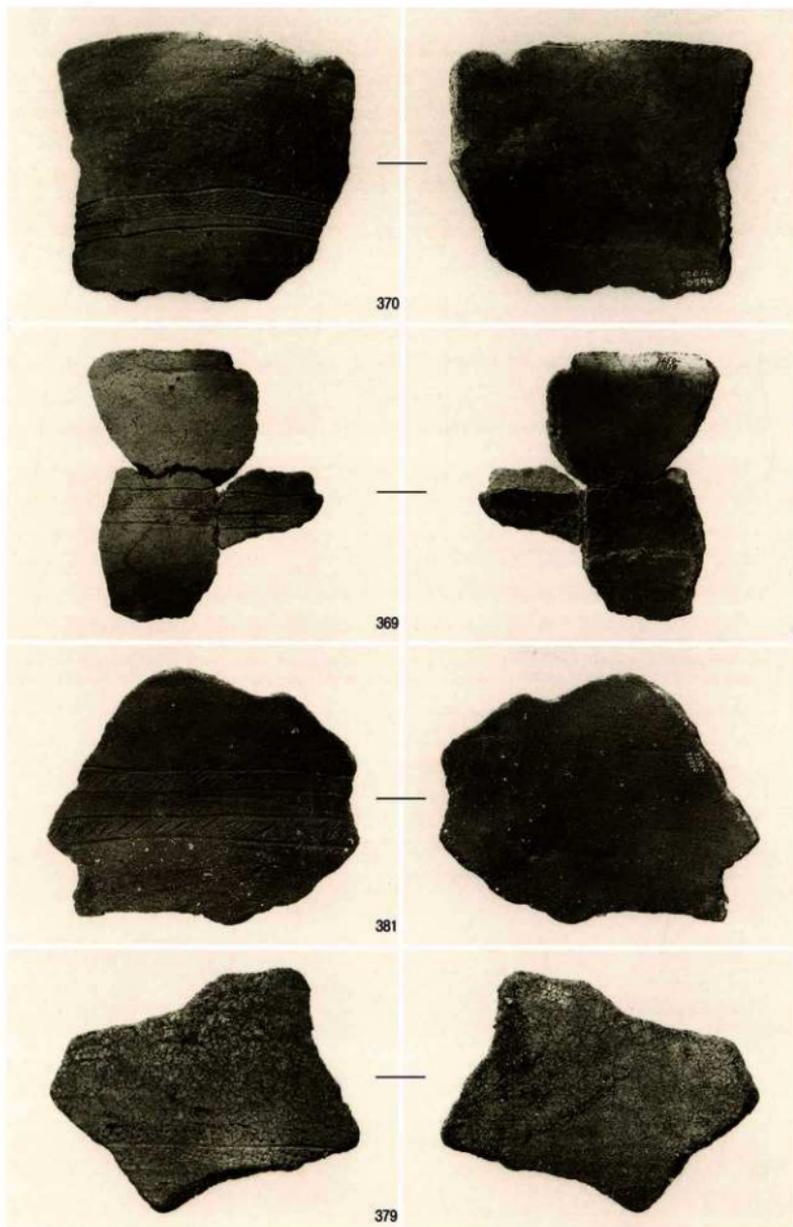
出土遺物 羽口・埴塼・鉄滓

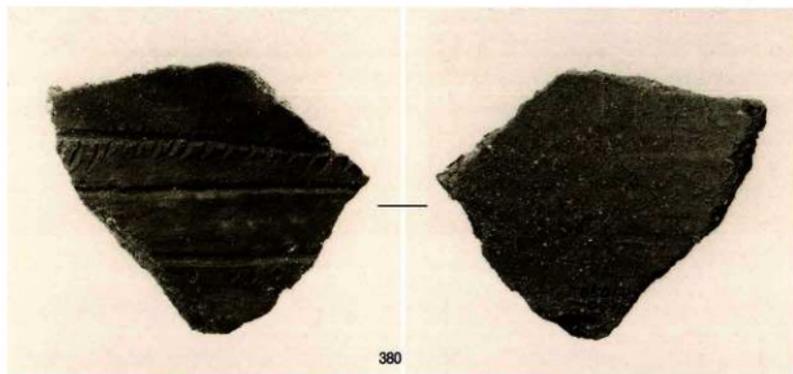


縄文土器 有文深鉢



縄文土器 有文深鉢

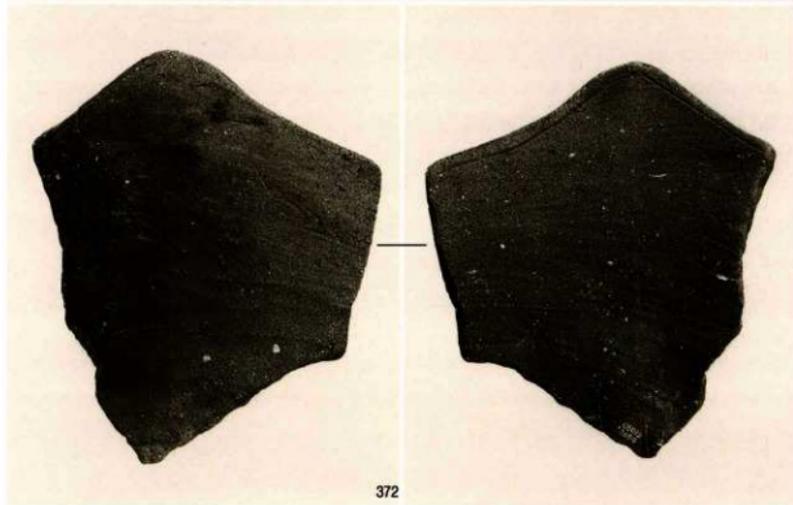




380



373



372



371



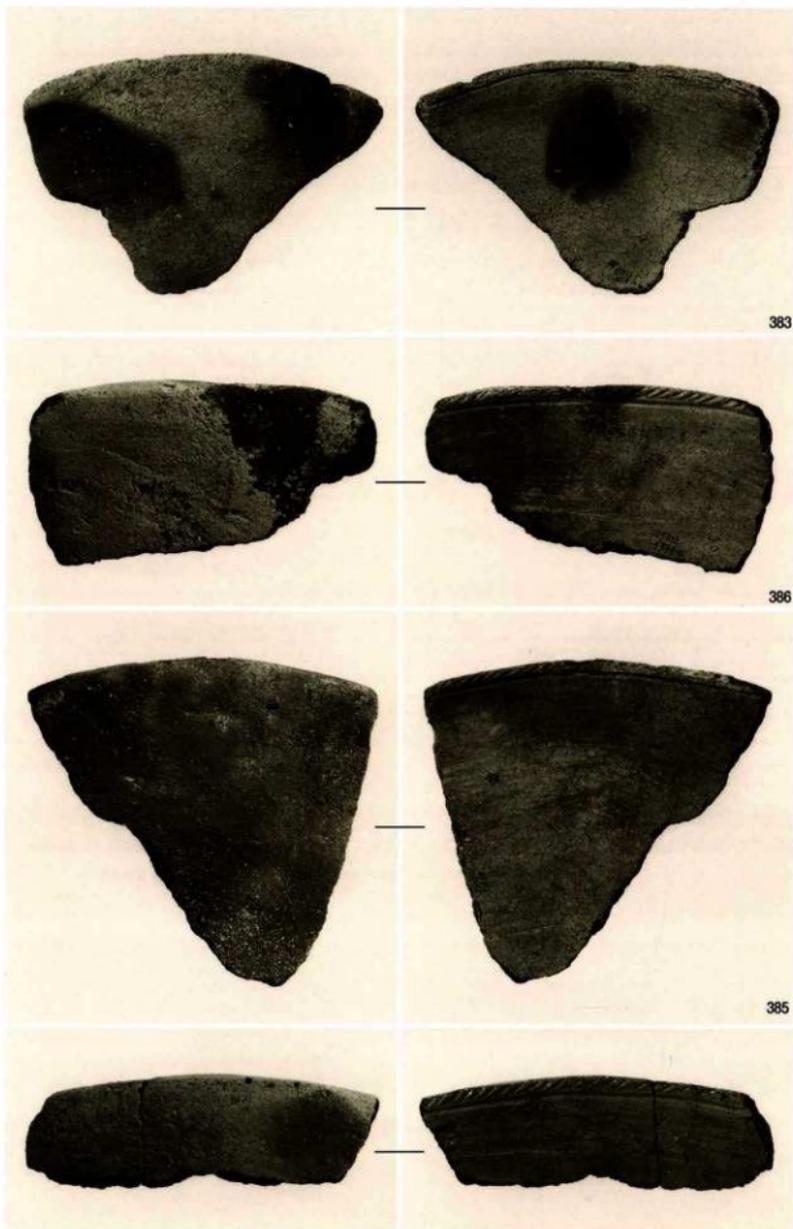
375

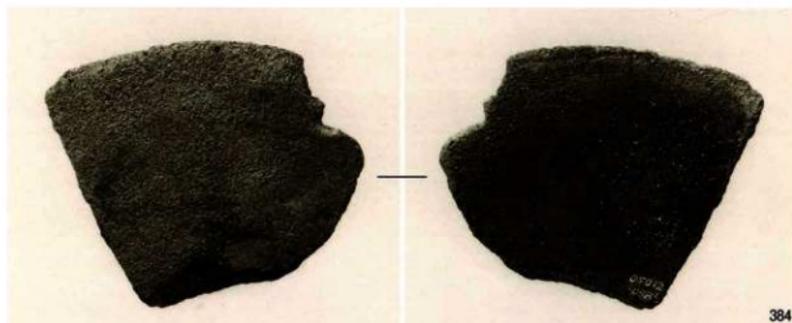


371

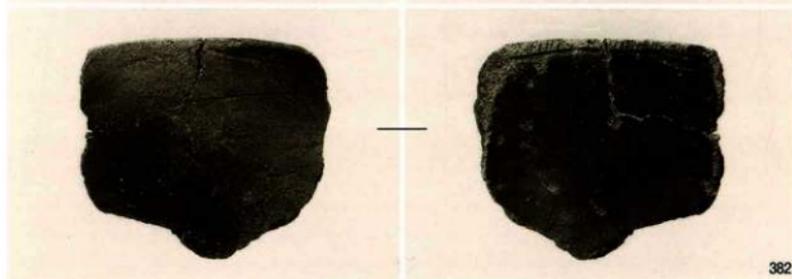


375





384



382

縄文土器 有文浅鉢

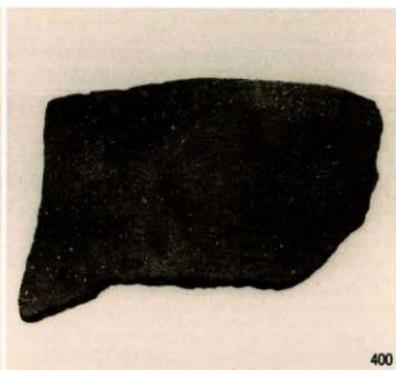


411

縄文土器 無文深鉢



402



400



392



399



406



409



407



394



405



424



401



397



404



396



434



435



426



450

縄文土器 無文浅鉢

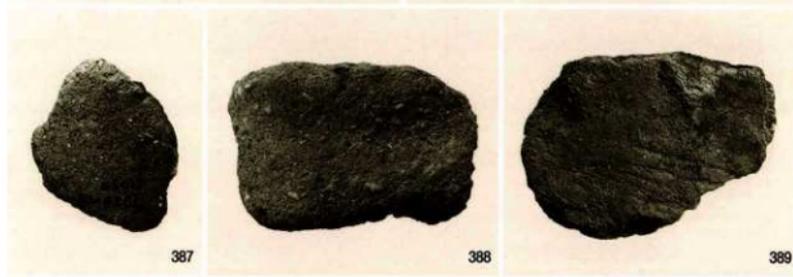


391

縄文土器 注口土器



390

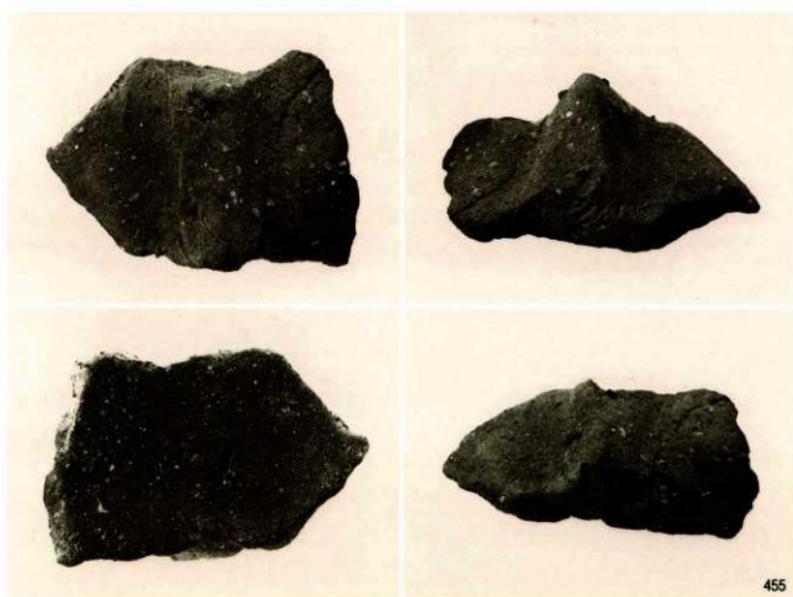


387

388

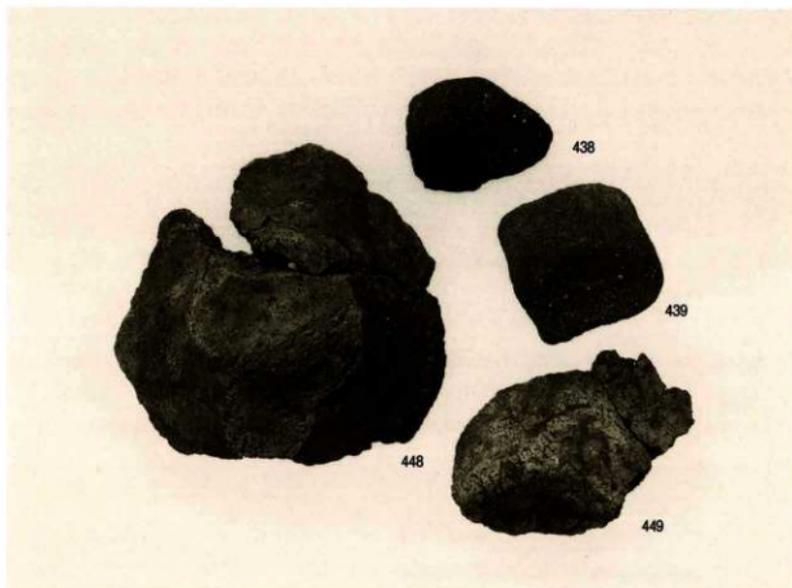
389

縄文土器 注口土器

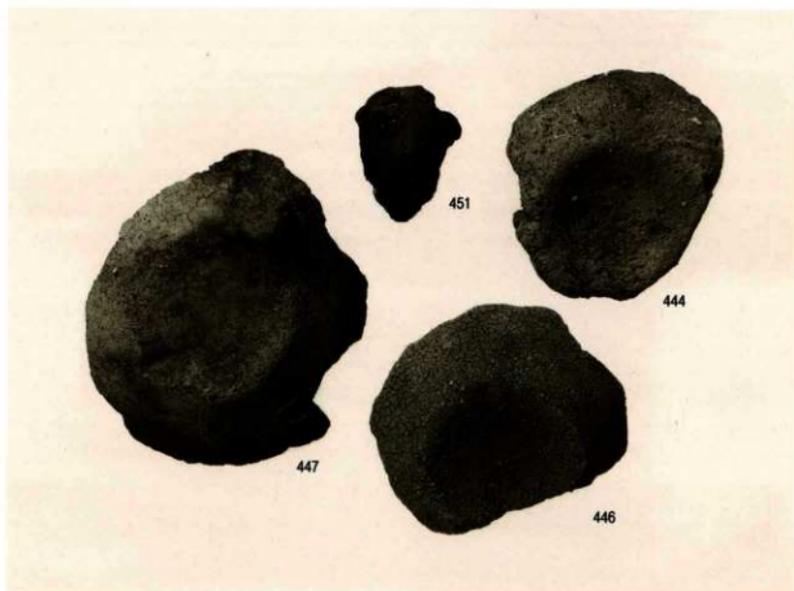


455

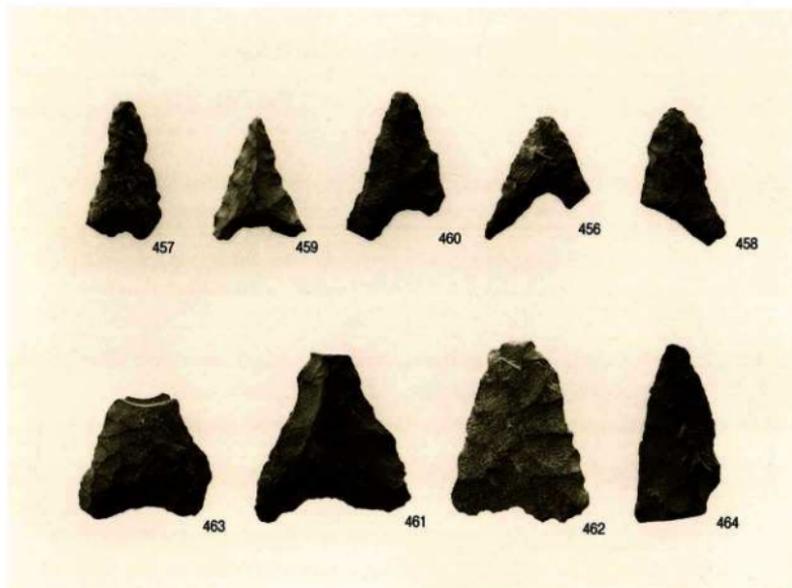
土製品



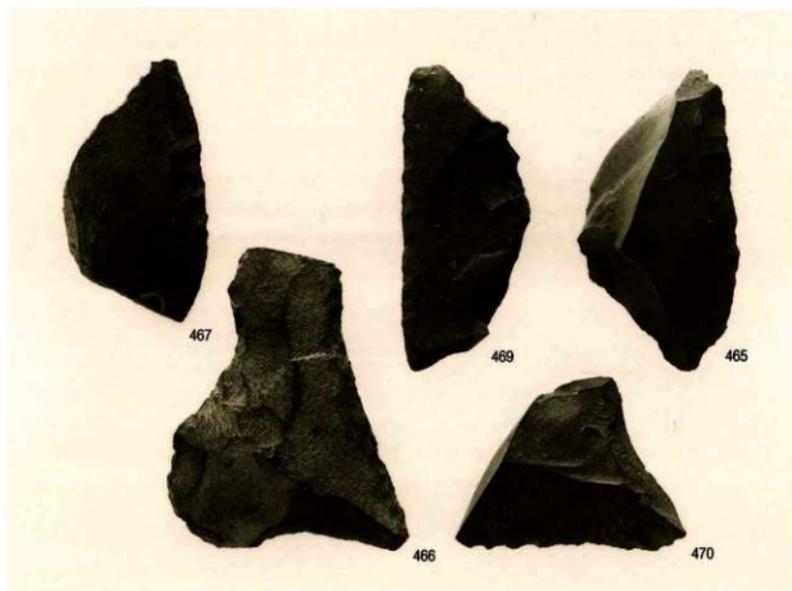
縄文土器 底部



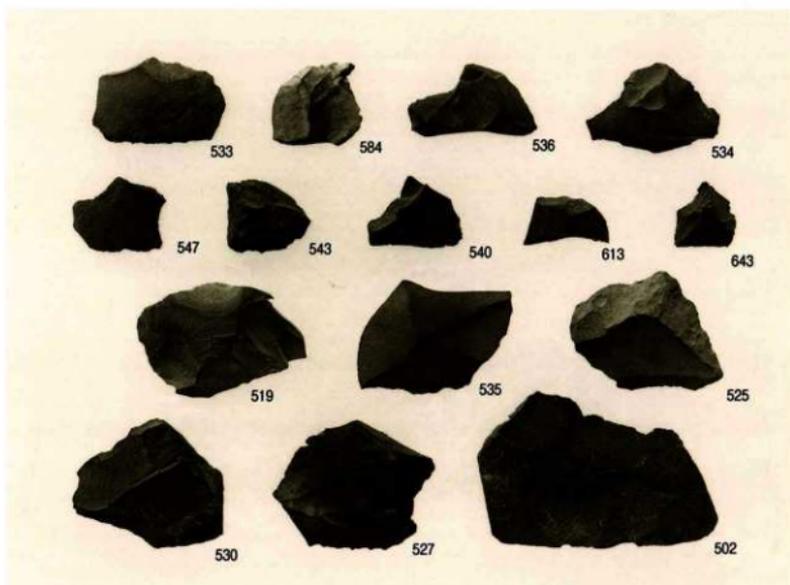
縄文土器 底部



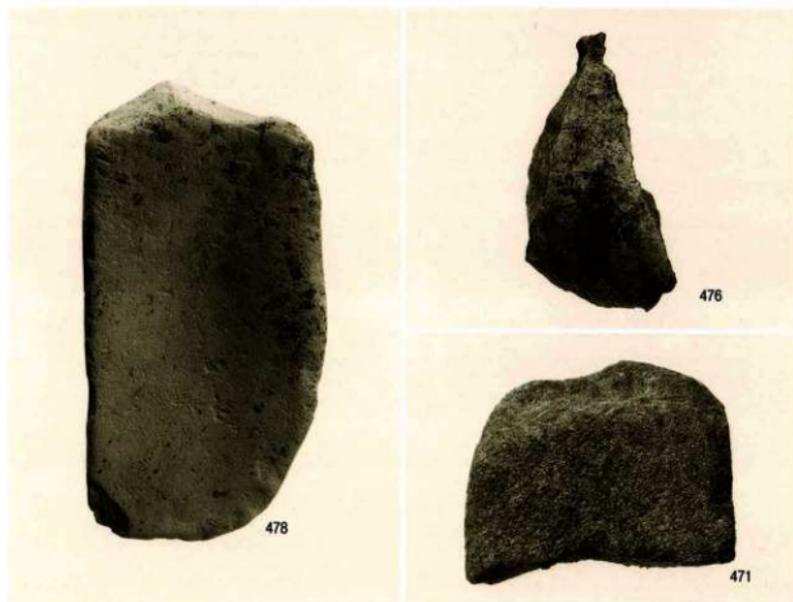
縄文石器 石鏃



縄文石器 石刃



縄文石器 剥片



縄文石器 石皿



木製樋管全形



木製樋管小口部

報告書抄録

ふりがな	おおとりひがしまちよんちよういせき
書名	鳳東町4丁遺跡
副書名	堺南警察署庁舎建て替えに伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2007-5
編著者名	三木 弘 河本純一
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540-0008 大阪府大阪市中央区大千代前2丁目 Ⅱ06-6941-0351 (代表)
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積(m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
鳳東町4丁遺跡	堺市内区鳳東町4丁	27201	9288	34° 31' 53"	135° 27' 45"	2005年6月 ～ 2006年1月	2,284	堺南警察署建て替え工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳳東町4丁遺跡	集落生産域	縄文時代	自然河道	土器、石器	大溝と周辺に広がる水田城を発見。縄文時代の河道から土器、石器が出土。
		古代	溝、水田、木製樋管	土器、須恵器	
		中世	畦、側溝	瓦器、瓦	

要約	<p>鳳東町4丁遺跡は、本調査の前年に行なった試掘調査によって新規発見された遺跡である。したがって今回が遺跡の性格を解明する、初めての発掘調査であった。</p> <p>その結果、奈良時代に開削されたと考えられる大溝と、それに並行する2条の溝、さらに周辺に広がる水田城を発見した。これらの溝と水田は平安時代末頃に廃絶するが、その後、中世にかけて水田城は荒地化したとみられる。</p> <p>その他の主要遺構としては、古墳時代後期の可能性のある2棟の掘立柱建物がある。この時期の遺構とみられるものは、他にはなかった。</p> <p>さらに、古代の遺構検出面下には縄文時代後・晩期の上層・石器を包含した層が存在した。この包含層は、自然河道を埋めた堆積土により形成されている。</p> <p>出土遺物は、上述した縄文後・晩期の上層・石器を始め、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、陶器、磁器、瓦などである。</p>
----	--

大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-5

鳳東町4丁遺跡

発行年月日 2008年3月31日
編集・発行 大阪府教育委員会
〒540-0008
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351(代)
印刷 南ウェイク
〒582-0001
柏原市本郷5丁目7-8

